初期ニ於ケル人胎兒生殖腺ニ就テ（獨文）、(2)去勢及ビ正常白鼠腦下垂體移植ニヨル幼若白鼠ニ認メラルル發情現象並ニ濾胞「ホルモン」及ビ「ルテオリペツクス」注射ヲ併用セル場合ニ於ケル同現象ノ變化ニ就テ、（獨文）、(3)卵巣喇叭管及ビ子宮ニ於ケル異所性腺樣組織ニ就テ、(4)乳腺ニ於ケル組織肥胖細胞ニ就テ（獨文）、　の四篇あり。

△故繁次博士の存命中、著者は先生の知遇を得特に理解と同情とを以て多年厚誼を得たるは、筆者の記憶を呼び起すものにして、今猶先生の德を偲ばしめ多大の敬意を表する者也。（前篇四三一頁參照）、一成博士は新進の學者にして年齒未だ三十有一歲なれども、病院の經營と云ひ患者の應待と云ひ、嚴君の遺鉢を繼ぐに充分なる資格の持主にして、殊に博士が年少二十九歲を以て早くも學位を得たるは、博士界中稀に見る所にして、其の頭腦明晰なると共に天才的學究の然らしめしところは推賞に値し、此間博士の面目の躍如たるものあるを見る。春秋猶頗る豐富にして精研倦まざる努力は、將來のヨリ大成を期待すべきものあるを確信す。治療界の前途暗澹として廓清の聲漸く高まらんとするの秋、斯界淨化の爲め益々努力盡瘁あらん事を、著者は改めて特に博士に切望する者也。自宅は芝區西久保城山町八なり。

◇

上田清　△山口縣德山海軍共濟組合病院に產婦人科醫長として上田清博士あり。京大系の產婦人科界の泰斗岡林秀一教授の門下生として知られ、大學院在學中、恩師指導の下に研究の結果、學位主論文「人胎盤血管ノ藥物學的研究」及び參考論文「人胎盤ノ所謂解毒作用ニ關スル實驗的研究」の外五篇を完成して、母校より學位を得、所謂京大派の少壯醫博として氣勢を昂げたる新人物也。學究生活より診療界に進出して以來、未だ年數淺少なれども、不斷の努力と熱實なる忠勤振とは、博士獨特の手腕の好評と相俟つて多大の信望を博し、將來有爲の臨床家として最も囑望せらる。

△學歷より觀れば、三高を經て、大正十三年京都帝大醫學部卒業、直ちに同醫學部產婦人科教室入局、同十五年より二ケ年間前橋市日赤群馬支部病院產婦人科醫長として勤務、昭和三年九月より一ケ年間愛媛縣八幡濱公立病院副院長兼產婦人科醫長就任、同四年十月京大大學院入學、產婦人科教室研究室にて研究、同七年三月現職に就任、同年十一月學位を受領し今日に至る。

△感想に曰く「實驗醫學（理論、醫學?）は日進月步の狀態に在るも、治療醫學は尙未だ不振の狀態に在る。而して現在に醫學は漢法醫學の僅に數理的基礎を與へたるに止まる感がある。玆に於て漢法醫學を今一度精細に見直して觀る必要がないかと思ふ。溫故知新といふ言葉は現在の醫學にも隨分當はまる言葉だと思ふ」云々。氏は兵庫縣氷上郡新井村字田路の出身、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歲にして、英氣潑剌として最も働き盛に在り、加ふるに手腕、識見共に漸く壯熟して益々其の特技を發揮するの時に在り、博士の得意や想ふべき也。研究以外の趣味としては圍碁を好み、又時に太公望となりて魚釣の味を忘れず一日の淸遊を試みることあり。山口縣德山町浦石に住む。

◇

竹村鉦一郎　△東京市本所區綠町四ノ七に產婦人科竹村醫院あり、院長竹村鉦一郎博士經營の診療所也。氏は石川縣の出身、明治二十四年生にして、大正四年金澤醫專を卒へ、日赤長野支部病院及び橫濱十全病院等に勤務の後東京帝大醫學部に入り解剖學教室に次で產科婦人科教室にて研究、昭和七年十二月東大より學位を受領す。學位論文は「日本人ノ骨盤出口筋ニツイテ」なり、其他論著夥多あり。氏は熱心なる研究家にして、平生刀圭多忙にも拘らず臨床の餘暇今猶精研に餘念なし。

◇

室原農夫藏　△大阪市湊區夕凪町園田病院婦人科部長として活躍しつゝある室原農夫藏博士は、長崎醫專大正

十年の出身にして、卒業後軍務に服役して陸軍三等軍醫となり、大正十二年より熊本市谷口病院に於て產婦人科研究其間一時鄉里に於て醫術を開業せしが再び出で丶谷口病院副院長、日本赤十字社熊本支部產院醫長小兒科醫長、熊本產婆學校講師等に歷任、傍ら熊本醫大に於て森教授指導の下に內分泌學を研究、昭和七年十二月大阪市園田病院產婦人科主任として赴任今日に至る。主論文「甲狀腺ト腫瘍發育」及び參考論文七篇を熊本醫大へ提出して昭和七年十二月學位を受領せり。

△博士の出身地は熊本縣阿蘇郡南小國村にして、明治二十九年生る。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、釣を好み、盆栽を趣味す。博士の年齒漸く不惑に達し、臨床家として多年の經驗を積み、今や手腕壯熟して最も活躍の時代に入り、日々臨床に勵精努力して日も尙足らざるの槪あり。大阪市港區西田中町三丁目二四に住す。

◇

田中勉

△大阪市南區難波新地三番四四に內科、外科、產婦人科を專門とする田中醫院あり。院長田中勉博士の經營にして、開業古く、旣にして牢固たる地盤を有し、今や悠々として成功の位地にあり、最近改造の計畫ありと聞く。氏は東京慈惠醫專系の產婦人科學者にして、生理學の造詣深く、昭和三年より開業の傍ら大阪帝大敎授正井保良博士に就て生理學を、同中田篤郎博士に就て法醫學を專攻し、大阪帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博として其の手腕を認められ、氏が從來の仁術に一段の光彩を放てり。大阪市公同委員、大阪市敎化委員の公職にあり。

△更に氏が學歷より年歷を總括すれば、私立東京中學校を經て、明治四十二年東京慈惠會醫專を優等卒業、同年大阪私立河野產婦人病院勤務、同四十四年より兵庫縣城崎郡豐岡公立病院副院長として勤務、大正二年より七年まで河野產婦人科病院勤務、同七年より現住所にて產婦人科開業今日に至る、斯間、昭和三年八月より大阪帝大醫學部生理學敎室に專攻生として入室し、同八年二月學位を受領せり。

△學位主論文は「有機體內ニ於ケル脂肪ヨリ含水炭素ヘノ移行ニ就テ」にして、四篇より成る。參考論文は、(1)「チロキシン」注射ニヨル動物體內「グリコゲン」及脂肪ノ消長ニ就テ（二篇）、(2)動物ノ榮養ニ關スル知見補遺（「ビタミン」B缺乏食ヲ以テ飼養セラレタル動物ノ體內ニ於ケル脂肪並ニ糖原質ノ消長ニ就テ）、(3)「クレアチル」體ノ尿中排泄ニ及ボス諸種無機N鹽損ノ影響ニ就テ等なり。

△感想に曰く『自分は苦學獨力を以て眞面目卽ち「ウソ」を云はぬ、而して一生懸命に醫業を勉勵する者にして金や名譽を目的とせず、働くと云ふ事が「モットー」である。故に金持も貧乏人に對しても應待は同一である。現時の醫家は上層階級に頭を垂れ下層者には頭を上げて凡て應待し居る、大に改良すべきで、又あまり專門の弊に過ぎて笑いたくなる。人體を「マシン」と考へて居る醫者が多い、最もかくしなくては卽ち專門の弊を標示しなければ金を得る事が少ないからであるが患者が氣の毒である、兎角之れは現代醫師に望むのは眞面目で朗であつてほしい』云々、眞面目なる臨床家としての氏の爲人を窺はれる。

△氏は兵庫縣城崎郡豐岡町本の人、田中芳郎の長男にして、明治十九年生る。獨立獨步を貫行して、其の今日ある成業と篤學とは氏が前半生史これを語りて餘蘊なく、頂門の一針として可也。讀書家にして烏耕を號とし文才に富む。研究と診療とは氏の最も趣味とする所にして努力主義を「モットー」として、日々診療に勵精して亦他事を顧みず、業餘又克く精研修養に勉む。生來眞面目にして正を好み邪を惡み、居常朗かにして、同情に富む、又功名に恬澹たり強ひて言へば短氣の方ならんか。貴族院議員古島一雄氏は岳父にして、京都嵯峨天龍寺管長關淸拙氏は叔父（父方）に當る。

◇

饒村佑一

△滿洲診療界に躍進して、千葉醫大派の少壯醫博としての手腕を認められ、年次獨自の地盤を開

拓して、今や成功の域に邁進しつゝあるは饒村佑一博士也。博士の自營せる新都醫院は新京梅ケ枝町三丁目に在り、三階建の結構と相俟つて内容充實し、醫局員四名、看護婦、事務員等約五十名、自動車あり、半綜合病院にして當市診療界に於ける私立病院中の覇王を以て稱せられ、門前常に市をなすの盛況を呈しつゝあり。

△學歴より見たる博士は、縣立高田中學校、四高を經て、昭和三年千葉醫科大學を卒へ、引續き同大學病理學教室にて研究、後文部省海外研究員となり、獨逸ライプチヒ大學に三ケ年留學、歸朝後千葉醫大産婦人科教室にて研究、同三月同大學にて學位を授與せらる、次で滿洲國新京に於て開業、私立新都病院經營今日に至る。斯間母校の恩師石橋及び杉山兩教授の指導を受け、又獨逸にてはフツク教授に師事せり。專攻は産婦人科にして、特に病理組織の造詣深く手術を最も最意とす。

△學位主論文は「淋巴器官ノ研究」にして、參考論文は「日本住血吸蟲の研究」なり。氏の論著中「淋巴器管ノ研究」及び「各疾病ニ於ケル淋巴腺組織ノ研究」の二篇は、博士會心の作にして氏が最も得意とせるものと見るべき也。

△感想の一片に曰く「各人の研究を連絡して系統ある國家的事業にしたい。又た大研究所を建設しい」云々、以て氏が研究に對する熱心振りを窺はる。氏は新潟縣中頸城郡和田村國賀の人、戸主饒村彬成の長男にして、明治三十四年生る。鯤魚子、典洋はペンネームにして、書を能くし、文才に富む、研究以外の趣味として乘馬、スキー、謠曲等を好む。性來凝り性にて、物事に對するに甚だ熱心にして徹底的に貫行するの長所を有す。又臨床方面にては誠意、誠實を以てし、圓熟せる手術の好評と相俟つて多大の信望を博す。博士の年齒漸く三十有五歳、春秋に富むの前途は益々輝かし、切に自重加餐を祈ると共に、滿洲治療界の爲に益々努力奮盡あらん事を。

◇

加藤清吾

△福島縣若松市新横町に著名なる加藤醫院あり、父子の共同經營にて、院長は博士の養父加藤平次氏也。加藤清吾博士は産婦人科主任として克く院長を輔佐する所あり。博士は新潟醫大(專門部出身)系の新進にして、恩師上野道故博士に就きて産婦人科の蘊奥を究め、新潟醫大より學位を獲得せる名醫博として其の名聲を馳す。殊に博士は母校に於て多年臨床の經驗を積み、今や獨特の新手腕を發揮して餘す所なく、診療手術の好評は院長多年の聲望と相俟つて益々遠近の人氣の吸收し、當地方診療界に拔くべからざる地盤を有し一流の位地を占む。

△博士は大正九年新潟醫專入學、同十三年新潟醫大專門部卒業、同年四月より昭和七年五月まで同大學産婦人科教室勤務、同七年七月以來、自己經營の醫院にて診療に從事す、同八年五月新潟醫大にて學位を授與せらる。

△主論文は『「ヴイタミン」ノ雌性生殖器機能ニ及ボス影響』にして、參考論文は、(1)子宮筋「クレアチン」ニ關スル研究、(2)「レントゲン」線去勢並ニ手術的去勢ノ家兎子宮運動ニ及ボス影響、外四篇あり。

△博士は福島縣若松市新横町の出身、明治三十三年生る。學究的溫厚の少壯紳士にして篤學者たり、其の今日ある閲歴は既に博士の面目を語るに足る、年齒未だ三十有六歳にして少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として猶止まず、今は學識、手腕、人格共に漸く壯熟して最も得意時代に入る。殊に博士の最も特徴と見るべきは、診療に熱心にして眞劍なると、「醫は仁術也」をモットーとして、患者に對するに誠意誠實を以てし、飽くまで親切を盡す點にあり。一面又人に接するに懇篤にして溫情に富み、謙讓にして少しも自己の識學を衒はず、淡々として己れを虚うする態度の奥床しき所に博士の人格を窺はれ、人に敬慕せらるゝ德を有す。强ひて其の短所を指摘せしむれば、眞面目にして或は短氣の嫌なきか。讀書家にして書見を樂しみ、又映畫を好む、嘗ては柔道、ボート等に多大の興味を持てることあり。

◇

竹内茂代

△東京市四谷區三光町一に堂々の陣を張り、産婦人科を以て斷然群を拔く井出醫院あり、女醫界の權威竹内茂代博士の主宰する私立醫院にして、創業二十有餘の歴史を有し、完備せる内部の設備と相俟つて牢乎拔

くべからざる地盤を有す。殊に博士は自ら日々診療に勵み、博士獨特の手腕は好評嘖々として既に世人に周知せらる、博士は東京女子醫專の出身にして、文部省體育研究所長北豐吉及び同所技師吉田章信兩博士指導の下に衞生學を研究し、論文を東京帝大に提出して同大學より學位を獲得せる女醫界六人目の名醫博也。尙特筆すべきは、博士の夫君竹內甲平博士並に令弟井出欽一博士及び同夫人ひろ子博士の三人の醫學博士を一家より出し、今又自身も博士の榮冠を贏ち得たる事にして、日本にては始めて二組の博士夫婦が一家より出でたることは、博士界の美談として各方面より羨望せられたり。

△博士は明治四十年東京女子醫專の前身東京女醫學校第一回卒業、翌年文部省醫術開業試驗に合格、大正二年四月以降井出醫院を開設、產科婦人科の診療に從事する傍ら昭和三年九月以降文部省體育研究所長技師北豐吉博士及び同技師吉田章信博士に師事して衞生學を研究し、同八年八月東京帝大より學位を受領せり、現在文部省體育研究所衞生部員にして今猶研究を續行中なり。

△主論文は「日本女子ノ體質ニ關スル研究」にして、本論文は大正生れの滿十二歳の少女より弘化生れの八十六歳の高齡者に至るまでの各年代に於ける健康體の女性一萬四千二百七十九名、十六種類の各職業婦人に就て統計的に調査研究したるものにして、始めて日本婦人の體質の科學的全貌が明かにされ、其の學問的價値は既に學界に認めらる。參考論文は胸圍不足者につき如何なる職業群に體質不良者の最も多きか、胸圍不足者の他の身體諸部分の缺點等を詳にせり。

△研究の動機に就て謙遜なる博士感想を述べて曰く「實はこの研究の動機も如何にしたら日本婦人の體質を向上させる事が出來ようかといふ事を考へたことにあつたのです、研究を思ひ立つた昭和三年既に私は二十餘年產科醫としての經驗を持つて居ましたが、日本の女は年々筋力の弱くなる一方であるといふ事と、もう一つ體のいゝ母からは必ず體のいゝ子が生れるといふ事を知つて居ましたため、たまゝ家で使つてゐる看護婦達をどうしたらよい體にさせ得るだらうか、それには日本の女性はどんな體質を持つてゐるだらうか等と色々考へた時、初めて思ひ立つた仕事なのでした」云々。博士にして始めて貴重なる此の研究を完成せらる、博士の努力や甚だ多とすべき也。

△博士は長野縣南佐久郡川上村井出喜重の長女にして、明治十四年生る、井出欽一博士の姉にして、大正四年竹內甲平博士に嫁す。永年女醫界に活動して學界、診療界、並に社會事業の爲め努力貢獻し其の大なる存在を認めらる。而かも其の半面には開業の傍ら研鑽多年、凡有ゆる難苦に耐へ、具に慘憺たる辛酸を嘗めて遂に克く一大業績たる學位論文を完成して、榮譽ある學位を得たる篤學は近來稀に見る所にして、殊に女醫界の爲め萬丈の氣焰を吐きたるは大に人意を强からしむるに足り、其の不撓不屈の精神と不斷の努力とは、後進の採つて大に學ぶべき也。其の今日ある輝しき閱歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、今や壯齡五十有五歳、元氣甚だ旺盛にして活躍を續け、曩には關西未曾有の大風害見舞の爲め、東京市婦人界を代表して大阪に出張し、罹災學童の救濟保護に努力奮盡せるなど、獨り學界又は診療界のみと言はず、社會事業にも貢獻する所甚大なるものあるは敬服すべき也。夫君甲平博士は東京同愛記念病院病理科主任及び千葉醫大講師として嘖々たる名聲を馳せ、令弟井出欽一博士及び同夫人ひろ子博士は共に在米シヤトル市にて開業に從事しつゝあり、當世博士界中最も異彩に富む餘慶ある家柄と云ふべき也。

◇

宇多潤造

△朝鮮道立醫院醫官にして、全羅北道立群山醫院に於て產婦人科を擔任しつゝある宇多潤造博士は、東大系の產科婦人科學者にして、大阪帝大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博として其の手腕を認められ、今や朝鮮診療界に最も矚目せらるゝ新進人物たり。母校にては恩師盤瀨雄一教授指導の下に產婦人科學を專攻し、大阪帝大にては大學院在學中教授村田宮吉博士に師事して病理學を專攻せり。研鑽多年の造詣深く、其の蘊蓄を傾倒し

て今や朝鮮診療界の爲め努力貢獻する所あり。

△學歴より觀れば、市岡中學、六高を經て、大正十五年東京帝大醫學部卒業、同年四月東大附屬醫院産婦人科醫局入局、昭和三年八月札幌市立病院産婦人科醫長任命、同五年十二月辭任、同六年四月大阪帝大大學院學生として病理學教室に入る、同八年三月退學、同年九月學位受領、同年八月朝鮮道立醫官に任ぜられ現在に至る。

△學位主論文は「人類及ビ二三動物ノ妊娠性子宮肥大ニ關スル考察」にして、參考論文は、(1)人工黄體發生時ニ於ケル赤血球沈降反應ニ就テ、(2)性「ホルモン」ノ赤血球沈降反應ニ及ボス影響ニ就テ、(3)妊娠尿ノ赤血球沈降反應ニ及ボス影響ニ就テ、(4)同上第二報、(5)産褥尿ノ赤血球沈降反應ニ及ボス影響ニ就テ、(6)晩産ニ對スル「キニーネ」療法(7)妊娠後腫及ビ産褥浮腫ニ於ケル硫酸「マグネシウム」注射療法等なり。

△感想に曰く「醫師界は今一段と統制結合の要あり醫師たるものは大學教授たると官吏たるとを問はず全部醫師會に歸屬し確固たる基礎の上に立ちて醫師の問題につきては、日本醫師會によりて悉く處理すべきである。又衞生省を設けて所屬大臣或は現今の衞生局長等全部衞生事務に携はるものは醫界關係人を以てするを以て當然と思ふ、且つ彼の醫療類似行爲の外醫者の性行に就き嚴重に取締るは國民衞生の上必要なる事と思考す」云々。

△氏は岡山縣津山市田町の人、明治三十三年生る。學究的少壯の紳士、年齒漸く三十有六歳にして、手腕壯熟の域に入り最も活躍を要する時代なり。賦性誠實、馬鹿正直のほど眞面目の人也。筍象はペンネームにして、讀書を唯一の樂しみとし精研修養怠ることなし、又圍碁に親しみ、運動を好む。法博平沼淑郎、法博平沼驥一郎、醫博谷野駿等とは親戚の間柄なり。朝鮮群山府千代田町二丁目一〇一に住む。

◇

藤田　九万龜

△大阪市外吹田町一一八四に藤田産婦人科醫院あり。院長藤田九萬龜博士は大阪醫大系の名醫博たる新進にして、恩師たる現大阪帝大教授緒方十右衞門博士に就て産婦人科學を、又京大教授清野謙次博士に師事して病理學を專攻せり。主論文は『組織學上ニ於ケル「デアミン」色素群ノ應用』にして六篇より成る。參考論文は、(1)色素ノ細胞毒（超生體染色研究）、(2)色素ノ細胞毒ト其特異性、(3)色素ノ肝細胞毒ト全身中毒にして、學位は京都帝大より獲得せり。最も得意とするは産科にして今やその領域に就ての診療手術の評判良く、開業日尙淺きも、博士の高邁なる人格と相俟つて堅實なる發展振を示しつゝあり。感想としては「醫師の向上を望む、余は開業して二年、切に開業醫の醫師道德向上を願ふものである」云々と語れり、以て博士の心境を窺はる。

△博士は大正十年大阪醫大卒業後、直ちに同大學産婦人科教室に入室、同十三年四月迄産婦人科學を專攻し、同年五月より昭和五年三月迄兵庫縣氷上郡柏原町立病院産婦人科醫長拜命、同年四月より同八年十二月迄京都帝大醫學部病理學教室に於て研究、其間同八年十月京大より學位受領、爾來現住所に於て開業今日に至る。滋賀縣伊香郡木ノ本町千田藤田正邦の二男にして、明治二十九年生る。學究的少壯の紳士にして、殊に臨床家としての人格の尊重すべきを自重し、常に自らその向上と陶冶に力め、「醫は仁術也」の本分を盡す上にも常に精神の修養に餘念なきは頗る意を强うするに足る。輓近學位に伴ふ人格の向上尊重を高調するの秋、大に心强く感ぜらる。趣味としてはスポーツ殊に庭球を好む。年齒漸く不惑に達して益々少壯の意氣に燃え、多年の經驗と共に今や最も得意の時代に入る。診療界淨化の爲め折角の奮闘を祈るや切也。

◇

山元　清一

△名古屋醫科大學教授山元清一博士は、名古屋醫大系の少壯醫博にして、産科婦人科學者として の新進人物也。學系より觀れば、大正十五年名古屋醫科大學卒業後、任陸軍三等軍醫、爾來母校にて研究を續け、恩師吉川仲教授の指導を受け、學位主論文『妊婦尿ノ妊娠「マウス」ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」（三編）及び參

考論文、主として女性「ホルモン」に關する研究、六篇を完成して、昭和八年十一月名古屋醫大より學位を受領せり。現在助教授として母校の教壇に起ち、多年の蘊蓄を披瀝して熱誠克く學生指導の任に當り、一面には又自已の研究に沒頭して亦他事を顧みるの暇なきが如し。

△感想に曰く『社會が複雜なるにつれて生存競爭がますゝ激しくなつてくる、吾々醫者仲間も昔の樣に經濟的に有利な位置を占めることも難しくなつてきてゐるが、如何なる立場に置かれても醫者としての道義を忘れてはならないと思ふ、こんな解りきつた事柄を此頃痛切に感じさせられることが屢々である」云々。同感の士決して尠しとせず、近來此樣の叫びを聽くこと一再ならず、又以て傾聽すべき也。氏は大阪府南河內郡長野町字原の人、明治三十三年生る。少壯にして年齒漸く三十有六歲、意氣益壯にして研究心潑剌たるものあり、特記すべき何等の道樂を有せず、一意專心、唯だ研學と醫育及び醫療そのものに趣味を集中して一路邁進し、以て希望ある將來に俟つあらんとする所に、氏の輝しき前途ありと云ふべき乎、將來有爲の資に富む學究の士として、向後の活躍に期待する所益々大なり。名古屋市東區長堀町六丁目十四番地に住む。

◇

竹田文雄　△山形市香澄町至誠堂病院は當地方診療界に於ける一勢力たり。竹田文雄博士は婦人科を擔任して內外の信望を博し、新手腕を提げて勵精克く其の任を果たし、診療手術の評判極めて良好なるを聞く。學系は北海道帝大系の產婦人科學者にして、金澤醫大敎授笠森周護博士に就て斯學の蘊奧を究め、金澤醫大より學位を獲得せる少壯醫博として其の技倆を認められ、將來有爲の臨床家として最も囑望せらる。

△更に氏の學歷より見れば、昭和二年北海道帝大醫學部卒業後、直ちに東京泉橋慈善病院產婦人科勤務、翌三年金澤醫大產婦人科助手に任ぜられ、昭和十年四月迄勤務の傍ら研究に從事す、それより現職に就任今日に至る、斯間昭和八年十二月學位を受領せり。

△學位主論文は『姙娠尿「ホルモーン」ノ研究』にして、(1)就中白鼠「パラビオーゼ」ニ據ル實驗研究、(2)就中所謂黃體「ホルモーン」ニ就テ、(3)姙娠尿姙娠「ホルモーン」ノ分離方法並ニ該「ホルモーン」の性狀ニ就テの三篇より成る。參考論文は、(1)姙婦尿姙婦「ホルモーン」ノ去勢成熟雌性家兎生殖器ニ及ボス影響並ニ該「ホルモーン」ノ起原ニ關スル研究、(2)人胎盤姙婦血液並ニ姙婦尿中ニ於ケル所謂黃體「ホルモーン」ニ就テ、(3)姙婦尿中ノ腦下垂體前葉「ホルモーン」ノ副腎副出囓齒類ニ及ボス影響(第一回)、(4)家兎卵巢ノ脂肪及類脂肪含有量ニ關スル化學的並ニ組織學的研究、(5)硬「レントゲン」線ノ血淸色素並ニ赤血球ノ抵抗ニ及ボス影響等なり。

△氏は北海道小樽郡熊雄村の人、明治三十三年生る。少壯未だ三十有六歲、漸く手腕壯熟して最も活躍すべき時代に入る。勵精勤勉家にして至誠の士也。特記すべき何等の道樂を有せず、唯だ研究と醫療そのものを趣味として一路邁進し不斷の努力精進を續けつゝあり、將來有爲の臨床家としての前途や頗る春秋に富む。

◇

藤野幸太郎　△京都市左京區田中關田町二一に於て、產婦人科及び小兒科醫として再び開業せる藤野幸太郎博士は、最後の研究室を離れ實地治療界へ躍進して以來開業日尙淺きも、眞摯熱心なる診察振りと、多年經驗に富む的確明快なる打診とは頗る好評にて、漸次獨自の地盤を開拓して日々繁忙を極め、光る學位は昔日の仁術に一段の光彩を放てり。學系は金澤醫專系にて、學位は金澤醫大より獲得せるが、今や產婦人科の名醫博として其の玲瓏たる手腕を認められ、學究的好箇の臨床家として向後の活躍を囑目せらる。

△更に學歷より見たる博士は、大正六年五月金澤醫專卒業、翌七年四月より京都帝大醫學部小兒科選科に入り、同九年三月迄在學小兒科學を研究、同九年四月より十三年迄醫術開業、同十三年十月より翌十四年十月迄再び京都帝大小

兒科專修科在學小兒科學專攻、同十五年四月より昭和二年六月迄京都府立醫大選科在學婦人科研究、昭和二年七月より九年三月迄同大學研究科に在學產婦人科、病理學及び解剖學研究、同九年三月學位受領後、今日に至るまで頭書の現住所に於て、產婦人科及び小兒科方面に於ける實地開業に從事す。

△學位主論文は、壹篇『海猿姙娠時ニ於ケル「ヴイタミン」C缺乏食飼養ガ母兒ニ及ボス影響』にして、參考論文九篇あり、(1)超生體染色法ニヨル赤血球網纖狀物質ニ就テノ研究、第一報。臍帶血液中赤血球網纖狀物質ニ就テ、(2)同上第二報、實驗的紫斑病ニ於ケル赤血球網纖狀物質ノ出現ニ就テ、(3)同上第三報、實驗的バルロー氏病ニ於ケル赤血球網纖狀物質ノ出現ニ就テ、(4)同上第四報、海猿ノ饑餓試驗ニ於ケル赤血球網纖狀物質ノ出現ニ就テ、(5)姙娠海猿ノ饑餓試驗ニ於ケル齒牙生長速度ニ就テ、(6)玩具含鉛著色料檢査、(7)重複畸形兒(殊ニ二頭一體兒) Dicephalus ノ一實驗例ニ就テ、(8)重複畸形(二頭一體)兒一實驗例ノ續報、(9)子宮附屬器ノ自然離斷ニ就テ等。

△氏は京都市の人、明治二十年生にして、壯齡今や知命に達せんとす、熱心なる研究家としての今日ある篤學は、氏が前半生史これを語りて餘蘊なく、元氣益々旺盛にして、今は手腕、學識相俟つて愈々圓熟の佳境に入り最も重望せらるゝ位地にあり、向後の成功や期して待つものあらん。賦性篤實溫厚、几帳面にして萬事キチンとする正確の人也患者に接し人に對するに親切にして誠實なるは氏の長所ならん。研究と醫療そのものに趣味を集中して亦他事を顧みず、拮据黽勉、精研に餘念なきは甚だ多とすべき也。

◇

櫟本憲孝

△東京市日本橋區矢ノ倉町（山本病院隣）に著名なる產科婦人科日本橋產院あり、櫟本憲孝博士は同院長として活躍し、手腕、聲望相俟つて好評嘖々の裡に多大の信用を博しつゝあり。同病院は山本病院長山本八治ドクトルの經營にして、木造二階建、延坪三百坪、患者法定收容數三十八、其他內部の施設を完備し、醫局員及び產婆數名の外看護婦、藥局員、事務員等々あり、產科專門病院としての特徵を具備す。

△學歷より見れば、氏は昭和四年熊本醫大卒業後、直ちに神田駿河臺婦人科濱田病院醫局員となり、翌五年千葉醫大研究科入學、同八年財團法人贊育會病院本院產婦人科醫局員、同九年四月千葉醫大にて學位を授與せらる、同年九月京橋區靈岸島病院產婦人科部長、同十年六月より現職に在り。斯間、濱田病院長小畑惟清博士、及び贊育會病院河田茂博士に就て產婦人科學を、千葉醫大教授加賀谷勇之助博士に就て血清學を專攻せり、特に內分泌學の造詣深し。

△學位主論文は一篇(四部)の英文原著より成る "Investigations of Hemolytic Complement" (I) "Hemolytic Specificity" of Hemolytic Complement. (II) Hemolytic Complement in Fetal Life. (III) Quantitative Relationship between the Components of Complement & their Behaviour to Heating. (IV) Influences of a few Chemical Preparations on the Hemolytic Complement. 參考論文なし。他の論著中、(1)二三ノ新驅黴療法ニ就テ、(2)乳汁方針ニ關スル研究ニ就テ、(3)無月經ノ新療法ヘノ展望、(4)海外醫事時報。(5)世界學界ノ動史等は氏の會心の著作と見るべき也。

△感想に曰く、醫師界に對しては「日本醫界の現情は瑣事に拘泥して大局を逸するの憾あり。世界醫界の現況を見て將來の大計を樹立するに非ざれば、歐洲各國の覆轍を踏み國民保險實施の曉、その社會的地位を失墜するの恐れなしとせず、實に寒心に堪えず」云々と。又學界に對しては「新興日本醫學が世界水準に到達せる事は否めざるも、彼に一歩拔くには相當の努力を要す。獨逸系醫學の檢討は勿論、今日輕視す可からざるは「アングロサクソン」並びに「ラテン」醫學の進歩なり。英の醫理學、米の內分泌學、外科學、佛の外科、內分泌、細菌、放射線學、伊太利の血清學、治療學なりと思惟す」云々。

△氏は熊本市七軒町に本籍を有し、官幣大社宗像神社宮司、士族櫟本憲昌の長男にして、明治三十六年生る。年齒未

だ三十有三歳、學究的少壯の紳士也。「ノルタ・イチノ」はペンネームにして、狂雨（俳句）を號とす。多趣味の人にして、新興美術理論（例へば新卽物主義、超現主義繪畫等）に關しては、(1)新卽物主義繪畫論、(2)稚拙なる新興美術への展望、(3)黑き象を見たり等の著あり。更に音樂の黎明期（胎）より想起せば、一九二四年熊本に合唱團「ヲ、スカラ・コール」を創設、熊大在學中右樂團指揮者たり、又熊本學生「ドラマ・リーグ」會長たり、文藝雜誌「胎」及び「雨裡」同人。此他自由詩、聲樂（次低音）、洋畫、文藝批評、隨筆等々敢て人後に落ちず、又スポーツを好み、愛讀家たり。性格は直情徑行にして、長短共に熱と力の「エビゴーネン」たるか。小畑惟淸博士とは遠戚なり。

◇

黃演烺　△臺灣治療界に躍進せる黃演烺博士は、其の最も得意とせる外科及び産婦人科を標榜して、臺中市柳町三ノ一一に自己經營の黃外科産婦人科病院長として起てり。本年十一月に新築竣工せる本病院は、堂々たる結構にして特に手術室の設備に全力を盡し、官立病院に優るとも決して劣らず、病舍は外科、産科、婦人科に別れ、夫れ〴〵專門の手術室を附屬せしむ、自宅は病院構內にありて危急を要する場合遺憾なからしむ、用意の周到なる又察せらる。博士は日々自ら診療に當面して細心の注意と、博士獨特の新手腕を發揮して益々大衆の人氣を獲得し、近時著るしく發展振りを示し、博士の理想を實現化しつゝあり、蓋し近時の成功家と謂ふべき也。

△博士は臺北醫專出身の篤學者にして、大正十五年卒業後、直ちに日赤臺灣支部醫院産婦人科勤務、昭和二年三月東京醫專卒業の後、故鄕にて三ケ年間開業、次で京都帝大醫學部專修科入學、昭和六年七月修了、直ちに副手拜命、同九年四月京都帝大にて學位受領、同年八月より日赤大阪支部病院外科勤務の後ち現住地に開業今日に至る。斯間、京大にては岡林教授に就て産婦人科を、尾崎教授に就て藥物學を專攻せり、特に外科、産科、婦人科範圍內に於ける手術を最も得意とし自信を有す。

△學位主論文は「局所痲醉藥ノ呼吸作用ノ研究並ニ該藥中毒ノ實驗的治療的研究」にして、參考論文は『培養セル「フイブロブラステン」ノ生長ニ及ボス諸種類ノ影響並ニ組織的研究』なり。特筆すべきは痲醉の際の呼吸痲痺に對する實驗治療の研究に全力を注ぎたる點にあり。

△感想に曰く、學界に對しては「新聞に傳へらるゝ學位賣買事件並に學閥の醜い爭ひに對し遺憾に思ふ」又醫師界に對しては「醫は仁術であると云ふことを多くの醫師が忘れてゐる點並に一部の策動家が凡ゆる非人格的行爲を敢てなし同業者を陷入れんとするのを見て憤慨に堪えん」云々。

△博士は臺中州東勢郡石岡庄字九房厝の出身、黃鑽水の四男にして、明治三十五年生れの少壯紳士也。年齒未だ三十有四歳、篤學者としての其の今日あるは、旣に氏の前半生史に光彩陸離たるを見る。意氣旺盛にして研究心に富み、愛讀家にして閑あれば讀書精研修養今猶怠ることなし、又音樂を好み殊にピアノを能くす。若し氏の趣味とする語學に至りては、天才的にして日、英、獨、佛、露、ギリシヤ、羅甸、馬來、北京官話、厦門語を「マスター」し居れり、母國語は廣東（喀喙）語なるが、ギリシヤ、ラテン語は京大文學部田中教授に就き學習したる外は何れも其の國の人に就き修得せり、目下なほ伊太利、西班牙、葡萄牙語の學習中なりとは、一大驚異にして敬服に値す。性來學究肌の仁にして無口の方なるが、純眞にして溫情あり同情に富む。臺北醫專藥物學教授杜聰明博士との親交あり。

◇

磯野隣夫　△山口縣防府町三田尻弘中病院に産婦人科醫長として磯野隣夫博士あり。氏は香川縣三豊郡一ノ谷村の出身、明治三十三年生る。大正十二年岡山醫科大學專門部の出身にして、現慶大教授安藤畫一博士に就て産婦人科學を專攻し、昭和九年五月岡山醫大より學位を獲得せる少壯醫博也。學位論文は「臍帶脫落ニ關スル研究」にして、參考論文なし。年齒未だ三十有六歳にして、潑剌たる意氣と共に手腕漸く壯熟し、診療手術の好評は益々內外の

信望を博す。而かも洋々たる前途は猶頗る春秋に富む、今後一層の努力を要すべし。山口縣防府町三田尻に住む。

◇

空閑重秋　△滿洲醫科大學助教授にして産婦人科學を講じつゝある空閑重秋博士は、南滿醫學堂出身の秀才にして、産婦人科學者として一家を成し、前滿洲醫大林教授及び現滿洲醫大西塚教授に就て研究の結果、滿洲醫大より學位を得、斯科界近來の少壯醫博として其の前途を囑目せらるゝ新進人物たり。年齒未だ少壯にして潑剌たる研究心を有し、現在にては醫育と研究とに專念沒頭して亦他事を顧みず、不斷の努力精進を續けて學生指導の任に當り、傍ら自己專門の領域に就ての研究に邁進しつゝあり。

△學歷より觀れば、大正十四年南滿醫學堂卒業後、直ちに關東廳醫員を拜命し、大連婦人醫院に勤務す、昭和三年より滿洲醫大産婦人科教室へ入局、勤務の傍ら研究に從事し、同九年五月滿洲醫大より學位を受領し今日に至る。

△學位主論文は『「ツオンデツク」「アツシュハイム」氏姙娠反應ノ研究』にして、(1)兩氏の姙娠診斷法ノ價値、(2)所謂腦下垂體前葉「ホルモン」ノ分布、(3)姙娠反應ノ本態並ニ反應機轉ニ關スル實驗的研究、(4)本態余ノ所謂「X」物質ノ産生母地ニ就テの四篇より成る。參考論文は、(1)月經週期ニ伴フ赤血球ノ抵抗ニ就テ、(2)胎盤「エキス」並に姙婦尿ノ雄性幼若「マウス」ノ生殖器ニ及ボス影響、(3)腦下垂體剔出及腦下垂體物質ノ投與ガ網狀織內被細胞系統機能ニ及ボス影響、(4)姙婦尿注射ニヨル人工的黃體發生ガ網狀織內被細胞系統機能ニ及ボス影響、(5)甲狀腺機能ガZ・A氏姙娠反應ニ及ボス影響、(6)副腎機能ガZ・A氏姙娠反應に及ボス影響等なり。學位論文中にての主要題目は「Z・A氏姙娠反應の本態並に其の反應機轉」にして、現在迄の作業中の興味を有するものは內分泌方面特に「性ホルモン」研究なりとす。

△感想に曰く「現住的關係より滿洲國の醫師法の制定を望む」云々。氏は福岡縣浮羽郡柴川村惠利の人、空閑秀吉の次男にして、明治三十三年生る。純眞なる學者として高邁なる人格を備え、志操堅實にして眞面目なり、强ひて言へば或は斷に缺くる所なきか。研究以外には寫眞と旅行を趣味す。空閑重行醫博は兄なり、兄弟兩博士の健康を祝し、幷せて滿洲醫學界の爲め益々努力盡瘁あらん事を翹望して止まず。奉天宮島町三番地三ノ五に住む。

◇

澤崎嘉衛　△朝鮮全南木浦府立病院に産婦人科部長として澤崎嘉衛博士あり。本府立病院は各科部長共學位を有し、一ケ年豫算八萬圓、收入は豫算を超過せりと云ふ。博士は其の專門科を擔任して獨特の手腕を揮ひ、誠意誠實を盡しての熱心振りと、診療手術の好評は、兩々相俟つて內外の信望を博し、今や朝鮮診療界に於ける新手腕家として重きを爲す。學系は滿洲醫大系にして、學位は九州帝大より獲得せるが、斯間、斯科界現代の權威たる九大教授白木正博博士より指導を受けたる蕈陶に負ふ所尠しとせず。

△更に學歷より見たる氏は、昭和五年滿洲醫科大學卒業後、直ちに九州帝大醫學部産婦人科教室に入局、同九年三月まで勤務の傍ら研究に從事し、爾後現職に就き、同九年八月學位を受領す。主論文は『腦下垂體硬「レ」線照射ノ雌狀海猩生殖ニ對スル形態學的及機能的研究』にして、(1)腦下垂體硬「レ」線照射ノ生物學研究、(2)腦下垂體硬「レ」線照射後ノ卵巢ノ組織化學的研究、(3)腦下垂體硬「レ」線照射後ノ剔出子宮自働運動、(4)本研究ノ總括及結論竝ニ臨床的應用意義の四篇より成る。參考論文としては、(1)手術不可能狀子宮頸部癌ニ對スルP、O、U、「ホルモン」ノ價値ニ就テ、(2)赤血球沈降反應ト血液型トノ關係、(3)女性狀「ホルモン」特ニ卵巢濾胞「ホルモン」ニ就テ、(4)海猩ノ狀周期ト卵巢ノ組織化學的變化特ニ脂肪所見ニ就テ外七篇あり。

△氏は廣島市段原大畑町澤崎繁夫の養子にして、明治三十七年生る。年齒未だ三十有二歲にして、新進の意氣に燃え研究心潑剌たるものあり。運動に趣味を有し身體强健なり。將來有爲の臨床家として頗る春秋に富み、前途猶洋々た

り。朝鮮木浦府山手町六に住む。

◇

高　敬　遠　△臺北市永樂町一ノ二一に高產婦人科醫院あり、院長高敬遠博士の經營にして、開業古く、病床十數箇、其他內部の設備整ひ、既に牢固たる地盤を有す、附屬として臺北產婆看護婦講習所の設けあり。博士自ら日々診療に勵み、傍ら產婆看護婦養成の爲め努力盡瘁する所あり。氏は臺北醫專の出身にして產婦人科醫として一家を成し、特に女性ホルモン療法を得意とし、又藥物學の造詣深し。岡山醫大より學位を獲得せる後ち歐米各國へ遊び、獨逸伯林大學產婦人科教室にてワグナ教授指導の下に斯學を研鑽大に得る所あり。今や其の蘊蓄せる學殖と共に技術的手腕を發揮して益々人望を博し、洋々たる前途の發展や頗る囑目に値す。

△更に其の學歷より見たる博士は、大正四年臺北醫專卒業後、臺灣總督府臺北醫院產婦人科に入局、大正九年十月臺北市に產婦人科開業、昭和四年四月臺北醫專藥物學教室研究員、臺灣總督府中央研究所囑託となり、同九年十一月學位授與、同年十一月歐米各國へ醫學視察、其間主として前記伯林大學にて研究、同十年六月歸朝今日に至る。斯間、母校の恩師杜聰明教授に就て藥物學を、同迎諧教授及び伯林大學ワグナ教授に就て產婦人科學を專攻せり。

△學位主論文は「臍帶浸出液ノ生物學的利用」にして四篇より成り、參考論文は「プルムバギン」ノ藥物學的作用外四篇あり。他の論著中「種々ナル藥物ノ家兎剔出腸管ニ於ケル脫出性作用ニ就テ」は博士會心の作と見るべき也。

△感想に曰く「臨床と研究をよく連結調合すべく亦患者と醫師との理解を一層增進せしむる樣努むべしと常に感ず」云々。氏は臺北州文山郡故高水成の次男にして明治二十六年生る。學究的溫厚の紳士にして、篤學者としての閱歷は氏が前半生史に光彩陸離たるものあり、年齒當に四十有三歲、年壯の意氣益壯にして多量の分別を有し、今は手腕、學識共に圓熟して最も得意の時代に在り。杏苑は其號にして愛讀家たり。研究と醫療そのものに趣味を集中して努力勵精する所あり、殊に氏の今日ある成業と篤學は、臺灣出身者中の代表的學者として敬意を表すべき也。

◇

下平淑　△下平淑博士の經營せる下平產婦人科醫院は、本院を東京市豐島區西巢鴨二ノ二二一八に、分院を芝區田村町二ノ七に置き、本院は產婦人科を專門とし、分院は產婦人科及び內科を專門とす。博士は日々自ら診療に忙殺され席を溫むるの暇なく、孜々營々として努力勵精する所あり、博士獨特の手腕は好評にて門前常に賑ひ、兩院共日增殷盛を極めつゝあり。氏は前金澤醫大教授にして附屬病院長たり、外科界の泰斗として學界に其の盛名を馳せたる故下平用彩博士の嗣子にして、嚴父の衣鉢を承け溫厚篤實なる學究的紳士としての人格者也。

△氏の學系よりすれば、四高を經て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、後ち慶大醫學部產婦人科並に臨床細菌學教室にて研究、斯間、川添正道教授及び小林六造教授の指導を受け、昭和九年十一月慶大より學位を受領せり。主論文は(1)無熱褥婦及ビ有熱褥婦ノ惡露ヨリ採取セル溶血性連鎖狀球菌ト褥婦ノ臨床的關係並ニソレ等ノ溶血性連鎖狀球菌ノ分類及ビ性狀ニ就テ、(2)產褥婦惡露ヨリ分離セル溶血性連鎖狀球菌ノ「エスクリン」分解、特ニ葡萄類ガソノ分解試驗ニ及ボス影響ニ就テの二篇より成る。外に參考論文四篇あり。

△氏の嚴父用彩博士は和歌山縣の出身、明治二十二年の東大卒業にて獨、墺、瑞に留學し、外科界の權威と仰がれたる純眞の學者なりしが、可惜、大正十三年二月二十三日逝去せらる。氏は長男にして、明治二十八年生る、現在は本籍を現住所に移す。年齒富に不惑有一歲、少壯にして研究心に富み、意氣益々壯にして學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、診療と研究とに趣味を集中して亦他事を顧みるの暇なく、誠意誠實を以て仁術の本分を盡すに餘念なし。今や大衆より信賴と尊敬とを受け多大の聲望を博す、猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、幸ひ健康にして益々努力奮鬪あらん事を望むや切也。

◇

渡邊二三男　△兵庫縣武庫郡芦屋山角一一〇〇に新興せる渡邊産科婦人科醫院あり、院長渡邊二三男博士の經營にして、新裝せる病室五室、收容人員八名、其他内部の設備全く成り、博士自ら診療に精進し日々繁忙を極め、診療手術の好評と相俟つて漸次獨自の地盤を開拓しつゝあり。學系は熊本醫大にて、學位は大阪帝大より獲得せる新進の少壯醫博也。

△學歴より見たる氏は昭和五年三月熊本醫大卒業後、同年四月大阪帝大醫學部副手、同年八月助手拜命、同八年十月辭職、直ちに大阪東條産科婦人科病院勤務、同十年一月大阪帝大より學位受領、同年九月より現住所にて開業せり。斯間、大阪帝大教授谷口腆二博士に就て細菌學を專攻せり、專門は産婦人科を以て立てり。

△學位主論文は『實驗的家兎鼠咬症ノワ氏「レアギン」様物質ニ關スル研究』にして、參考論文は、(1)姙娠時ニ於ケルワ氏反應ノ吟味、(2)メイニツケ氏清澄反應(Klärungs Reaktion)ニ就テ、(3)流行性腦脊髄膜炎球菌ノ豫防接種ニ就テ、(4)細菌莢膜ノ新染色法等なり。

△氏は福岡縣築上郡千束村の人、明治三十五年生る、大阪東條病院長渡邊範介博士の弟也。年齒未だ三十有四歳、學究的少壯の紳士、臨床家としては學術の研究と相俟つて多年の經驗を積み、今や獨特の手腕を有し愈よ壯熟の域に入る。開業日尚淺少にして未だ理想の境に到らざる迄も、向後の活躍と相俟つて輝しき前途の發展は大に待望せらる。研究以外の趣味としては庭球、圍棋、撞球等を好む。將來有爲の資に富む博士、折角の奮鬪努力を望むや切也。

◇

飯尾秀平　△兵庫縣加東郡天神二三九に歴史ある飯尾家累代の飯尾醫院あり、飯尾秀平博士は副院長として産婦人科を擔任し、特に婦人の内科を最も得意とし、博士獨特の手腕を發揮して嘖々たる好評を博す。氏は慶大系の産婦人科學者にして、恩師川添前教授、川上漸教授、安藤教授指導の下に研究の結果、母校より學位を得、所謂慶大派の少壯醫博として診療界に躍進せる新手腕家也。向後の活躍は刮目を以て囑望せらるゝ所あり、將來有爲の臨床家としての博士や、前途の努力を要するや益々切なるを想ふ。

△學歴より見たる氏は、兵庫縣立小野中學校を經て、大正九年慶大醫學部入學、昭和三年同大學卒業後、直ちに同學部産婦人科教室入局、臨床方面並に臨床病理學方面に研究を積み、同十年二月學位を受領せり、爾來飯尾家累代の醫業を手傳ひ今日に至れり。

△學位主論文は「子宮癌ト共ニ剔出セル骨盤淋巴腺ノ組織學的研究」にして、參考論文は、(1)人體子宮ニ於ケル所謂「アデノミオージス」並ニ結核合併症ノ興味アル一症例ニ就テ、(2)陰挺畸形ト巨大ナル卵巣肉腫合併ノ稀ナル一症例ニ就テ、(3)一卵性双胎ノ興味アル二症例ノ比較觀察並ニシヤツツ氏ノ急性羊膜水腫成因ニ對スル疑義等なり。他の論著中「範域疾患トシテノ子宮癌」及ビ同一本原ノ癌肺ノ生物學的性狀ガ境地ノ影響ニヨリテ著シク變化スル點」等は博士會心の作にして最も重要のものと見るべき也。

△學界及び醫師界に對しての感想としては「兩方共多々有之候も語る機に非ざることを強く感じ申候、此の理由は、大乘的に尚沈默の必要有之候」云々。氏は現住地亡父飯尾秀龍の五男にして、明治三十四年生る。振海(川上斬水教授より命名されたるもの)を號とし、趣味としては禪味ある生活ならば何んでも好む風あり。性淡白にして、凡てに執着心强く、物に熱する方なり。姻戚中には二、三の博士あるも心からの親戚緣者はなしと聞かさる。

◇

深町朗安　△岩手縣花卷町共立病院産婦人科部長として深町朗安博士あり、學系は長崎醫大に屬し、學位は慶大より獲得せる名醫博士にして、産婦人科專門醫として錚々たる者也。講師として久しく慶大醫學部の教壇に起ち、

學生指導の爲め努力貢献する所ありしが、診療界に進出して以來、誠實親切を以て其の職務に勵精し、獨特の手腕を發揮して益々内外の信望を博しつゝあり。

△博士は長崎縣立長崎中學校を經て、大正十年長崎醫專を卒へ、直ちに慶大醫學部病理細菌學教室に研究生として入室、川上澥教授の下に研究、同年十二月醫學部助手に任用せられ、同十四年四月同學部講師となり病理學を擔任せり、同年七月學位受領、次で現職に就任せり。

△學位主論文は「肝臓物質ノ腹腔内注入ニ因ル肝臓ノ變化ニ就キテ」にして、參考論文としては、(1)癲ニ對スル大風子油製劑ノ靜脈内注射療法ニ就テ(共著)、(2)稀有ナル放線狀菌病ノ一例、(3)癌前驅性皮膚病ニ就テ(英文)、(4)淋巴陰囊特ニ其病理組織學的研究、(5)病理組織學的ニ論ジタル淋巴陰囊ニ就テ(獨文)、等あり。外に、(1)流行性腦炎ニ於ケル肝臓ノ病理組織學的研究、(2)潜伏結核病竈ノ病理解剖統計學的研究、(3)所謂特發性總輸膽管囊腫ニ就キテ、(4)稀有ナル大動脈瘤ノ一例ニ就テ其他論著夥多あり。

△博士は長崎市東濱町齶師深町佐久馬の次男にして、明治廿九年生る。學究的溫厚の紳士にして、年齒漸く不惑に達す少壯の意氣を以て立ち、手腕壯熟して最も得意時代に入る。多趣味の人にして庭球、野球、短艇、水泳等を好み身體頗る强健なり、呂庵は號にして、俳句にのみ用ふ。春秋猶頗る豐富なれば、洋々たる前途は更に大に待望せらる。長崎市西濱町深町病院長深町朗學士は兄にして、寄木大勇博士は岳父（妻の父）なり。

小兒科

永井　靜

△高松市兵庫町に新裝せる内部の設備と相俟つて、打診の評判遠近に轟き超然として一流に在る永井病院は、永井靜博士の診療所にして、小兒科を以て其の地方を風靡す。博士は京大出身の小兒科學者にして、斯科界現代の權威たる恩師平井毓太郎博士に就きて斯學の蘊奥を究め、大學院在學中は教授清野謙次博士指導の下に專ら血液學を研究せる、京大派の名醫博として其の手腕を認められ、今や四國診療界に於ける重鎭としての貫祿を有す。現今香川縣醫學會及び高松醫學會の副會長たるは、亦以て氏が社會的位地を表徵する一端を窺はる。

△博士は高松中學校、四高を經て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに副手となり小兒科教室に入り平井教授に師事す、同十年十二月清野教授歐洲より歸朝して同大學微生物學教室を擔任せらるゝに及び、大學院學生として同教室に入り專ら血液學を研究す、同十四年四月恩師の薦めにより高知市楠病院小兒科長として赴任す、同年六月學位受領、昭和四年歐洲に遊學し、昭和五年二月楠病院を辭し現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「血球溶解現象ノ形態學研究」にして、參考論文は、(1)鳥類ノ血球ニ就テ、(2)鳥類ノ住血寄生蟲ニ就テ、(3)ギームザ氏液ヲ以テセル超生體染色法、(4)大正十三年夏季香川縣地方ニ於ケル流行性腦炎ノ研究、(5)母乳榮養兒ノ哺乳量測定ニ就テ、(6)治療セル化膿性腦膜炎ノ一症例及ビ其病原菌（グラム陽性ノ桿菌）ニ就テ、(7)坐高ト榮養法ニ就テ、外七篇あり。

△感想に曰く『私は生來病弱にて幼時頻々たる痙攣發作毎に現在「治療及處方」主宰たる長尾折三氏のお世話になり矮小蒼白の小學期を經て中學に入るに及びて當市上原道場にて三年有半劍技を學び漸く健康と氣質の素地を得、次に

臨濟宗の逸足現高松中學校長横田宗直氏に磨かれ、更に平井先生に小兒科臨床の實際と勤勉廉直の好模範を指示され清野先生に學問研究の法と細心巨腹の妙諦を授けられ漸く一人前となつた。三十年研學の生活を許された先祖の遺財に負ふ所亦大なると共に斯く次々に良師の指導を得て菲才の身にして今日あるを思へば四恩感謝の念に堪えぬ。今は眞の臨床家たらん事を努め日の足らざるを惜しむ。傍ら小兒の世界に盡さんと「高松童蹣研究會」を率ゐ「高松こどもの會」にも力を致す』云々。

△高松市永井武七郎長男、明治二十四年生る。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある閲歴は博士の感想よくこれを語つて餘蘊なからしむ。年齒漸く不惑に入る五歳、今は分別盛にして學識、手腕、人格共に圓熟して最も得意の時代に在り。殊に博士の最も特徴として見るべきは、學問と併せて自ら精神の修養に怠らず、常に恩師に對する感謝の念を捨てざる點に在り。研究以外の趣味としては遠足を好み、近時書道を學び、油繪を好む。

◇

磯部正雄　△東京市磯部小兒科醫院（牛込區矢來町二七）院長磯部正雄博士の名聲は、帝都治療界に響き、小兒科の名醫博としての大なる存在を認めらる。結構宏大とは云ひ兼ぬるも、和洋折衷の氣持の善い建物にて待合室診療室、應接室、藥局等整然として設備に間然する所なし、患者に接するに親切丁寧にして、且簡易を旨とし病家本位なれば、門前常に賑ひ、診療甚だ多忙にて席を溫むるの遑なきが如し、盛也と云ふべき哉。

△博士は山口縣防府町三田尻士族亡正勝の長男、明治十八年生にして、大正元年京都帝大醫科を卒へ、副手として同大學附屬醫院小兒科に勤め、同五年助手となる、同六年依願免官、西宮市西宮回生病院小兒科長に聘せらる、同十二年辭職、京都帝大大學院入學、平井教授及び藤浪教授の指導を受け小兒科學及び病理學を研究し、同十四年八月學位を受領す、爾來現住所に於て開業、小兒科の診療に從事し現在に至る、以てその今日ある學識、經驗の圓熟せる點に於て認識を得るに足る。

△學位は母校たる京都帝大より獲得せるが、主論文は『所謂人乳中毒症ノ本態附鳩「ヴイタミン」B缺乏症知見補遺』にして、參考論文は、(1)乳兒脚氣ニ對スル「ヴイタミン」B劑ノ影響、(2)鳩强制飼養法並ニ鳩嗉囊內殘留食餌排除法(3)所謂腦膜炎其他ノ腦脊髓液ニ於ケルロホニー氏C數、(4)異嗜症ノ一療法、(5)結節性僂麻質斯症の五篇なり。他にも論著夥多あり。

△一度び其風貌に接せんか、臨床常に多忙なるにも拘はらず、破顔一笑溫容を以て迎へられ、應待丁重にして却つて恐縮す。談論風發、話題に富みて頗る痛快なり、その話振りの圓滑にして情味たつぷりしたところに、好感を起さしめ敬慕の念を深からしむるものあり。博士は去七年秋より約半歳に亘り齒性骨髓骨膜炎兼敗血症を患つたとの事にて其後健康舊に倍し頗る元氣なるが、愛嬌あふるゝ中にも學者そのものゝ威嚴さを表示し、小兒科の大家として、その相應しき態度は、其今日ある所以を物語るものとして深き印象を殘せり。

◇

藤井秀旭　△南洋に進出して奮闘的活躍を續け、在外同胞の治療、衞生、保健上絶好のリーダーとして多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、南洋廳醫院醫長バラオ醫院長藤井秀旭博士也。京大系の小兒科學者にして、母校より學位を獲得せる名醫博也。

△博士は大阪府泉南郡孝子村の人、明治十三年生れにして、私立數學院尋常中學、一高を經て、明治四十年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として小兒科教室に勤め平井教授に師事すること年餘、次で東京市日本橋區中洲養生院に勤め小兒科を擔任す、大正二年お茶水順天堂醫院に轉勤小兒科を擔任す、同十二年大震災に依り同僚と共に順天堂醫院を辭退し、同十三年京大大學院に入り、平井毓太郎、藤浪鑑、清野謙二教授等に師事して造詣する所あり、同十四

年八月學位を受領し、大學院を退學す、同十五年小石川區鶯籠町に診療所を新築し小兒科の診療に從事し傍ら、昭和二年以來日本橋區中洲病院小兒科々長を兼務す、同六年四月頭書の現職に任官同地に赴任す。

△主論文は「コレラ」ノ實驗的研究にして、(1)實驗的「コレラ」ニ於ケル腎臟ノ變化、(2)實驗的「コレラ」ニ於ケル腦脊髓液內還元性物質ノ消長、(3)實驗的「コレラ」ニ於ケル血液及ビ腦脊髓液炭酸瓦斯量ノ研究、(4)實驗的「コレラ」ニ於ケル腦脊髓內「アセトン」ノ出現ニ就テ、(5)實驗的「コレラ」ニ於ケル肝臟ノ變化の五篇より成れり。參考論文は、(1)小兒期ニ於ケル大葉性肺炎六十八例ノ統計的調査、(2)小兒期ニ於ケルビルケー氏反應トモーロー氏反應トノ比較研究、(3)腸性紫斑病ニ就テ、(4)哺乳兒期並ニ小兒期ノ潛伏性先天黴毒及其療法、(5)紫斑病及其療法の外九篇あり。

△感想に曰く「大學出たての頃は何でもわかる樣な氣がして、自分も一かどの大家になつたつもりでうぬぼれてゐたが、二、三年たつと今度は何が何だか少しも分らなくなり、これではならぬと大に悲觀してゐると、何時となしにまた少しわかり出し、又暫くすると全くわからなくなる。コンナことを二、三年每に殆ど周期的に反覆して二十五年も夢の樣に徒らに過してしまつた。今後また大學卒業當時の樣な馬鹿氣た然し愉快な感情の起ることは有り得ないと思ふ。恩師平井毓太郎先生が名づけて下さいました「假稱熱帶性發熱症（Sogenante tropische Hypertermie）の研究に身を獻げたいと思つて居ります」云々。

△文學趣味の人にして文才に富み、殊に江戸文學の造詣深く、馨英、水葉を號とす。學究的溫厚の紳士にして、一度び其の磬咳に接せんか、敢て學者として尊大振るなく、應待頗る丁寧、談快活にして、情味豐かなるは好感を覺えしめ、敬慕の念を深からしむ。姻戚には醫博岡村龍彥、法博原嘉道、醫博林春雄、醫博緒方知三郎、醫博赤松純一、醫博故原田顯、醫博阿部喜市郎、理博植村琢等々あり、餘慶の家柄と云ふべし。

◇

島　信　△東京市牛込區新小川町一ノ一二に小兒科島病院あり。院長島信博士は、大正六年組の東大出身にして、恩師柿內（三郎）教授に師事して醫化學を、同栗山（重信）教授に就て小兒科を專攻し、母校より學位を獲得せり。嘗て歐米に遊びて知見を博め、學識の深遠と相俟つて多年の經驗に富む。學位主論文は「蛋白酵素ニ關スル研究」にして、(1)自家分解ニ關スル研究、(2)「ペプシン」消化ニ關スル研究の二篇より成り、參考論文なし。

△明治二十三年生にして、二高を經て、大正六年東京帝大醫科を卒へ、直ちに副手として醫化學教室に勤め、同十一年小兒科教室に轉じて以來小兒科學を專攻す、同十二年十月學位受領、同十四、五年歐米視察、歸朝後講師として小兒科教室に勤續す、昭和三年以來開業今日に至る。島小兒科の今日ある大なる存在は既に一般に認められ、今や好評嘖々の裡に超然たる位地を占む。スポーツに趣味を有する丈に立派なる體格にして、凛々たる風貌の中にも厭味なき溫顏は、能く其性質を表して人に好感を與ふ。

◇

奧藤重二　△大阪市東區博勞町五ノ二七に奧藤醫院あり、小兒科專門を以て著聞し牢固たる地盤を有す。院長奧藤重二博士は金澤醫專の出身にして、卒業の翌大正五年六月文部省普通學務局學校衞生課に勤務、同八年六月之を辭し、直ちに京都帝大醫學部に勤務の傍ら在學し同十五年八月に至る、同十四年十一月京都帝大より學位を受領す京都帝大辭職後大阪市にて開業今日に及ぶ。

△主論文は「血管灌流ヲ行ヒツツアル摘出腸管ニ就テノ研究」にして、第一生理學的研究、第二藥物學的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)「アントラヒノン」屬植物性下劑ノ瀉下作用ニ就テ、(2)「コカイン」ノ神經纖維麻醉作用ニ及ボス溫度ノ影響ニ就テ、外四篇あり。指導教授京大教授平井毓太郎、鈴木正兩博士（以上小兒科）並に同尾崎良純博士（藥物學）に負ふ所多し。

△大阪市の人、岳父は虎之、同市の醫士なり、明治二十四年生る。當年不惑に入る五歳、手腕圓熟して一段の貫祿を加え、臨床家としては今が最も腕の冴えたる得意の時代なるべし。

◇

原田達三　△我國小兒科界の大家にして、大阪醫界の重鎭たる原田達三博士は、曩に都市計畫に災はひされて既に二十餘年に垂んとする古き開業地を放棄し、今は親友土肥衞博士と共同して、大阪市北區曾根崎上四丁目に產婦人科小兒科の綜合病院を經營し、堂々の陣を構へて博士自ら日々診療に勵み、打診の好評は繁榮をいや增し、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有し成功の域に在り。博士は京都帝大の出身にして、恩師平井毓太郎教授に就きて斯學の蘊奧を究め、又鳥潟隆三博士指導の下に免疫學を研究し、母校より學位を獲得せる年壯の名醫博也。

△更にその學歷より閱歷を語らしめば熊本縣立中學濟々黌、五高を經て、明治四十四年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同學副手となり小兒科教室勤務、大正二年四月同教室を辭し大阪市私立河野病院小兒科醫長就職、同七年三月之を辭し同市に於て開業今日に及ぶ、斯間大正十年十一月より開業の傍ら私立鳥潟免疫研究所に於て研究に從事し、同十五年三月學位を受領し、引續き同所技師として研究を續行す。公職としては大阪府醫師會理事、又は代議員、大阪市醫師會理事及代議員、大阪府衞生會及結核豫防協會評議員兼理事、大阪市醫師會風紀委員、防疫委員、講話委員、救護委員、日本小兒科學會評議員兼大阪地方會幹事、大阪市產婆會講師、大阪市船場教育會評議員兼理事、大阪府醫師會健康保險部副部長及び理事、相愛女子專門學校講師等の他に大阪府濱寺町に「健康寮」を創設し虛弱兒童を收容して體質改善、健康增進の道場たらしめ着々その効果を擧げつゝあり。

△主論文は「沈澱反應ノ機轉ニヨル凝集反應並ニ溶血反應ノ特殊增强ト特殊減弱」にして、參考論文は、(1)抗體一元說ノ實驗的吟味、(2)非細菌性沈澱反應ノ機轉ニ依ル細菌性特殊凝集反應ノ特殊增强現象ニ就テ附凝集反應本態論、(3)漿液性腦膜炎、(4)週期性嘔吐症の四篇なり。著書としては、(1)育兒寶典、(2)育兒之栞、(3)小兒牛乳榮養明細表、(4)赤坊の育てかた、(5)「イムペヂン」と「コクチゲン」、(6)乳兒及幼兒の育て方と其看護法、(7)小兒粉乳榮養明細表、(8)子供を丈夫に育てるには、等あり。

△感想の一片に曰く「近代の不自然なる都會生活、享樂的なる所謂文化生活が如何に多くの兒童を虛弱ならしめ、その體質を惡化せしめたであらうか、私は治療醫學から豫防醫學へ、豫防醫學から健康醫學へ小兒科を進步向上せしむべく、先づ自ら「濱寺健康寮」なるものを創設して未だ何人も企てなかつた最新の試みを開始した。日光、大氣、水と土とに接せしめ新鮮なる食餌を與へ、家庭の延長として都會の兒童等を煤煙と噪音、陰鬱と焦躁から救ひ身心ともに健全、明朗ならしめんとするものである」云々。先見の明ありと云ふべし、折角の努力奮盡を翹望して止まず。

△博士は大阪府濱寺町下石津に本籍並に自宅を有し、明治十八年東京市に生る。當年知命有一歳にして、元氣甚だ旺盛也。其の專門に涉る學問及び經驗は言はずもがな、今は一段の貫祿を加え、最も重望せらるゝ年輩にして權威を有す。殊に博士の長所として特筆すべきは、「醫は仁術也」をモットーとして誠實と親切とを以て終始する點にあり、蓋し小兒科に相應しき性格の反映たるは慶ぶべき也。讀書家にして書見を樂しみ、又登山と旅行を趣味とす。因に醫博楢林篤三、同楢林兵三郎、同後藤道雄等と近親の間柄なりと聞く。

◇

三原吉裕　△名古屋市東區鶴重町三ノ五に小兒科を以て著聞する三原醫院あり。院長三原吉裕博士は、愛知縣立醫學校出身の篤學者にして、開業拮据二十有餘年に及び、斯間臨床の傍ら學を錬り腕を磨くに餘念なかりしが、愛知醫大教授林直助博士に就きて病理學の蘊奧を究め、京都帝大より學位を獲得せる學究的老大家也。

△學位主論文は「小兒ニ來ル腎臟混合腫物ニ就テ殊ニ其病理組織學的並ニ發生學的研究」にして參考論文は、(1)所謂

颶風病ニ於ケル剖檢的所見ニ就テ、(2)名古屋地方ニ於ケル所謂颶風病ノ研究、(3)名古屋地方ニ於ケル所謂颶風病ノ剖檢所見、(4)母乳榮養兒ノ發育的觀察、(5)輓近報告セラレタル窒扶斯菌特異培養法ノ比較研究、(6)窒扶斯樣經過ヲ取リシ哺乳兒「スタヒロコツケンヱンテリチス」ノ稀例、(7)家鷄ノ特發性腎臓腫瘍ニ就テ、外八篇あり。

△愛知縣知多郡小鈴谷村の人、明治十一年生る。三十五年愛知縣立醫學校卒業、同三十六年十月東京市神田區駿河臺東洋內科醫院に於て、院長高田畊安博士（當時學士）指導の下に內科學研究、同三十七年論文を提出して愛知醫學得業士の稱號を得、同三十八年十一月愛知縣立病院診察醫補を被命、產科婦人科に勤務す、同三十九年十月愛知縣立醫學專門學校囑託教員兼務を被命、同三十九年十一月愛知縣立病院診察醫を被命、同四十一年一月愛知縣より研究の爲め帝國傳染病研究所に出張を被命、北里、北島、志賀三博士の下に細菌學專攻、同四十二年十月愛知縣立病院小兒科獨立の爲め小兒科勤務、同四十二年十一月任愛知縣立醫學專門學校助教諭、大正三年六月より五年十一月迄名古屋市幼稚園醫囑託、同四年五月愛知縣立病院小兒科部長心得を被命、同年六月職を辭し現住所にて開業今日に至る。其間大正七年より十年まで愛知縣保健調査委員を囑託せられ、同六年一月より愛知醫科大學病理學教室に於て林教授指導の下に研究、同十四年十二月學位を受領せり。

△篤學者にして、殊に特筆すべきは臨床の傍ら日夜倦むことを知らず、幾星霜かの間、懸命の努力精進を續け、研學切磋終に克く學位を獲得せる堅忍不拔の精神に在り。年齒今や知命に入る八歲、元氣甚だ旺盛、躬行實踐主義の人にして志操堅實、寬厚能く人を愛し和氣溫情に富む。趣味としては謠曲（寶生流）を好む。

◇

谷保平

△浪速診療界に於て當世小兒科の大家として仰がれ、其の篤き德望と相俟つて、嘖々たる好評の裡に民衆の信賴と尊敬とを受けつゝあるは谷保平博士ならずや。大阪市北區曾根崎町上四丁目一九に在る診療所は、日本建澁味のある結構奥床かしく、診察室を始め內部の設備整然として好感を覺えしむ。博士は大阪府立高醫の出身にして、大阪醫大系に逸色せる異彩たるを失はず、其の篤學は克く今日の地盤と成功とを贏ち得たるもの、今更著者の批判を俟つまでもなし。

△德島縣立脇町中學を經て、明治四十一年大阪府立高等醫學校を卒へ、同四十二年同校助手拜命、大正四年助手辭任同九年二月大阪市私立高洲病院副院長、同十二年大阪醫科大學醫化學教室研究生となり古武教授の指導を受く、同十三年高洲病院辭退、同十四年退學、同十五年三月學位受領、爾來大阪市頭書の住所に於て開業、小兒科專門、一般の診療に從事し今日に至る。

△學位は大阪醫大より受領せるが、主論文は『「ウロクローム」色素ノ起原ニ就テ』にして、參考論文は、(1)犬體內ニ於ケル「イミダヅール、プロビオン」酸ノ態度ニ就テ(獨文)、(2)所謂腦膜炎ノ原因ニ對スル疑義、(3)動物及人乳兒ノ血液中鹽基性顆粒赤血球ノ發現ニ就テ、(4)所謂腦膜炎ト「ウロクローム」トノ關係、(5)自由生活小線蟲ニ就テの五篇なり、其他の論著枚擧の遑なし。

△感想に曰く「凡そ如何なる職業を看るも其複雜性と峻嚴なる法の制裁を受くる點に於て醫業の右に出づるものはあるまい夙に醫師會なる團體あり其員數の膨大なるを誇り得るも其團結力に至りては實に菲弱極まつて居る、他の諸團體は强固なる團結力に依りて各自の領域を開拓し、より安全に、より鞏固に進展しつゝあるも獨醫師團に在りては然らず、所謂長袖流の生活に甘んじ以て逐次眞綿にて頸を絞めらるゝの窮境に立つ、今次醫師法の改正ありと謂ふも何處に之を求むべき醫業が國家存立上其樞要さに於ては決して次亞的のものに非ず、然るに今や朝野之を輕視し之を壓迫す洵に前狼後虎の難に遭へるが如し、彼の溟濛を啓發し此大難を排擊せんには一に偉大なる指導者と之を支援すべき各員の熱烈なる團結力を要する」云々。至極同感也。

△德島縣麻植郡學島村の人、明治十六年生る、當年五十有三歳也。元氣旺盛にして學識、經驗、人格共に圓熟、學究的紳士たるのタイプを具え、人格高潔也。殊に天資緻密の人にして萬事に几帳面なり、其の筆態の穩健情趣豐かなるは親しむべし。一度び其の謦咳に接せんか、態度悠揚として迫らず、虚心坦懐として快談に富む、若し夫れ學術上の事に言及せんか、熱心に諄々として說き盡くる所を知らず、其の眞摯にして情緒纏綿たるものあるは頗る好感を覺えしめ、其の德を敬慕せしむ。讀書家にして文藝に趣味あり、文才に富む。高洲謙一郎博士は妻マツヨの伯父に當る。切に自重加餐を祈る。

◇

富田定壽　△醫博富田定壽は前の門司鐵道病院長にして、現在にては門司市上本町一丁目に自己の診療所を設け、主として乳兒健康指導のため哺育の方針を示し、薄弱兒を檢診す、故に診を主體とし療を從とするの先例を拓き、以て醫藥分業の第一線に立ちて努力貢獻する處あり。

△略歴より見たる博士の年歴を概括すれば、博士は五高を經て、明治三十七年京都帝大醫科卒業、同學小兒科教室副手を歴て、翌三十八年十月福岡醫大助手、四十二年同學講師、四十三年十月任九州帝大助教授、大正六年四月門司鐵道病院長兼内科醫長となる、十三年十一月現職の儘歐米各國に出張、翌十四年十二月歸朝す、昭和二年二月九州帝大より學位を得、辭職、開業今日に至る。

△學位主論文は「日本哺乳兒ニ見タル各種白血球ノ數量的關係」にして、獨逸文の原著なり、參考論文は六篇あり。

△熊本縣鹿本郡中富村下分田の人、故法學博士富田山壽の兄にして、明治九年生れ也。現代醫界に對する博士の希望としては、第一新藥業者の名前を賣らぬこと、第二醫師會の規約を撤廢し醫藥を分業すること等にあり。謙遜家にしてお世辭を好まず、おべつかを云ふを憎む、その高潔なる人格は尊敬すべき也。門司市上本町一丁目に住す。

◇

佐野伴治　△横須賀市公卿町二一四六に小兒科專門を以て著聞する佐野病院あり、斯科界の大家佐野伴治博士の經營にして、内部の設備整ひ、當地診療界に卓然として群を拔く。博士は九大系の小兒科學者にして、斯科界の泰斗恩師伊東祐彦博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を得たる斯科界近來の名醫博なるが、多年恩師に師事して懸命の努力精進を續け、學を錬り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、教室を去りて後は横須賀海軍共濟組合病院に小兒科部長として臨床に勵しみ、多年の經驗と共に篤き聲望を博す、開業以來日猶淺少なるにも拘はらず獨特の手腕は打診の好評と相俟つて益々人氣を吸收し、日增盛況を呈しつゝあるも亦偶然ならざるを首肯せしむ。

△顧みて博士の學歴より其の今日ある閲歴を尋ぬるに、四高を經て、大正九年九州帝大醫學部卒業後、直ちに副手囑託として小兒科教室勤務、同十二年十月任助手、昭和二年四月學位受領、同時に依願免本官、同年七月横須賀海軍共濟組合病院小兒科部長に就任す、同六年十二月辭して現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「人血清ノ非特異性抗補體性物質ノ研究」にして、參考論文は、(1)綠色腫ノ一剖檢例ニ就テ、(2)眞性壞血病ノ一例報告、(3)嗜眠性腦炎ニ就テ、(4)綠色腫ヲ疑ハレタル一貧血症ニ就テ、(5)小兒假性白血病性貧血ノ一例報告、(6)一慢性骨髓性白血病患者ノ「ラヂウム」治療ニヨル血球變化ニ就テ、(7)炭酸瓦斯ニヨル血清「グロブリン」層ノ二重析出法トワ氏反應トノ關係、の七篇なり、其他の論著中、(1)小兒赤痢及び赤痢樣疾患に對する余の治療方針と治療成績、(2)ヴイタミンB劑の應用範圍に就て等は博士會心の作と見るべきものならん。

△「醫師は其地方町村の衞生組合を指導す可し、日本醫師會に府縣醫師會、市郡（區）醫師會を通じて背後より全日本の衞生組合を指導す可し、以て内務省より衞生省を獨立せしむ可く努力せざる可からず。而して日本醫師會の衞生大臣に於ける恰も軍部の軍大臣に於けるが如き力と熱を日本醫師會に有せしむ事、之れ今日の醫人の理想とす可き處

なり」云々は、博士の感想の一片なり。

△長野縣下高井郡平岡村佐野健八の四男、明治二十三年生る。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、當年不惑に入る六歳、年壯の意氣と共に學識、手腕、人格愈よ圓熟の域に入り、今は腕の冴え盛にて最も得意時代なるべし。小兒科に相應しき性格の持主にして、和氣溫情に富み、圓滿主義にて愛想良し、殊に患者に對するに熱心忠實にして、誠意親切を盡す點は博士の特徴と見るべき也。研究以外の趣味としては西洋音樂を愛好す、學窓にある頃故榊保三郎博士の下にあつて九大「フイルハルモニー」の牛耳を執り「セロ」を擔當せり、後「バトン」を握りベートフェンの第八交響樂、チヤイコフスキーの悲愴交響樂を指揮せるは氏の最も華なる思出なりと。春秋猶豐富にして、拮据黽勉、精研に餘念なき前途は、綽々として博士の將來を語るに餘裕あり、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

豐田順爾　△京都市室町通一條上ルに豐田醫院あり、高尚なる結構奥床しく、內部の設備整ひ快感を覺えしむ、院長は小兒科及び乳兒科の大家豐田順爾博士にして、開業玆に二十數年を閱し、多年の聲望は牢乎として拔くべからざる勢力を扶植し、繁榮歳と共に成功の地盤を築きたるは、頗る矚目に値す。博士は京都府立醫專出身の篤學者にして、小兒科及び乳兒科を專門とし、又學校衞生學の造詣深く、京都府立醫大より學位を獲得せる名醫博也。拮据研鑽、學術と共に多年臨床に腕を磨き、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし、其の今日ある博士の得意や思ふべき也。公職としては京都市醫師會理事、京都醫事衞生社主幹、京都市醫師會統計調査主任、京都市學校醫會庶務主任幹事京都市室町尋常高等小學校醫、虛弱兒童養護施設たる八瀨學園の園長、京都市染織試驗場醫、京都市醫師購買組合理事其他に關與し、又京都赤ん坊審査會及京都健康幼兒表彰會に主務として活動し、近くは六大都市學校衞生協議會を京都市に開催する等、公共の爲め盡力する所少なからず。

△顧みてその學歷より見たる博士は、縣立和歌山中學校を經て、明治四十二年京都府立醫專卒業後、直ちに同校附屬療病院醫員拜命小兒科教室勤務兼助手、同四十四年五月依願免職、同年七月現住地にて小兒科專門醫術開業、昭和二年十月京都府立醫大より學位を授與せらる。

△主論文は「余ノ所謂坐高三角法ニ就テノ研究」にして、外に參考論文として、(1)日本人腰椎薦椎移行脊椎ニ就テ、(2)日本人椎尾閭骨椎移行椎ニ就テ、(3)哺乳動物蝸牛殼ノ構造及二三ノ測定ニ就テ、(4)聽診時鼓膜ノ生理的位置ハ如何ナル條件ノ下ニ保タルベキヤ、(5)舊「ツベルクリン」皮膚反應ノ組織的研究、(6)湯タンポノ保溫性ニ就テノ研究の五篇あり。著書、(1)坐高三角法、(2)育兒カレンダー、(3)坐高三角法に關する書籍、圖譜の出版、映畫作製、其他。

△前橋市堀川町豐田宣の長男、明治十九年生る。學究的溫厚の紳士にして、稀に見る篤學者也。豐文はそのペンネームにして、雜誌「京都醫事衞生」誌上にその漫筆を見るべく、油畫を能くし、似顏に巧にして時々人々を揶揄して罪あり寫眞術を愛好し、研究と發明とは博士の最も趣味とする所にして、日頃倦むことを知らず不斷の努力と注意とを此の方面に傾けつゝあるは賴母し。一度び其の磬咳に接せんか、舉措悠揚として迫らず、豐頰福々しく溫顏常に笑を浮べ、凛々しき風貌に何んとなく威嚴を存す、應接慇懃、敢て學者として衒はず、極めて快活にして話題に富み、知らずして閑談に時を移す。其の今日の成功と篤き聲望を博せるも、蓋し其の性格の反映なると共に、一面には又常に德操の堅持を心掛け、日夜精神の修養を怠らざりし事實の見逃すべからざるものあるを首肯せしむ。

◇

早川朋光　△愛知縣橫須賀町高橫須賀七六に在る早川小兒科醫院は、早川朋光博士の診療所也。新裝完備せる內部の設備と相俟つて、博士自ら診療に勵しみ日々繁忙を極め、今や當地方診療界を風靡するの盛況を呈す、成功と云ふべき也。博士は愛知醫專出身の小兒科學者にして、研學切磋、終に五篇より成る「百日咳性肺炎ノ研究」と題

する主論文を完成して、京都帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。由來百日咳性肺炎の成因、本態並に病理解剖學的所見の特徴に關しては未だ定說なかりしを、博士は先づ人類百日咳性肺炎に於ける肺臓に就て、病理解剖學的檢索を行ひ本論文を完成せるものなり。

△顧みて博士の今日ある學歴及び閲歴を考査するに、大正二年愛知醫專卒業後、同年十月大垣市私立渡邊病院勤務、同四年十二月同院辭職、同五年一月京都帝大醫科大學小兒科教室醫員介補に任ぜられ、同六年四月迄勤務、同年五月日赤長野支部病院小兒科主任に任ぜられ同八年七月迄勤務、同年八月南滿醫學堂附屬奉天醫院小兒科醫員拜命、同九年四月南滿醫學堂講師兼務、昭和二年四月滿洲醫大講師、兼專門部助教授任命、同年十月任滿洲醫大助教授、兼專門部助教授、兼同附屬奉天醫院小兒科副醫長を命ぜらる、同年十一月學位受領、同四年三月滿洲醫大を辭し現住地に於て開業今日に至れり。

△學位主論文「百日咳性肺炎ノ研究」自其一至其五、外に參考論文として、(1)哺乳兒十二脂腸圓形潰瘍ニ就テ、(2)ボルデー、ジャングー氏菌體內毒素ニ關スル研究、(3)ボルデー、ジャングー氏菌ノ發育要約ニ關スル研究の三篇あり。

△愛知縣愛知郡横須賀町の人、明治廿一年生る。篤學者にして常に德操の堅持を心掛け、淡々として只管己れを虛うする態度の奥床しさは、眞に德操の士に非ればこゝに至るを得ず。其の反映は期せずして患者に及び、熱心にして誠意、誠實、飽迄親切を盡すとの評判が、博士をして今日あらしめたる主因なるを首肯せしむ。研究以外、哲學及び社會政策に關する論著に趣味を有し、又撞球を好む。

◇

大藤昌美

△函館市會所町に昭和九年三月の大火災後復興せる大藤小兒科醫院あり、院長大藤昌美博士は、金澤醫專出身の新進にして、久しく北大衞生細菌學教室にて研究の後、北大教授永井一夫博士に就きて小兒科學の蘊奥を究め、北海道帝大より學位を獲得せる少壯の名醫博也。學位論文は氏の今日迄の種々なる研究に出發して、新しき意味に於て實驗的に痘瘡或は牛痘「ウイールス」による家兎睪丸の變化を研究したるものなり。既にして其の蘊蓄せる學殖は言はずもがな、臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して益々遠近の人望を吸收し、繁榮歳と共に成功の地盤を築きつゝあり。曩の大火災に遭難せるも既に復興後、孜々として日夜倦むことを知らず、懸命の努力精進を續け、災後診療界の爲め奮盡しつゝあるを多とす。

△更に學歴より見たる博士は、大正九年金澤醫專卒業後、直ちに東京市泉橋慈善病院內科に研究生となる、同十年四月辭して福島縣郡山市太田病院內科に勤務、同十二年三月北海道帝大醫學部衞生細菌學教室に入りて研究、同年五月副手となり、同年八月助手となる、同十五年三月細菌學教室を辭し直ちに同學部小兒科教室に副手として入局、同年七月醫員を命ぜらる、昭和二年再び助手に任ぜらる、同年十月學位受領、同三年五月以來現住地にて開業今日に至る。

△主論文は『痘瘡並ニ牛痘「ウイールス」ニヨル家兎睪丸ノ病理組織的變化ニ就テ、殊ニ該「ウイールス」ニヨル「プラスマ」細菌浸潤ニ就テノ知見』にして、參考論文としては、(1)重感染早期免疫ノ成因ニ就テ殊ニ之ト網狀織內被細胞トノ關係、(2)北海道ノ冬期寒冷ニ對スル「ヂフテリー」菌並ニ百日咳菌ノ抵抗力ト當地方ニ於ケル該疾患ノ消長ニ就テ、(3)痘瘡「ウイールス」ノ患者尿中ニ於ケル證明、(4)痘瘡患者血液中ニ於ケル痘瘡「ウイールス」ノ證明ニ就テ、(5)水痘「ウイールス」ノ家兎移植ニ就テノ經驗、(6)發疹「チフス」血液接種ニヨル家兎睪丸ノ變化ニ就テ、の六篇あり。

△福島縣安達郡二本松町の人、明治廿八年生る、舊名熊吉（學位受領後改名）、學究的溫厚の紳士、少壯にして年齒漸く不惑に入る一、今は分別盛にて學識、手腕、人格共に益々圓熟の佳境に入りて最も得意の時代に在り。殊に博士の最も特徴とするところは、眞面目にして熱心なる臨床家としての聞え高く、患者に對するに誠意誠實を以てし、飽迄親切を盡す點にあり、以て其の性格の一斑を窺はれ、同時に亦其の高邁なる人格を敬慕せらる。春秋猶豐富にして、

拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々として益々輝かし、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

藤澤好雄　△堺市堺病院小兒科醫長として新進の藤澤好雄博士あり。博士は大阪醫大出身の小兒科學者にして、斯科界現代の權威たる恩師笠原道夫（現大阪帝大教授）博士に就て斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる大阪醫大派の少壯醫博也。研鑽多年、其の蘊蓄せる學殖と其に實地の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して益々内外の信望を集め、猶孜々として精研に餘念なき前途は更に大に期待せらる。

△學歴より見たる博士は、大正八年大阪醫大卒業後、直ちに任同大學助手、同年十一月大學昇格後の大阪醫大副手囑託となり、同十年六月任助手、同十一年九月再び副手となり小兒科勤務、同時に大阪醫大附屬醫院醫員を被命、同十三年十二月再び任助手、昭和二年三月大阪醫大試講を被命、同年十二月學位受領、次で同大學講師として小兒科學教室に勤務、同四年二月堺病院小兒科醫長に就任今日に至る。

△學位主論文「結核性腦膜炎ノ實驗的研究」、參考論文、(1)結核菌ノ皮下及腹腔内並ニ血管内接種ニヨル「マウス」「ラツテ」ノ病的變化ノ種屬的差異ニ就テ、(2)光學的異性乳取ノ家兎體内ニ於ケル糖形成ニ就テ、(3)結核菌「リポイド」ノ抗原作用ニ就テ、(3)先天性黴毒ノ血液所見並ニ療法ニ就テ、(5)實驗動物ノ正常腦脊髄液知見補遺、(6)「ヴヰタミン」Bニ關スル知見補遺の六篇あり。

△大阪市住吉區帝塚山中二丁目に本籍を有し、明治廿五年京都に於て生る、藤村元張博士の實弟也。年齒不惑に入る四歳、年壯氣鋭にして研究心に富む、小兒科に相應しき性格の持主にして、又能く應答の禮を重んじ、人に親しまるるの德を有す。研究以外の趣味としては旅行を好む風あり。大阪市住吉區帝塚山中二丁目一番地に住む。

◇

小松通允　△帝都醫博界は多士濟々として近時頗る人物に富む、而かも競爭激烈にして群雄割據の觀あり。此の間に介在して年次獨立の地盤を獲得し成功の域に向上しつゝある小松通允博士は、日本橋區馬喰町四の十一に小松小兒科院を經營し、充實せる内部の設備と相俟つて日々診療に精進しつゝあり。千葉醫專の出身にて小兒科及び生化學を專攻し、學位は東京帝大より獲得せる篤學の名醫博として其の手腕を認めらる。研鑽多年、該博なる學識は言はずもがな、臨床に堪能にして實地の經驗に富み、今や獨特の特技を發揮して益々人望を博し、繁榮歳と共に日增盛況を極む、蓋し帝都醫博界中近來の成功者と云ふも過言に非らず。

△東京市の人、小松貞介の養子にて、明治廿八年生る、大正七年千葉醫專を卒へ、直ちに同校醫化學教室に入りて研究し、同九年二月金澤醫專醫化學教室に轉じ、翌年四月母校小兒科教室に入り勤務す、翌十一年六月更に東京帝大醫學部醫化學教室に入り生化學の研究に從事す、大震災の爲一時日本赤十字社水道橋乳兒院に勤務せしが、同十三年四月再び東大醫化學教室に復歸して研究を續け、昭和二年一月神田泉橋病院小兒科に轉じ、同三年一月學位を受領す、同七月父病弱のため現住所に於て父の醫院を繼承今日に至る。

△學位は東京帝大より授與せられたるが、主論文は『「ヘマトポルフイリン」獸血液蛋白質ノ生化學的研究』にして、原著は英文より成り、外二篇あり、何れも原著は英文なり。外に參考論文としては、(1)「ビロール」反應ニ就テ、(2)白米家鷄ノ副腎「アドレナリン」含量ニ就テ（須藤憲三共著）(3)種々ノ食物ヲ攝取シタル際ニ於ケル尿「インヂカン」及「エーテル」硫酸ノ排泄量ニ就テ、(4)蛋白質ノ分光化學的研究の四篇あり。指導教授は末吉雄治教授、須藤憲三教授、柿内三郎教授、太田孝之博士等とす。尚氏の從來發表せる臨床的研究の内、泉橋病院小兒科時代には、(1)甲狀腺ノ機能ニ關スル研究、(2)發作性血色素尿症水代謝知見補遺、(3)重症紫斑病ノ一例、開業時代には、(1)痲疹ニ於ケル消化器系症狀ニ就テ、(2)幼兒心囊炎ノ二例、(3)單核細胞增多症（非白血病性綱狀内被細胞增殖症歟）ノ一例、(4)膏劑ニ

因ル所謂腦膜炎ノ一例、(5)異常體質兒乳兒脚氣ノ一例、(6)麻疹ト結核トノ諸相等は最も重要のものなるべし。

△年齒漸く不惑に入る一歳、少壯の意氣益々壯んにして研究心に燃え、多く臨床的研究に成る業績を臨床小兒科雜誌其他へ發表することに力め精研に餘念なし。臨床方面にては平生「醫は仁術也」をモットーとして熱心甚だ務め、患者を待つに克く誠實と親切とを盡す、其の態度の眞摯にして熱情あり溫味あるところに博士の特徴を見出さる、好箇の臨床家として溫厚篤實なる人格を尊重す。

◇

長濱宗佶　△大阪市東區淡路町三ノ一一、長濱小兒科醫院長としての長濱宗佶博士は、明治二十九年大阪府立醫學校を卒へ、直ちに同校病理學教室に入り佐多博士指導の下に細菌學研究、同三十年五月須磨浦療病院醫員として勤務、同三十二年同院を辭し同時に東京帝大醫科大學小兒科選科に入學、同三十七年二月大阪府立高等醫學校助教諭兼附屬病院小兒科醫長心得として就任す、大正十二年一月大阪醫大竹尾結核研究所に入り、佐多博士及び村田教授の指導を受け研究、昭和三年二月大阪醫大より學位受領、爾來現住所に於て小兒科開業今日に至る。

△學位論文は「蛋白性食餌ト含水炭素性食餌ノ結核感染ニ及ボス影響」に就て研究せるものなり。博士の五十有二歳の高齡を以て學位を獲得せる篤學は當世博士界の美談として特筆に値す。兵庫縣の出身にして明治九年生る、高壽耳順に達して元氣旺盛也。博く學識を有し、殊に臨床に堪能にして多年の經驗に富み、老練圓熟せる手腕は益々其の特色を發揮して妙境に入る、其の今日ある輝しき閲歴は燦として氏が奮鬪の跡を物語るもの也。

◇

多田繁　△廣島市三川町に多田小兒科醫院あり、院長は多田繁博士にして病室完備、X線、太陽燈、ソラックス燈の設備完全也。博士は岡山醫專出身の小兒科學者にして細菌學及び寄生蟲學の造詣深く、特に小兒呼吸器病を最も得意とす。嘗て瑞西に留學するや、ベルン大學にてゾーベル、ハイム教授に細菌學を、ストース教授指導の下に小兒科學を修め、歸朝後岡山醫大にて鈴木稔教授及び好本節教授に就て研究の結果、岡山醫大より學位を得たる小兒科界近來の名醫博として其の存在を認めらる。研鑽多年、該博なる學識は言はずもがな、臨床に堪能にして實地の經驗に富み、今や斯家の大家と仰がれ、獨特の手腕を發揮して益々人望を博し、歳と共に日增繁榮を持續しつゝあるは刮目に値す。

△廣島縣豐田郡竹仁村の人、多田良吉の長男にして、明治廿三年生る。大正二年岡山醫專卒業、同三年六月迄風早小兒科內科醫院勤務、同三年七月より十一年迄吳市外吉浦町にて小兒科內科開業、同十一年より歐洲に留學、スキス國ベルン大學に於てドクトル、メヂチーネの學位を得、同十三年歸朝し、引續き岡山醫大に於て寄生蟲學を鈴木教授に、小兒科を好本教授につき研究し、昭和三年十一月岡山醫大より學位を得、翌四年三月より現住所に小兒科を以て開業今日に至る。

△主論文は「日本住血吸蟲ノ終宿主體內ニ於ケル發育及ビ其ノ構造ニ就テ」にして、外に參考論文として、(1)初生兒「ヂフテリー」ノ原因檢索、(2)痺脫疽菌ノ局處免疫ニ就テの二篇あり。

△學究的溫厚の紳士にして今は手腕愈よ圓熟の域に入り、最も得意時代にて熱心勵精克く誠實と親切とを以てし「醫は仁術也」を平生のモットーとす。其の眞摯にして熱情あり溫味ある態度は、患者をして信賴と尊敬との念を起さしめ、敦厚篤實なる其の人格を景仰せしむ。趣味としては讀書と散歩を好む。

◇

洲崎敬三　△市立横須賀病院副院長兼小兒科醫長たる洲崎敬三博士は、金澤醫專出身の小兒科學者にして、母校の恩師泉仙助教授の指導を受くる所厚く、後ちに又た京都帝大教授鈴木正博士に師事して斯學の蘊奥を究はめ、

京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。研鑽多年の結果、今は學識は言はずもがな獨特の手腕を有し、勵精恪勤甚だ務むる所あり、內外の信望を博す。

△富山縣東礪波郡城端町洲崎永之助の三男、明治三十二年生る。大正十一年金澤醫專を卒へ、直ちに同校助手を拜命して小兒科學教室に勤務、翌十二年大學昇格と同時に大學助手に任命、引續小兒科學教室に勤務、同十五年三月同大學助手を辭任して京都帝大醫學部專修科入學、昭和三年十二月市立横須賀病院小兒科醫長として赴任、同四年一月學位受領、同八年二月副院長となり今日に至る。

△主論文は「赤痢菌毒素ノ家兎摘出腸管ニ及ボス影響」にして九篇より成る。參考論文は「饑餓時ニ於ケル血糖量ノ消長」外六篇あり。參考論文の內「赤痢菌體外分泌毒素ノ生理學的並ニ免疫學的研究」なる一篇は、博士の最も快心とする論文にして學界に重要せらる。

△感想の一片を寄せて曰く「教室を出づるや雜務多忙の故を以て讀書せざるもの多し之れ甚だ遺憾とする所なり、少くとも專門雜誌五、六種外國雜誌一種を含む——は座右に備へ斯界の趨勢を知らざるべからず」云々。甚だ多とすべき也。當年三十有七歲にして少壯の意氣に燃え、向學の精神猶欝勃として禁ぜざるものあり。其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて躍如たるものあるを見る、今は働盛にて手腕漸く壯熟の域に入り最も得意の時代に在り。趣味としては特筆すべきほどのものを有せずと雖も、讀書家にして書見を樂しむの風あるは喜ばし。春秋猶頗る豐富にして、輝かしき前途は洋々たり、幸に健康と共に益々發奮精研あらんことを望むや切也。因に洲崎隆一博士（福井日赤病院產婦人科醫長）は兄にして、濱田與久博士（京都帝大醫學部眞下內科勤務）は實弟なりと、又以て兄弟三博士の餘慶ある家柄と云ふべし。横須賀市公鄕町二二一三に住む。

◇

星騰吾　△宮城縣志田郡古川町七日町小兒科內科專門星醫院長として令名を博し、多年地方診療界の爲め努力勵精しつゝあるは星騰吾博士也。氏は宮城縣遠田郡北浦村の出身、明治二十四年生にして、大正六年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手として、中西內科教室に勤務す、七年任東北帝大助手、小兒科學教室に轉勤す、九年同學講師となり間もなく依願解囑の上、宮城縣石卷町公立病院長に聘せられ、內科小兒科醫長を兼勤す、十二年東北帝大大學院に入り熊谷、木村兩教授指導の下に研究し、十四年十一月東北帝大にて學位を受領す、爾來頭書の私立醫院を開設し現在に及べり。博士獨特の手腕と多年の聲望とは當地方を風靡し、今や小兒科の大家として仰がる。

△學位主論文「膵臟內分泌ト迷走神經」參考論文、(1)副腎神經支配ニ關スル形態學的並ニ實驗的研究（獨文）、(2)副腎神經終末裝置ニ就テ、(3)副腎神經ノ發生ニ就テ、(4)心筋神經終末裝置ニ就テ、(5)種々ノ狀態ニ於ケル血中膵ほるもんニ就テ、(6)鳥類白米病ニ於ケル血糖狀態ノ變化ト膵臟ノ變化。

◇

高橋寛　△東京市立深川病院に小兒科醫長として高橋寛博士あり、內外の信望厚く、至誠以て努力精進しつゝあるは多とす。氏は靜岡縣駿東郡御殿場町勝又愛次郎の次男、明治二十五年生にして現姓を冒す。大正八年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として、佐藤彰教授指導の下に小兒科學研究、九年助手に任命、十二年五月辭任、同年六月再び副手として、藥物學教室に勤め八木教授指導の下に研究、十四年副手解囑の上、講師を囑託せられ小兒科學教室勤務、同年十一月東北帝大にて學位を受領す、十五年講師解囑、同時に靜岡市小兒科勝又醫院に於て診療に從事し、同年九月より淸水市に於て開業、幾何もなく聘せられて栃木縣立宇都宮病院小兒科部長として赴任す、其後頭書の現職に轉任今日に至る。博士の年齒今や不惑有四、臨床家としては腕の冴え盛にて最も得意の時代に在り。浩汀は其號にして、多趣味の人也、殊に讀書、觀劇、旅行、庭球、ピンポン、野球見物等を最も好む。

△學位主論文『「アルコホル」ノ人體及ビ動物ノ循環系統ニ及ボス作用』(獨文)、參考論文、(1)幼家兎ノ毒物ニ對スル感受性ニ就テ、(2)體液ノ「カリウム」微量比色定量法、(3)日常作業トシテノ腦脊髓液ノ糖及「クロール」定量法他に三篇あり。外に論著多數あり。東京市目黑區洗足一四六三に住む。

◇

久保田　實　△帝國女子醫藥專教授にして、自宅開業（東京市牛込區余丁町一〇五）小兒科專門を以て立ち、手腕、聲望相俟つて嘖々たる評判を聽くや既に久矣。氏は群馬縣新田郡綿打村字金井の人、平民久保田友吉三男、明治二十六年生にして、群馬縣立太田中學、八高を經て、大正八年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部衞生細菌學教室の研究生となり九年五月辭して、東京市順天堂醫院小兒科醫員となり、十年同醫院を辭し再び東大藥物學教室に入り、林、田村兩教授の指導を受く、十一年久野內科病院に入り小兒科を擔當す、同年七月藥物學教室及久野內科病院を辭し、直ちに任內務省衞生試驗所技師、東京衞生試驗所勤務を命ぜられ、藥毒物の作用調査に從ひ、十二年兼任內務技師、十五年一月東京帝大にて學位受領、其後頭書の現職に就き傍らに開業今日に至る。

△學位主論文『「テール」色素ノ毒力ニ關スル生物學的研究（附同色素ノ附着性ニ就キテ）』參考論文なし。他に論著夥多。謠曲を趣味とす。圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮せんとす、博士の得意や想ふべき也。

◇

肥爪　貫三郎　△浪速診療界に於ける私立病院中小兒科の覇王と稱せらるゝ高洲病院（上本町二丁目交叉點西）院長肥爪貫三郎博士の名聲は餘りにも有名にして、小兒科の大家として何人も首肯する所ならん。同病院は世人周知の如く、小兒科界の泰斗高洲謙一郎博士の創設せるものにして、開業既に古く、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有す。現在にては高洲博士を顧問とし、肥爪博士は院長として經營と共に診療の首班に起ち、日々繁忙を極め席を溫むるの暇なきが如し。其の圓熟せる博士獨特の手腕と、多年扶植せる篤き聲望とは、既に斯界に定評あれば玆に贅せず。博士は兵庫縣立伊丹中學を經て、大正八年大阪府立醫大を卒へ、同時に府立大阪醫大助手兼同病院醫員を命ぜられ小兒科勤務、同十一年五月依願免職、同年五月獨逸留學、伯林市立ウイルヒョー病院化學部にて、ウオルゲムート教授に就き酵素を研究し、轉じて國立乳兒院ラングシュタイン教授、並ニ伯林大學小兒科チェルニー教授に師事して小兒科學を專攻す、十三年九月歸朝、爾來大阪高洲病院長となり今日に至る、其間大正十五年一月大阪醫大にて學位を受領す。

△學位主論文『「ヂアスターゼ」ノ知見ニ就テ、併セテ該酵素二元說問題ノ補遺』(獨文)、參考論文、(1)小兒榮養障碍ニ於ケル酸素檢査(獨文)、(2)牛乳並ニ人乳加白米ニヨル「マウス」飼養試驗(共著)、(3)血液中ノ「フェノラーゼ」(獨文)、(4)皮膚ノ生物學的知見(共著)(獨文)。其他論著夥多。

△兵庫縣川邊郡六瀨村木津の人、平民肥爪廣吉の長男、明治二十七年生る。妻節子は高洲謙一郎博士の長女也。學究的年壯の紳士、當年不惑に入る二歲、意氣益壯にして多量の分別を有し、今は腕の最も冴え盛にして學識、手腕、人格共に圓熟の域に入る。趣味としては釣魚、テニスとす。私邸は大阪市南區北桃谷町三五に在り。

◇

大野內記　△小兒科の大家大野內記博士は、大阪市南區南綿屋町四七に本院を有し、外に兵庫縣武庫郡精道村芦屋驛前通りに芦屋診療所を設置して、小兒科特に腺病、小兒結核專門を以て堂々の陣を張り、開業既に古く、多年扶植せる聲望は圓熟せる手腕の診療と相俟つて、好評嘖々の裡に牢固たる地盤を築き、今や卓然として頭角を拔き成功の位地に在り。(一)虛弱兒童特に小兒潛伏結核（腺病質）の改善、國家社會的に貢獻したき事、(二)學校衞生の向上を計る事等は、博士の希望として吐露せる談片なるが、亦以て氏の高遠なる抱負の一端を窺知するに足る。

△博士は愛知縣立第一中學を經て、明治四十三年大阪府立高等醫學校を卒へ、同年十一月より四十五年七月迄母校小兒科教室にて研究、同四十三年助手拜命、同四十四年同校病院醫員拜命、同四十五年七月より大正二月迄東京帝大醫學部入澤内科教室に於て研究、同年三月より八年六月迄郷里愛知縣に於て診療に從事、同八年より十四年迄大阪醫大研究科入學、竹尾結核研究所にて腺病の發生機轉に就き研究、同十五年四月大阪醫大にて學位受領、爾來現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「腺病ノ發生機轉ニ就テ」にして六篇より成り、參考論文なし。其後發表せる論著「人乳ノ溶血素含有ニ就テ」の外數多あり。專攻は小兒科にして特に小兒結核（腺病）を最も得意とす。指導教授は主として佐多博士入澤博士、高洲博士等なり。

△感想に曰く「方今專門が細に入り微を極め往々に全身狀態を忘れ、自己專門の立場のみを治療して事足れりとする者多し、例へば扁桃腺炎、中耳炎等を治して其原因たる素質改善を忘れ一時的の治療に止まる事多し、或は外科醫は患部の治療に重きを置き聽診器を持つ事尠なき傾向あり、又結核豫防事業の如き乳兒時代の初感染期より出發せざれば其効果を修むる事難し、要は末葉を極めて本體を忘却する傾向あるを憾む」云々。

△博士は愛知縣丹羽郡犬山町の出身、明治十八年生る、當年知命に入る一歳也。翠堂は其號にして、漢詩に堪能なり醫文士を以て同僚の間に稱せらる、多趣味の人にして運動、殊にゴルフ、玉突、庭球、柔道を好み、謠曲に親しみ、又書畫骨董を鑑賞し藏品少からずと云ふ。其の專門的學識、經驗に至りては今や圓熟の域を超越して一段の貫祿を備ふ、其の今日あるも亦偶然ならざるを想はしむ。

◇

田中利雄　△日赤山口支部病院に小兒科醫長として田中利雄博士あり。氏は長野縣東筑摩郡鹽尻町の人、明治二十五年生にして、長野縣立松本中學、四高を經て、大正七年九州帝大醫科を卒へ、八年同大學副手囑託（小兒科勤務）、十二年任九大助手、被命醫學部勤務、十四年關東廳醫院醫官に任ぜられ、關東廳旅順醫院小兒科部長として赴任し、十五年四月九州帝大にて學位受領、次で現職に轉じ今日に至る。

△學位主論文「小兒腦炎ノ知見補遺」、參考論文、(1)劇症小兒赤痢及疫痢ノ腦症狀ト其發生ノ原因ニ就テ、(2)所謂人乳中毒症ニ就テ、(3)小兒赤痢及疫痢ニ續發スル腦炎ノ統計的觀察、(4)所謂人乳中毒症ノ原因ニ就テ外三篇あり。其他論著數多。テニスを趣味す。勵精恪勤の人にして十年一日の如く努力貢獻し、至誠以て公に奉ずる熱誠の士也。宮島幹之助、副島豫四郎、副島廉治、松岡謙之助等の醫博と親戚の間柄なり。山口市古熊六六に住む。

◇

小坂禮二　△岐阜市神田町六ノ三に小兒科專門を以て開業せる小坂禮二博士は、岐阜縣武儀郡美濃町小坂光之助の養嗣子にして、明治二十三年生る。縣立岐阜中學を經て、大正三年熊本醫專を卒へ、四年九州帝大醫科大學醫員介補となり、同年熊本市渡邊病院内科醫局長となる、五年米國に留學し、加州醫大に入學す、六年米國加州政廳公認醫術開業試驗に合格、七年ロウザンゼルス市東第一街に醫院を設け、八年加州ハリウッド小兒科病院研究室員を命ぜられ、九年南加日本人病院研究室員を兼ねたり、十年在米日本人同胞より南加日本人會參事議員として選擧せらる、十一年マサチユセツツ州ボストン大學醫學部に入學し、ドクトルの稱號を受く、次でハーバート醫大及びコロンビア大學醫學部に學ぶ、十二年更に歐洲に留學、英、獨、佛、伊各國の醫學及醫政を視察す、十三年歸朝、直ちに京都帝大松尾教授指導の下に内科學研究、十五年十月京都帝大にて學位を受領す、同年秋田縣公立病院長を命ぜられ、其後辭して現住地に開業今日に至る。相山の號あり、スキー、テニス、玉突、長唄を趣味す。

△學位主論文「肺炎分利機轉ニ關スル實驗的研究」第一、二、三報告（以上英文）、第四、五報告（以上邦文）、參

考論文、(1)實驗的腎臓炎ノ尿及血液ニ於ケル「インヂカン」ニ就テ、(2)饑餓時ニ於ケル「インヂカネミー」ニ就テ、(3)血液並ビニ尿中ノ「インヂカン」ニ就テ、他に三篇あり。著書、(1)結核ニ對スル古賀氏「チアノクプロール」療法(2)所謂蛋白體療法　其他。

◇

福田十郎　△京都市御幸町御池角に小兒科を以て開業せる福田十郎博士は、多年聲望を扶植し、圓熟せる手腕は打診の好評と相俟つて益々繁盛を極め、今や超然として悠々たる位地を占む。氏は熊本縣阿蘇郡坂梨村の人、蟻田仕平の三男にして、明治二十七年生る。熊本縣立中學濟々黌を經て、大正八年熊本醫專を卒へ、京都帝大醫學部介補拜命、平井毓太郎教授の下にて小兒科學を專攻す、十二年依願解職、滿鐵職員に就任、南滿醫學堂講師を兼務し、小兒科學を講ず、十五年十二月京都帝大にて學位受領、昭和二年任滿洲醫大講師兼同專門部助教授、其後職を辭し現住地にて開業今日に至る。骨軒は其號にして、俳句漢詩、寫眞を趣味す。溫厚篤實にして臨床家としての特質を具備す。△學位主論文「肺炎双球菌ノ研究」、參考論文、(1)テレル氏現象ノ臨床的考察、(2)肺炎双球菌性腦膜炎ニ於ケル腦脊髓液知見補遺、(3)局所的蛋白體療法、蛋白體ノ蜘蛛膜下腔注射ニヨル炎症性腦脊髓液ノ殺菌力ニ關スル實驗、(4)小兒大腸菌性膀胱炎ノ統計的考察外二篇あり。

◇

金子甚藏　△前の滿鐵大連醫院小兒科醫長たりし金子甚藏博士は、退職後大連市西通七八に獨立開業して以來、小兒科の大家と仰がれ、圓熟せる打診の好評は多年の聲望と相俟つて大衆の人氣を吸收し、今や拔くべからざる繁榮を持續し極めて盛況に在り。△博士は大正六年南滿醫學堂を卒へ、直ちに大連滿鐵醫院小兒科醫員を被命、十三年迄同醫院に於て鈴木博士の指導を受く、同年滿鐵會社より小兒科學研究の爲め京都帝大へ滿一ケ年半留學を命ぜらる、十四年京大小兒科教室專修科へ入學、平井、鈴木兩教授指導の下に小兒科學研究、十五年再び歸院、昭和二年一月京都帝大にて學位を受領す、其後大連醫院を辭して現住地にて開業、一般小兒科の診療に從事し今日に至れり。△學位主論文「腦脊髓液ノ滲壓ニ關スル研究」、參考論文、(1)小兒風疹ノ血液所見並ニ其デーレ氏包含體ニ就テ、(2)滿洲ニ於ケル小兒結核性腦膜炎ノ臨床的觀察、(3)乳兒佝僂病ノ血液所見、(4)血液粘稠度ノ實驗的研究外三篇あり。△福島縣石城郡平町字田町の人、金子豐吉の二男、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歳、年壯の紳士にして、臨床家として立派なる人格者也。經驗豐富にして、圓熟せる手腕を有し、今は最も得意時代にて多大の信望を博す。賦性篤實溫厚、人に對する親切にして同情に富む。趣味としては運動、殊に野球と庭球を好む。當世博士界の中堅人物として敬意を表し、其の人格を尊む。

◇

早野實　△東京市豐島區西巢鴨二ノ二〇八四に小兒科專門を以て開業せる早野實博士は、既にして牢固たる地盤を有し、打診の好評は氏が性格と相俟つて、大衆より多大の信望を博し、日々繁榮を極めつゝあり。氏は埼玉縣兒玉郡藤田村の人、明治二十二年生る。明治四十年東京醫學校に入り、四十二年醫術開業試驗に合格、同年七月より大正二年六月迄東京市衞生試驗所に勤務、それより七年四月まで札幌區々立札幌病院に勤務す、次で遠山博士主宰の東京顯微鏡院に九年八月まで在勤、九月より昭和二年三月まで慶應醫學部細菌學教室に在りて細菌學研究、同年四月慶大にて學位受領、同年六月より東京生物學研究所を設立し其の經營の任に當り、傍ら西巢鴨に小兒科を開業し今日に及べり。學位主論文「百日咳研究」參考論文なし。氏は生物化學に多大の興味を有す。

◇

高橋保

△神戸市神戸區山手通五丁目に、小兒科の大家高橋保博士を院長とする長澤小兒科病院あり、神戸最古の小兒科病院にして私立病院中斷然其の頭角を拔く、本院は神戸の中央に位し醫師三名、病室三十五室を有し內部の設備整ふ、林田區腕塚町五丁目に分院あり。博士は大阪醫大系の錚々たる小兒科學者にして、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。臨床家として多年の經驗に富み、卓越せる手腕は玲瓏たる打診の好評と相俟つて益々人望を其の一身に蒐め、古き歷史と共に動すべからざる地盤を有し、年々歲々向上發展、今や他の追隨を許さゞる盛況を極めつゝあるは頗る刮目に値す。

△岐阜縣羽島郡下中島村石田高橋宇吉の長男、明治二十九年生れにして、大正十二年大阪醫大卒業、直ちに細菌學教室に入室、助手となり二ケ年間故福原教授の指導を受く、同十四年四月より京都帝大醫學部小兒科教室に入り平井及故鈴木教授に就て小兒科臨床を學ぶ、同十五年九月より母校の小兒科研究科に入り笠原教授の指導を受け、昭和三年四月學位受領、其後長澤小兒科病院副院長に就任、同四年院長となり現在に及ぶ。

△主論文は「腦脊髓液ノ血清學並ニ免疫學的研究」にして、參考論文は、(1)「ホルマリン」血球ニ關スル研究、(2)榮養性膿痂疹（土肥氏）ノ病原菌ニ關スル知見補遺、(5)粉乳ノ細菌學的研究、(6)腦脊髓液ノ生物學的研究知見補遺なり。(3)同「ヴイタミン」培地ニ發育セル細菌（第二回報告）、(4)白色葡萄狀球菌

△一二の感想を述べて曰く「世相の變化と不景氣の爲め長袖者流の困難となり、世間の醫者に對する白眼視や暴利を云々され、且つ負はさるる義務は益々增加するに拘はらず、權利は益々減少するの感あり、醫界の團結を以て堅禪一番世間の疑念を解かねばならぬ」と。又曰く「小兒科は他科と異なり死亡すれば壽命だけではとほらぬ、先づ家族殊に母親の治療をせねばならぬ事が多い、直ちに子供を愛する精神なくては出來ない、無心の子供に接することは誠實と愛の二つ以外にはない。第二の國民の教養は吾等を度外してはならぬ、都會地に於ける結核殊に腺病質兒童の所置は給食以上に必要ではないか、結核治療が餘りに大人にのみ向けられることは遺憾である、虛弱兒童の收容所又は學修所を作ることは如何に重大なるかを思ふ」云々。

△故長澤四郎博士とは叔父甥の間柄也。臨床に熱心にして打診の評判に至りては、既に世間に定評あるが如く、名實伴ふ名醫博として篤き聲望を博す。溫厚篤實なる性格と相俟つて、高邁なる人格を尊ぶ。寫眞を趣味し又た旅行を好む。博士の年齒漸く不惑に達す、春秋猶頗る豐富にして、輝しき前途は益々有事多望なるの秋、切に自重加餐を祈る。

◇

布瀨七一郎

△富山市殿町に布瀨七一郎博士の經營する布瀨乳兒院あり、レントゲン科、其他理學的診療等々內部の施設完備す。博士自ら日々診療に勵しみ、打診の好評は氏が小兒科に相應しき性格と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、當地方診療界に斷然頭角を顯はし一流に在り。博士は金澤醫專出身の小兒科學者にして、母校の恩師中村八太郎博士の指導を受けて斯學の蘊奧を究め、金澤醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。其の今日あるは地方診療界の爲め大に人意を强からしむるに足る。

△富山縣上新川郡大澤野村笹津布瀨龜次郎の二男、明治二十五年生る。大正四年金澤醫專卒業後、一年志願兵として軍務に服し、陸軍二等軍醫に任ぜらる、昭和四年六月學位を授與せられ、金澤醫大小兒科教室に勤め、同六年五月以來現住地にて開業今日に至る。專門は小兒科にして特に乳兒科を最も得意とす。

△主論文は「肝臟脂肪體ノ形態學的研究」にして、參考論文は「汎發性澱粉樣變性並ニ澱粉樣變性ト硝子樣變性トノ關係ニ就テ」外英文一篇あり。他に自著論文數多ある中に「乳兒脚氣及佝僂病」は最も主要なるものなり。

△學究的溫厚の紳士にして、當年四十有四歲。臨床家として腕の冴え盛にて最も得意の時代に在り。患者に對する愛と同情とを以てし患家をして信賴と敬慕の念を深からしむるの德を有す。趣味として園藝に親しみ、又養魚を樂しむ。

◇

桂島忠良　△仙臺市木町通北二角に新興せる桂島内科、小兒科醫院は桂島忠良博士の經營也。院長桂島博士は東北帝大の出身にて、母校より學位を得たる新進の手腕家也。開業日尚淺きも、濟々多士なる仙臺診療界に進出して以來、拮据黽勉、多年錬磨せる獨特の手腕を發揮し、嘖々たる好評と相俟つて年次發展の域に在り。

△仙臺市の人、桂島良孚の次男、明治二十九年生にして、仙臺一中、二高を經て、大正十二年東北帝大醫科を卒へ、直ちに病理解剖學教室に入り木村男也教授指導の下に研鑽數年の後、東北帝大助教授に任ぜらる、昭和三年十月依願免官、後加藤豐治郎教授指導の下に内科學を、佐藤彰教授指導の下に小兒科學を專攻、同四年七月學位を受領す、同五年四月八戸病院副院長として赴任、同八年六月辭して頭書の醫院を開設、以て今日に至る。

△主論文は、獨逸文の原著にて、「Zur Kasuistik des Riesenzellen sarkoms der Sehne」と題し、參考論文は、(1) Ueber Nervenveränderungen im Bereich des Magenglsehwürs resp. Ulkuskarzinoms (2)東北地方ニ於ケル鉤絲蟲嚢包ニ就テ、(3)末梢神經系統ノ染色方法、(4)腦腫瘍二例、(5)松果腺腫瘍一例の五篇なり。

△年齢漸く不惑に達し、少壯氣鋭にして進取の氣象に富み、不斷勵精以て精研に餘念なく、人に對しては誠意親切を以てす、殊に居常能く禮節を重んずる風あるは、臨床家として其人格を尊ぶべき也。今後の活躍と相俟つて前途の向上發展を待望して止まず。

◇

和田彌三郎　△京都微生物研究所主任技師として勤務の傍ら、京都市油小路通四條南入に自家經營の和田小兒科（小兒診療を行ひレントゲン線及び、紫外線の設備あり）に於て一般診療に從事しつゝある和田彌三郎博士は、京都府立醫大系の先輩にして、研鑽多年の造詣深く、學識と經驗兩々相俟つて、今や手腕圓熟の域に入り、小兒科專門の大家として仰がれ、多年の聲望と共に打診の評判極めて良好なるを聽く。

△京都市の人、現住所に本籍あり、明治十八年十二月生れにして、明治四十一年京都府立醫專卒業後、同校助手を歴て、島根縣濱田細菌檢査所主任技師として勤め、次で京都帝大醫科大學附屬醫院勤務の後、京都府立醫科大學研究科に在學、昭和四年八月學位を授與せらる。母校の恩師、平井毓太郎教授、常岡良三教授、後藤五郎教授等の指導を受け、小兒科、衞生、細菌、物療等を專攻す、特に小兒科は最も得意とする所にして、小兒科を標榜して立つ。

△主論文「紫外線照射ノ血液成分並ニ血清學的現象ニ及ボス影響ニ就テ」、參考論文、(1) Cholin 及 Betain ノ細菌發育ニ及ボス影響、(2)加熱及非加熱自家血清並ニ同種血清ノ非徑口的注ニヨル生體ノ反應ニ就テ、(3)遠藤氏培養基ヲ赤變セザル大腸菌屬ニ就テ。昭和四年八月、京都府立醫大より學位受領。

△讀書家にして文雅に趣味を有し、殊に俳句、和歌を能くす、又たスポーツをも好む。性格は自信の强い人にして、自分の信ずることは飽迄斷行する勇氣を有す、蓋しそれが長所ともなり短所ともなるかの樣に思はれる。而かも人に對し忠者に接するに、慇懃にして親切なると、同情心に富む美德は、人をして敬慕の念を深からしめ、臨床家としての人格者たるを推奬す。故文學博士三浦周行とは親戚の間柄なりと聞く。現住所京都市下京區油小路通四條下ル。

◇

恩地功　△福井市佐佳枝下町三四に恩地小兒科醫院あり、恩地功博士の經營にして内部の設備整ふ。博士は京大系の小兒科學者にして、斯界の巨擘平井毓太郎教授、故鈴木正教授の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる京都帝大派の名醫博也。年壯にして多年の經驗に富み、圓熟せる手腕は玲瓏たる打診の好評と相俟つて益々人氣を博し、開業未だ數年ならずして年次成功の地盤を築きつゝある前途は頗る囑目に値す。

△博士は三高を經て、大正二年十一月京都帝大醫科大學卒業後、直ちに副手として同學小兒科教室に勤め、同八年五

月任海軍醫官、補臨時南洋群島防備隊附、同九年九月臺灣總督府醫院醫長に轉じ嘉義醫院長となる、昭和二年十一月官を辭し京都帝大大學院に入學、小兒科學專攻、同五年三月母校より學位受領、同年末頭書の現住地に於て開業今日に至る。

△主論文は「ヂツク氏連鎖狀球菌ノ生物學的研究」にして、參考論文は、(1)「アメーバ」赤痢ノ甘汞療法、(2)嘉義地方ニ散發スル一不明熱疾患ニ就テ、(3)猩紅熱血液像ノ統計的觀察等なり。

△博士は福井縣坂井郡高椋村舟寄兒玉範之丞二男、明治二十年生る、民衆的熱心なる臨床家にして、「醫は仁術也」をモットーとし、患者本位を主義とす、現代の醫師界に對しては「一般醫師がモツト〳〵舊殼を脱し民衆的にならなければ駄目だと思ふ」との意見の持主也。從つて其の診療に臨むや、熱誠克く誠實と親切とを盡し、克く患家の心理を洞察して理解と同情とを以てす、强ひてアラ探しをすれば、意志の弱きうらみなきか。研究以外の趣味としては謠曲ぐらゐ。臨床的手腕は愈々圓熟して一段の重望を加え、今は働盛にて最も得意の時代に在り、而かも年壯にして猶春秋に富み、博士の後半生史を語るには餘裕綽々たり、幸に健康と共に、診療界淨化の爲め益々奮發活躍あらんことを切に祈る。

◇

堀木勇治　△三重縣松阪市殿町に新興の堀木醫院あり、小兒科を以て著聞し當地方を風靡す。院長堀木勇治博士は金澤醫專出身の小兒科學者にして、京都帝大教授戸田正三博士指導の下に論文を完成して、京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△博士は大正六年金澤醫專を卒へ母校研究科を經て、大阪住友病院小兒科內科に勤務し、同十五年京大醫學部に學び昭和六年二月同大學に論文を提出して醫學博士の學位を得、同八年六月鄕里松阪市に於て開業一般患者の診療に從事す。

△主論文は「高度ノ高溫環境ニ於ケル鬱熱現象ノ發現ト之方調節域ニ就テ」にして、外參考論文七篇あり。

△三重縣飯南郡大河內村桂瀨堀木齋右衞門の次男、明治二十三年生る。年壯にして進取の氣象に富み、研究心猶潑剌たるものあり。其の今日ある篤學は博士の前半生史に躍如として精彩を放ちて見ゆ、今は働盛にて圓熟の域に達し、獨立の舞臺に獨特の手腕を發揮して餘す所なく、診療に臨むや甚だ熱心にして克く親切と誠實とを盡すところに、特に博士の特徵を見出さる。「現代の開業醫の品性が思つたより下卑なのに驚いてゐます」とは、博士が述懷の言葉であり其の眞相が窺はれる。性來眞面目にして、正を好み邪を惡む質の純眞の人なるが、短氣なのは博士の短所として惜むべきか。研究以外、文藝趣味豐かにして殊に義太夫、長唄などを愛好す。因に東大名譽教授中村淸二理博とは近親の間柄なりと聽く。

◇

小柳重禎　△福岡縣瀨高町下庄に小兒科小柳病院あり、町の中央警察署前に陣容堂々として敷地約五百坪を有し、病院は現代式洋館にして建坪約一百坪あり、入院患者定員十四名、其他充實せる內部の設備整ひ門前常に賑ふ院長小柳重禎博士は、長崎醫大系(專門部出身)平井教授門下生の俊材にして、恩師の指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる小兒科界近來の名醫博也。博士の感想を聞くに「現時次第に醫師特に開業醫の品位低落の感あり之れ一面醫師都會集中による過剩の結果餘りに患者の吸收策に汲々として人格の低落を省みざるの現狀にあり余は此の意味に於ても開業醫都會集中打破の提唱者の一人として飄然歸鄕小兒科專門醫として立つに決せり」云々と。宜なる哉、果然鄕土に於て開業醫として一家を成し、今や小兒科の大家と仰がれ、遠近の大衆より多大の信賴と尊敬とを受け、年次成功の地盤を築きつゝあるは、賢明なる博士の成功を祝すると共に、亦以て他山の石として一般の識者を戒しむ

べき也。

△福岡縣瀬高町下庄小柳茂長男、明治三十三年生る。大正十三年長崎醫大醫學專門部卒業後、同十四年十一月迄長崎紡織醫局勤務、同年十二月長崎醫大小兒科教室勤務、平井教授の指導を受く、昭和四年十二月長崎醫大藥物學教室轉勤、同六年一月學位受領、同年四月開業今日に至る。

△主論文は『「タリウム」ノ藥物學的研究』にして三篇より成る。參考論文は『哺乳兒胃內容ノ「レントゲン」學的研究』外十一篇あり。

△眞面目なる學究的臨床家にして、患者に對し誠實と同情とを以てす。讀書家にして研究以外には俳句を能くし、矢水を號とす、又た謠曲を愛好して時に心勞を慰す。

◇

榊原　益次郎　△兵庫縣武庫郡精道村芦屋字大桝八二三に榊原小兒科醫院あり、院長榊原益次郎博士は、愛知縣立第一中學校を經て、大正十一年大阪醫大を卒へ、同年四月より昭和六年十一月まで、大阪醫大病理學教室、同附屬病院肺癆科、小兒科に勤務す、其間同六年一月母校より學位を受領し、辭職後現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「諸種細菌注射ニヨル二十日鼠ノ實驗的澱粉樣變性ニ就テ」にして、參考論文は、(1)諸種細菌體內ノ硅酸含量ニ就テ、(2)慢性骨髓性白血病ノ「ペンツオール」療法ニ就テ、なるが、主なる指導教授は母校の恩師酒井幹夫博士及び笠原道夫博士（小兒科）、村田宮吉博士（病理學）、佐多愛彥博士（肺癆科）なり。

△愛知縣知多郡半田町字中村の人、明治二十九年生る。研究と醫療そのものに趣味を集中し、誠意誠實とを盡し以て自己の天職と爲す、春秋猶頗る豐富なれば、向後の活躍と相俟つて、洋々たる前途は更に大に待望せらる。

◇

岸　芳男　△東北帝大派の名醫博にして、小兒科の大家と仰がれ、高崎地方に嘖々たる名聲を博しつゝある岸芳男博士の診療所は高崎市中紺屋町二十一に在り、小兒科專門を以て多年聲望を扶植し、圓熟せる手腕の好評と相俟つて遠近の人氣を吸收し、今や當地方診療界を風靡するの概を示し、卓然として一流の位置を占む。

△博士は大正十二年東北帝大醫學部の出身にして、母校にて多年研究の後、學位論文『「インヂカン」成生ニ關スル實驗的研究』を提出して、昭和三年五月學位を受領せり。他に幾多の業績を發表して既に學界に其の存在を認められつゝある中にも、(1)生物體中ニ於ケル「インヂカン」生成機轉、(2)乳幼兒鉛中毒等の如きは、最も重要なる論文にして、博士會心の著作として見逃すべからず。

△博士の感想に曰く「醫學は日進月歩だと云ふが、治療に至つては相變らずで誠に遺憾に思ふ」云々。博士は群馬縣高崎市の出身、明治三十年生る、當年三十有九歲也。學究的熱心なる臨床家にして、少壯の意氣に燃え、多年の經驗と共に手腕漸く壯熟して今は最も得意の時代に入る。性來眞面目にして正直なれば、稍もすれば短氣の方なれども、誠意誠實を以て懇切を盡す點に於て評判極めて良好也。讀書家にして書見を業餘の趣味として又圍碁を好む。海軍々醫學校教官海軍々醫少佐吉田太助博士は義弟（妹婿）なり。

◇

西田　宗一　△多士濟々、殊に近來競爭最も激烈なる浪速醫療界に於て、一家を築き上げんとするも亦容易ならんや。南區心齋橋北詰西一丁に小兒科及び小兒外科を專門とする西田病院あり、院長西田宗一博士の自營する處、開業既に古く手術室、レントゲン、病室等々內容の設備整ふ、老熟せる博士獨特の打診、手術の好評は、多年の聲望と相俟つて、牢固たる地盤を築き拔くべからざる盛況を呈す。殊に博士の最も得意とする小兒病中內外科境域疾病の診療に至りては他の追隨を許さず、博士獨特の評判嘖々たるを聽くや既に久矣。氏も亦大阪醫大派の名醫博たるに漏

れず、近來成功者の一人物と見るべき乎。

△博士は明治三十七年大阪高醫卒業、陸軍々醫たる事一年間、母校の助手を歴任して、四十四年より青森市立病院副院長として大正三年迄勤め、辭職後現在の所に開業の傍ら母校病理學教室にて研究、昭和五年四月母校にて學位受領今日に至る。斯間恩師木村孝藏、高洲謙一郎、村田宮吉諸博士に就て指導を受くる所多し。主論文は『「モルモット」胎兒ノ壞血病ニ就テ』にして、參考論文なし。

△博士の感想に曰く「醫師報酬規定を撤廢し、社會民衆の生活に順應し經濟的脅威を與へぬ方法にて病苦を除き殊に豫防したいと思ふ。但し全部を醫師の負擔に歸することは反面醫師の生活を苦しめ結果に於て面目からぬ點も生じ易いと思ふから、醫師自らの生活程度に自制を行ふと共に國家の援助と民衆の平素より疾病に對する經濟上の用意をも希望する」云々。理想としては誠に結構なるかと思ふも、先づ現實の可能性があるかが問題ならん。

△大阪府豐能郡歌垣村倉垣の人、西田藤太郎の長男、明治十四年生る、當年知命に入る五歳、健康にして元氣益旺盛也。氏が今日ある閲歴を顧みれば、多年臨床の傍ら努力研鑽を重ね、終に克く學位を獲得せる厚志篤學に至りては敬服に値す。生來慈心家にして寛恕の精神に富み、患者に對しては相當の理解と同情とを以てす。業餘の趣味としては圍碁と謠曲とにあり。今や悠々たる位地を獲得して終生「醫は仁術也」をモットーとして、貴き使命を果たすべく不斷の努力奮鬪を續けつゝあるを多とす。幸い健康にして治療界の爲め益々奮盡あらんことを切望して止まず。

◇

雨宮修象

△京都府立醫大系の新進、近來目覺ましき躍進を續け、今や甲府市に獨立して、民衆醫療界に盡瘁しつゝあるは雨宮修象博士なり。即ち甲府市綠町にある雨宮小兒科醫院は博士の經營する所にして、博士の得意とする小兒科を標傍して立てり。開業日猶淺少なれど、その存在は市民間に認められ、剩さへ的確なる打診は博士の人望を日々益々高めつゝあるは刮目に値す。

△博士は京都府立醫大の前身醫專時代大正六年の出身にして、卒業後は海軍に入り、大正十二年海軍々醫大尉に累進し昭和三年豫備役に編入せらる、先是大正十五年以來京都帝大及母校京都府立醫大に入りて、醫博小南又一郎教授及び醫博齊藤二郎教授の指導を受け研究を重ね、小兒科及法醫學を專修す、昭和五年五月京都帝大より學位を得、同年九月より頭書の通り現地に開業して一般治療に從事せり。

△主論文は『「カルモチン」等二、三催眠劑中毒ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文として「ヂフテリー」後ノ急死外七篇あり。

△感想に曰く『救護法を徹底し醫療經濟を確立する上に於て醫師國營も可、何れにしても醫療費不拂に關して「理由なき忍容」(Tulden) とせず、道義心の沒却現今の如き世相に於ては少くとも無錢飲食無錢遊興と同律に更改するを要望する處にして一般官公吏軍人等に理由なくして俸給不拂或は半減など起らば其影響や如何、翻て醫療費の「理由なき忍容」に識者の耳目を注ぐものなきは異中の異とすべきに非ざる歟』云々。

△山梨縣西山梨郡山城村の人、醫師雨宮文亮の三男、明治二十六年生れにして、醫博雨宮保衛は實兄なり。業餘庭球或は撞球に興じて勞を癒す。學究的溫厚の紳士にして、年齡不惑に入る三歳、漸く壯熟に入りて前途猶洋々たり。性來謙遜自抑の士にして、人に篤く患者に親切と同情と理解とを以てし、功名榮達は恬澹として意に介せず、唯だ夫れ至誠天職を以て任じ、仁術の最善を盡して他事を顧みざるの概あり。

◇

中本良春

恩賜財團濟生會乳兒院に於て、斯科診療の爲め努力精進しつゝある中本良春博士は、醫博中本誠一(東京顯微鏡院診療部長)博士の令弟にして、慶大系の重鎭川上漸教授の門弟中の逸才として知られ、恩師指導の下

に、主論文、(1)膽囊粘膜ノ上皮細胞ノ異所性增殖ニ就テ、附上皮性腫瘍ノ一新原因ニ就テ、(2)膀胱粘膜ノ上皮細胞ノ異所性增殖ニ就テ、及び參考論文、膽道粘膜ノ上皮細胞ノ異所性增殖ニ就テ、を完成して母校より學位を獲得、所謂慶大派の名醫博たる一人物として其の存在を認められ、近來此の方面に進出して新手腕を發揮しつゝあるは頗る刮目に値す。

△博士は大正十二年慶大醫學部を卒へ、直ちに病理學教室に入りて研究す、昭和六年芝區恩賜財團濟生會乳兒院醫員として就任、同年四月學位を授與せらる。專攻中最も得意とするは病理學にして川上教授に師事して多年造詣する所あり、現在にては小兒科專門を以て立つ。

△鳥取縣八頭郡佐治村福園中本誠太郎六男にして、明治三十年生る、當年未だ三十有九歳の少壯也。文學趣味の人にして殊に俳句を能くす、又たテニス、ピンポン等を好む。人と爲り質朴敦厚にして謙讓禮あり、人と接するに眞摯にして溫良の態度一貫して見ゆ、蓋し臨床家としての將來甚だ賴母敷性格の人たるを慶ぶ。中本兄弟博士の前途益々多幸ならん事を祈る、幸に健康と共に治療界淨化の爲め益々發勵盡力あらんことを。東京市中野區沼袋北一丁目三四九に住す。

◇

玉田壽次　△西宮市大井町七に新興の玉田小兒科院あり、院長は玉田壽次博士にして、小ざつぱりとした陣容結構にして、行屆きたる內部の設備は好感を與ふ。博士は大阪醫大の出身にて、恩師笠原道夫博士の指導を受け小兒科學を專攻し、母校より學位を獲得せる所謂大阪醫大派の名醫博たる新人物也。研鑽多年、今や小兒科に關する獨特の新手腕を有し、打診の好評と相俟つて益々人氣を集め、輝しき將來の高蹈飛躍を期待せらる。

△博士は大正十四年大阪醫大を卒へ、直ちに同大學小兒科副手として勤め、翌十五年二月より十月まで長野縣伊那病院勤務、同十五年二月より昭和二年二月迄、母校の小兒科副手、同年三月更に同大學小兒科研究科入學、同六年三月退學、同年四月學位受領、同五年七月より七年四月迄、大阪聖バルナバ病院小兒科勤務、同七年五月開業今日に至る。

△主論文は「血色素抵抗ニ關スル實驗研究」にして、外に參考論文として、(1)「リビオドール」蜘蛛膜下腔注入ニ關スル實驗的研究、(2)「リビオドール」蜘蛛膜下腔注入ガ軟腦膜內被細胞ニ及ボス影響、(3)先天性溶血性黃疸血液知見(先天性溶血性黃疸患者ノ血色素抵抗)(4)「トリプトフアン」ノ血毒性貧血幼若家兎赤血球網纖狀物質ニ及ボス影響、(5)新案血色素抵抗測定器ニ就テ等あり。

△出身地は和歌山縣伊都郡學文路村にして、明治三十二年生る、當年三十有六歳也。少壯氣鋭にして手腕漸く壯熟の域に入る。賦性溫厚にして篤實、淸淡にして功名榮達を意に介せず、一意專念、仁術の爲め孜々として倦まざる概あり、蓋し臨床家として天資其の特質を具備せる人格者たるを喜ぶ。

◇

西弘二　△和歌山東牟婁郡西向町に小兒科を以て好評嘖々たる西病院あり、院長西弘二博士の經營にして高壯なる外構と相俟つて內部の設備整ひ、博士獨特の玲瓏たる打診振は、天資小兒科に相應しき性格と相俟つて遠近の人氣を集め、歳と共に益々繁榮の域に向上しつゝあるは祝福すべき也。博士は名古屋醫大の前身愛知醫專の出身にして、小兒科を以て立ち、長崎醫大より學位を得たる近來の篤學者也。

△博士は大正五年愛知醫專卒業後、東大小兒科に研究、麴町區三番町木澤病院に勤務、吉田、福岡、野谷諸博士の指導を受け、大正十年現住地に開業、昭和四年一月より再研究、長崎醫大淺田教授の許に血淸學の研究に從事、傍ら內科學教授角尾教授及び物療科末次教授の指導を受け、昭和六年六月學位受領、翌七年七月現住所に再開業今日に至る。

△學位主論文は「生物學的反應ニ對スル葡萄糖ノ影響」にして、外參考論文十三篇あり。感想の一片を吐露して曰く

「將來の開業醫何處へゆくといふことを痛切に感じてゐる」云々。

△博士は和歌山縣那賀郡東野上町の人、明治二十三年同縣潮岬に生る、當年不惑に入る六歳也。學究的年壯の紳士にして、今は最も腕の冴えたる全盛時代に在り。熱心なる臨床家としての聞え高く、眞面目にして誠實と親切とを以て始終し、「醫は仁術也」をモットーとして、最善を盡す上に不斷の努力を傾倒しつゝあり、其の眞摯なる態度は、臨床家の執るべき常道として尊重すべき也。

◇

武井竹雄　△日赤北海道支部病院小兒科に在る武井竹雄博士は、金澤醫專の出身、銀時計組の一秀才にして慶大學派の流を汲み、病理學の泰斗川上漸博士及び小兒科の大家唐澤光德博士に親炙して造詣する所深く、慶大より學位を得たる新進の名醫博として其の存在を認められ、今や診療界に躍進して新手腕を揮ひ、勵精恪勤、大に將來に待つあらんとす、希望に充つ前途の大成大に期待せらる。

△博士は大正十二年金澤醫專を卒へ、優等賞として銀時計を授けらる、卒業後直ちに和歌山縣日方町阪口病院に勤務同年十一月同院を辭し翌年十一月迄、一年志願兵として歩兵第五十九聯隊に入隊、除隊後直ちに慶應義塾大學醫學部病理細菌學教室に於て、病理學に就き川上教授の指導を受けること六ケ年有餘、昭和六年六月より更に小兒科學教室に轉じ唐澤教授に師事し研究を續け、同年七月慶大より學位を受領せり、次で同九年日赤北海道支部病院小兒科に赴任し、今日に至る。

△主論文は「動物惡性腫瘍ノ免疫學的治療法ノ研究」にして、參考論文は、(1)「所謂 Gaucher 氏病ニ就テ」(2)「所謂先天性水腫症ニ就テ」等あり、(3) The Study of immunological therapeutic of human cancer, (4) Immunological Studies of animal tumour 等なり。

△博士は群馬縣北甘樂郡一ノ宮町武井庄太郎長男、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歳の少壯也。研學の念欝勃として今猶禁ぜざるものあり。顧みれば其の閲歴は博士の前半生史に盡きて餘蘊なしと雖も、其の今日あるは恩師川上唐澤兩教授の他、小兒科及川慶三氏に公私共に指導せられたる所多きは與つて力あるを想はしむ。趣味としてはスポーツ、演劇、寫眞等を好む。人と爲り眞面目にして誠實、清淡にして功名榮達を求めず、快活にして親切なり。將來有爲の臨床家として待望して止まず。幸に健康を祈り益々發奮活躍あらん事を。旭川市榮町一丁目日赤社宅五號に住す。

◇

杉田博　△西南の醫術文化史上に燦然と歴史を飾る長崎港の袋町一〇に小兒科專門を表示し、市民の信頼を蒐め、嘖々たる名聲を博せる杉田小兒科醫院長杉田博博士あり。學系は長崎醫大派の小兒科學者にして、特に疫痢疾患を最も得意とする新進の名醫博として、其の手腕を推稱せらる。斯間大正十四年六月迄は齋藤秀雄教授に、その後昭和六年六月迄平井金三郎教授に指導を受け、其間平井教授洋行中は京都帝大名譽教授平井毓太郎博士に師事せり又細菌學方面は阿部俊男教授につき研究を重ね造詣する所深し。研鑽多年の學殖と共に實地の經驗を積み、今や獨特の手腕を發揮して益々獨自の地盤を開拓しつゝある處に、博士の大なる存在を認めらる。

△博士は鄕里縣立熊本中學を卒へ長崎市に出でゝ、大正十三年長崎醫大醫學專門部を卒業し、同年十一月同醫大副手囑託、翌十四年九月同醫大助手拜命、爾後七年間小兒科教室に勤務し、昭和六年六月依願免官、同年八月醫學博士の學位を授けらる。

△主論文は「Enterokokken ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文としては、(1)長崎市内ニ販賣セル野菜類ニ附着スル寄生蟲卵特ニ蛔蟲卵檢査成績、(2)同一家族内ニ發生シ共ニ疫痢樣症狀ヲ呈シタル二例ノ患者ヨリ檢出セル菌株ニ

ツキテ、此他乳兒爪「カンタリジン」發疱次、赤痢等ニ關スル論文十篇あり。其他論著夥多ある中にも特に疫痢疾患に就きて興味を有するが如し。

△感想の一片を披瀝して曰く「一般社會狀態と共に醫界淨化は醫學界、醫師界共に緊急事と思ふ」云々。博士の出身地は熊本縣上益城秋津村大字沼山津にして、杉芳平の三男、明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歳、學究的少壯の紳士也。書籍を愛し、讀書精研克く修養に力むる風あり、又俳句に堪能にして「初冬や千羽鳥の渦卷ける」、「月出でん綠金色の雲の峯」などの近作あり。性格としては聊か感情的に流るゝ憾なきかを想はしむ、而かも人に對するに溫情あり、理解と同情を以てす、人を愛し人に親しまるゝの德を有す。熱心なる臨床家にして、將來有爲の資、而かも春秋猶頗る豐富なるの秋、幸ひ健康にして益々努力奮鬪あらん事を望むや切也。

◇

黑田稔

△東京府下府中町馬場大門に新築せる白壁殿堂の黑田小兒科醫院あり、院長黑田稔博士獨特の手腕は遠近に喧傳し、京王電軍沿線を利用して近來著るしく外來患者輻輳し、今や超然として當地方診療界に頭角を拔くの概あり。殊に博士の最も得意とするは小兒科一般並に乳兒科にして殆ど獨步の觀あり、近來又豫防醫學の發達に專念腐心しつゝあり。博士は日本醫大系の篤學者にして、東北帝大教授青木藁博士に就きて小兒科學の蘊奧を究め、東北帝大より學位を獲得せる新進の名醫博也。學位論文は「チブス」、「パラチブス」菌に關する研究にして、如何に精研の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅言の要なし。

△博士は東京府南多摩郡稻城村醫學士黑田尙寬七男、明治三十四年生れにして、鄕里の小學校を卒へ、中學は獨逸協會中學、醫大は日本醫科大學を卒業後、日本赤十字社病院醫員として小兒科に勤務し、昭和二年より東北帝大醫學部副手を囑託せられ小兒科教室に勤務、青木藁教授指導の下に研究に從事す、昭和六年八月同大學にて學位を授與せらる。爾來再び日赤產院乳兒科に勤務し、同九年春辭職、現住地に於て醫院新築成り開業今日に至る。

△博士の嚴父尙寬學士は、東京帝大明治三十五年組の石原誠、長尾美知、三田定則等の諸博士と同期生にして、皮黴科の大家として仰がれ、小石川區表町に多年安住せるも惜むらくば大正十四年十二月二十四日逝去す。父の衣鉢を襲ぎて醫學を志せる博士は小兒科を以て立ち、研學切磋、其の今日ある學歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、今は分別盛に入りて年齒漸く三十有五、少壯の意氣に燃え潑剌たる研究心を有す。學究的溫厚の紳士にして、人と接するに城府を設けず、懇篤にして快活、寬厚能く人を容れ、和氣溫情に富む、殊に小兒科に相應しき特徵を具備し、患者に對するに診療甚だ熱心忠實にして、飽くまで愛情と親切とを盡す點は評判にて、篤き今日の聲望を博す所以と見るべき也。細菌學の研究は博士の最も趣味とする所にして、今も猶之れを樂しみ、又洋畫を能くす。感想としては「豫防醫學の發達を望み之れが指導奬勵に務めつゝあり」と。妻千枝子との間に良家庭をなす。

◇

兒島俊亮

△下關市中之町に在る兒島小兒科は兒島俊亮博士の診療所也。學系より觀たる博士は、大正十二年岡山醫大附屬醫學專門部卒業、同年九州帝大醫學部專攻科入學、昭和六年九月九州帝大より學位を得、翌七年七月より下關市に於て小兒科專門を以て開業今日に至る。

△主論文は「過酸化酵素ニ關スル研究」にして、參考論文は、「人乳及ビ牛乳中ニ含マルル二三ノ重金屬ニ就テ」なり。博士曰く「醫師は病者の慰安者なりと云ふも今少し小兒科と內科との區別を鮮明にする必要を感ず。之がためには大衆の醫學的智識の向上をはかり他方醫師の德義心に訴へんとす。以て疾病治療の効果の完璧を期せん」云々。以て博士の感想一端を窺はる。福岡市の人、明治三十三年生れにして、當年三十有六歳也。少壯にして前途猶洋々たり學究的臨床家としての將來益々多望なるの秋、切に努力奮鬪を望むや切也。

◇

篠崎憲吉

△宇和島市堀端通りに篠崎小兒科あり、外觀の結構内容完備、併せて院長篠崎憲吉博士の手腕人望と相俟つて名聲遠近に喧傳し、小兒科に於ては當地方診療界に斷然頭角を表はすの概あり。博士は岡山醫專出身の小兒科學者にして、岡山醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博として既に其の手腕を推稱せらる。加ふるに小兒科に相應しき溫厚篤實なる性格と相俟つて、其の今日の隆盛を來たせるもの又た偶然ならざるを思ふ。

△博士は松山中學校を經て、大正三年岡山醫專卒業、直に母校助手に任ぜられ醫化學及び藥物學教室勤務を命ぜらる同五年二月依願免本官、同時に東京帝大小兒科教室介補を囑託せられ十月依願解囑、六年三月靜岡縣磐田郡高木鑛業鮎釣鑛山醫院勤務、同七月右辭職、同月同縣周知郡奥山村村醫を囑託さる、同八年三月右辭職して久原鑛業株式會社に入り、大瀨鑛山及廣田鑛山に勤務、傍ら大正十二年五月より十一月迄岡山醫大西川外科教室にて見學、昭和三年九月辭職、十月岡山醫大副手を囑託せられ藥物學教室勤務を命ぜらる、六年四月附屬醫院小兒科へ轉じ、同年九月學位受領、七年二月依願解囑、三月現地に開業今日に至る。博士は藥物學、醫化學、小兒科、外科學の廣汎に渡りて研究せるが特に小兒科を最も得意とす、斯間の指導教授は主として諏訪瑩一教授（醫化學）、故弘田長博士(小兒科)、西川義英博士（外科）、奥島貫一郎博士（藥物學）、好本節博士（小兒科）等なり。

△主論文は『環狀「グアニヂン」誘導體ノ藥理學的研究第一報、血液凝固ニ及ボス影響ニ就テ』にして、參考論文は(1)「グアニヂン」並ニ其環狀誘導體ノ藥理學的研究、第二報血管ニ對スル作用ニ就テ、(2)同第三報腸管子宮並ニ心臟ニ對スル作用、(3)生體内ニ存スル「グアニヂン」誘導體ノ血液凝固ニ對スル作用ニ就テ、(4)血餅凝縮力測定法並ニ諸種藥物ノ凝縮力ニ及ボス作用ニ就テ、(5)「カンフル」及ビ其代用藥「アルコホル」及ビ「エーテル」ノ血液凝固並ニ血餅凝縮力ニ及ボス影響、(6)諸種痙攣毒ノ血液凝固並ニ血餅凝縮力ニ及ボス影響等なり。他に「ベンチールグアニヂン」（武田發賣豫定の止血藥「イルメリン」）の止血的作用藥理學的研究」と題する博士會心の一大論著あり。

△愛媛縣喜多郡大瀨村篠崎健關の養子にして、明治二十四年生る。年齒不惑に入る五歳にして年壯の意氣益々壯也。今は手腕愈々圓熟して最も得意の時代に入り、熱心親切なる臨床家にして又小兒科の大家として仰がれ、近鄉の大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは多幸とす。

◇

三杉義利

△競爭激烈なる浪速診療界に進出して、其の專門とせる小兒科を以て起ち、孜々營々、近來成功の地盤を築きつゝある三杉義利博士は、大阪市住吉區北田邊町八九五に三杉小兒科醫院を經營し、院長として自ら日々診療に勵しみ多忙を極はめつゝあり。博士は京都府立醫大出身の小兒科學者にして、血清學及び組織培養學の造詣深く、京都帝大より學位を獲得せり。未だ少壯にして開業日尚淺少なれども、既にして名醫博としての新手腕を認められ、漸次堅實なる地盤を開拓し、日增盛況を呈しつゝある前途は頗る刮目に値す。

△博士は大正十二年京都府立醫大を卒へ、同年四月より十四年八月迄、京都府立醫大小兒科教室に助手として小兒科學專攻、同十四年十一月より昭和三年五月迄、日赤大阪支部病院小兒科勤務、同三年五月より六年七月迄、京都帝大醫學部微生物學教室にて研究、同六年十月現住所にて小兒科開業、同年十一月學位を授與せらる。斯間母校の恩師故三浦操一教授、同齋藤二郎教授及び京都帝大教授木村廉博士の指導を受け學位論文を完成す。卽ち、主論文は「過敏症ノ本態ニ關スル研究」にして三篇より成り、外に參考論文として「體外培養組織ノ赤血球凝集素產生ニ就テ」外九篇あり。

△博士曰く「非常時日本の爲に、第二の國民たる乳幼兒の健康增進に向て邁進することこそ、余が天職也」云々。此の信條の下に若き意氣と不斷の努力とを以て、一路邁進しつゝある前途や大に待望せらる。大阪市住吉區北田邊町三

杉義敏の長男にして、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳也。趣味としては音樂を樂しみ、總てのスポーツを好み、又時には太公望を極め込みて其の日の勞を慰することあり。少壯の覇氣滿々として進取的氣象に富み、切磋卓勵孜々として其天職に倦むことを知らざる精力家也。

◇

大野忠　△帝都診療界に進出して王子區王子町一二八一に自己獨立の診療所を新築し、內科小兒科を標榜して着々向上發展の進境に向ひつゝあるは大野忠博士也。博士は長兄中村舒博士（內科）と、中兄小笠原彬博士（東北帝大產婦人科助教授）と兄弟三人揃つて醫學博士中の末弟にして、既に學界の美譚として人皆稱する所也。學系よりすれば日本醫大出身の新進にして、東京帝大教授竹內松次郎博士に黴菌學を、中村舒博士に內科學を、東京帝大講師太田孝之博士に就て小兒科學を研鑽する所あり、就中小兒科は博士の最も得意とする所にして、打診の好評は益々人氣を集め、遠近の患者を吸收しつゝあり、向後の活躍と相俟つて前途の成功を期待す。

△博士は大正十三年日本醫大を卒へ、直ちに東京帝大醫學部黴菌學教室に入り、竹內教授の指導を受け、同時に中村（舒）博士に師事して內科學を研究す、昭和四年四月泉橋慈善病院小兒科醫局に入局、七年五月まで太田博士の指導を受く、其間六年十二月東京帝大に於て學位を得、京王病院內科小兒科部長として昭和七年十二月まで勤め、爾來頭書の現住地にて開業一般の診療に從事す。

△主論文は「日光々線ト色素トノ協力殺菌作用ニ就テ」にして、參考論文は、(1)鷲口瘡ノ生物學的性質並ニ免疫學的實驗、(2)貝類及昆蟲類腸內「バクテリオアフージ」ノ檢索なり。論著中の「光線ノ殺菌作用ノ本態」は博士會心の作にして、最も重要の論文として稱讃せらる。

△博士曰く「現代醫學界に就ての感想多々あるも最近最も感ぜらるゝことは各醫師の人格修養の向上なり」云々。一服の清涼劑として三思傾聽に値す。博士は現住所に本籍を有し、明治二十九年生る、當年四十歳也。少壯氣鋭にして崇高なる人格を具へ、學究的臨床家として相應しき特質を具備す。其の專門に至りては手腕今や壯熟し、篤き聲望と相俟つて益々評判良し。趣味としては音樂を好む。博士のモットーとする人格修養の向上に對しては、著者は更めて敬意を表する者也。學位の尊嚴と共に人格の尊重すべき事は今更論議するまでもなく、必ず學位と人格とは一致して共に尊敬せらるゝ美風を培ふ要を認むるや切也。況んや博士の人格に對する世論の紛々たる秋に於てをや、世論を正しく導く上にも一層此の感を深うして止まず。

◇

富島嘉門　△大阪市東區弘濟病院に小兒科醫長として富島嘉門博士あり。多士濟々たる浪速醫博界に於ける當世の手腕家として囑目せらるゝ新進人物也。博士は大阪醫大出身の小兒科學者にして、斯科界現代の權威たる恩師笠原道夫教授に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる近來の少壯名醫博として其の存在を認めらる。

△顧みて博士の學歷及び閲歷を公開すれば、大正十四年大阪醫大卒業後、同年四月より母校の小兒科教室に殘り、昭和二年三月辭して同科研究科入學、同六年十二月母校にて學位を得、爾來現職に就任し今日に及べり。

△主論文は「化膿性腦膜炎ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)實驗的鉛中毒知見補遺、(2)腦脊髓膜炎球菌治療血清蜘蛛膜下腔注入ガ呼吸ニ及ボス影響、(3)實驗的化膿性腦膜炎ニ於ケル腦脊髓液內色素移行ニ關スル實驗的研究、(4)「サルヴァルサン」血清蜘蛛膜下腔注入ガ軟腦膜內被細胞ニ及ボス影響、等なり。

△博士は大阪市此花區上福島北一丁目に本籍を有す、瀧川德之充の三男、明治二十九年生る。少壯の意氣と共に診療に熱心にして、患者をして信賴と尊敬との念を深からしめ評判極めて良し。一面又人と接するに溫厚にして圓滿、敢て學者として衒はず、恬澹として人を愛し、又能く人に親しまる。趣味は釣り、圍碁を好む。大阪府北河內郡蹉跎村

大字中振二二一八に住む。

◇

海輪利光　△東北帝大派の新進、小兒科學者にして又た生理學者たる海輪利光博士は、現に講師として母校の教壇に起ち、誠意、精勵克く學生の提撕に力め、一面又自己の研究に精進しつゝある前途有爲の士也。二高を經て昭和二年東北帝大醫學部卒業後、引續生理學教室に次で小兒科教室に勤め今日に至る、斯間佐武安太教授(生理學)、並に佐藤彰教授（小兒科學）に師事し造詣する所あり、昭和七年二月母校より學位を受領す。

△主論文は『「ペプトン、ヒバグリケミア」ニ就テ』にして、英文の原著二篇より成り、參考論文は、佛、獨文の原著八篇あり。外に著書「新佛和醫學辭典」（南山堂出版）あり。

△秋田縣由利郡龜田町の人、明治三十六年生れにして、年齒未だ三十有三、學究的少壯なる學者肌の人、其熱心にして眞摯なる態度は、向後の切磋卓勵と相俟つて、大に將來の大成を期待せらる。音樂趣味の人、親戚には醫博海輪十二、醫博田中敬助等あり。仙臺市光禪寺通六六に住す。

◇

布上正則　△熊本醫大助教授にして小兒科學を分擔しつゝある布上正則博士は、九州帝大系の新進にして、小兒科の耆宿、現九州帝大名譽教授伊東祐彦博士の愛弟子として知られ、恩師の親しき指導を受け、其他母校の箕田貢教授、大平得三教授、宮入慶之助名譽教授等に就て研究の結果、母校より學位を得たる少壯醫博也。專攻は小兒科學衞生學にして、特に寄生蟲學に興味を有し最も得意とす。年齒未だ少壯にして研學の念に燃え、潑剌たる前途を有す將來有爲の新人物として、輝しき前途の大成を囑目せんとす。

△博士は大正十三年九州帝大醫學部卒業後、初め同大學醫學部小兒科教室に入り小兒科學の臨床を修む、昭和二年同學部衞生學教室助手となり、衞生學一般並に寄生蟲學を修む、同四年十二月熊本醫大助教授に任ぜらる、同七年三月九州帝大より學位を受領す。

△學位主論文は「寄生蟲免疫ニ關スル實驗的研究」にして、(1)條蟲免疫ノ實驗的研究、(2)肺臟「ヂストマ」免疫ノ實驗的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)肥頸絲蟲知見補遺、(2)蛔蟲症ニ關スル臨床的觀察の二篇なり。

△感想の一片を述べて曰く『母性及小兒保護の社會的施設が國家永遠の大局より見て、モツト具體化する樣醫師の覺醒と努力を要するものと思ひます。私達小兒科醫には何より先づ世の母性乃至は女性の正しき指導後援が課せられたる大責任と存じます。女性の覺醒、正しき見解の具現ない限り、我國の眞の「衞生」は興らないものと思ひます。私は保健、國家の繁榮の爲めにドウシテモ「衞生省」（乃至は保健省）の設立が近き將來に實現せねばならぬと確信致しますが、そして其の衞生行政の統制者には、是非自然科學を修め、醫學を習得し、眞の保健衞生に理解ある者でなければならぬと愚考致しますが、此の國民保健も母性乃至は小兒保護の問題も今の男子に期待するのみでは到底、覺束無いと思ひます。ドウしても女性の覺醒、知識、見識の向上が必要であると存じます。此の意味に於て私は女性の覺醒の曉に期待するものであります。更に子供の事は男まかせではいつになるか分らぬと思ふものであります。眞に識見ある女性の政治方面に於ける進出（子を常に背負ひて）もやはり必要だと存じます』云々。

△博士の出身地は佐賀縣佐賀郡川上村大字池上にして、明治三十年醫師布上俊耕の四男に生る。少壯の意氣益々壯にして、教壇に立つや熱情と誠實とを以てす。賦性眞面目にして如何なる人に對しても至誠、無私を以てし、寛厚克く人を愛し快活にして能く學生を愛撫す、蓋し常に德操を堅持して自ら品格の修養に力むるの事實を見逃すべからず。讀書家にして散歩を趣味す。熊本市大江町九品寺五〇四に住む。

◇

大濱喜作　△帝都診療界に於ける私立病院中、小兒科を以て斷然頭角を拔くは、歷史ある神田區駿河臺の瀨川小兒病院に亞ぐものなからん、院長は人も知る斯科の泰斗瀨川昌世博士にして、克く院長を補翼するに副院長として大濱喜作博士あり。博士は千葉醫專の出身にて、小兒科を以て立ち、慶大より學位を得たる少壯の名醫博也。玲瓏たる打診の評判は良好にして、院長の聲望と相俟つて益々人氣を博す。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を公開すれば、博士は大正八年千葉醫專卒業後、直ちに瀨川小兒病院に勤務、大正十二年震災後同病院の副院長を勤め、大正十五年より慶應大學醫學部藥物學教室に入り、阿部教授指導のもとに研究し、昭和七年二月學位獲得後も引續き瀨川小兒病院副院長を勤務し現今に至る。

△主論文は『「アンチピリン」ノ反對作用ニ就テ』にして、參考論文は、(1)小兒結核症ノ臨床的觀察、(2)乳幼兒粟粒結核ニ就テ、(3)小兒特發性氣胸ニ就テの三篇なり。斯間、瀨川昌世博士及び阿部勝馬教授より受けたる指導薰陶に負ふ所多し。

△愛媛縣周桑郡壬生川町大濱嘉太郎の四男にして、明治二十八年生る、當年四十有一歲也。學究的溫厚の紳士、手腕今や壯熟の域に入り最も得意時代に在り。「醫は仁術也」を以て任じ、其の態度の眞摯にして溫味靄々たるは、好箇の臨味家として其の高邁なる人格を景仰せしむるの德を有す。博士に三兄あり、長兄石太郎は陸軍少將にて死亡、中兄龜太郎は實業肥料會社重役、末兄十龜盛治（妻の義兄）は住友銀行重役なり。神田區駿河臺二丁目八に住む。

◇

星直利　△大連市若狹町三五星小兒科醫院長として活躍し、手腕名望相俟つて嘖々たる好評を博し、當地診療界に於ける名醫博としての存在を認められつゝあるは星直利博士也。滿洲醫大出身の異才にして、小兒科を以て立ち、京都帝大教授鈴木正博士、及び同服部博士に師事して研究の結果、京都帝大より學位を得たる近來の少壯醫博也。

△博士は大正十三年滿洲醫大卒業、直ちに大連醫院小兒科勤務、昭和四年六月滿洲醫大より京都帝大醫學部小兒科教室に小兒科學研究の爲め留學を命ぜらる、同五年六月龍山鐵道醫院小兒科醫長に就任、同七年三月學位を受領す、次で現住地に開業今日に至る。

△主論文は「小兒赤痢及疫痢ニ關スル臨床的實驗的研究」にして、參考論文は、(1)小兒赤痢ニ關スル論文四篇、(2)小兒心臟疾患ニ關スル論文六篇、(3)細胞毒素免疫血淸ノ特異性、(4)「レントゲン」線ノ發育ニ及ボス影響、(5)傳染性紅斑ニ就テ、(6)「アドレナリシ」ト「アセトシ」量トノ關係、以上十五篇なり。就中小兒の赤痢及疫痢に關する論文（臨床的五篇、實驗的五篇）は博士會心の作にして學界に重要せらる。又た「傳染性紅斑ニ就テ」は世界に誇る論文として既に定評あり。近時朝鮮人小兒發育に關する朝鮮最初の研究發表（四篇）あり。其の他部下の少壯醫師を指導して猩紅熱に關する研究、內分泌に關する研究、並に小兒赤痢等に關して研究發表多數の論文あり。

△福島縣若松市行人町星武次郎の三男にして、明治三十二年生る。當年三十有七歲、少壯精英にして手腕漸く壯熟の域に入る、特に小兒の赤痢及び疫痢は博士の最も得意とする所にして、博士獨特の評判嘖々たるものあり。文學趣味豐かにして音樂を好み、又た運動、旅行を樂しむ。學究的好箇の臨床家として更に將來の大成を期待す。

◇

高橋次郎　△東京市神田區駿河臺三樂病院小兒科に在る高橋次郎博士は、東京帝大の出身にて、小兒科界現代の權威、栗山重信博士門弟中の新智識として知られ、恩師の親しき指導を受けて斯學の蘊奧を究め、學位論文「赤血球新生機能並ニソノ刺戟ニ對スル反應ノ年齡的差異」（參考論文なし）を完成して、母校より學位を獲得せる少壯有爲の臨床家にして、軈て輝しき前途の展開を囑望すべき新人物たるを推奬すべき也。

△博士は第一高等學校（大正十一年卒業）を經て、大正十五年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として小兒科教室に入り、現職に就任する迄研究に從事す、昭和七年三月學位を受領せり。

△博士の出身地は東京市大森區東調布町にして、明治三十四年高橋本枝の二男に生る、年齒未だ三十有五歲の少壯也曩に教室を勇退して診療界に躍出するや、誠意誠實を以て臨床に勵精努力し、獨特の新手腕を發揮して益々好評を博し居れり。人と爲り溫厚篤實にして、患者に接するに厚く、社交に又た理解と厚意とを以て人を遇するは、將來發展の素質ある好個の臨床家として其の人格を尊ぶ。小兒科島病院長島信博士は義兄に當る。東京市小石川區表町七九に住む。

◇

千葉盛枝　△帝都診療界は群雄割據の觀あり、殊に近來醫博人物に富み多士濟々たり。玆に品隲を試みんとする千葉盛枝博士も、當世醫博界中亦逸すべからざる一人物として推奬す。學系は臺北醫專系なれど東北帝大に學ぶところ多く、東北帝大教授佐藤彰博士の愛弟子にして、東北帝大より學位を得たる小兒科近來の名博士として其存在を認められ、現に東京市醫員の任命を受け、廣尾病院の小兒科に勤務活躍しつゝある新進有爲の臨床家たるを至囑す。

△博士は宮城縣立佐沼中學を經て、臺北醫專に入り大正十五年卒業、直ちに臺北醫院小兒科に入り昭和四年二月迄勤務す、同年三月東北帝大醫學部副手として小兒科教室に勤務、同七年四月學位受領、同年五月同大學講師囑託となる同六月東京市醫員に任ぜられ廣尾病院勤務今日に至る。

△主論文『「ヴヰタミン」B缺乏症ト「ベルオキシターゼ」反應トノ關係ノ研究』原著は英文にして二篇より成る。

參考論文は、(1)幼兒ノ頑固ナル下痢ニ對スル「ヤクリトン」ノ効果、附「ヤクリトン」ノ「ヴヰタミン」勤員作用、(2)含鉛膏劑ニヨル所謂腦膜炎ノ一例、(3)健康乳兒ニ於ケル荒川氏反應檢査成績、(4)幼小兒ノ十二指腸蟲病ニ關スル知見補遺、(5)小兒腸「チフス」及ビ「パラチフス」ノ統計觀察、外英文三篇あり。

△博士は宮城縣登米郡寶江村の人、千葉儀一郎の四男にして、明治三十七年生る。當年未だ三十有二歲の少壯なるが醫專出身の學徒にして、而かも三十歲未滿の年少を以て學位を獲得せるは、年來稀に見る所也。其の篤學に輝く不撓不屈の精神氣慨は頂門の一針として學ぶべき也。春秋頗る豐富にして、光る學位の前途は猶洋々として、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。人と爲り眞摯にして、溫愛の情豐かなる打診の態度は、良く博士の人格を語るに足る。澁谷區代々木山谷町一七五に住む。

◇

岡崎正　△門司市新町三丁目に岡崎小兒科醫院を獨立經營して、日々診療に精進しつゝあるは岡崎正博士也。大正十二年長崎醫大專門部の出身にして、昭和三年九月迄福岡縣田川郡後藤寺町三井醫局に奉職、昭和三年より再び母校にて藥物學並に小兒科學研究、昭和七年七月長崎醫大にて學位授與せらる。

△學位論文は『血液中ノ「コレステリン」並ニ「カルミューム」ノ消長ニ及ボス卵巢「ホルモン」並ニ腦下垂體後葉「ホルモン」ノ影響ニ就テ』にして、參考論文なし。もと〳〵門司市の人、明治三十三年生る、當年三十有六歲也。

◇

室橋民衛　△東京市麴町區下二番町四八に歷史あり著名なる木澤病院あり、小兒科界に拔くべからざる勢力を有し成功の地位に在り、院長室橋民衛博士の經營にして內部の設備充實す。學系より見たる博士は、東京帝大派の名醫博にして小兒科の大家として其の手腕を認めらる。大正五年東大卒業、同九年より十二年迄歐洲に留學、歸朝後同十二年十一月より現木澤病院長として就任今日に至る、先是大正十二年八月東京帝大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「石鹼便及乳兒糞便中ノ石鹼ニ就テ」にして、著書「乳兒石鹼便ニ就テ」あり。公職として市醫師會

豫備議員、區醫師會醫政部調査委員、麴町健康相談所顧問等にあり。戸外運動を趣味とす。群馬縣の出身、明治二十三年生る。年齢今や不惑有六歳、年壯の紳士也。現代的有爲の臨床家として茲に推奬す。

◇

岩井眞金　△東京市品川區上大崎四四四に岩井小兒科醫病あり、院長は岩井眞金博士也。氏は群馬縣の出身明治十九年生れにして、明治四十三年日本醫專卒業後、三井慈善病院小兒科勤務、次で大正九年より慶大醫學部小兒科に勤務の傍ら研究に從事し、同十三年十月慶大より學位を受領す、同年一月より慶大醫學部講師となり、昭和三年十二月辭任、同四年一月より現住所にて開業今日に至る。

△學位論文は『水素「イオン」濃度ノ冠狀血管及ビ心臟機能ニ及ボス影響ノ研究』なり。魚釣を趣味す。

◇

和田淺香　△東京市麴町區飯田町五ノ三九和田小兒科醫院長和田淺香博士は、東大の出身にて、學位は慶大より獲得せる名醫博として名聲を馳せ、開業拮据十年餘に及び、今や成功の地盤を固め、日々繁忙を極めつゝあり。氏は千葉縣の出身、明治二十二年生にして、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、東京和泉橋慈善病院內科及び小兒科に勤務、次で慶大醫學部小兒科教室に勤務の傍ら研究に從事し、昭和二年三月學位受領後、同年五月より現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は『「モルヒネ」ノ脫出時作用ニ就テ』なり。讀書家にして、運動と圍碁とに趣味を有す。壯齡今や不惑に入る七歳にして益々元氣也。臨床家としては最も重望せらるゝ時代に在り。

◇

鈴木外男　△金澤醫大派の名醫博たる名譽と責任を其の双肩に荷ひ、殊に小兒科醫としての使命を果たすべく奮起せる鈴木外男博士は、現に金澤市上胡桃町三〇に於て鈴木小兒科醫院を經營、同院長として活躍する所あり。博士は金澤醫專の出身にして、大正四年母校卒業以來、十有餘年內科、小兒科醫として臨床に携り居りしも、爾後感ずる處あり、身を衞生行政方面に投じ暫く臨床に遠ざり居り、再び臨床家殊に小兒科專門醫として立つに際し、其間日進月歩の醫學は奈邊に迄進み居るや、殊に治療醫學の趨勢を窺知するには、夫々特長ある大學の臨床を見學するの要あるを痛感し、小兒科臨床家としての大家京都府立醫大齋藤教授、又地方病的研究を主とする母校泉教授の指導を仰ぐ事前後一年、茲に十有餘年經來りし臨床と新に窺知せる兩大學の特長とにより、小兒科醫としての自信を得たるにより昭和八年五月より小兒科專門として獨立開業せり。博士曰く「余は終世の希望として第二の國民たる可憐の乳幼兒の友となり父となり健やかなる者はより健かに、病める者に對しては能ふ限りの努力を以て病魔を驅逐し次代に供ふべき健全なる日本國民を作らん爲め特に小兒科を選びたるなり、訴ふるに言葉なく敎ゆるに言を知らざる可憐なる小兒の病めるを見ては誰か營利や金錢のみ腦裡に置くを得んや、愛兒の死の床に侍る母を見る時一刻も早く此の苦難より母子を救はんと希ふは人の情なり、金錢を醫の末端に置く殊に小兒科醫としてこの尊き使命を懷ふ時、奮起自ら此後益々勉勵研究を誓ふ」云々、博士の意氣込や壯とすべく、各自自省の清涼劑として可也。

△更に其の學歴より觀たる博士の略歴を概括すれば、大正四年金澤醫專卒業後、自大正六年至十四年臺灣總督府病院醫官を勤め、自大正十五年至昭和七年六月臺灣總督府地方技師(臺中州衞生課長)兼中央研究所技師、自昭和七年五月至同年九月京都府立醫大小兒科、自同年九月母校金澤醫大小兒科に歸り、同七年五月母校にて學位を得、翌八年五月より開業現在に至る。斯間の指導敎授は中川幸庵博士、横川定博士にして小兒科學を專修し、殊に寄生蟲學に長ず。

△主論文は「臺灣ニ於ケル肝蛭ノ分布並ニ發育皮ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)アツシウネル氏現象ニ就テ、(2)少年ノ肥度ト結核トノ關係、(3)肥大吸蟲卵子ニ對スル種々ナル物理的化學的刺戟ノ影響ニ就テ、(4)肥大吸

蟲包囊「セルカリヱ」ノ抵抗ニ就テ、(5)臺灣ニ於ケル肥大吸蟲蔓延狀況調査(豚ノ寄生狀況)、(6)臺灣ニ於ケル肥大吸蟲ノ人體寄生例ニ就テ、(7)肥大吸蟲ノ發育ニ關スル研究(中川幸庵共述)、(8)臺灣農村部落ニ於ケル人體寄生蟲ノ分布狀態ト年齒性職業及地勢的關係トノ考察、(9)「クロール」石灰(晒粉)ノ野菜附着ノ「チフス」菌屬ニ對スル防疫學的效果、(10)臺灣ニ於ケル古來ヨリノ治療ニ關スル迷信風習、等九編なり。

△博士は石川縣の人、鈴木魁の次男にして、明治二十二年生る、年齒漸く不惑に入る七歳也。「校門を出で基礎醫學に於て學位を得、臨床に自信なくして單に學位を看板に開業するは醫師として愼むべき事なり」との持論者にして、今や學界を捨て小兒科專門の診療に堅き自信を以て獨立の地盤き開拓しつゝあり。賦性溫良にして高潔なる品格を具へ、殊に小兒科に相應しき性格の持主たるを見る。

◇

伊藤景一　△東京市田世谷區北澤町三ノ九五〇にて小兒科を標榜して開業せる伊藤景一博士は、茨城縣の出身、明治二十一年生にして、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、爾來和泉橋病院に勤務、內科小兒科擔任、次で朝鮮總督府元山府立病院長に就任、昭和三年五月母校小兒科教室に入り、同四年五月迄在勤、次で帝國女子醫專教授に就任、其間昭和三年十二月千葉醫大より學位を受領せり、爾來現住所にて小兒專門開業今日に至る。

△學位主論文は『「ツベルクリン」反應補遺』なり。洋書を業餘の趣味とす。

◇

磯田仙三郎　△東京市小石川區同心町一一磯田小兒科醫院長磯田仙三郎博士は、埼玉縣の出身、明治二十九年生にして、一高を經て、大正十一年東京帝大醫學部卒業後、母校小兒科教室にて研究の後、日本醫科大學小兒科教授となり、昭和六年四月東京女子醫專教授に就任す、先是昭和四年三月母校より學位を受領し、同五年六月より現住所にて開業今日に至れり。公職としては小兒科學會評議員、東京日々新聞社々會事業團囑託醫たり。

△學位主論文は「乳汁ノ生物學的及化學的性狀ニ關スル研究」なり。擊劍、乘馬を趣味す。

◇

小西正孝　△神戸市立兒童相談所長として、多年斯道の啓發指導に當り、至誠公に奉ずるの熱心と、不斷の精進を續けつゝある小西正孝博士は、大阪醫大派の名醫博として其の手腕を稱せられ、神戸診療界に逸すべからざる小兒科の大家と爲す。氏は大阪の人、明治二十七年生にして、大正十年大阪醫大卒業後、神戸市技師に任ぜられ現職に在り、斯間、母校にて研鑽の結果、學位論文「腦脊髓液壓ニ關スル實驗的研究」を完成して、昭和四年五月大阪醫大より學位を受領せり。勵精恪勤家としての信望厚し。神戸市大井通一に住む。

◇

佐藤隆一　△釜山府幸町二丁目二五に佐藤小兒科醫院を經營して、レントゲン、太陽燈、細菌培養、其他內部諸般の設備を整へ、日々診療に勵精、刀圭甚だ多忙を極めつゝあるは佐藤隆一博士なり。博士は九大系の小兒科學者にして、小兒界の權威、現九大名譽教授伊東祐彥博士及び九大教授箕田貢博士の門弟中の一異才として知られ、多年恩師指導の下に研鑽の結果、母校より學位を得、所謂九大派の名醫博として其の獨特の手腕を稱せらる、殊に其の最も得意とする小兒科學領域に於ける X 線の診斷に至りては、好評嘖々、他の追隨を許ざる所なり。

△更に博士の學歷より概括すれば、鄉里の小學校より三條中學に學び、新潟高等學校を經て、大正十五年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部小兒科教室に副手及び醫員として勤務、次で小兒科學教室レントゲン療法主任囑託、助手に任命せらる、昭和六年二月同大學を辭して、釜山府現住所に於て小兒科の專門醫院を開設し診療に從事す、同年七月學位を授與せられ今日に至る。

△主論文は「本邦小兒期生體心臟ノ發育ニ關スルX線學的研究」にして、參考論文としては、(1)鉛中毒ニ於ケル骨端X線像ト其症例、(2)小兒ノ自發氣胸ニ就テ、(3)先天性深在性食道憩室ノ症例、(4)植物性蛋白質ヲ以テ起シ得ル蕁麻疹ノ一例等あり。博士の出身地は新潟縣南蒲原郡三條町字大町にして、佐藤善太郎の三男、明治三十一年生る、年齒三十有八歳の學究的少壯の紳士也。臨床に多年の經驗を有し、手腕漸く壯熟して今は最も得意の時代に入る。將來有爲の臨床家として玆に推奬し、向後の活躍を期待すべき也。

◇

生地憲　△小兒科殊に乳兒科現代の大家としての生地憲博士は、大阪市立堀川乳兒院長としての位地と聲望とを保持し、多年斯界の爲に努力貢獻する所あり。氏は大分縣の人、明治二十八年生にして、大正九年大阪醫大卒業後、大阪市立兒童相談所技師、同部主任を歷て現職に在り。斯間、母校にて研究の結果、學位論文「肌絡膜細胞學的研究」を提出して、昭和四年五月母校より學位を得、所謂現大阪帝大派の一勢力を爲す名醫博たる一人物也。大阪市東淀川區十三東之町二ノ七九に住む。

◇

山下秀雄　△倉敷中央醫院小兒科の山下秀雄博士は、京大系の新進にして、小兒科醫として鄙々たるもの、恩師鈴木正敎授及び同服部峻治郎敎授に就て小兒科學を專攻し、母校より學位を得たる少壯醫博中の新手腕家也。學歷よりすれば、愛媛縣立宇和島中學校より松山高等學校を經て、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、引續き小兒科敎室に勤務の傍ら研究に從事し、昭和七年七月學位を授與せらる、爾來現職に在り。拮据勵精、向後の活躍と相俟つて、將來の發展を期待せらる。

△學位主論文は「赤痢及ビ疫痢ノ糞便ノ研究」にして、參考論文として、(1)赤痢樣症狀ヲ呈セル腸結核ノ一例、(2)腦出血ヲ併發セル出血性「チフス」ノ一例、(3)小兒先天性粘液水腫ノ一例、(4)小兒移動性長S字結腸症ニ就テ、(5)食餌性喘息ノ一例特ニソノ「アレルゲン」ニ就テ、(6)小兒下痢症特ニ小兒赤痢ノ林檎食療法ニ就テ、(7)小兒尿崩症知見補遺等あり。

△博士の出身地は愛媛縣南宇和郡船越にして、明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳の少壯也。經驗と共に手腕漸く壯熟して最も得意の時代に入り、熱心にして眞摯なる診療振りと、溫厚にして學生氣質の朗快さは人に好感を抱かしめ、患者の評判極めて良好なり。居常の趣味として特筆すべきものなしと雖も、研究と醫療そのものに趣味を集中して又他事を顧みざるの概あり。學究的有爲の臨床家として潑剌たる前途を有す、幸ひ健康にして、診療界淨化の爲め益々努力奮鬪あらん事を翹望して止まず。倉敷市高砂町に住む。

◇

田章吾　△東京帝大派の一新勢力と見るべき小兒科の新手腕家田章吾博士は、千葉縣の人、明治三十年生にして、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに法醫學敎室に入りて研究す、昭和二年以來小兒科敎室に轉じ、東京帝大醫學部講師として勤務の傍ら研究を續け、兼ねて東京警察病院小兒科に勤む。斯間、學位論文「正常並ニ免疫抗體ノ性狀ニ關スル研究」を提出して、昭和四年五月母校より學位を受領せり。年齒漸く三十有九歳の少壯なれば、向後の活躍は大に期待せらる。赤坂區青山高樹町一二ノ一五を住む。

◇

關與一　△東京市神田區多町二ノ八に在る關小兒科醫院は、院長關與一博士の經營にして、牢固たる地盤の上に、堅實なる發展振りを示しつゝあるを見る。氏は新潟縣南魚沼郡三俣村の出身、明治十四年生にして、明治三十五年東京醫學專門學校濟生學舍卒業後、東京山龍堂病院に次で順天堂病院等に勤務の傍ら小兒科研究、明治三十六

年より臺灣高雄市にて開業、大正十二年より京都帝大醫學部小兒科教室にて研究、學位論文「狂犬病固定毒並ニ其發病機轉ニ關スル實驗的研究」を完成して、昭和四年五月京都帝大より學位を受領せり、其後同年十月より現住地にて開業今日に至れり。氏が開業試驗出身より奮起して、初志を貫行せる篤學は、氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。年齒今や知命に入る五歳、益々元氣也。謠曲を業餘の趣味とす。

◇

大脇和夫　△名古屋市中區南桑名町五ノ六に於て小兒科專門を以て開業せる大脇和夫博士は、「小兒科專門として現今尙乳幼兒の保健に就て世人の餘りに無意識なるを深く憂慮し居り將來余は開業の傍ら小兒無料健康相談所を設置し此の方向の無智なる親達を啓蒙し度今より準備中なり」云々。の理想を以て、奮起獨立せる錚々たる小兒科醫たり。顧みてその學歴より見れば、博士は大正十五年愛知醫大第一回卒業、直ちに同小兒科へ入局し爾來研究、昭和五年小兒科醫局長を經て、同七年十月講師を拜命せり、此の間昭和七年六月名古屋醫大にて學位を授與せられ、翌八年三月辭職、現住所にて開業せり。專攻は小兒科學及び生化學にして小兒科を以て立てり。

△主論文は『皮膚及他臓器「エキス」ノ血糖量ニ及ボス影響ニ就テ』にして、參考論文は、(1)皮膚內血糖下降性物質卽皮膚「エキス」ノ「アドレナリン」及「インシコリン」トノ關係、(2)發作性血色素尿症ニ就テ、(3)猩紅熱ノ統計的觀察、(4)興味アル兩側性膿胸の一治療例、其ノ他二編あり。從來「インシスリン」ノ剔出困難にして膵臓より僅少に腎出されしが氏はこれを皮膚內に於て證明せり。

△名古屋市西區前ノ川町一ノ十一大脇英夫の長男にして、明治三十二年生る、當年三十有七歳也。少壯にして進取の氣象に富み、多量の分別を有す。殊に氏の長所とするはその事に熱心にして成し遂げずば止まぬ所にあり、若し强ゐて短所と云へば內氣の所位ならんか。賦性溫和にして敦厚、謙抑にして尊大振なく、寬厚能く人を愛す、其の態度の紳士的にして眞摯なるを喜ぶ。親族には醫師多數あり、岳父は岡山醫師會議長、名大學友會の副會長たり。

◇

久保德彌　△北海道帶廣市島田病院小兒科に在る久保德彌博士は、京都市の人、明治三十年生にして、大正十年京都府立醫專卒業後、引續き京都府立醫大にて研究を續け、同醫大講師となり、學位論文「胃液乳酸ニ就テノ研究」を完成して、昭和四年七月學位を受領せり。所謂京都府立醫大派の小兒科醫として今や獨特の手腕を揮ひ、拮据勵精大に將來に期する所あらんとす、有爲の臨床家としての前途や洋々たり、折角の努力活躍を望むや切也。北海道帶廣市東三條十丁目に住む。

◇

小田美穗　△東京市京橋區築地一丁目十六ノ二に小田小兒科醫院あり、小兒科一般及び小兒外科を以て著聞す。院長小田美穗博士は、姫路市の出身、明治二十七年生る。當年不惑に入る二歳、年壯にして手腕漸く壯熟し、最も活躍の全盛時に在り。學系よりすれば、大正八年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き近藤外科勤務二年の後、新潟縣南蒲原郡見附病院長として赴任し、二ヶ年奉職の後、歐洲留學の途に上り、歸朝後大阪醫大小兒科教室にて研究生として小兒科專攻、次で慶大醫學部藥物學教室及び小兒科教室勤務中、學位論文『血液「カルチウム」調節中樞ニ關スル研究』を完成し、慶大醫學部へ提出して昭和四年七月學位を授與せらる、同年十一月より現住所に小田小兒科醫院を開設今日に至る。趣味としては漢藥「ブラジル」藥草の研究と、長唄及び旅行にあり。自宅は四谷區東信濃町二八に在り。

◇

稻留藤次郎　△中部醫療界、濱松市鳴江町一六八四に小兒科及び內科を標榜して獨立開業せる稻留藤次郎博士

は、東京市芝區新門前町に本籍を有し、大正十年長崎醫專卒業後日赤山口支部病院、東京市技師、久原鑛業會社醫局等を經て、昭和七年八月慶大にて學位を獲得せる名醫博にして、研鑽多年の間貴重なる經驗を積み、今や手腕全く圓熟の域に入り、打診の好評は益々人氣を集め、遠近よりの外來患者日々輻輳するの盛況を呈す。而も未だ三十有九歳の少壯、光る前途は益々有爲多望にして、向後の活躍は更に大に期待せらる。

△博士の專攻は內科、小兒科にして就中小兒科に長ず。岡山醫大內科の耆宿稻田進博士に師事して克く精學研鑽、又慶大教授寄生原蟲學の大家小泉（丹）理博の指導を受く。

△學位主論文は「經膚感染後筋肉內ニ移行セル十二指腸蟲仔蟲ニ就テ」にして、參考論文は、(1)土壤中ノ人十二指腸蟲仔蟲ニ對スル石灰窒素ノ毒性作用ノ實驗的研究、(2)十二指腸蟲仔蟲ト「メヂウム」ノ水素「イオン」濃度トノ關係ニ就テ、(3)蛔蟲成熟卵ノ感染機轉ニ及ボス二三驅蛔藥ノ影響ニ就テ、(4)鼻腔內ニ輸送セラレタル蛔蟲成熟卵ノ運命ニ就テ、(5)自然界ニ於ケル蛔蟲仔蟲ノ經膚感染アリヤ等なり。

△博士の感想に曰く「現今の開業醫の診療報酬は大多數の庶民階級の患者にとりては確かに過重の負擔であり苦痛であるに相違ないが、醫者側から（少くとも小生に）云はせれば寧ろ安過ぎて引き合はないのが事實である。此の大きな瞭らかな矛盾は所詮國家の眞摯な努力に須つにあらざれば他に解消の途はない、是小生が何時になれば實現すると も覺束ない醫業國營にかそけくも一縷の望を託して居る所以である」云々と。醫事多端にして醫師界刷新の前途渾沌たるの秋、博士の抱く積極的ネオ、アイデアを此處に紹介して諸賢の批判に俟つ。業餘の博士はスポーツ特にビンポン、庭球に興じ、又文學趣味深く藝術愛好家たり。玆に博士の健康を祝すると共に、診療界淨化の爲益々發奮盡力あらんことを切望して止まず。

◇

杉野龍藏　△東京市本所區龜澤三ノ一に小兒科專門の江東病院あり、院長杉野龍藏博士の經營也。氏は東京府の出身、明治三十年生にして、大正十三年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに小兒科教室に勤務の傍ら研究、昭和四年より同五年迄愛國婦人會の囑託にて歐米に留學し、昭和五年八月母校より學位を受領し、同年十月より現住所にて江東病院を經營今日に至る。學位論文は「表面汚性電解質溶液ノ表面張力ニ及ボス蛋白質添加ノ影響」なり。長唄、麻雀を業餘の趣味とす。自宅は小石川區表町一〇九に在り。

◇

繼　博　△東京市杉並區馬橋一ノ一〇に繼小兒醫院あり、院長繼博博士の經營、開業拮据十數年、牢固たる地盤有し、、打診好評也。氏は山口縣の出身にして、明治二十同年生る、學系は千葉醫專に屬し、學位は慶大より獲得せる小兒科の名博士として其の手腕を稱せらる。大正四年千葉醫專卒業後、同十二年和泉病院及び日赤本社病院にて研究に從事し、同十三年七月鶴見淺野病院に勤務す、同十五年より大崎町にて開業の傍ら慶大醫學部にて研究、昭和五年瀨川小兒科病院にて研究の後、學位論文『「アボモルヒネ」ノ自宰神經末梢ニ對スル作用』を完成して、昭和五年十一月學位を受領せり、爾來現住所にて開業小兒科一般の診療に從事し今日に至れり。年齒四十有五歳にして多年の經驗に富み、手腕今や圓熟して最も重望せらるゝ時代に在り。業餘悠々として圍碁を樂しむの餘裕あり。

◇

井上一郎　△九州帝大派の名醫博たる新進の井上一郎博士は、現に八幡市製鐵所病院小兒科醫長として內外の信望を博し、該院の最高幹部の一員として九州診療界のため活躍奮盡する所あり。

△博士は大阪府立天王寺中學校、三高を經て、大正八年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部小兒科教室に勤め、十一年久留米市立病院小兒科醫長に就任、昭和二年再び母校小兒科教室に轉勤。六年十二月製鐵所病院小兒科醫長に任

ぜられ今日に至る。其間恩師伊東及び箕田兩教授の指導を受け七年八月九州帝大より學位を受領せり。

△主論文は「榮養素ノ發育期個體ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)乳兒生理的瓜線、(2)小兒腎炎、(3)早期「ヂフテリー」心臟麻痺屍心所見なり。

△博士は大阪市天王寺區逢坂下町の人、明治二十六年生れにして、當年不惑に入る三歳、年壯にして前進躍氣たる氣魄に富む。現代の醫界に對しては「此所で働いてゐると勞働都市乳幼兒のみぢめさを痛感する。急性傳染性疾患はもとより母親の不注意と無智により榮養障碍は夥しく多いのに驚く、托兒所や育兒健康相談所も他の大都市の如き積極的なものでなければならないとつく〴〵考へさせられます」云々と、感想の一片を漏せり。賦性篤實敦厚、患者に接するに毫も不遜の態度に出でず、小兒科醫タイプの溫愛の情豐かなるは、人をして敬慕の念を深からしむ。音樂に趣味し藝術を愛好す。幸に自重加餐を祈る。八幡市高見町七丁目に住む。

◇

五島博

△帝都診療界に於ける私立小兒科病院としての一勢力たる、神田區裏猿樂町三輪延壽堂醫院に醫博五島博あり。同醫院は世人周知の如く、小兒科界の泰斗、三輪信太郎博士經營の私立醫院にして一流に在り。五島博士は副院長格にて克く院長を補佐し、院長多年の聲望と相俟つて博士獨特の打診好評にて、同醫院の拔くべからざる今日の隆盛を見るもの、博士の獻身的努力亦大に與つて力あることを見逃すべからず。

△學系より見たる博士は、東京帝大醫科大學の出身にして、大正五年卒業後直ちに整形外科教室に助手として勤務の後、同七年より三輪延壽堂醫院に勤務今日に至る、斯間、三輪院長の指導を受くる所厚く、勤務の傍ら多年研鑽の結果、學位論文「股關節運動（股位）ト血管走行トノ關係ニ就テ」を完成、母校に提出して昭和五年十二月學位を受領せり。所謂東大派の名醫博たるに耻ぢず、多年の經驗に富み、今や手腕圓熟して最も得意時代に在り。石川縣の人明治二十年生にして、當年不惑に入る九歳、元氣益々旺盛にして、一意專心、診療に勵精して仁術の爲め忠實を盡しつゝあり、好箇の臨床家として敬意を表す。東京市杉並區阿佐ヶ谷一ノ八〇四に住む。

◇

齋藤眞文

△大正十一年一月以來、一介の小兒科開業醫として、無趣味、無道樂、唯孜々として働き、以て悠々たる心境を持して仁術の最善を盡すに餘念なきは齋藤眞文博士ならん。博士經營の齋藤醫院は堺市市ノ町西四丁目に結構なる陣容を構へ、小兒科を專門とし、博士獨特の手腕の評判は多年の聲望と相俟つて既に牢固たる地盤を有す。尙齒科には鶴田市藏（大阪齒科）醫學士ありて之を擔當す。略歷より觀れば、博士は大正四年熊本醫專を卒へ、京都帝大醫學部小兒科教室に入り、平井博士指導の下に小兒科學研究、大正五年八月小倉記念病院開設に際して就任同年十二月一年志願兵として熊本第六師團に入營、大正七年五月退營、再び小倉記念病院小兒科醫長就任、同十一年一月現住所に開業す、昭和五年五月より開業の傍ら大阪醫大笠原博士の下に研究に從事し、同七年九月大阪醫大より學位を受領せり。主論文は「痘毒ニ關スル研究」にして、外に參考論文として「痘毒ニ關スル研究」十篇及び「小兒腦膜炎ノ研究」三篇あり。

△熊本縣の出身にして、明治二十六年生る。當年不惑に入る三歳、眞面目なる學究的紳士にして、篤學者としての輝しき氏の閲歷は、既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。專門的學識の該博なるは勿論、臨床的經驗に富み、手腕愈々圓熟して今は最も得意の時代に在り。而かも仁術を本領としての熱誠振りは、天資小兒科に相應しき溫厚なる性格と相俟つて益々信望を博す、好個の臨床家として崇高なる人格を尊ぶ。

◇

津田博通

△東京市淺草區駒形町一五に小兒科內科專門を以て著聞する津田診療所あり。ドクトル、メデチ

ーネ津田博通博士の私立醫院にして開業古く、博士獨特の手腕は多年の聲望と相俟つて益々人氣を蒐め、牢乎たる地盤を有し成功の位地に在り。博士は金澤醫專出身の篤學者にして、嘗て歐洲に遊び、獨逸クルリンシヤリテー及びハンブルグ大學卒業、同大學にてドクトル、メヂチーネの學位を得、クライネーシユツト教授に就て研究の後、墺國ウイン大學にてはビルケエー教授に師事し、次で瑞西のチユリツヒ大學にて研究の後、ベルリン大學にてはザアリト教授に就て研鑽大に得る所あり、歸朝後論文提出の結果、千葉醫大より學位を獲得せる名醫博也。公職としては區醫師會理事、區醫政調査委員、府醫師會議員等に在り。

△更に學歴及び閲歴を概括すれば、明治三十九年金澤醫專卒業後、東京帝大醫科大學小兒科教室にて研究すること四ケ年、次で東京市醫奉職、米國エクキテーブル及びチヤイナ、ミユチユアル保險會社囑託醫たり、大正九年渡歐、主として前記獨、墺、瑞各國の諸大學に學び、佛、英、伊各國を視察して同十一年歸朝、爾來祖父の業を繼承して開業今日に至る、斯間、昭和六年四月學位を授與せらる。

△學位主論文は、(1)人工及天然榮養兒ノ統計的觀察、(2)「ヂフテリー」毒素ノ家兎ニ於ケル血糖ノ消長、(3)生蛋白ヲ加ヘザル淋菌特殊培養基、附同動物諸臓器肉水ノ比較の三篇より成り、參考論文としては「卵白ノ殺菌作用並ニ防腐作用ニ就テ强心劑ノ循環器ニ於ケル影響」あり。氏は東京市の人にて、明治十三年生る、當年知命に入る六歳也。篤學者としての輝しき閲歴は燦然として氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。精力家にして元氣益々旺盛、「醫は仁術也」をモツトーとして終始し、以て其の天分なるを樂しむ純眞の士也。趣味は著書と繪畫、今は悠々たる還環に處して風流に親しむの餘裕を有す。

◇

竹内正明　△東京市淀橋區下落合一ノ五四七にて、小兒科、內科專門を以て開業せる竹內正明博士は、愛知醫大出身の篤學者にして、小兒科、內科を以て立ち、昭和二年同大學卒業後、京都帝大醫學部にて研究の結果、學位論文「毛細血管ノ臨床的研究」を完成して、昭和六年五月學位を獲得せる所謂京大派の一新勢力たる少壯醫博也。開業日尚淺くも、孜々營々、日々診療に勵精して倦むことを知らず、打診の好評は氏が篤實溫厚なる性格と相俟つて堅實なる發展振を示し、日增盛況に向ひつゝあり。氏は福井縣の出身、明治三十三年生にして、當年未だ三十有六歳、少壯の意氣と共に手腕漸く壯熟の域に入り、潑剌たる前途の大成を期待せらる。

◇

龜田瓏　△千葉縣館山北條町長須一〇五に龜田小兒科內科醫院あり、院長龜田瓏博士の經營にして診療室研究室、病室等々內部諸般の設備全く整ふ、開業拮据既に十有餘年、博士獨特の手腕は打診の好評と相俟つて遠近を風靡し、繁榮歳と共に牢乎たる地盤を有し、今や同地方診療界に卓然として一流の位地を占む。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、千葉醫大專攻科學生として恩師松村淼博士に就きて衞生學を、同詫摩武人博士に就きて小兒科を專攻し、千葉醫大より學位を獲得せる新進の名醫博也。公職としては千葉縣立安房高等女學校校醫なり。

△博士は大正九年千葉醫專卒業後、直ちに千葉縣館山町館山病院に奉職し同十二年迄勤續す、同十三年獨立して現住所に開業し今日に至る、斯間昭和五年十二月千葉醫大專攻科入學、同八年五月卒業と同時に學位を授與せらる。

△主論文は「腸內菌叢ノ實驗的研究」にして、實驗動物（犬）に就き其の初生兒期、母乳榮養期或は牛乳榮養期、離乳期並に普通食餌榮養に於ける夫々の糞便及び消化器各部內容に就きて、其の、(1)肉眼的及び塗抹標本顯微鏡的檢査、(2)細菌分離培養、(3)水素イオン濃度の測定を行ひ、(4)各分離菌株の形態學的並に生物學的檢査、(5)其の消化器各部に於ける分布狀態の觀察、(6)糞便菌と腸內細菌との比較を試みたるものなり。主論文中「各年齡ニ於ケル腸內菌叢ノ胃腸管內ノ分布狀態ト糞便細菌トヲ比較研究セル點」は博士會心の作にして最も得意とせる要點なるべし。

△千葉縣安房郡吉尾村龜田萬次郎の長男にして、明治二十七年生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり、今は分別盛にて年齒漸く不惑に入る二、年壯の意氣と共に、學識、手腕、人格愈々圓熟の域に入り、今は最も重望せらるゝ時代に在り。殊に又著者の立場より觀たる博士は臨床家としての人格者にして、醫師の人格次第に低下するを常に憂ひ德操を堅持して博士自ら品性の陶冶に餘念なき事實は見逃すべからず、學位と共に人格の向上尊重を高調するの今日眞摯なる博士の態度は甚だ多とすべき也。研究以外の趣味としては謠曲を好む。東京府下小岩町開業青木豹博士は義兄、千葉市開業川名晃博士は從弟の間柄也。博士の春秋猶豐富にして、洋々たる前途は益々輝かし、幸に健康と共に診療界淨化の爲め益々活躍奮盡あらん事を望む。

◇

平野忠七　△日赤本社病院小兒科主幹として內外の信望を博し、日々診療に勵しみつゝある平野忠七博士は東大派の小兒科の醫博として其の手腕を認められ、斯科の新進大家として逸すべからざる一人物たるを失はず。學系よりすれば、昭和二年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに病理學教室に入りて研究の後、更に翌三年傳研にて研究を續け、學位論文「嵩口瘡齒ニ關スル知見補遺」を完成して、昭和六年七月東京帝大より學位を受領せり、爾來現職に就任今日に至る。氏は埼玉縣の人、明治二十年生にして、今は最も腕の冴盛なれば、氏の得意や想ふべき也。赤坂區青山南町六ノ一四七に住む。

◇

高階修　△東京市本郷區湯島新花町三四高階小兒科院長高階修博士は、東大系の小兒科醫として名聲を馳せ、院長自ら診療に勵精して日々繁忙を極めつゝあり。大正十四年東京帝大醫學部を卒ゆるや、直ちに同學部小兒科に入局、後ち又藥理學教室に轉じて專ら研究に從事し、學位論文『「アドレナリン」ノ吸收ニ關スル實驗的研究特ニ年齡的差異ニ就テ』を完成、母校に提出して昭和六年八月學位を受領せり、爾來現住所にて開業今日に至れり。埼玉縣の人、明治三十二年生にして、當年三十有七歲の少壯也。洋畫を趣味す。

◇

德丸喬　△松山市二番町六七に德丸小兒科醫院あり、院長德丸喬博士の診療所にして、病室六、其他の設備を整え內容充實す。博士自ら日々診療に努力精進して、仁術の最善を盡すに餘念なく、的確なる診斷の好評は、小兒科に相應しき氏が性格と相俟つて益々人氣を博し、堅實なる發展と共に日增盛況を呈しつゝあるを見る。

△博士は岡山醫大（專門部）系の小兒科學者にして、大正十一年卒業後、日赤愛媛支部病院勤務、次で岡山醫大小兒科教室及び藥理學教室にて研究、昭和八年八月岡山醫大にて學位を授與せられ、現住地にて開業今日に至る。斯間主として好本教授に就て小兒科專攻、奧島教授に就て藥理學を專攻せり。

△學位主論文は『芳香性「グアニヂン」誘導體ノ血糖作用』にして、外に參考論文五篇あり。

△愛媛縣越智郡宮窪村大字宮窪の人、戶主德丸七五郎の孫にして、明治三十二年生る、年齒漸く三十有七歲也。少壯氣銳にして研究心に富み、教室を勇退し診療界に躍進して以來、開業日尙淺くも、多年錬磨せる手腕と、不斷の熱誠努力とを以て、孜々營々として臨床に勵精しつゝある前途の發展は大に期待せらる。賦性篤實溫厚、好箇の臨床家としての特質を有し、高邁なる氣品を備ふ。趣味としてはテニスと和樂を好む。

◇

酒井潔　△臺北醫院小兒科醫長、兼臺北醫專教授として小兒科を擔任しつゝある酒井潔博士は、東大派の少壯醫博として學界に重きを爲す一人物也。略歷より觀れば大正九年東京帝大醫學部卒業後、直ちに小兒科教室に入りて研究に從事し、後ちに聘せられて支那漢口病院に小兒科部長として赴任す、次で昭和五年歐米留學の途に就き、

歸朝後現職に就任し今日に至れり。斯間、學位論文「酸鹽基平衡ノ變化ト白血球像ノ變化トノ關係ニ就テ」を母校に提出して、昭和六年十一月學位を授與せらる。兵庫縣の人、明治二十七年生る。年齒漸く不惑有二歲、年壯の意氣益々壯にして、今は醫育と研究とに沒頭しつゝあり。臺北市東門町七七に住む。

◇

八代武夫　△東京市本郷區駒込富士前町一八にて小兒科を標榜して開業せる八代武夫博士は、東大系の錚々たる小兒科醫にして、近藤乾郎博士を院長とせる近藤病院に副院長として久しく勤務し名聲を博せり。略歷より觀れば大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院小兒科に入局、次で支那天津日本病院に小兒科部長として赴任し、昭和三年再び東大に入りて研究の結果、學位論文「白血球ノ生理的狀態並ニ其ノ刺戟ニ對スル反應ノ年齡的差異ニ就キテ」を完成して、昭和七年三月東京帝大より學位を受領せり、先是同六年より前記の病院に勤務せるも、辭職後現住所にて開業今日に至れり。東京府の人、明治三十年生る。讀書家にして、音樂を趣味す。

◇

高木秀雄　△宮崎市旭通一丁目に高木醫院あり、小兒科を專門とす。院長高木秀雄博士は慈惠醫專（大正八年）の出身にして、卒業後東京慈惠會病院、東京市橋田內科病院、福田小兒科病院等に勤務後、宮崎縣に於て開業、昭和五年三月慈惠醫大研究科に入り、生理學、小兒科、物療科に於て研究、同八年十月慈惠醫大より學位を授與せられ、爾來現地に於て開業せり。病室は九名收容可能、レントゲン科の設置等々、相當の設備を有す。△主論文は「不應期ニ關スル研究」にして、二篇より成り、參考論文は「スポーツ」醫學に關する研究なり。指導教授は慈惠醫大の高木喜寛博士、戶川篤次博士、樋口助弘博士及び九大教授箕田貢博士等にして、專門の領域に就ての造詣見るべし。

△博士の出身地は宮崎縣高岡町にして明治二十九年高木孝助の長男に生る。感想の一片を寄せて曰く「今少し大人物出でゝ醫師界を善導され度きもの。昔より醫者と坊主と申し居候へ共、坊主に比して膽小、人物小なるもののみ多く坊主の方大人物多き感有之候」云々と。之を理想とせる博士や其の人爲りの一端を窺はる、唯だ希くば自ら大人物たるの自覺と、發奮大に之が實現に向つて努力邁進あらんことを。業餘には刀劍、尺八を趣味し、酒を嗜むの風あり。年齒漸く不惑に達す、春秋猶豐かにして今は活動の盛期にあり、出でゝ診療界淨化の爲め一肌脫ぎ、醫師界善導の爲め奮盡あらんことを切望す。

◇

橋本秀樹　△東京市淺草區東三筋町一六に在る橋本醫院は、小兒科、內科を專門とし牢固たる地盤を有す。院長橋本秀樹博士は福島縣の出身、明治三十二年生にして、大正十四年東京帝大醫學部を卒へ、千葉縣湊病院を經營、昭和四年まで繼續す、同年四月より東大小兒科教室に入り同五年四月迄研究に從事し、續いて同醫學部藥理學教室に轉じ同七年五月迄研究に沒頭す、同年同月學位を受領せるに及び同教室を退學して開業今日に至る。學位論文は「諸種重金屬化合物ノ腎內排泄部位ニ就テ」なり。開業日尙淺くも、拮据黽勉、診療に餘念なき前途は大に囑目せらる。俳句と撞球を業餘の趣味とす。

◇

吉川吉次　△大阪市東成區林寺町三一〇に小兒科、內科專門の吉川醫院あり、院長吉川吉次博士の自己經營にして、開業日尙淺くも、氏の診療に臨む態度の眞摯にして熱心なると、打診の的確にして明快なりとの好評とは、兩々相俟つて益々人氣を吸收し、漸次獨自の地盤を獲得して堅實なる發展振りを示しつゝあるを見る。博士は金澤醫專出身の小兒科及び內科學者にして、細菌學の造詣深く、殊に最も得意とするは小兒科なるが、指導教授は主として

前京大教授、現神奈川縣第二衞生試驗場長渡邊邊博士、慶大教授川上澥博士、京大教授木村廉博士等にして、學位は京都帝大より獲得せり。今や少壯醫博としての手腕を認められ、獨特の領域に向つて向上發展しつゝある前途は更に大に期待せらる。

△博士の學歷及び閱歷を概括すれば、大正十一年金澤醫專卒業、昭和二年五月金澤醫大助手拜命、同年十月横濱醫師會病院小兒科主任勤務、同三年八月神奈川縣立第二衞生試驗場勤務、同四年日赤囑託、同七年横濱稅關囑託、高等官七等待遇、同八年十一月學位授與、同年叙從七位、次で開業今日に至る。學位主論文は『「バクテリオフアーヂユ」ニ關スル研究』にして、三篇より成れり、外に參考論文として八篇あり。細菌學、化學、特に「インドール」に關する研究は博士の最も得意とせるものと見らるべき也。

△感想に曰く「將來臨床家たらんとする者は、學生時代より處方等の研究を怠る可からず」云々。氏の出身地は金澤市觀音町にして、明治三十一年生る、當年三十有八歲也。秀峯は其號にして、繪畫、魚釣、乘馬等を趣味す。意志强固にして研究心に富み、殊に我慢强きことは氏の長所と見るべきか、平生人に對して城壁を設けず、應待懇切にして好感を抱かしむ、又應答禮を重ずる人也、其の紳士的態度は自ら其の人格を敬慕せしむるの德を有す。樞密顧問官、美術院長清水澄博士、大阪府立鳳中學校長友永謙二氏等とは近親の間柄なりと聽く。

◇

內藤和三郎　△東京市本鄕區根津八重垣町二六小兒科內藤醫院は、內藤和三郎博士の經營にして、開業古く、牢乎たる地盤を有し成功の位地に在り。略歷より觀れば、日本醫專の出身にして、大正四年卒業後、神田區駿河臺瀨川小兒科病院勤務、同八年九月より現住地に開業、斯間、昭和二年二月より東京帝大醫學部解剖學教室にて研究、同九年八月東京帝大より學位を受領せり。學位論文は「邦人上肢ノ外皮ニ分布スル神經ニツイテ」なり。靜岡縣の出身明治二十一年生る、年齒今や不惑に入る八歲、手腕愈々圓熟の域に達して一段の貫祿を備ふ。讀書家にして精研修養相俟つて書見を唯一の樂しみとす。

◇

山縣汎　△東京市本鄕區東片町二二に小兒科專門のウツノ病院あり、院長は宇都野研學士にして隔離室完備す。山縣汎博士は副院長格にして克く院長を補佐し、日々診療に勵精打診の評判良好也。博士は山梨縣の人、明治三十五年生る、北海道帝大醫學部出身の小兒科醫にして、昭和二年同大學卒業後、東京帝大醫學部藥理學教室にて研究を續け、學位論文「新陳代謝毒ニ對スル感受性ノ年齡差異ニ關スル實驗的研究」を完成し、東京帝大醫學部に提出して、昭和九年八月學位を受領せり。學究生活を離れて日尙淺く、向後の活躍を期待すべき也。本鄕區駒込東片町一三六に住む。

◇

森岡信太郎　△千葉市寒川九八九、小兒科開業醫としての森岡信太郎博士は、千葉醫專出身の錚々たる小兒科臨床家としての名聲を馳せ、開業拮据既に十年以上を閱す、斯間開業の傍ら研鑽多年、母校の恩師松村教授、大田博士、小山博士等の指導を受けて學位論文を完成し、千葉醫大より學位を獲得せる篤學の士也。臨床多年の經驗に富み既にして牢乎たる地盤を有し、今や光る學位と共に博士の仁術に一段の光彩を放てり。

△學系よりすれば、氏は大正七年千葉醫專卒業後、同十三年一月迄六年間、千葉醫大附屬醫院小兒科に勤務、爾來現住所にて開業今日に至れり、斯間昭和九年十月學位を受領せり。學位論文は「母乳榮養兒ノ糞便ノ細菌學的檢索、主トシテ大腸菌族ノ態度ニ關スル研究」なり。氏の出身地は三重縣南牟婁郡南輪內村にして、森岡仙藏の長男、明治二十四年生る。學究的年壯の紳士にして篤學者たり、其の今日ある輝しき厚志篤學は、氏の面目を語るに充分也。庭園

に趣味を有し、平生刀圭多忙の裡に園藝を樂しむの餘裕を存す。年齒今や不惑有五歳、精力家にして年壯の意氣と共に手腕圓熟の佳境に入り、好箇の臨床家として悠々たる位地に在り。

◇

岩淵　要　△東京市荏川區町屋二ノ二六六に岩淵小兒科醫院あり、院長岩淵要博士の經營する診療所也。開業拮据十有餘年に及び、打診の好評は大衆の人氣を集め門前常に賑ふ。學系よりすれば慈惠醫大の出身にして、大正十三年卒業後、日本橋區吉松小兒科病院に次で聖路加國際病院に於て小兒科擔任の傍ら東京市の囑託を受く、同十五年八月より現住所にて開業の傍ら、母校の研究科にて研究に沒頭し、昭和九年八月慈惠醫大より學位を受領せり。學位主論文は「大腦垂體ノ硫黄代謝ニ及ボス影響」なり。茨城縣の出身、明治三十四年生る、年齒漸く三十有五歳也。スポーツに趣味を有す。

◇

俣野純夫　△函館市立中ノ橋病院長たる俣野純夫博士は、大正十四年東京醫專出身の小兒科醫として鋼々たるもの也。同校卒業後、同年四月より七月迄傳染病研究所にて研究、同年七月より小兒科木澤病院（麴町區）副院長として勤務、昭和三年七月辭職、同年同月函館市立中ノ橋病院醫員に任命、昭和五年一月北海道帝大醫學部專攻生として入學、同七年四月函館市立中ノ橋病院醫長に任ぜられ、病院長に補せらる、同十年一月北海道帝大にて學位を授與せられ、同醫學部專攻生退學、今日に至る。斯間、北大教授井上博士の指導の下に學位論文を完成す。主論文は、「乳糖非分解性大腸菌族ニ關スル知見補遺」にして、參考論文として「色素ニアル細菌凝集現象ニ就テ」外十七篇あり。

△博士は鹿兒島縣肝屬郡大姶良村南の人、明治三十三年生る、年齒漸く三十有六歳の少壯也。篤學者としての博士の研學の跡は燦として今や輝かし、而かも年齒未だ少壯、春秋猶頗る豊富なれば、向後の活躍と相俟つて博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。孤石はペンネームにして、俳句が得意なり、學生時代よりの讀書家にして今猶卷を放たず、精研修養相俟つて書見を唯一の樂しみとし、又運動に趣味を有す。幸ひ健康にして、須く小事に拘泥せず、拮据黽勉、益々努力奮闘あらん事を望む。函館市中島町一五九に住む。

◇

飯田三郎　△東京市日本橋區本石町三ノ六ノ三に小兒科專門を以て名聲を博せる飯田醫院あり、院長飯田三郎博士の經營にして日々繁盛す。學系より見たる博士は、東京帝大系の小兒科學者にして、大正十年卒業後、三ケ年間傳研にて研究の後、東大小兒科に入局、次で内田小兒科病院副院長として勤務の傍ら東大解剖學教室にて研究を續け、學位論文「邦人頸部淋巴管系統ニ關スル解剖學的研究」を完成して、昭和九年九月東京帝大より學位を受領し、爾來專ら自己經營の醫院に於て小兒科一般の診療に從事しつゝあり。東京市の人、明治二十八年生にして當年不惑に入る一歳也。向後の發展を囑目せらる。

◇

村田廣次　△日本赤十字社病院小兒科に新進の村田廣次博士あり。北海道帝大出身の小兒科醫にして、東京帝大より學位を受領せる新博士中の逸物也。大正十五年北大醫學部を卒業後、直ちに日本赤十字社病院小兒科に勤務今日に至る、斯間、東京帝大教授、傳染病研究所々員河本禎助博士に就き生化學の指導を受け、學位論文「哺乳動物血液ノ一、二單糖類分解作用ニ關スル研究」を完成して、昭和十年一月東京帝大より學位を受領せり。

△博士の出身地は横濱市中區常盤町にして、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳也。少壯の意氣旺盛にして研究心に富み、多年日赤病院に勤務の傍ら不斷の精進を續け、研學切磋、終に克く初志を貫徹せる篤學は、氏の今日ある

閲歴に一段の光彩を放てり。而かも謙遜なる氏は自抑して誇らず、名利に恬澹として一意專心公に奉じ、仁術の爲め孜々として倦まざるの勤勉家たるを見る。從つて研究と醫療そのものに趣味を集中して努力勵精する所に、氏の居常を窺はれ其爲人を知るに足る。横濱市中區根岸町二ノ一〇八に住む。

◇

泉　仙　助　△泉小兒科の今日あらしめたる、金澤醫科大學教授泉仙助博士は、獨り學内の重鎭たるのみならず、少兒科界現代の一權威たるべし。博士は明治四十二年仙臺第二高等學校卒業、大正三年東京帝大醫學部卒業、同五年任東北大學醫學專門部教授、同七年任東北大學醫學部助教授、同十三年任金澤醫科大學教授、同年三月東京帝大にて學位授與、以て今日に至れり。

△主論文は「孵化鷄卵ノ血清學的生物化學的研究」にして、參考論文は、(1)感作赤血球ノ酸素瓦斯飽和度ニ就テ、(2)植物性色素「カロチン」ノ動物體内ニ於ケル運命ニ就テ、(3)簡單ナル微量「クロール」定量法(佐藤彰共著)等なり。他の論著中、(1)酵酶「ヌクレイン」酸ノ分離方法ニ就テ、(2)「ヌクレイン」酸ノ金屬鹽類ニ就テ、(3)「グリコプロテイド」中ノ含水炭素屬ニ就テ、(4)小兒骨髓性白血病ニ對スル「レントゲン」線ノ作用其他夥多あり。

△博士は茨城縣行方郡潮來町潮來の出身、明治二十一年生る、壯齡今や不惑有八歳、純正なる學者肌の人、年壯愈よ爛熟して一段の貫祿を加え、猶春秋に富む前途は益々有爲多望にして、小兒科界の將來博士の努力精研に俟つもの大なるを思ふ。金澤市下本多町六番丁一八に住む。

◇

志摩次郎　△和歌山市屋形町四ノ三に於て、小兒科を標榜して堂々の陣を張り、多年の聲望と相俟つて、好評嘖々の裡に今や成功の位地にあるは志摩次郎博士也。博士は五高を經て、大正元年十一月京都帝大醫科大學卒業、同二年一月同大學小兒科教室副手囑託、同五年五月滿鐵安東醫院小兒科醫長就任、同七年三月岡山醫學專門學校教授任命、小兒科學講座擔任、岡山縣病院小兒科醫長囑託、同九年五月滿鐵撫順醫院小兒科醫長就任、同十二年十月滿鐵より内地留學を命ぜられ、京都帝國大學大學院に入學、藤浪、平井兩教授指導の下に小兒に關する病理學研究、同十四年八月京都帝大にて學位受領、同年十二月日本赤十字社滋賀支部病院副院長兼小兒科醫長を命ぜらる、其後職を辭し現住地に開業今日に至る。

△學位主論文は『「ベンツオール」ニ關スル實驗的研究、特ニ其年齡的差異ニ就テ』にして、(1)血液ノ形態學的研究(2)骨髓ノ組織學的研究の二篇より成る、參考論文は、(1)萎黄病ノ一症例、(2)マリー氏型肺性肥大性骨關節疾患ノ一例ニ就テ、(3)「デーレ」白血球包含體ニ就テ、(4)高度ノ「ヱオジノフイリー」ヲ有スル一例、(5)流行性耳下腺炎ノ血液所見(6)小兒期ニ於ケル正常血液所見ニ就テ、(7)本邦健康小兒ノ白血球像ニ就テ、(8)溫泉聚落ノ兒童ニ及ボス影響、(9)一種ノ乳兒發疹性疾患ニ就テ、(10)大正十二年撫順ニ流行セシ痲疹ニ就テ、等なり。其他論著夥多。

△博士は滋賀縣滋賀郡堅田町の人、明治十八年生る。臨床家としての氏が前半生史より見れば、經驗豊富にして今や壯齡と共に手腕愈々圓熟して佳境に入り、溫厚篤實なる氏が性格と相俟つて益々信望を高め、氏が仁術に一段の貫祿の備はりたるを見る。業餘の趣味としては運動、競技を好む。

◇

大月齋庵　△福井市足羽下町九四に小兒科、產科專門を以て多年の聲望を扶植し、當地診療界の重鎭を以て敬慕せられ、公衆より多大の信望と尊敬とを受け、嘖々たる名聲を博しつゝあるは大月齋庵博士也。現に福井縣醫師會長、同縣結核及び性病豫防協會各副會長、同縣コドモ研究會長、福井市足羽學院長、若越醫學會副會頭等々の幾多公職を負ひ、獨り醫師界乃至醫學界のみならず、社會公共事業の爲め努力貢獻する所あり。

△博士は一高醫學部の出身にして、現地に開業以來、拮据奮勉、不覇獨立の精神を以て起ち、漸く成功を贏ち得たる裡にも興學の念に燃え、常に臨床の餘暇幾星霜かの間、春風秋雨の努力研鑽を重ね、終に克く多年の宿志たる、(1)百日咳ノ一新治療法、(2)百日咳恢復期血清ノ應用ニ就テの學位論文を完成して、大正十五年三月慶應義塾大學より學位を獲得せり。其の輝しき奮鬪の跡を顧みれば、感慨無量にして語ること尠しとせず、少くとも其の精神氣慨と、堅忍不拔の努力とは、立志傳的篤學の士として範を示すに足り、後學の採つて學ぶべき頂門の一針として銘すべき也。而かも謙遜なる博士は、その今日あるも自己の識學を衒はず、學者として尊大振るなく、功名榮達を意に介せず、一意專心、唯だ仁術の爲め誠意誠實を盡して以て自己の天職なるを樂しみ、淡々として己を虛うして人に篤く、又克く社會公共の爲め力を盡す態度の奥床しき美德は、學德兼備せる醫博人物として敬意を表すべき也。氏は現住地の人にして、明治八年生る。高齡今や耳順に入る一歳、元氣旺盛にして、內外甚だ多忙なるに拘はらず、克く努力勵精する所あり。著者は更めて、切に博士の自重加餐を祈る者也。

◇

林　務　△京都市御幸町御池上ルに小兒科を以て著聞する林小兒科醫院あり、院長林務博士の經營せる診療所なり。開業拮据不斷の熱誠努力と、爛熟せる打診の好評とは、年々歳々繁榮をいや增して堅實なる地盤を築き、今や一流の名醫として、成功の位地を占む。博士は岐阜縣立大垣中學校を經て、明治四十四年六月京都府立醫學專門學校卒業、同四十四年十二月一年志願兵として步兵第三十三聯隊入營、大正二年六月愛媛縣町立宇和島病院醫員、同三年六月辭任す、同三年六月より同四年六月迄、滋賀縣長濱病院勤務、同四年七月京都府立醫學專門學校附屬療病院醫員、同十年九月京都府立醫科大學助手、同十五年六月京都帝國大學醫學部專修科入學、昭和二年二月醫學博士の學位を受領す、其後現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「肝臟機能障碍ガ抗體生成ニ及ボス影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)黴毒患者ノ尿中ニ於ケル不透析性物質ノ造坑原作用ノ研究（第一報告）、(2)「コブラ」毒素ノ黴毒患者血液ニ及ボス作用ニ就テ、(3)二、三急性傳染病ニ於ケル尿ト免疫血清トノ關係ニ就テ、(4)「ストロフルス、インフアンツム」ノ臨床的觀察、(5)興味アル總輸腸管囊腫ノ一例、(6)小兒期ニ於ケル肝臟膿瘍ニ就テ、(7)「コブラ」毒素溶血作用ノ本態ニ就テ、(8)結核兒ニ於ケル假性腦膜炎ノ二例等なり。其他論著夥多。

△博士は滋賀縣犬上郡彦根町の出身、明治二十年生なれば、當年不惑に入る九歳也。學究的溫厚の紳士にして、熱心なる研究家を以て知られ、臨床家としては多年の經驗に富み、手腕圓熟して愈々獨特の精彩を放ち、今や斯科界の重鎭を以て囑目せらる。

◇

宮崎森治　△福岡縣行橋博多町に在る宮崎小兒科醫院は、院長宮崎森治博士の診療所也。開業既に古く、當地方診療界に於て小兒科を以て斷然頭角を拔き、好評嘖々の裡に年々歳々繁榮を持續しつゝあるを見る、蓋し近來の成功と云ふべき乎。氏は福岡縣立豐津中學校を經て、大正四年大阪府高等醫學校を卒ゆ、其後鄕里たる現住地に於て開業今日に至れるが、斯間大阪醫大生理學教室に於て故中川知一教授指導の下に研究の結果、昭和八年四月大阪帝大より學位を獲得せる名醫博として名聲を馳せ、氏が仁術に一段の光彩を放てり。

△學位主論文は「心肺標本ニ於ケル心臟ノ糖消費ニ及ボス諸影響」にして、參考論文は、(1)瀉血ノ腦脊髓液糖量ニ及ボス影響、(2)漿液腔內ニ注入セル「アドレナリン」ノ血壓ニ及ボス影響、(3)尿素「クレアチン」及ビ「クレアチニン」ノ蛙腓腸筋疲勞曲線ニ及ボス影響、(4)胃腸管ノ色素排泄ニ及ボス其自律神經截斷ノ影響等なり。

△殊に特筆すべきは、氏が名譽ある學位を獲得せる迄には、幾星霜かの久しき間、開業の傍ら研學切磋常に學を錬り

腕を磨くに餘念なく、懸命の努力精進を續け、獨力貫行、開業醫としての面目と位地とを保持しつゝ、終に克く其の興學の初志を貫徹せる點にあり。その今日ある成業と篤學とは、氏が奮鬪の跡を物語るものにして氏が前半生史に光彩陸離たらしめたり。氏は現住地の出身にて、宮崎彌平の二男、明治二十年生る。學究的溫厚の紳士にして、當年四十有九歳、多年の經驗と共に手腕愈々圓熟して最も重望せらるゝ時代に在り。努力主義の人にして、意氣を以て起ち、終始診療に忠實を盡すの外、何等の道樂を求めず、專念仁術を以て任ずる好箇の臨床家たるを見る。

◇

小原芳樹　△東京市神田區錦町三ノ四に著名なる小原小兒科醫院あり、院長小原芳樹博士は東大系の小兒科醫として錚々たるものにして、開業古く、既に牢乎たる地盤を有し、玲瓏たる打診の好評は多年の聲望と相俟つて年々歳々繁榮をいや增し今や拔くべからざる盛況を呈す。博士は長野縣立諏訪中學校、二高を經て、大正七年東京帝大醫科を卒へ、同八年一月より十三年三月迄同醫學部小兒科教室副手として弘田長教授及び栗山重信教授に師事す、此間同八年一月より九年十一月迄同醫學部醫化學教室副手として柿内三郎教授に師事し、又同十一年十月より千葉醫大附屬專門部講師及同附屬醫院小兒科醫長拜命、同十三年五月同教授拜命、同年十二月辭任、同月東京女子醫專教授となり小兒科を擔任す、同時に自宅開業今日に至る、其間大正十四年三月東京帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は『「レガール」ノ反應及コレヲ應用シタル尿中既成「アセトン」及「アセト」錯酸ノ定量法ニ就テ』にして、參考論文は、(1)東京市養育院在院者營養研究、(2)注射用重曹水ノ製法ニ就テ等なり。其他論著夥多。氏は長野縣諏訪郡湊村の人、花岡嘉助の次男、明治二十五年生にして當年四十有四歳也。號西湖、乘馬、圍碁を越味す。學究的溫厚の紳士にして、臨床家として多年の經驗を有し、今は手腕圓熟の域に入り、最も得意の時代にして多大の信望を博せり。

耳鼻咽喉科

脇田政孝　△耳鼻咽喉科界現代の大家として重きを爲し、浪速診療界に於ける中堅人物として活躍しつゝあるは脇田政孝博士也。博士の經營主宰する耳鼻咽喉科脇田病院は、大阪市南區長堀橋南詰東入に結構堂々の陣を構へ、特に中耳炎、蓄膿症、鼻整科、扁桃腺病等、獨特の特色を發揮して斯科界に嶄然頭角を顯はし、好評嘖々の裡に其の大なる存在を認めらる。博士は京都府立醫專出身の耳鼻咽喉科學者として錚々たるものにして、斯科界の權威京大教授和辻春次博士指導の下に斯學を專攻し、次で歐米各國を視察して新知見を博め、京都帝大より學位を獲得せる名醫博として其の名聲を馳せ、その今日あらしめたるは博士の成功を物語りて餘蘊なし。

△博士は鳥取縣八頭郡下私都村の人、明治二十二年生にして、京都同志社普通校を經て、大正二年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都帝大附屬醫院醫員介補を命ぜらる、翌三年一年志願兵として入營、同七年任陸軍三等軍醫、同年日獨戰役に出征、翌八年召集解除と共に京都帝大醫學部研究科に入學、同十一年まで耳鼻咽喉科教室にて和辻教授の指導を受く、日獨戰役の功に依り叙勳六等、同十一、二年歐米へ外遊を試み、同十二年六月學位受領、歸朝後間もなく倉敷中央病院耳鼻咽喉科醫長として就職し、同十三年任二等軍醫、同十五年同院を辭し大阪扁桃腺病院を開設して同院長となり昭和二年まで勤務す、爾來現住地にて開業、一般耳鼻咽喉科の診療に從事して今日に至る。

△學位主論文は「電氣刺戟ニ因スル聽器ノ病理實驗的研究」にして、參考論文は、(1)細菌ニ因スル中耳炎ノ實驗的研究補遺、(2)扁桃腺ノ生體染色及其淋巴細胞濾出ニ關スル知見補遺、(3)顆顎葉皮質ノ所謂聽中樞部ヲ破壞シタル後ノ神

經系統及內耳迷路ニ於ケル實驗的病理等、他に論著夥多あり。

△感想に曰く「今から丁度二十年、私が始めて醫者になつた當時扁桃腺の手術といへば大てい切除する位であつて、扁桃腺の全摘出するといふことなどは全く亂暴極まることだ、特に發熱してゐる急性炎症のある扁桃腺に對しては外科的處置を講ずるなど以つての外だといふのが一般醫界の認識であつた。然し自分が專門醫の立場にあつて日常診療に從事してゐると咽頭や口盍の扁桃腺の病氣又はこれから起因してゐる病氣が頗る多いのに一驚を呈したと同時に思ひ切つて扁桃腺の全摘出を施行して見ると世人のいふが如き心配も顧慮もないのみならず、扁桃腺自體の疾病はそれ限り根絶されて仕舞ふ計りでなく、爾後に於ける被術者の保健的狀態は從前と全く雲泥の差であつて殆ど比較にならぬ位好結果を得られるといふ事實である。私は已に十數年來確固たる信念の下に罹患扁桃腺の全摘出を推奬し、且つ實行してゐる一人である。蓋し將來は身體虛弱なる小兒に對してはこの扁摘第一主義を以て臨む時代も遠きことではあるまいと感ずるものである」云々。

△博士の年齒今や不惑有七歲、貴公子然たる學究的溫厚の紳士にして、圓熟せる手腕、人格相俟つて一段の貫祿を備へ、今は最も奮鬪活躍の全盛時に在り。若しそれ臨床家としての經歷よりすれば、博士の前半生史よく之を語りて餘蘊なし、殊に博士の感想にもある如く、此の十數年來確固たる信念の下に罹患扁桃腺の全摘出を推奬し、且つ實行しつゝある先覺者として、博士獨特の手腕に對しては既に斯界に定評あるが如し。博士に面識ある著者をして言はしむれば、先づ第一の印象として脇田耳鼻科に對し好感を抱かしめたるは、玄關子（女子取次）の親切にして躾の善きこと、第二に來院患者輻輳し診療甚だ多忙なるにも拘はらず、著者を歡待せる博士は破顏溫笑を以て迎へ、その態度悠容として迫らず、又敢て學者として尊大振るなく、談論風發、話題に富み頗る痛快、凛々とした風貌は落着ある平和の裡に威嚴を存し、敬慕の念を深からしめたる點にあり。著者は古き記憶を呼び起し、玆に更めて敬意を表する者也。

◇

西田文治　△京都市東山區繩手四條下ル大和町に新裝せる西田病院あり、耳鼻咽喉科を以て斷然頭角を拔くの概あり。院長西田文治博士の經營する所にして、鐵筋コンクリート四階建にて和洋兩樣の病室、レントゲン機械、エレベータ、日光浴室、娯樂室、各室ラヂオ設備、電氣暖房の外、各種衞生設備等完備して一流病院たるの本質を具備す。博士は京都府立醫專の出身にして、陸軍三等軍醫正の印綬を帶び從六位勳五等を有す。陸軍々醫學校にては時の校長岩田教授に師事し、後ち又た京都帝大にては耳鼻咽喉科學の泰斗和辻春次教授の指導を受けて京大より學位を得、研學切磋、多年の經驗と相俟つて圓熟せる手腕は益々獨特の技能を發揮して餘す所なく、好評嘖々の裡に拔くべからざる信望を博し盛況を極む。

△博士は石川縣能美郡川北村の人、明治十九年生にして、同四十年京都府立醫專を卒へ、同年仟陸軍三等軍醫、同四十二、三、四年の間兩回陸軍々醫學校に學ぶ、同四十三年任二等軍醫、大正二年任一等軍醫、同十年任三等軍醫正、同年京都帝大耳鼻咽喉科教室にて研究、同十二年伏見桃山にて開業、同十三年一月學位受領、昭和七年夏現住地に新築落成と共に移轉せり、同時に伏見桃山の舊病院は仁科病院と改稱し、令弟仁科亨に經營を委ね、耳鼻咽喉科の診療は從來通り博士自ら擔任し居れり。

△學位主論文は「聽神經終末器官ト同神經聽器トノ相對的及其續發的各變化ノ病理實驗」にして、參考論文は、(1)化膿性腦膜炎ニ於ケル聽器ノ病理實驗的研究、(2)涙囊炎ノ鼻內手術療法ニ就テ、(3)歐氏管軟骨部ニ成立スル他覺的耳鳴症ニ就テ、なるが他にも論著多種あり。

△顧みて氏が偏篇者を以て自ら任じ、同僚よりは世間見ずとも言はれたる學生時代より、少くも京都私立病院中に拇指

を屈せらるゝ今日の成功と其の位地とに想到せば、知るものをして轉た今昔の感を深からしむるものあらむ。著者の打診果して正か否か、著者をして言はしむれば、多年の軍隊生活にて鍛へ上げたる不撓不屈の精神と、秩序ある生活の様式とは、氏が大學に於ける研究と、實地家としての活動に少からざる寄與を爲したることは爭はれざる事實にして、其の克く今日の境遇を生めるものは學校の成績（首席卒業）、素行、軍隊に於ける教養、帝大に於ける研究態度の眞劍さ、活社會に於ける眞面目さ、從來の研究の續行、將又不言實行主義等の現はれが即ち其の礎を爲せる第一の原因と見るべし、又以て頂門の一針として學ぶべきものあるを信ず。博士の如きは眞面目なる好箇の臨床家として、學德兼備の點に於て推奬に値し敬意を表す。

◇

山口競　△自己の專門たる耳鼻咽喉科を標榜して、長野市千歳町に開業せる山口競博士は、世人周知の如く耳鼻咽喉科醫長として久しく日赤長野支部病院に勤め、十年一日の如く孜々として其の職に勵しみ、終始診療界の爲め貢獻せる努力は酬ひられ、多年扶植せる信望と共に、今や拔くべからざる獨立の地盤を確保するに至れり、蓋し近來の成功と言ふべき乎。博士は東大系四十四年組の出身、恩師岡田和一郎教授に就きて耳鼻咽喉科學を專攻し、母校より學位を獲得せる後ち歐洲に遊びて新知見を廣め、學識該博にして臨床的經驗の豐富なる點に於て、其の地方に拇指を屈せらる、亦當然なりと云ふべし。

△博士は栃木縣河内郡雀宮村山口爲重郎の五男、明治十六年生にして、縣立宇都宮中學校、二高を經て、同四十四年東京帝大醫科を卒へ、副手として耳鼻咽喉科教室に勤め、大正二年日赤長野支部病院耳鼻咽喉科醫長に就任し、同十三年一月學位を受領す、同年同院より海外留學を命ぜられて渡歐、同年末歸朝復職す、昭和二年辭職、現住地にて開業今日に至れり、その今日あるもの良く之を物語りて餘す所なし。

△學位主論文は「金屬鑄型ニ依ル日本人ノ乳嘴竇及迷路ノ形態的研究」にして、參考論文として、(1)骨性迷路ノ「レントゲン」像ニ就テ、(2)深部氣道異物ニ就テ、(3)直達鏡下抽出或ハ自然道排出ニヨル食道異物ノ四十一例ニ就テ、の三篇ある外、他に論著多種あり。

△游浩は其の號にして洋畫を能くす、又た園藝に趣味を有し業餘の樂しみとす。溫厚の紳士にして、篤實謙讓、阿附迎合を好まず、人に篤く患者を待つに親切を以てし、居常又能く應答の禮を重んず、以て其の爲人を知り圓熟せる人格を敬慕せしむ。博士の年齒今や知命に入る三歳、元氣益々旺盛にして學識、手腕、共に練達の佳境に達し、好箇の臨床家として最も信望せらるゝ時代にして一段の貫祿を有す。春秋猶豐富なるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。

◇

富田治郎　△中京の醫博界は多士濟々として群雄割據の奇觀を呈す。此間に介在して、富田耳鼻咽喉科病院（名古屋市中區南吳服町二丁目）院長富田治郎博士の盛名は斯科の大家として推され、多年の聲望と相俟つて斷然其頭角を拔き、牢固として侵すべからざる地盤を有す。殊に先年新築竣工せし病院は宏大ならざるも實用的にして內部の治療設備は完備し、入院患者の收容と共に來院患者の診察治療上間然する所なく院內常に繁忙を極む、尙近來市內布池町に住宅を新築し此所にても治療に從事しつゝあり。

△博士は愛知縣西枇杷島町醫師富田泰造の次男、明治十七年生にして、同三十九年愛知醫專を卒へ、直ちに愛知縣立病院醫員として勤め、同四十二年京都帝大醫科耳鼻咽喉科教室に愛知縣より留學を命ぜられ和辻（春次）教授の下に研究する事一年半、同四十五年より母校の耳鼻咽喉科學授業擔當二ヶ年半、大正三年以來名古屋市に於て耳鼻咽喉科開業、傍ら同十年より一年半の間愛知醫大病理學教室にて林（直助）教授指導の下にて研究す、同十二、三年渡歐、西歐各國を巡視見學す、歸朝以來一般の診療に從事し今日に至る、其間大正十三年三月京都帝大にて學位受領、同十

四年富田耳鼻咽喉科病院を現住地に新築移轉せり。

△學位主論文は「扁桃腺ノ細菌學的並ニ病理學的研究補遺」にして二篇より成る。參考論文は、(1)氣管創傷ノ治療機轉ニ於ケル實驗的病理、(2)動物及人類ノ喉頭粘膜ニ於ケル腺樣組織ニ就テ、(3)內耳諸臟器ハ動物ノ死後ニ於テ如何ニ變化スルヤの外七篇あり。

△和歌、俳句、漢詩、書を能くす、尙多年碧松軒盧山禪師に親交ありて禪道を修め、靜山居士と號す、時に又圍棋に親しみ、謠曲に耽ける事あり、殊に圍棋は初段の棋品を有す。博士の年齡漸く知命に入る二歲、日常醫務多忙にして席を暖むるに暇なしと雖、一意倦まざるの氣慨を有し元氣甚だ旺盛なり。人と爲り好學溫厚の紳士にして高潔なる人格を備へ、其學識、專門的技術は年と共に圓熟して一段の重きを加ふ。醫博界の中堅人物として推奬するを多幸とし、併せて自重加餐を祈るや切也。

◇

鳥居惠二　△新潟醫科大學耳鼻咽喉科學主任教授鳥居惠二博士は、京大系大正六年組の逸才にして、母校より學位を得、久しく母校の教壇に起ち、後歐洲に遊び、主として獨逸にて耳鼻咽喉科學を研究せるが、就中聽器と航空病との關係を明にしたる航空生理の研究に關しては著名にして學界既に定評あり。其眞摯にして純潔なる性格は其豐富なる學識と相俟つて、內外學界に多大の信望を博し、今や學內の重鎭たるのみならず、耳鼻咽喉科界現代の一權威たる貫祿を有す。

△博士は德島縣脇町の人逢坂政太郎の二男にして、明治二十四年を以て生れ現姓を嗣ぐ。大正六年京都帝大醫科を卒へ、直ちに同大學助手として外科學教室に勤務、同九年任助教授、同十二年文部省在外研究員として獨逸に留學を被命、後佛、英、米、各國を視察して、同十四年歸朝す、同時に新潟醫大教授に任ぜられ、今日に至る、其間大正十三年三月京都帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は、(1)航空生理ノ統計的觀察、(2)航空生理ノ實驗的研究（其一、其二）にして、參考論文は、(1)麻痺ヲ伴ヘル結核性脊椎炎ト其療法、(2)「インフルエンザ」耳炎ニ就テ、(3)所謂後筋麻痺ノ原因補遺、(4)上氣道特ニ鼻腔並ニ喉頭組織ノ生體色素攝取、(5)「クロールアミン」Tノ耳鼻的、特ニ眞珠腫ニ對スル應用ニ就テ等なり、他に內外にて發表せる論著夥多。

△純眞なる年壯の學者にして、學者タイプの風貌に威嚴を有し、謹嚴そのものゝ性格を表示して餘蘊なし。醫育と研究とは博士の最も趣味とするところにして、讀書の外他に道樂を求めず、研學切磋、常に品性の陶冶と相俟つて修養怠らざるを見る、又時には旅行を樂しむの風あり。近來博士人物の人格に對する紛々たる世論益々喧しからんとするの秋、世論を正しく導く上に能く之を戒めて、指導薰陶の宜しきを得んことを、著者は更めて博士の力に待望して止まざる者也。新潟市濱田中町に住す。

◇

神尾友修　△帝都診療界の重鎭にして、耳鼻咽喉科界現代の大家として嘖々たる名聲を馳せつゝある、神尾友修博士の經營せる神尾耳鼻咽喉科醫院は、小石川區鶯籠町二五三に結構なる陣容を構へ、古き歷史と共に內容充實し、既に獲得せる地盤は牢乎として動かず、年々歲々向上發展の上に超然として頭角を拔き成功の位地に在り。博士は東大系の耳鼻咽喉科學者として逸色せる一異才にして、嘗て獨逸に留學するや、ウユルツブルグ大學マナツセ教授に耳鼻咽喉科學を、グライスワルド大學フリドベルゲル教授に血淸學を專攻し、歸朝後母校より學位を得たる大家として既に斯界に定評あり。

△更に其の學歷及び閱歷を概括して觀るに、會津中學校、一高を經て、明治四十二年十二月東京帝大醫科大學を卒へ、

翌四十三年一月より四十五年四月迄東大大學院在學、傍ら東大耳鼻咽喉科學教室副手として、耳鼻咽喉科學の研究に從事す、同四十五年五月大學院退學と同時に副手を辭し、根岸養生院々長就任、大正八年一月より神田に開業、同十年四月養生院を辭し、私費渡歐留學の途に上り、同十三年一月迄獨逸滯在、主として前揭の大學にて研究、同十三年三月歸朝、爾來專ら開業に從事し今日に至る、斯間、大正十三年七月學位を受領せり。

△學位主論文は『「オトスクレローゼ」ニ關スル實驗的研究』にして原著は獨逸文なり。參考論文としては、(1)扁桃腺ノ機能補遺、(2)喘息ト過敏症トノ關係ヲ海猿ニテ實驗的ニ證明シ得ルカ（獨文）あり。他の論著中、(1)初生兒哺乳兒ノ中耳炎（單行本）、(2)上顎竇皮膚樣囊腫其發生及治療ニ就テ、(3)鼻腔內硬化性乳嘴腫ノ一例的鼻粘膜上皮細胞ノ化生ニ就テ、(4)「サルヴアルサン」注射後ニ來ルメニール氏症ニ就テ、(5)血淸療法ニ就テ、其他夥多。著書としては(1)初生兒哺乳兒の中耳炎、(2)耳鼻咽喉科診療法、其他。

△福島縣若松市屋敷町に本籍を有し、明治十七年福島縣耶麼郡金田村に生る。溫厚なる學究的紳士にして、年齒知命に入る二歲也。臨床醫家として起ちて以來幾星霜、幾多の難關を突破して獨力貫行、克く今日の位地と聲望とを贏得たるは成功と云はざるを得ず。而かも謙遜なる氏は自己の識學を衒はず、恬澹として功名榮達に介意せず、克く自抑して人に厚く、又能く社會公共の事に盡す。平生醫療と研究とに趣味を集中して他に道樂を求めず、一意專心、仁術の爲め唯だ、誠意誠實を盡して自己の天職なるを樂しむの士也。

◇

辰巳　庄太郎　△大阪帝大の前身たる大阪醫大派の一勢力と見るべき、耳鼻咽喉科界の重鎭辰巳庄太郎博士の經營する辰巳耳鼻咽喉科醫院は、大阪市南區鰻谷東之町十五に在り、開業已に古く、多年聲望を扶植して動かすべからざる堅き地盤を有し、卓然として群を拔き悠々たる位地を占む。氏は大阪市の人、明治十八年を以て生る、大阪醫大系（明治三十九年卒業）の先輩にして、耳鼻咽喉科を以て起ち、卒業後久しく母校に在りて研究に從事し、大正十四年二月大阪醫大にて學位を受領せり、斯間大阪醫大講師兼附屬醫院醫員たりしが、辭職後現住所に開業今日に至れり。

△學位主論文は「舞踏鼠聽器ノ解剖學的研究補遺」也。本論文は十章より成る。要之、本論文中前人の謬見を正し、新知見として、殊に興味を覺ゆるは、舞踏鼠聽器の病的變化の主體が、蝸牛殼神經領域、並に正圓窓聽斑に於ける高度の萎縮にして、然も、生後十日、乃至十五日にして、蝸牛殼基底廻轉起始部の螺旋神經節の二三細胞の消失、並に染色性の不平同等、原發性病變の端緒を發現し、之が時日の經過と共に、縱斷的には漸次上方廻轉の螺旋神經節に蔓延し、又同時に、橫斷的には骨螺旋板神經纖維に、次でコルチ氏器感覺並に支柱細胞に、續發性病變を發來し、時日の經過と共に蔓延增進して、二ケ年の終り（老衰期）に達するも、其病變尙ほ進行を示して、停止する所なき推移を、示せるの事實なり。其他論著夥多あり。

◇

小野鑛造　△東京市神田區駿河臺四丁目二ノ六に耳科鼻喉科專門を以て著聞する小野病院あり。院長小野鑛造博士は東大系の耳鼻咽喉科臨床家として錚々たる名聲を馳せ、多年恩師岡田和三郎博士に師事する所ありて母校より學位を受領せり。博士の略歷より觀れば、一高を經て、明治四十二年東京帝大醫科大學を卒へ、翌四十三年より四十四年迄日本赤十字社病院外科に奉職、同四十四年七月より東京帝大耳鼻咽喉科醫局に入り副手として、大正三年三月迄勤務、直ちに耳鼻咽喉科小此木病院に副院長として勤務、同七年二月辭職と同時に神田區表神保町に私立耳鼻咽喉科病院設立、同十二年震災に罹り同十三年三月より牛込區筑土八幡町に移轉開業、同十四年三月學位受領、昭和二年再び神田區駿河臺なる現住所に移轉開業今日に至る。

△學位主論文は「聽器半視管ノ機能ヨリ强迫現象ノ成立ヲ論ズ」の一篇にして參考論文なし。要するに一側迷路の刺

戟若しくは破壞の際に現はるゝ所謂强迫現象成立の原因に關し、東西未だ定說なかりしを遺憾とし、氏は此現象を以て迷路平衡器關の生理的機能と密接の關係を有し一見不可解なる現象も仔細に之を觀察すれば半視管が身體の平衡器として作用せる必然の結果に過ぎざる事を推論し得たり、これ本論文の骨子なり。

△博士は福島縣伊達郡桑折町小野玄海の長男にして、明治十四年生る。壯齡今や知命に入る五歲、臨床家として多年の經驗に富み、手術的獨特の手腕を有し、今は最も重望せらるゝ時代にて成功の位地を占む。趣味としては銃獵を好む外他に道樂なく、「醫は仁術也」を以て任じ終始努力勵精する人也。

◇

高木　愼　△東京市神田區駿河臺二ノ三ノ五に著名なる高木耳鼻咽喉科醫院あり、高木愼博士の經營せる診療所也。博士は東大系の耳鼻咽喉科臨床家として錚々たるものにして、今や斯科の大家を以て囑目せられ、帝都診療界に重きを爲す一人物たり。學位は慈惠醫大より獲得せるが、主論文は『歐氏管「カテーテル」通氣ニ關スル研究』なり。要するに歐氏管通氣法は耳疾患の診斷及び治療上缺く可からざるものとして、既に十八世紀の初めより臨床に應用せられ來りたるものにして、爾來幾多の學者に依つて研究せられたる處多しと雖、尙未だ其機械的作用及治療機轉に關して闡明せられざる處尠からず、氏は歐氏管「カテーテル」通氣法に關し模型、死體及生體の三方面より精細なる科學的研究を施行せり。

△參考論文としては、(1)扁桃腺黴毒ニ就テ、(2)聽覺ニ關スル音響學的觀察、(3)聽能檢査ニ就テ、(4)鼻翼ニ發生セル癌腫ノ一例、(5)歐氏管狹窄或ハ閉塞ノ原因及ビ狹窄或ハ閉塞歐氏管ニ對スル「カテーテル」通氣法操作ニ關スル注意事項等あり。他の論著中、(1)炎症ト其處置ニ就テ、(2)巨大ナル上顎竇性後鼻腔「ポリープ」ノ一例、(3)耳根治手術後療法ノ一新法、其他枚擧に遑なし。

△一高を經て、大正八年十二月東京帝國大學醫學部卒業、直ちに同醫學部耳鼻咽喉科教室に於て副手として岡田和一郎博士に師事す、同十一年一月同教室を辭し東京神田駿河臺金杉病院に副院長として就任、同十二年二月東京帝國大學醫學部生理學教室に研究生として橋田教授に師事す、同十三年七月東京神田永富町東京一般病院耳鼻咽喉科部長兼任、同十四年六月學位を受領せり、其後辭職以來現住所に開業せり。

△東京市赤坂區仲町に本籍を有し、明治二十六年本籍地にて生る、士族高木作藏の五男也。溫厚なる年壯の紳士にして當年不惑に入る三歲、臨床家として多年鍛へ上げたる腕は愈々冴え、年壯の意氣と共に今は最も活躍の全盛時にて多大の信望を博し、悠々たる位地を占む、博士の得意や想ふべき也。趣味は音樂と旅行とにあり。

◇

本田　雄五郎　△帝都殷賑の中心にして醫院割據の環境たる京橋區銀座西五ノ五に本田耳鼻咽喉科病院あり、ドクトル、メヂチーネ本田雄五郎博士の經營するところ、其の堂々たる陣容振りと、充實せる內部の設備とは、慥に斯科一流の名病院としての特徵を表示して餘す所なし。診療には院長自ら手術的獨特手腕を揮ひ、他に斯科專門の新進平龜二郎、西端驥一博士、佐竹結實、伊東茂治氏等、各々分擔して異彩を放つところにまた博士の偉大さを髣髴せしむるの感を深うす。現に東京府醫師會常任理事たるの外幾多の公職に關與す、亦以て氏の社會的位地の評價を知るべし。

△顧みて氏が今日の地盤と聲望とを築き上げたる成功の奮鬪史を繙き見れば、轉た懦夫をして起たしむるものなしとせず。卽ち博士は長崎縣東彼杵郡上波佐見村故本田同俊の次男として、明治十年生れ、十二歲にして早くも父を喪ひ、家貧うして正規の學校に入學するを得ず、十五歲早崎高等小學校を卒業するや、同鄕醫師澁谷正雄の門に入り獨學自習、十八歲の時長崎に於て醫術開業前期試驗合格、二十歲にして熊本に於て同後期試驗に合格す、二十一歲の夏靑雲

の志を抱いて上京、日本橋病院長岡本武次の知遇を得、入りて外科部に勤務、明治三十五年東京帝大醫科大學耳鼻咽喉科第一期專科に入學、岡田和一郎教授に師事して研究し、同三十六年修業す、次で北里研究所に於て細菌學の講習を受く、同四十一年獨逸に自費留學、エルランゲン大學耳鼻咽喉科教室にてデンケル博士に就て研究、同四十二年ドクトル試驗に合格す、同四十三年歸朝と同時に日本橋病院耳鼻科主任となる、同四十五年之を辭し自宅開業に從事す、大正六年放射療法及び耳鼻咽喉科研究の爲め米國に遊學し同七年歸朝す、同十四年三月東京帝大にて學位受領、以て今日に至れり。

△學位主論文は「種々ナル細菌ニ依ル腦膜炎性內耳炎ノ實驗的研究」にして獨逸文の原著なり。參考論文なし。他に論著夥多、主として獨逸文より成る。主論文は聾症研究に益する所甚だ大なりとして學界に認められ既に定評あり。

△想ふに田舍醫師より奮起せる氏は、年少笈を負ふて早く鄉關を出でゝ上京し、會々醫界の先輩岡本武次翁の知遇を得、日本橋病院を頂天立地の踏み臺として以來、獨力貫行、學術の研鑽に一路邁進して倦むことを知らず、既にして獨逸留學より歸朝せる當時の博士は、專攻の耳鼻咽喉科學には一廉の蘊蓄を備え、歸朝後三年間は報恩の爲め日本橋病院に部長として働きながら臨床的實地の經驗を積み、愈々開業醫として獨立以來、二十有餘年一日の如く春風秋雨、日夜不斷の努力精進を續け、開業の傍ら常に研究に志し、日新醫學を魁として月步の設備に余念なく、遂に克く今日の隆盛と地位とを贏ち得たるもの立志傳的成功者としての範を示すに足る。今や獨り臨床家としてのみならず、京橋區醫師會を始め府の重鎭として社會的衆望が氏の一身に集まりつゝあるを見るも、如何に多大の尊敬と囑望とを受けつゝあるかを窺はる。一面又性格より見たる博士は、流石苦勞人だけに同情に富み能く後進を世話す、又人と接するに敢て城壁を設けず、應待懇切にして好感を抱かしむ。

◇

關川一郎　△日赤和歌山支部病院耳鼻咽喉科長として關川一郎博士の名聲は久しく其地方に著聞し、斯科の大家として民衆より多大の信賴と尊敬とを以て囑望せられつゝあり。博士は九州帝大系の一先輩にして、斯界の耆宿現九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子として知られ、母校より學位を得たる錚々たる人物也。嘗て獨逸に留學するや伯林大學耳鼻喉咽科教室にてアイケン教授に師事し、又伯林コツホ研究所にて研究せるなど、既にして學識の該博なるは勿論、臨床に堪能にして手術的手腕の圓熟せる點に於ては既に批判の餘地なし。

△博士は日本中學、二高を經て、明治四十三年京都帝大福岡醫大を卒へ、同四十四年前記大學副手囑託、耳鼻咽喉科勤務、大正二年九州帝大助手、引續き耳鼻咽喉科教室勤務、同年九月依願免本官、日本赤十字社和歌山支部病院耳鼻咽喉科長として赴任、同九年病院長事務取扱を命ぜられ、同十二年四月より十三年六月迄獨逸留學、歸朝後復職、同十四年五月學位を受領せり。

△學位主論文は『肺炎球菌ニ於ケル「オプトヒン」耐性ノ本態』にして、獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)乳嘴突起用鑿術後早期縫合ニ就テ、(2)血管神經鼻炎ノ一療法、治療新法、(3)巨大ナル舌乳嘴腫ノ一例、(4)最近氣管食道異物ノ直達鏡治驗例、(5)咽喉腫瘍ノ觀ヲ呈セル咽頭護謨腫ノ二例、外獨逸文原著一篇あり。

△博士は千葉縣香取郡米澤村の人にして、明治十四年生る、當年五十有五歲也。老熟の期に入り今は最も重望せらるゝ年輩にして、氏の仁術に一段の貫祿を加ふ。學究的敦厚の紳士にして、殊に臨床家としての特質を具備し、人に對し患者を待つに懇篤親切也、又應答禮を重んじ時務を欠ぐことなし、其の眞摯なる態度を多とし崇高なる人格を尊ぶ。業餘の趣味としては花卉園藝を親しむ風あり。和歌山市小松原町通四ノ一二に住す。

◇

田中達三郎　△大東京市の中央醫療界に於て、耳鼻科殊に鼻整形科の大家として仰がれ、今や大方より多大の

信望と尊敬とを受けて衆望を集め、又た一面には詩人樂山の名を恣にして醫文壇を賑はしつゝあるは田中達三郎博士也。博士が經營する田中耳鼻咽喉科醫院は京橋區木挽町一丁目に在り、結構宏大ならざるまでも整然として療器内容共充實し好感を覺えしむ。殊に又た博士の立志傳的異彩に富む篤學に至りては、學界の美談として人の皆賞する所也。

△千葉縣一宮町の人、慶應二年生にして、明治十五年より東京外國語學校に於て露語を四ケ年、傍ら獨逸語を兼修す又英語はイーストレーキ教師に、獨逸文學及び羅甸語は龜井藤太郎教師に、獨逸語及び獨文速記術並に佛蘭西語を獨人シャツマイヤ教師に就て學ぶ。明治二十三年濟生學舍に入り同二十八年醫學全科卒業、同年醫術開業試驗合格、同三十一年以降京橋區内に於て開業、大正五年北里研究所第一回講習を了へ同所研究生となり、同八年以降同所正助手となる、同十四年七月東京帝大より學位を授與せられたる篤學の士也。

△學位論文は『肺炎双球菌ノ免疫學的分類並ニ米國型トノ比較研究』が主論文なるが、本論文は肺炎病原双球菌に付「ロツクフエラー」教室の學者が之を免疫學的四型に劃然分類せるに對して、米國以外の學者間には多少の異論あるに鑑み、本邦に於ては果して之を如何なる型に分類し得べきかを研究したるものなり。外に參考論文として『肺炎双球菌ノ研究』の一篇あり、其他にも論著夥多。著書としては「内科類症診斷學、(上下)」「外科類症診斷學」、「臨床藥物學」等あり。

△感想に曰く「現代に於ける法律家は學位の有無に拘はらず、就中辯護士などは自己の權利義務を尊重して道德心の上に立つてゐる、そして同等の行動をとり同等の待遇をうけてゐる、即ち一の法人が引受けた法律問題の闡を他の法律家はこれを自分の闡にせんと申出ない、同業者間に於ける共同心、道德心が非常にかたい、醫師會に於てもかくあるべきなのに如何、開業醫の同志打ち、妬み合ひ、嫉み合ひ、僻み合ひ等々熾にしてこの樣な精神の缺けてゐることは實に憐むべきことである。淨化すべき明日の醫師會を作るべき殘された研究の餘地あるプロブレムだと信ずる」云々。

△樂山は號にして別に京齋とも稱す。詩作家にして歌道の嗜しみあり、殊に人生と詩に就て多大の趣味を持ち一家を成す。曩に「樂山詩集」第一輯（昭和七年五月）を自費刊行して同好の士に頒布せり。その詠ぜるものは雪月花の詩に非ずして、博士が常に燃ゆるが如き愛國の至誠より發露せる時事詩なれば、讀者をして轉た感激の念を深からしめたるものあり。聽く所に據れば、和漢の漢詩集は勿論、英譯獨譯に至るまで、凡そ漢詩の歐米に紹介せられたるものは、努めて之を購讀し研究しつゝありと。又たその趣味に至りては單に之に止まらず、寫眞術並に園藝に於ても夙に高級技術家の手腕を有し、博士の令閨も亦小禽の飼育に巧みにして其技に長ぜりと。博士一流の研究癖も亦以て之を窺はる。

△顧みれば博士は世の紈袴子弟の如く、悠々大學生活をなす所なくして、忙中刻苦力行、螢雪の功を積んで學位を獲得し、耳鼻科の領域に於ては鼻整形外科術に一新生面を開いて、社會に多大の貢献をなしつゝ克く今日の地位と名聲とを贏ち得たるものにして、其の立志傳的異彩は陸離として氏が奮鬪の前半生史に輝き、眞に後學誘掖の好資料とも なり、博士界中特に推奬すべき一人物たるを囑望して止まざる也。

△附言す、著者は二度博士を訪問したることあり、玄關子の態度甚だ曖昧にして博士の在否を明言せず、暫く待たした上に只今御留守ですと、二度とも玄關拂に遭ひたることあり、平生能く懇篤なる書信を貰ひ居る博士としてはよもあるまじき事と信じ居るも、或は博士に此の事を通ぜず、訪問者に對して誰彼の區別なく、追拂主義を取りたる玄關子の勝手の振舞ひかと善意に解し居るも、獨り博士のみと言はず、名士の内には往々にして同樣の噂さを聽くこと屢次あり、訪問するものにとりては之れほど不快の念を起さしむることなし、一言附して一般識者の注意と反省を促さんとす。

◇

鰐淵源　△熊本醫科大學の新進鰐淵源博士は、耳鼻咽喉科學主任教授として重きを爲し、我國耳鼻科界現代の一權威たるを失はず。博士は東大系にして、恩師現東大名譽教授岡田和一郎博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。學位論文は潜水夫並に「ケーソン」内勞働者に見る聽器傷害の實驗的研究なるが、所謂潜水夫病なる物は高壓空氣呼吸に依るものにして、身體の諸器官中聽器は最も傷害を受け易し、博士は即ち其の病理的變化を闡明せんとして、之れが實驗的研究を行へるものにして、『潜水夫並ニ「ケーソン」内勞働者ニ見ル聽器傷害ノ實驗的研究』と題する主論文即ちこれなり。外に參考論文としては、(1)腫瘍ノ壓迫ニヨル氣管及喉頭狹窄ノ剖檢四例、(2)バセドウ氏病患者ニ見タル氣管黴毒及黴毒性甲狀腺炎ニ就テ、(3)音響刺戟ニヨル聽器障碍ト氣壓トノ關係ニ就テの三篇あり、他にも論著多し。

△福井縣大野郡荒土村鰐淵源太郎の長男、明治廿七年生にして、福井縣立大野中學校、四高を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學耳鼻咽喉科教室に入り、同十三年四月迄岡田教授指導の下に研究に從事す、先是同十二年九月海軍々醫學校耳鼻咽喉科教授を囑託され、同十三年五月縣立廣島病院耳鼻咽喉科部長就任、同十四年八月學位受領、昭和二年一月任熊本醫大教授、耳鼻咽喉科學擔任今日に至る。

△學究的年壯の紳士にして、當年不惑に入る二歳、新進の氣象に富み、研究心潑剌として精研甚だ勉むる所あり、學者タイプの風貌は凛々として謹嚴そのものの性格を物語りて余蘊なし、而かも寛厚能く人を容れ、學生を指導するに厚く、謙遜自抑、淡々として己を虚する態度は人をして敬慕の念を深からしむ。文藝趣味豊富にして文才あり、スポーツ、音樂を好む。熊本縣大江町本に住む。

◇

原田三杉　△東京市牛込區市谷田町三ノ一に耳鼻咽喉科を以て著聞する原田醫院あり、原田三杉博士の診療所にして、開業拮据十餘年、今や牢乎として拔くべからざる地盤を築き、繁榮歳と共に日增盛況を呈す。博士は東大系の耳鼻咽喉科學者にして、現東大名譽教授岡田和一郎博士の門弟として知られ、恩師指導の下に研究の結果、母校より學位を獲得せるは人皆識る所也。學位論文たる「骨傳導に關する研究」論文に對しては、嘗て大日本耳鼻咽喉科會總會（大正十五年四月第十七分科）に於て賞金を授與せられ、又右論文は帝國學士院記事（大正十五年二月）に採錄せらるゝなど、如何に精研の優秀なるかを語り、博士の面目の躍如たるものあるは此間に窺はる。

△博士は一高を經て、明治四十四年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手囑託せられ附屬醫院耳鼻咽喉科教室に勤務、大正五年一月依願副手解囑、同十四年八月學位受領、前記學位論文は三部より成り、參考論文なし。但し他に論著夥多あり。

△博士は明治廿一年、千葉縣東金町に生る、原田貞夫の長男也。溫厚の紳士にして壯齡不惑に入る八歳、學究的臨床家として早く診療界に進出し、獨自の舞臺に活躍して以來、拮据黽勉克く今日の聲望を博せるもの、博士の最も得意時代なるを思はしむ。研究は博士の最も趣味とする所にして、業餘孜々として精研に余念なき前途は猶洋々たり。海及之れに關する一切の事項に多大の興味を有し亦唯一の道樂とす。

◇

岩田誠久　△名古屋市中區若松町大須ホテル西隣に在る岩田耳鼻咽喉科醫院は、ドクトル、メヂチーネ岩田誠久博士の診療所にして、好評嘖々、斯科界に斷然頭角を拔きて一流に在り。博士は愛知醫專の出身にして、現東大名譽教授岡田和一郎博士に就きて耳鼻咽喉科學の蘊奥を究め、嘗て歐洲に遊學するや、瑞西ベルン大學チンメルマン教授に就て耳鼻咽喉科に關する解剖、組織、發生學を、ルワシエル教授に就きて耳鼻咽喉科學を、次で獨逸ベルリン大學パツソー、アイケン兩教授に就きて耳鼻咽喉科學を研究し、歸朝後東北帝大より學位を獲得せる篤學の士也。

△名古屋市の人、明治十五年生にして、明治卅八年愛知醫專卒業後、同年十一月より三十九年十二月迄愛知縣立病院熊谷外科介補勤務、同四十年一月より大正十年三月迄名古屋市中村耳鼻咽喉科病院副院長勤務、同六年九月より同年十一月迄東大耳鼻咽喉科教室にて岡田教授の指導を受く、同十年四月歐洲へ留學、主として瑞、獨にて研究、ベルン醫科大學にてドクトルの學位受領、同十三年四月歸朝後再び前記中村耳鼻咽喉科病院副院長勤務、傍ら同院研究室に於て研究作業に從事す、同十五年三月學位受領、昭和二年一月前記病院を辭し現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「蝙蝠內耳殊ニ其靜定器ノ組織的研究」にして、獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)蝸牛殼螺旋靱帶外螺旋溝ノ上皮細胞所謂上被ニ就テ、(2)人體淚道ノ形態特ニ其發生學的研究補遺、(3)弱年者ニ於ケル副鼻腔惡性腸瘍ノ臨床的及病理解剖學的知見補遺、(4)鼻中隔前端ニ於ケル分葉狀肥大ニ就テ、(5)外聽前壁ヨリ發生セル「チリンドロームー」ニ就テなり。

△學究的溫厚の紳士にして、篤學者として其の今日ある閱歷は博士の面目を語るに充分なり。當年知命に入る四歲、學者タイプの風貌の持主にして體軀强健、元氣甚だ旺盛也。其の專門に亘る學識、手腕は言はずもがな、今は最も重望せらるゝ年輩にして圓熟せる人格と相俟つて一段の貫祿を加ふ。幼より繪畫を好み業餘畫筆を弄す、夫人須磨子亦繪畫を能くす。當世博士界中の中堅たる醫博人物として敬意を表す。

◇

富岡末吉　△京都府立醫大助教授にして、附屬醫院耳鼻咽喉科副部長たる富岡末吉博士は、岡山市小橋町富岡豊吉の長男、明治二十一年生にして、大正三年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校附屬療病院醫員、大正六年任同校助教授、十三年京都府立醫大講師を囑託せらる、十五年三月京都府立醫大にて學位を受領、同年京都府立醫大助教授に任ぜられ、兼ねて附屬醫院耳鼻咽喉科副部長を命ぜられ今日に至る。

△學位主論文「化學的刺戟ニ對スル耳迷路ノ生理學的並ニ病理學的反應現象ニ關スル實驗的研究」、參考論文(1)乾酪性副鼻竇炎ニ就キテ、(2)迷路開放術施行後治癒機轉ニ關スル實驗的研究、(3)再ビ乾酪性副鼻竇炎ニ就キテ、(4)所謂出血性鼻中隔鼻茸ノ再發ニ就キテ、(5)古咽神經切斷後ニ於ケル味蕾ノ觀察補遺、外三篇あり。眞面目なる學究の士にして、研究を唯一の趣味として切磋琢磨を勉むる所あり。平生學生を愛撫し克く提撕に力む。京都市左京區泉川町二番地の一に住む。

◇

西端驥一　△東京市瀧野川區西ケ原町二五四に新設せる瀧野川耳鼻咽喉科院は西端驥一博士の私立病院也。博士は東大系の大正九年組の一異才にして、曩に助教授として京都帝大醫學部に在勤中、論文を提出して京都帝大より學位を獲得せる新進の耳鼻咽喉科學者として錚々たるもの也。學位受領後象牙の塔を勇退するに及び、倉敷中央病院を經て日本醫大教授に就任して以來私學隆興の爲め努力する所ありしが、昭和七年渡歐に先だちて之を辭し、歐洲視察より歸朝後前記に開業せり。現に大日本耳鼻咽喉科學會評議員にして此の方面にも盡力する所あり。

△博士は一高を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學附屬小石川分院助手に任命、十二年十月長岡市長岡病院耳鼻咽喉科醫長として赴任、十三年四月新潟醫大講師囑託、十四年十月任京都帝大醫學部助教授、十五年六月岡山縣倉敷中央病院耳鼻科醫長として赴任す、同年七月學位受領、昭和六年四月日本醫科大學教授、附屬第一、二醫院耳鼻咽喉科部長に就任、同七年四月之を辭し同年十月歐洲視察の途に就き翌八年四月歸朝す、爾來頭書の現住所に醫院開設一般の診療に從事す、同八年四月大日本耳鼻咽喉科學會評議員に推選せらる。

△學位主論文は「鳥類ニ於ケル體位均衡生理學補遺」にして、參考論文は(1)鳥類ノ大腦摘出後ノ態度ニ關スル研究、(2)鳥類ノ耳迷路破壞後ノ態度ニ關スル研究、(3)鳥類耳迷路破壞ノ一改良法、(4)左側上眼窩神經痛及ビ左側後口蓋弓缺

損ヲ伴ヘル畸形腫様鼻咽腔混合腫瘍の三篇なり、他にも論著夥多あり。

△博士は東京市小石川區大塚坂下町西端學の長男、明治二十七年生にして當年漸く不惑に入る二歳也。年壯氣鋭にして研學心に富み、平生刀圭甚だ多忙なるに拘らず、孜々として新智識の吸收に努め精研に餘念なし。診療に臨むや熱と力とを以て懇篤親切を盡す、其の態度の眞摯にして溫情あるは博士の特徴として傳へらる。好箇の臨床家としての高邁なる人格を尊ぶ。讀書家にして精研修養相俟つて業餘の趣味とす。

◇

笠井經夫　△岡山市東中山下に耳鼻咽喉科笠井病院あり、院長笠井經夫博士の經營にして、病室十四、病床十七を有し、其他内部の設備整ひ、診療手術の好評と相俟つて當市診療界に於ける私立病院中の一流を占む。岡山醫大派の名醫博として其の手腕を認められ、斯科界の大家として一家を成す。往年助教授として暫く岡山醫大の教壇に起ち、學生の指導に務むる所ありしも、象牙の塔を勇退して以來、診療界に精進するや、不羈獨立を貫行して、克く今日の地盤を築き得たるもの、其の卓越せる手腕と、篤き聲望の然らしめし所あるを思はしむ。

△岡山縣上道郡富山村の人、明治廿五年生にして、岡山縣立津山中學校を經て、大正五年岡山醫專を卒へ、直ちに岡山縣病院助手醫として耳鼻咽喉科勤務、十年任岡山醫專附屬醫院助手、十一年任岡山醫大助手、同年岡山醫大附屬醫學專門部耳鼻咽喉科講師囑託、十三年依願免本官、岡山醫大耳鼻咽喉科講師囑託、十四年任岡山醫大助教授、十五年十月學位受領、昭和二年依願岡山醫大を辭し爾來現住地にて開業今日に至る。斯間、昭和七年七月渡歐、スペイン、マドリツドに於ける第二回萬國耳鼻咽喉科學會出席を兼ね、主として獨逸國内著名の耳鼻咽喉科教室を見學、旅行を終へシベリヤ經由歸朝せり。

△學位主論文は「腦膜炎性迷路炎ノ實驗的研究」にして、第一報告腦膜炎性迷路炎ニ就テ、第二報告腦膜炎性迷路炎ノ治癒機轉ニ就テ、の二篇より成れり。參考論文は、(1)喫煙ノ氣道粘膜ニ及ボス影響ニ就キテノ實驗的研究、(2)咽頭内ニ達セル莖狀突起ノ二例、(3)再ビ長大ナル莖狀突起ニ就キテ、(4)鼻腔骨腫ニ就キテ、(5)「ヒステリー」性聾ニ就テ(6)實扶拏里性軟口蓋麻痺ノ食鹽水注射療法、(7)頰粘膜下ニ發生セル淋巴管内皮細胞腫ノ一例なるが、其他の論著少からざるものあり。

△博士の年齒今や不惑に入る四歳、年壯の意氣益壯んにして、多年の經驗と共に手腕愈々圓熟の域に入る。趣味としては研究と醫療そのものに集中して亦他事を顧みるなく、終始その事に勵精克く勉むるの概あり。學究的好箇の臨床家としての人格を尊重す。

◇

森川政三　△高田市財團法人知命堂病院に院長兼理事長として森川政三博士あり、兼ねて得意の耳鼻咽喉科を擔當す。同病院は内科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科の四科目に大別し、各科夫れ〳〵敏腕の學位所有の篤學の實地家を部長に置き、各科に醫員一二名を配し、設備は凡ゆる診療に不便を來さゞる樣完備し居り。博士や明治二十三年以來の歴史に耻ぢざる樣不斷の努力精進を續けつゝあるは、地方診療界の爲め欣幸とする所なり。博士は新潟醫專の出身にして、耳鼻咽喉科を以て立ち、京大教授星野貞次博士に就きて斯學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。

△博士は大正四年新潟醫專卒業後、直ちに任同校助手、耳鼻咽喉科勤務、同八年六月同校講師囑託、同九年五月任同校助教授、同十年七月財團法人知命堂病院耳鼻咽喉科醫長に就任、同十三年六月同院辭職、同年七月京都帝大醫學部專修科入學、耳鼻咽喉科教室にて星野教授指導の下に研究、同十五年十二月學位受領、昭和二年一月より再び知命堂病院に復任し、同四年五月より同病院長の要職にあり理事長を兼ぬ。

△學位主論文は「顳顬骨ノ外科的解剖學補遺」にして、(1)乳嘴部ノ外科的解剖學、(2)鼓室部及岩樣部ノ局所解剖學、(3)顳顬骨ノ耳科的手術ニ緊要ナル局所解剖學的研究、の三篇より成れり。參考論文は、(1)耳根治手術ニ於ケル歐氏管部ノ處置改變ニ就テ、(2)顳顬骨鱗狀部頭蓋面ニ於ケル中硬腦膜動脈溝ノ研究、殊ニ其外科的局所解剖的觀察、(3)副鼻腔内ニ發生セル癌腫ノ二例、(4)耳性腦膿瘍ノ手術治驗二例、(5)後頭骨ニ於ケル二三形態異常ニ就キテ、外三篇あり。其他にも論著夥多。

△感想に曰く「本年（昭和九年）の醫學總會に出席し、毎年の事ながら同一の感想を繰り返へさせられます。格別進歩の狀態を認め得られず、各科目の爲め「行き詰つてゐる」の感を新たにせしめらるゝのみです、然して此の裏面には演題の選擇に情實に支配さるゝ誤りが特に本年吾が科目に多かりし事を知つて、尙更ら不快の感を深くせざるを得ませんでした」云々。

△博士は新潟縣東頸城郡菱里村の出身、明治十九年生る。學究的溫厚の紳士、年壯の意氣壯にして、當年知命に達す圓熟せる學識、手腕、人格共に一段の貫祿を備え、好箇の臨床家として多大の信望を博す。殊に氏は熱心なる研究家にして忍耐力强く、常に學を錬り腕を磨くに余念なく、診療と研究とを唯一の趣味として他に道樂を求めず、精研修養相俟つて新智識の吸收に務め、又克く學會などにも力めて出席する風あり。性格は短氣なるも、情にもろく慈善心に富み、後進思ひにて又克く人の世話を爲す美德を有す。高田市西城町三ノ一二〇に住む。

◇

中村萬里　△京城府長谷川町一一二にドクトル、メヂチーネ中村萬里博士經營の中村耳鼻咽喉科病院あり。斯科專門を以て當地診療界に超然として頭角を表はし、博士獨特の診療手術の好評と相俟つて日々繁盛を極む。氏は明治三十一年福岡縣糸島郡怡土村三雲にて生る。大正九年京城醫專卒業、直ちに九州帝大耳鼻咽喉科教室（主任久保教授）入局、十一年瑞西國ベルン醫大入學、細菌學教室ゾーベルンハイム教授に就く、十二年同學よりドクトル、メヂチーネの稱號を受く、同年墺國ヴヰン市國立血清治療研究所に入り、レエヴェンスタイン教授の下にて聽器結核研究、十三年同市醫大神經學教室マールブルヒ教授の指導にて研究を續く、十四年歸朝、九州帝大耳鼻咽喉科教室へ再入局、久保教授並に細菌學教室小川教授の指導を受く、同年滿鐵鞍山醫院耳鼻科醫長として赴任、昭和二年三月九州帝大より學位を受領す、其後職を辭して現住所にて開業せり。

△學位主論文は「肺炎双球菌ニ依ル聽器炎症ノ實驗的研究補遺」にして、參考論文なし、本實驗に於て神經系に主變を見たるは毒素によるものにして、臨床上熱性傳染病の經過中或は經過後に目擊せらるゝ神經症狀を說明するに足るものとして學界に重要せらる。氏は音樂趣味の人也。

◇

中村桂　△大阪市北區櫻橋交叉點に中村桂博士の經營せる中村耳鼻咽喉科あり。氏は茨城縣の人、明治十五年生、明治四十年東京慈惠醫專出身の耳鼻咽喉科學者にして、大阪醫大耳鼻咽喉科教室にて研究の結果、學位論文『動物體内ニ於ケル「メチールキサンチン」體ノ「メチール」基脫ニツイテ』を完成、大阪醫大へ提出して、昭和二年四月學位受領後、引續き同教室に於て研究を繼續せり。其後耳鼻咽喉科を以て診療界に躍進するや、拮据經營今日に至り、堅實なる發展振りを示しつゝあり。壯齡今や知命に入る四歲、手腕圓熟、臨床家としては最も重望せらるゝ年輩なり。而かも放任主義の人にして、約束を無視し他人の迷惑を意に介せざる人の如し、人格の尊重を高調する今日獨り博士のみと言はず一部識者の反省を促すや切也。私宅は大阪市北區曾根崎上四ノ二六に在り。

◇

牧野敏雄　△多士濟々たる福岡診療界に進出して、其の專門とせる耳鼻咽喉科を以て近時擡頭せるは牧野敏

雄博士なるか、現に福岡市下東町四〇に自己經營の牧野耳鼻咽喉科醫院あり、新裝の結構と相俟つて內部の設備整ひ好評嘖々、門前常に賑ひ、拔群の盛況を極む、蓋し近來の成功といふべき乎。博士は熊本醫專出身の篤學者にして、耳鼻科界現代のオーソリチー九大名譽教授久保猪之吉博士に就きて斯學の蘊奧を究め、又解剖學界の泰斗九大教授進藤篤一博士の指導をも受けて學位論文を完成し、九州帝大より學位を獲得せる名醫博として既に其の手腕を認めらる。

△顧みて博士の今日ある學歷及び經歷を考査するに、熊本縣立玉名中學校を經て、大正四年熊本醫專を卒へ、直ちに九大耳鼻咽喉科教室に入局、久保博士指導の下に同五年七月まで勤務、同六年一月より三ケ月間東大傳研にて細菌學の講習を受く、同七年より十三年六月まで福岡市にて開業、同十四年五月九大解剖學教室にて(進藤教授擔當)發生學の研究に着手、久保、進藤兩教授の指導を受く、同十五年三月九大耳鼻咽喉科醫員となる、昭和二年八月學位受領、爾來福岡市にて再び開業今日に至る。

△學位主論文は「鷄ノ喉頭並ニ下喉頭(鳴器)ノ發生學的研究」にして、參考論文は「ヴイタリ氏器ニ就テ」なり。其他論著夥多。

△博士は明治二十四年生る、熊本縣玉名郡有明村尾山水哉の二男、大正五年牧野姓を冒す。銀水は其號にして文學趣味の人、文才あり、書畫を能くす、又骨董好にして鑑識あり、多く珍品を藏す。賦性敦厚篤實、圓滿主義の人にして和氣溫情に富み、風姿自ら其の性格を表はし、溫容の裡に又威嚴を藏す。特に診療に臨む態度の眞實にして熱意ある點は評判にて、博士の特徵として見逃すべからず。思ふに博士の篤學にして今日ある閱歷は、既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なしと雖も、而かも日頃德操の堅持を心掛け日夜精神の修養を怠らざりし事實は認むべき也。

◇

稻見光

△東京市芝區札の辻電停前に新築せる稻見病院あり、院長は稻見光博士にして、新裝せる病院は宏大ならざるまでも洋館の結構體裁よく、內部の設備は理想的にして快き印象を與ふ。博士は新潟醫大出身の耳鼻咽喉科學者にして、京大教授清野謙次博士に就きて微生物學を、同星野貞次博士に就きて耳鼻咽喉科學を研究し、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の新進大家として錚々たるもの也。曩には歐米各國を視察して專門的知見を廣め、該博なる學識と共に實地の經驗に富み、今や獨特の技術、手腕を發揮して益々人望を集め、診療手術の好評と相俟つて年次成功の地盤を築きつゝあるは頗る囑目に値す。

△博士は大正十一年新潟醫大卒業後、引續き同大學副手として衞生學細菌學教室勤務、宮路重嗣教授に師事して專ら細菌學、血淸學の研究に從事す、同年六月京大醫學部に轉じ、淸野及び星野兩教授の下に微生物學及び耳鼻咽喉科學兼修、昭和二年十一月學位受領、同時に京大醫學部講師を囑託せられ耳鼻咽喉科學教室に勤務、同三年四月學術研究の爲め歐米各國へ出張を命ぜられ、同五年二月歸朝後職を辭して以來、現住地にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「加熱凝集性細菌ニ關スル研究」にして三篇より成れり、猶參考論文としては、(1)免疫學的見地ヨリ觀タル淀腸ノ意義(第一、二、三回報告)、(2)流血中ノ「チフス」「パラチフス」菌簇証明ニ關スル實驗的研究補遺(3)岐阜縣高山町ニ勃發セル中毒患者ノ綜合的考察、(4)急性中毒性胃腸炎病原ニ關スル知見補遺(第一、二、三四回報告)、(5)黃疸症ニ見ル血淸ノ性狀變化特ニ其ガ免疫的考察(第一、二、三回報告)の五篇あり。

△栃木縣河內郡明治村の人、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歲にして、少壯の意氣に燃え研究心に富む、學究的溫厚の紳士也。今は分別盛にして手腕壯熟、最も活躍の奮鬪時に入る。殊に臨床家としての態度の熱あり力ある誠實と親切とは、博士の長所として傳へられ評判極めて良し。一面又人と接するに穩健にして篤實、和氣溫情に富む。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、研究以外、自ら品格の陶冶に力むるの概あらしむ、又乘馬を愛好するの風あり。當世博士界中の中堅たる新進人物にして、好箇の臨床家として推奬するに吝ならざる也。

◇

荻野朝一　△日赤長野支部病院に耳鼻咽喉科部長として荻野朝一博士あり、その名聲は、同地方診療界に嘖々たるを聞くや既に久矣。博士は愛知醫專の出身、學位は愛知醫大より獲得せる新進の名醫博にして、學位論文の指導教授は八木澤文吾博士（耳鼻科）及び勝沼精藏博士（內科特に血液學）の二恩師也。主論文は耳鼻咽喉科領域に於ける急性炎症性疾患の血液像特に其豫後關係を研索せるものにして、特に臨床上の參考資料として既に學界に其學問的價値を認めらる。外に參考論文として、(1)「ヂフテリー」治療血淸注射後ニ見タル高度ノ「プラスマチトーゼ」ニ就キテ、(2)糖尿病ヲ伴ヒ高度ノ壞疽性扁桃腺炎ヲ主訴トセル不成形性貧血ノ一例、(3)所謂實驗的「ケーソン」病家兎ノ血液像、(4)本邦ニ於ケル氣管並ニ氣管枝異物ノ統計的觀察附興味アル四症例、(5)炎症性鼻粘膜特ニ甲介粘膜副鼻竇粘膜鼻茸ニ於ケル「グリコゲーン」ニ就テの五篇あり。研鑽多年、既に其の蘊蓄せる學識は言はずもがな、經驗豐富にして其の今日あるも亦偶然ならざるを思はしむ、殊に博士は手術そのものに對しては全部興味を有するも、特に專門科中の癌とも稱すべき副鼻膜炎、卽ち蓄膿症の治療特にその手術に最も興味を有し、之れに全精力を注ぎつゝあり。Dr. Halle（ハルレ氏）の下に於ける研究以來該手術法の改善に苦心しつゝあり。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を考査するに、大正八年愛知縣立醫專卒業後、同年六月任海軍々醫少尉、同九年五月休職被仰付、同九年九月愛知醫大勝沼內科教室にて研究、同十年一月同大學耳鼻咽喉科教室に轉じ、昭和二年二月任同大學助手、同年三月日赤長野支部病院耳鼻咽喉科醫長に就任今日に至る、同年十二月學位を受領せり。次で昭和七年一月より一ケ年間の豫定にて長野日赤より歐米留學を命ぜられ、主として伯林大學耳科教授フオン、アイケン教授の下にて見學し、尙ほ耳鼻咽喉科手術學の大家ドクター、ハルレ氏及び耳鼻科整型の大家ヨゼフ教授の下にて實地的研學をなし、尙ほ全歐米各地大學の見學をなせり。

△感想として「留學中吾が醫學の發達せる紹介機關の缺如否極めて貧弱なるを痛感す、思ふに之れは各大學、各學會其他幾十幾百の機關雜誌、研究雜誌等あるも纏りて本邦醫界を紹介すべき適當且つ完備せる雜誌無之に因るにあらざるかと思考す、依つて日本醫學界として完備せる發表機關（歐文にて）を設けられんことを望む。醫師會に對しては大都市のみならず小都市にも完備せる施療病院を設置、國民保健に更に努力する必要あるを痛感す、第一着手として日赤病院を全部施療機關としては如何と思考す」云々と述べらる。

△福島縣石城郡下小川村の人、明治廿八年生る。篤學者にして其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて躍如たるものあり。凜々しき風貌に常に笑顏を浮べ、溫容の裡には何んとなく威嚴を藏す。人と爲り穩健篤實、謙遜克く自抑して人を愛し部下を親しむ、淡々として己れを虛うするその奧床しき態度は、眞に德操の士に非ればこゝに至るを得ず。業餘野外運動を趣味とし殊に乘馬及び寫眞を好む。前愛知醫大教授八木澤文吾醫博は義兄（妻の兄）、佐波古直明博士、高野安茂博士は從兄弟なり。長野市南縣町德永一〇四九に住む。

◇

林外男　△金澤市高岡町に耳鼻咽喉科專門の林醫院あり、院長林外男博士は東大系の錚々たる斯科の專門大家にして、母校の恩師岡田和一郎教授の指導を受くる所厚く、學位は助教授として千葉醫大に在職中、千葉醫大より獲得せる名醫博として其の手腕を認めらる。學位論文は「支那山東省ニ原發セシ鼻硬化腫ノ三例並ニ組織學的知見補遺」にして、其の學問的批判は既に學界に定評あり。專門智識の該博なるは言はずもがな、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、今や斯科の大家と仰がれ、獨特の手腕を發揮して益々遠近の人望を集め一流に在り。

△博士の今日ある學識及び閱歷を公開すれば、博士は大正四年東京帝大理學部動物學科を卒へ、更らに大正八年同大學醫學部を卒へ岡田和一郎博士教室に入り耳鼻咽喉科を研究、大正十一年靑島病院耳鼻科醫長就任、大正十五年千葉

醫大助教授となり、昭和三年六月千葉醫大より學位受領、同四年八月辭職現地に開業今日に至る。

△「新興滿洲國は勿論日支間の眞實なる共存共榮が將來必要缺くべからざる事と思ふ、これが爲めには現今同仁會醫院等あれど猶一層擴大して醫術の恩惠に浴せしめる事等は親善に非常な効果ありと思惟す、少壯醫學者がどん〳〵滿洲支那へ行かるゝ事を切望する」云々とは、氏の感想の一片なり。

△金澤市の人、明治二十二年生る、元氣旺盛にして當年の意氣益壯也。今は最も得意時代にて臨床に熱心勵精し、患者を待つに誠實親切を以てす、其の態度の眞摯にして熱情あり溫味あるところに、今日の聲望ある所以を窺はる。

◇

加藤直吉

△朝鮮醫界近來博士人物に富む、而かも各科博士に就ての認識を得んとするも亦た容易ならんや玆に品隲を試みんとする加藤直吉博士に就て少しく語らしめんか、釜山本町二丁目に在る加藤耳鼻咽喉科こそ博士自營の小醫院也。結構宏大ならざるまでも入院の要意あり、諸種內部の設備整ふ。學系より見たる博士は九州帝大系の耳鼻咽喉科の專門家として錚々たるもの、斯科の耆宿九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師の親しき指導の下にて研究の結果、母校より學位を得たる年壯の名醫博として既に其學識手腕を認められ、半島診療界に重きを爲す一人物たり。既にして其の圓熟せる手腕は玲瓏たる診療、手術の好評と相俟つて一流に在るは成功と言ふべき乎。

△豐橋市の人、加藤平吉の次男、明治廿二年生れにして、大正十年九州帝大醫學部卒業後、直ちに同大學耳鼻咽喉科教室久保猪之吉教授の門に入り專ら臨床的方面を研究せる後、高知市楠病院耳鼻咽喉科々長、大分縣立病院耳鼻咽喉科部長、滿鐵撫順病院耳鼻咽喉科醫長を歷任して、昭和二年八月母校大學院に入學し、恩師久保猪之吉、高山正雄兩教授の指導の下に研究を終り、昭和四年二月釜山府立病院耳鼻咽喉科長に就任し、同年五月九州帝大より學位受領、翌五年七月現住地に開業せり。

△學位主論文は「坑夫眼球震盪症ノ原因ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文十二篇あり、(1)坑夫眼球震盪症ノ統計的觀察（撫順炭坑ニ關スルモノ）、(2)坑夫眼球震盪症ノ統計的觀察（九州田川炭坑ニ於ケル研究）(4)坑夫眼球震盪症ニ關スル研究（第六回報告）、(3)坑夫眼球震盪症ニ關スル研究（第五回報告）、（撫順並ニ平壤寺洞炭坑ニ於ケル研究）(4)坑夫眼球震盪症ニ關スル研究（第六回報告）、（炭山坑內稼働者以外ノ者ニ關スル研究）、(5)採炭坑夫ノ先天性眼球震盪症ニ就テ、(6)急性酸化炭素中毒ニ因ル眼球震盪ノ實驗的研究、(7)家兎ノ酒精眼球震盪ニ關スル知見補遺、(8)聽器機能障碍ヲ訴ヘタル貧血患者ノ一例、(9)種痘ニ繼發セル廻歸神經麻痺ノ症例ニ就テ、(10)外聽道異物（便所ノ蛆）ノ一例、(11)唾石ノ二例、(12)三十六日間食道內ニ介在セル一錢銅貨、等。其後の著述としての重なるものは、(1)實驗的バルロー氏病ニ於ケル聽器病變ニ關スル知見、(2)右側廻歸神經麻痺ノ一例、(3)食道ヨリ鼻咽腔ニ移行シタル異物例、(4)下鼻道ヨリ發生セル出血性鼻茸ノ一例、歐文論文としては、(5) Ueber die pathologischen Veränderungen am Gehörorgan bei der experimentellen Möller-Barlow'schen Krankheit, 等、以て學術方面の一班を窺はる。

△當年不惑に入る七歲、年壯の意氣益壯にして、手腕愈よ圓熟し一段の重望を加ふ。精力主義の人にして誠實と熱情とを以て仁術の本分を盡し、患者をして信賴と尊敬との念を起さしむるの德を有す。學究的溫厚の紳士にして、好箇の臨床家として其の態度の眞摯にして靄々たる情味あるを尊ぶ。

◇

片山一良

△帝都私立病院中儼然たる一大勢力として著名なる聖路加國際病院に、臨床研究部長として信望を博しつゝある片山一良博士は、京都府立醫專出身の耳鼻科及び內科學者にして、特に醫化學を最も得意とす。嘗て米國に留學するや研鑽多年、臨床に次で教壇に起ち、後には研究室主任として大に活躍する所ありしが、歸朝後現職に就任して以來、その蘊蓄せる學識手腕を傾倒して專ら臨床方面の研究に努力精進しつゝあり。

△博士は大正十一年京都府立醫專を卒へ、直ちに同附屬病院耳鼻科に入り、翌十二年六月渡米、紐育醫科大學院入學耳鼻科專攻、同年十二月同大學院附屬病院副手として內科に勤め、同十三年九月同大學院醫化學助手、同十四年四月同大學院醫化學講師となり、昭和四年四月迄勤務、同年同月紐育市コロンビヤ大學醫學部神經科及精神科病院研究室主任に任ぜられ、同五年八月迄勤務、其間同五年四月京都府立醫大より學位受領、同年九月東京聖路加國際病院臨床研究部長として就任今日に至る。斯間指導教授は主として中村登教授（耳鼻）、フオーブス教授（鼻）、マツクフアーソン教授（耳鼻）、モーゼンタール教授（內科）、シヤタツク教授（內科）、アインホルン教授（胃腸）、マイヤース教授（醫化學）、キリヤン教授（醫化學）等なりと聽く。

△學位主論文は、(1)膽汁酸定量法、(2)黃疸ニ於ケル膽汁酸ノ消長、の二篇にして原著は何れも英文なり、外に參考論文として英文の原著九篇あり。就中「含水炭素ノ研究」は博士の最も得意とする論文にして、既に學界に定評あり。

△博士の感想に曰く「大日本醫師會をして尙一層權威あるものとしたい、少くとも米國に於けるA、M、A、の如く醫學校、病院、開業醫者等を徹底的に調査監督し醫師會に於て文部省又は內務省の掣肘を受けぬ樣にしたい」云々。著者曰く至極同感なり、一般識者の自覺發奮を促すや又切也。

△岡山縣苫田郡鄕村大字下原片山壽平の長男、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歲にして少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として精研甚だ勉むる所あり。其の篤學にして在米八年、奮鬪的研學の跡は歷然として博士の面目を物語るものあり、今や其の蘊蓄せる新智識を傾倒して熱誠克く斯道啓發の爲め盡しつゝあるは甚だ多とせざるを得ず。研究以外の趣味としてはスポーツを好み、又た音樂を樂しむ風あり。學究的少壯の好紳士として高邁なる人格を具へ、淸廉高潔にして溫情に富む、但だ强ひて言はしむれば、好人物過ぎて他人の言を直ぐ信用して度々騙される事あれば、時に思はざる損害を蒙る外に或は他に迷惑を及ぼすかの嫌なきか、而かも眞面目なる性格の反映するところ亦諒とすべき也。猶春秋に富む前途洋々たり、切に自重加餐を祈る。東京市澁谷區幡ヶ谷笹塚町一〇五五に住む。

◇

倉田包雄　△大阪帝大醫學部講師として耳鼻咽喉科教室に在る倉田包雄博士は、大阪醫大出身の新進にして、嘗て歐米醫學界を視察して新知見を弘め、今は專念學生の指導と自己の研究に沒頭しつゝあり。大正十四年大阪醫大を卒ゆるや、副手を歷て專修生として耳鼻咽喉科教室にて村田教授の指導を受け研究に從事す、昭和四年歐米視察の途に上り、各國の醫學界殊に耳鼻咽喉科教室其他を見學す、歸朝後母校の耳鼻咽喉科教室に復歸し、副手、助手講師として勤務の傍ら研究に餘念なく、五年四月大阪帝大より學位を受領す。

△主論文は『「ヴイタミン」Bノ吸收及ビ排泄ニ關スル研究』なり。其他論著夥多あり。

△兵庫縣西宮市越水の人、明治三十年生る、當年三十有九歲也。學者肌の人にして、進取の氣象に富み、潑剌たる研究心を有す。精研に熱心、孜々として倦む事なき前途は、今後の努力研鑽と相俟つて大に期待すべきものあるを待望す。人と爲り謹直にして志操堅實、淸淡にして功名榮達を意に介せず、專心醫育と研究に沒頭する以外又た他事を顧みざるが如し。西宮市越水に住す。

◇

小田大吉　△岡山醫科大學助教授にして耳鼻咽喉科學を講じつゝある新進の醫博小田大吉は、東大系の耳鼻咽喉科學者にして、岡山醫大教授田中文男博士の指導を受くる所厚く、岡山醫大より學位を獲得せる名醫博としての新人物也。未だ少壯にして向學的精神に燃え、學生の指導と相俟つて自己の研究に餘念なき前進は、潑剌として更に大に期待せらる。會々感想の一片を寄せて曰く『「溫古知新」は醫人終生の義務にして名譽と存居候』云々と、世は澆季といふに、博士の斯言や心を强からしむ。

△博士は六高を經て、大正十四年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに岡山醫大助手拜命、昭和二年同大學講師となり、翌三年同大學助教授に任ぜられ今日に至る、同五年五月岡山醫大にて學位を授與せらる。主論文は獨逸文の原著にて、「Pathologische Veränderungen des Gehörorgans, dedingt durch galoarinsche Reizsung」と題し、參考論文は「扁桃腺ノ病理ニ關スルモノ」此外十一篇あり。他の論著中「耳性化膿性腦膜炎ノ療法ニ關スル研究」は博士會心の作にして最も主要なるものなり。

△博士は鳥取市西町小田芳造長男、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳、少壯氣鋭にして志操堅實也。學究的學者タイプの年少紳士にして、教壇に起つや熱誠克く學生の撕提に務め、他面又自己の研究に沒頭して他事を顧みざるの概あり。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、又乘馬を趣味とす。因に石井俊次醫博とは義兄の間柄なりと。岡山市門田八二七に住む。

◇

村上幸次

△秋田市土手長町末丁貳〇を卜として獨立開業し、其の專門とせる耳鼻咽喉科を以て特異の精彩を發揮し、年次院務の發展と共に今や成功の地盤を築き、名聲嘖々として他の追隨を許さゞるは村上幸次博士也。博士は東北帝大出身の耳鼻咽喉科學者にして、恩師和田德次郎博士に就き耳鼻科を、同布施現之助博士に就き解剖學を造詣する所深く、獨逸文を以て著はせる主論文「日本人硬口蓋ノ研究」及び參考論文「日本人口蓋皺襞ノ研究」を完成して、母校より學位を得たる所謂東北帝大派の名醫博として其の英才を認めらる。曩年某市に醫學專門學校創立せられたるに際し、恩師の命默し難く解剖學教室に教授として赴任したるも、私學校の「××××」に憤慨し、滿二年にして辭表を提出したるが博士の開業に轉向せる動機なりと聞く、今にして想へば博士の賢明にして潑剌たる其の精神氣慨は大に多とすべき乎。

△博士は四高を經て、大正十二年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部助手拜命、耳鼻咽喉科教室に入り、和田德次郎教授に師事す、居ること三年にして解剖學教室に轉じ布施現之助教授の指導を受く、昭和三年岩手醫專教授として赴任し解剖學を擔任すること滿二年、同五年六月學位受領、辭職後秋田市に於て開業今日に至る。

△感想の一端を寄與して曰く「學界、學者の西洋（白人）崇拜思想を改めたし。醫師界を見渡すと「イクヂナシ」と申上げ度くなる、當縣は全國に知られたる組合病院の多き土地、醫師諸君は何れも血眼になつて組合病院を潰し、自己の生活安全確保のために狂奔してゐる、それもよからう、然し乍ら開業醫は全國に五萬位ときく、同胞は九千萬ある、どつちが生きればよいのか、醫師も國民も眞劍に考へねばならぬ問題だ、當秋田縣からは醫師にして救世思想家佐藤信淵大人が出てる、大醫は國を癒すとか、醫家もモツト國家の大局に目をつけねばならぬ時代になつたと思ふ」云々。又た曰く「左座金藏博士の體格縮小の如き消極的な考は大嫌ひ、そんな消極的な世界平和がほしければ頭とペニスだけの人間でも作ることを考へたらどうか、日本建國以來の大願は皇道を四海に宣布して世界人類の平和を招來せしむるにある。今の學者、科學にのみ走り日本國民たるの自覺と使命とに冷淡ではないか」云々。

△博士は山形縣鶴岡市鳥居町村上喜次郎次男、明治二十七年生にして少壯の意氣益壯也。學究的好箇の臨床家にして一面又た熱心なる皇道精神の鼓吹家にして一死以て君國に奉ずる熱血の士也。賦性高潔にして毀譽褒貶に恬澹たり、和氣情味に富みて能く人を愛す、但だ短氣なることは或は博士の短所と見るべきか。運動好にして殊に武道を愛し劍道四段なり、否石を號とす。因に村上幸太博士と兄弟なるかの如く思ふ人あるも全く赤の他人なりと。

◇

河野敏之

△京都醫大派の一新勢力たる河野敏之博士の經營する河野耳鼻咽喉科醫院は、京都市烏丸四條下に在り、開業拮据數年、既に堅實なる地盤を築き、進出の英氣潑剌として日々診療に勵精し、診療手術の好評は益々

民衆の信望を博するに至り、近來著るしく院務の發展振りを示し居れり。博士は京都府立醫專出身の耳鼻咽喉科學者として一家を成し、京都府立醫大より學位を獲得せるが、斯間恩師京都府立醫大教授中村登博士に就て研鑽大に得る所あり、既にして多年の經驗に富み獨特の手腕を有す。

△博士は大正九年四月京都府立醫專卒業後、直ちに耳鼻咽喉科學教室入室、專ら臨床に携はる、同十五年四月京都府立醫大研究科に入り、昭和五年論文を提出し同年七月學位受領、同年五月同學講師に任ぜられ、同年十月辭職開業。學位主論文は「內耳ノ循環障碍ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文九篇あり。

△感想に曰く「專門科名を標榜するに當り一定の審査機關により審査許可せしむる事の必要あり」云々。學界淨化の叫び喧々たるの秋、興味ある問題として傾聽すべき乎。京都市の人、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歳、學究的少壯の紳士也。思慮あり識見に富む、臨床家として當年の意氣を以て起ち、造詣する所深く、治療方面に於ては獨特の手腕を存分に發揮し、今は最も奮鬪活躍の時代に在り。趣味としては演劇を好み、又愛煙家との評あり。

◇

宮島靖　△臺灣診療界近時又た頗る醫博人物に富む、臺北市京町二ノ二一に宮島耳鼻咽喉科醫院あり、院長宮島靖博士の經營にして內部の設備整ひ、超然として一流を占む。博士は臺北醫專出身の篤學者にして、恩師上村教授指導の下に斯學を專攻し、九州帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博としての新人物也。斯科專門醫として立ちて以來、日尙淺きも、熱心なる不斷の勵精振りと、博士獨特の手術的治療の好評とは、兩々相俟つて益々人氣を集中し、繁榮歳と共に日增成功の地盤を築きつゝあり。而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる前途を有す、將來有爲の臨床家にして、豪灣醫博界に重きを爲す一人物たるを囑目す。

△博士は大正十三年臺北醫專を卒へ、直ちに同校助手を命ぜられ、同十五年同校講師となり、昭和七年三月同校教授に任命せらる、其間同五年十二月學位受領、同七年七月職を辭して以來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は「水癌病竈部各種微生物ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)口蓋扁桃腺ノ發育學的研究補遺、(2)水癌ノ血液像ニ關スル臨床並ニ實驗的研究、(3)急性上氣道疾患發生ニ對スル氣溫氣壓並ニ濕度ノ影響ニ關スル統計的觀察(4)腦底腫瘍ニヨル偏側混合性咽喉麻痺の四篇なり。

△長野縣北安曇郡陸郷村小泉、宮島喜世の四男にして、明治三十三年生る、年齒三十有六歳。其の今日ある篤學は博士の前半生史に鄭きて躍如たるものあり、今は少壯氣鋭にして多量の分別を有し、最も活躍を要する時代に在り。孜々營々、診療に餘念なき前途は大に刮目に値す。

◇

福田美信　△帝都私立病院中、耳鼻咽喉科を以て斷然頭角を顯はし、名實共に伴ふ名病院たるは本郷區本郷元町二の三七に在る小此木病院なり。院長は小此木襄治にして、福田美信博士は副院長として共に日々診療に勵み院長を輔佐する所あり。博士は金澤醫專出身の俊才にして、耳鼻咽喉科學者として既に其の手腕を認められ、學位は慶大より獲得せる名醫博たる一人物也。研鑽多年の經驗に富み、其の玲瓏たる診療手術の好評は益々人望を博し、歴史ある同病院をして昔日の名聲を永らへ、今日の繁榮を持續しつゝあるもの、博士の力亦與つて大なりと云ふべし。

△博士は大正十一年金澤醫專を卒へ、直ちに九大醫學部耳鼻咽喉科教室に入り斯界の世界的權威たる久保猪之吉教授に就き臨床的研究を修める事滿三年、大正十四年現小此木病院に就職、昭和元年より傍ら慶大醫學部解剖學教室にて岡嶋教授指導のもとに研究を續け、昭和六年四月學位を得、且つ小此木病院副院長となる。

△主論文は『「ハンザキ」ノ舌骨鰓骼ノ形態並ニ發生』にして、參考論文は、(1)「ハンザキ」ノ喉頭側軟骨ノ發生並ニ形態、(2)箱根山椒魚ノ變態時ニ於ケル舌骨鰓骼ノ變化なるが、以上論文は何れも獨逸文の原著なり。

△感想に曰く「現代の醫師たるもの醫師たらんと思ふ者學究にのみならず、人格の修養にもお互に努力すべき時季だと思ふ」云々、以て其の人と爲りを窺はる。博士は富山縣の人、明治三十二年生れにして、當年三十有七歳也。學究的溫厚の紳士にして、新進大家としての手腕漸く壯熟、今は最も得意の時代に入り、「醫は仁術也」を以て任じ一意專心臨床に勵精し、努力奮鬪日も猶足らざるの概あり、好箇の臨床家として洋々たる前途は頗る春秋に富む。牛込區赤城元町三四に住む。

◇

花田清　△福岡縣田川郡後藤寺町三井田川鑛業所醫院に外科部長として花田清博士あり。博士は長崎醫專出身の耳鼻咽喉科學者として錚々たるものにして、外科學の造詣あり、耳鼻咽喉科學は斯科界の權威九大名譽教授久保猪之吉博士に親炙して研究する所あり、學位は九州帝大より獲得せる斯科界の名醫博として名聲を馳せ、多年炭坑治療界の爲め努力貢獻する所あり、今や博士の仁術に一段の貫祿を備へ、大衆より多大の信望と尊敬とを受け、一意專心、唯だ誠意誠實を盡して公に奉ずるの信念を以て、其の職務に努力勵精し不斷の精進を續けつゝあり、博士の努力を多とすると共に炭坑診療界の爲め將來博士の力に俟つもの甚大なるものあるを思ふ。

△博士は大正五年五月長崎醫專卒業後、直ちに福岡縣田川郡後藤寺町三井田川鑛業所醫院に奉職、當時の院長眞島隆輔學士及び外科部長隈鎭雄博士の指導を受く、昭和二年十二月九州帝大醫學部專攻生として耳鼻咽喉科學教室に入り久保教授の指導を受く、昭和五年九月現職に復歸し、同六年四月學位受領、以て今日に至れり。

△學位論文は「頭蓋側面加壓ニヨル頭蓋底骨折ノ實驗的研究特ニ聽器トノ關係ニ就テ」にして、(1)頭蓋側面加壓ニヨル頭蓋底骨折ノ實驗的研究、(2)實驗的頭蓋底骨折ニ於ケル聽器ノ病理組織學的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)耳鼻科ニ關係ヲ有スル頭蓋底骨折ノ二例、(2)下顎骨體部骨折ニ於ケル金屬線副子固定法及余ノ考案セル一方法ニ就テ(3)熱湯誤嚥ニヨル咽喉頭火傷ノ二例ニ就テ、(4)家兎ノ後頭下穿刺ニ就テ、(5)ワイル氏病ノ血液像ニ就テ、(6)腸管皮下破裂ノ三例、(7)食道異物例等あり。最近業績の內「耳性化膿性腦膜炎ノ治驗」は博士會心の作にして、近著中の最も重要のものと見るべき也。

△感想に曰く「私の長い炭坑醫生活を顧るに過去に於て炭坑醫(又は鑛山醫)に對して世間の見る所は侮蔑でない迄も頗る輕視せられた事は事實である。それは事業經營者の無理解にも原因したのであるが、多く又醫師自身の罪でもあつた。此點最近著しく改善向上せられた所謂鑛山醫に新進氣鋭の士多く其業績は陸續發表せられ、本邦に於ける幼稚なる災害醫學の開拓及不幸なる勞働者の救護に向つて勇躍するかの觀がある。從つて各地鑛山に附屬する病院は漸次其地方に於ける信用と權威とを獲得しつゝある樣である。さあれ諸鑛業の發展益々盛なるの時、幾十萬の鑛山勞働者を背景として立つ鑛山醫は無盡の研究題目を前に常に偷安と怠惰から目覺めて居らねばならぬ」云々。

△福岡縣宗像郡河東村山田、花田庄三郎の三男にして、明治二十六年生る、年齒漸く不惑に入る三歳、當年の意氣や益壯にして今猶鑛山醫學に就いての研究を捨てず、精研相俟つて斯道の啓發指導に貢獻する所多し、殊に博士が鑛山醫として其の一生面に躍進して以來、幾星霜かの間幾多の改善向上に盡くせる功績の偉大なるものあるかは、博士の發表せる業績其他能くこれを語りて餘す所なし。性來謙遜家にして、自己の識學を衒はず、又功名榮達を意に介せずして其の功に居らず、恬澹として自己の職務に忠實を盡すの外他事を顧みず、至誠一貫、勵精恪勤の士と見るべき也。一面又自己の長所を誇りとせず、短所の矯正に汲々として自ら修養に力むる人也。研究以外の趣味としては俳句を好み、業餘又克く讀書するの風あり。福岡縣田川郡後藤寺町三井社宅に住む。

◇

西村義太郎　△名古屋市の中央、中區上前津町三四に西村耳鼻咽喉科醫院あり、院長西村義太郎博士の私設經

營する所にして博士自ら之を主宰す、開業拮据、二十年餘の努力空しからず、漸く圓熟せる博士獨特の技倆と德望とは、兩々相俟つて信望益々高く、今や拔くべからざる地盤を有し、中京耳鼻咽喉科界に第一流を以て推さる。博士は愛知醫專の出身にて愛知醫大教授淺井猛郎博士指導の下にて解剖學を專攻し、主論文「ブローマン氏ノ所謂鼻中隔下腺ノ組織並組織發生學的研究」(獨文)、及び參考論文「歐氏管咽頭開口部ニ對スル計測的觀察」を完成の結果、愛知醫大より學位を得たる近來の名醫博也。特に整鼻科は博士の最も得意とする所にして、玲瓏たるメスの好評は益々其の異彩を發揮して餘す所なし。

△博士は大正二年愛知醫專卒業、直ちに愛知病院耳鼻科勤務、五年辭職開業、十五年四月より愛知醫大解剖學教室に於て研究、昭和六年四月學位受領、其間大正十三年愛知縣指定愛知理髮學校々長兼設立者たり。

△感想の一片を書に寄せて曰く「現代の世相が非か將又その非が醫界に存するかは識らざれども困つた相なり。然し大厦の傾かんとするや一木の……云々、我は超然として空想的たりとも小說的文學或は歌に親めば可しと思ふ」云々と、以て博士の理想の一端を察せらる。名古屋市南區波寄町に本籍を有し、明治二十二年生る。年齒將に不惑に入る七歲、勵精家にして年壯の意氣を以て立ち、診療に臨むや熱心甚だ務め誠實と親切とを以てす。今は圓熟せる腕の冴え盛にして、新進大家として多大の信望を博しつゝあるも又偶然ならざる乎。研究以外には文學趣味豐富にして、殊に小說を能くす、書に於ては不堂、文學的には桂峰をペンネームとして既に發表せるもの尠からず、文壇に其の盛名を謳はるゝや既に久矣。一面には又た武術にも多大の興味を有し、文武相俟つての趣味は亦その居常の一端を窺はる。若し夫れ其の性格より打診すれば、餘りに世相に超然たるは長所なると共に、半面に於て又たそれが確かに短所ともならんか。

◇

田中　芳次郎　△名古屋市民病院に耳鼻咽喉科部長として田中芳次郎博士あり。愛知醫大系の新進にして、耳鼻咽喉科の泰斗、元愛知醫大教授八木澤文吾博士の愛弟子として、多年恩師の指導を受くる所あり、學位は母校より得たる所謂愛知醫大派の名醫博として其の手腕を認められ、今や斯科の大家として民衆より多大の信頼と尊敬とを以て迎へらる。

△博士は大正十五年愛知醫大を卒へ、引續き同大學耳鼻咽喉科教室に於て八木澤教授指導の下に研究に從事す、副手を歷て昭和三年三月助手に任ぜられ、同六年四月學位を受領す、同年五月更に名古屋醫大助手に任ぜられ、同年六月名古屋市民病院耳鼻咽喉科部長に就任今日に至る。

△學位主論文は「中耳炎膿汁ノ細胞學的研究並ニ其ノ血液像トノ關係ニ就テ」にして、參考論文は、(1)口腔、咽喉頭熱傷患者ニ於ケル血液像、(2)本邦ニ於ケル氣管枝異物ノ統計的觀察　附興味アル四症例、(3)慢性鼻炎ニ對スル次硝酸蒼鉛(「ヘミシン」)注射療法ノ臨床的並ニ組織學的研究、(4)上顎骨骨體側面及前面ニ發生セル「プラスマチトーム」ノ一例なり。

△感想の一片を披瀝して曰く「日々學位獲得者の增加するは邦家のためにも醫界の爲めにも祝福致す次第に候得共、臨床にある者にとりては如何なる研究にて學位を獲得されしや、又その履歷は臨床の力と比例致すものには候はねど大體を伺ひ知るにも力あるものなれば今回貴社の御計畫は小生等の等しく切望致し居る處にて一日も早く御完成の程祈上候」云々と、感激に堪えざる所也。博士の出身地は群馬縣佐波郡赤堀村にして、明治三十一年田中喜七の二男に生る。當年三十有八歲にして少壯の意氣益壯也。學究的溫厚の紳士にして、今は手腕漸く壯熟の域に入りて最も得意の時代に在り、勵精恪勤の人にして臨床に甚だ熱心なり、其の眞摯にして親切なる態度は評判極めて良し。人と爲り眞面目にして誠實、快活にして人を愛す、又應答禮を厚ふして時務を缺ぐことなし。名古屋市中區池田町一八に私宅あり。

◇

上田隼人　△最近朝鮮治療界に進出して、新進の意氣と、獨特の新手腕とを振ひ、耳鼻咽喉科界に斷然頭角を拔きつゝあるは上田隼人博士也。博士の經營にかゝる上田耳鼻咽喉科醫院は京城府北米倉町に在り、病室ベツト九其他內部の設備整ひて遺憾なし。博士は名古屋醫大系愛知醫專時代の出身にして、母校の恩師小林靜雄博士に師事して造詣する所深く、開業日猶淺少なるにも拘はらず、評判良好にして年次向上發展の進境に在るは、玲瓏たる技術と相俟つて博士の德望の致す處あれば也。博士の心境を打診すれば、曰く「體天地好生心」、「醫人は常に眞摯にして朗らかでありたいもの」と言はんのみ。

△博士は大正十一年愛知醫專卒業後、專ら耳鼻咽喉科を敎授小林靜雄博士に就て研究、昭和二年渡鮮、朝鮮總督府醫院醫員兼京城醫專助敎授奉職、三年依願免官、京城帝大醫學部耳鼻咽喉科敎室助手に任ぜらる、六年八月名古屋醫大より學位を得、同年十二月依願免官、爾來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は原著獨逸文より成り、Experimentelle Untersuchungen über die Labyrintherschütterung bei Kopfverletzungen と題す。參考論文は、(1)「モルヒネ」ノ聽器ニ及ボス影響、(2)化濃性中耳炎兼ベツオルド氏乳嘴突起炎ニ續發セル眼窩膿瘍ニ就テ、(3)鼻腔血瘤腫ニ就テの三篇なり。其他自著論文中の「迷路震盪症ノ成因竝ニ本態」は博士會心の名篇にして學界に重要せらる。

△博士の出身地は廣島縣賀茂郡廣村にして、明治三十三年生る、當年三十有六歲也。讀書家にして精研今猶卷を放たず、業餘の趣味としては邦樂殊に長唄及び尺八を樂しむ風あり。性格は嚴正謹直にして眞面目なる處に博士の面目の躍如たるものあり、但だ或は多少小心の處なきかと思ふ、而かも人に對し患者に接するに眞摯にして親切なる博士の德とする處を喜ぶ。年齒未だ少壯にして潑剌たる前途の大成亦た期して待つべき也、至囑々々。

◇

立木豐　△長崎醫大敎授にして耳鼻咽喉科擔任たる立木豐博士は、九州帝大系の新進、現九州帝大名譽敎授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師の親しき薰陶を受け、母校より學位受領後、獨逸に留學して更に斯學の蘊奧を究め、歸朝後新知見を披瀝して母校の敎壇に起ちしも、最近現職に轉じて專ら學生指導の爲め孜々として勵精甚だ務むる所あり。年齒未だ少壯にして潑剌たる前途は、最高學府に最も囑望せらるゝ將來有爲の一權威たるを至囑す。

△博士は大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、同年八月任九州帝大醫學部助手、昭和二年三月九州帝國大學醫學部講師囑託、同五年一月任九州帝國大學助敎授、敍高等官七等、敍從七位、同六年三月九州帝大より學位受領、同七年二月敍高等官六等、敍正七位、同十年十月現職に轉任せり。

△學位主論文は「實驗性前庭器性眼球震盪ノ中樞性成立機制ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)黴毒性腦基底腦膜炎ノ一區分現象トシテ小腦腦脚隅腫瘍症候群ヲ示シタル一症例、(2)「ラヂウム」照射ニヨリテ治癒シタル扁桃腺肉腫ノ一例、(3)猩紅熱カ「ヂフテリー」カ特ニ其ノ診斷上ノ疑義ニ就テノ一考察、(4)抽出後死ノ轉歸ヲトリタル氣管枝異物（義齒ノ一例）、(5)隨意性眼震ニ就テ、(6)實驗性前庭器眼震ノ異常型及其ノ中樞成立機制ニ就テ、(7)猩紅熱性口峽炎ノ診斷等なり。

△博士は靜岡縣田方郡三島町の人、明治三十一年生る。當年三十有八歲の少壯にして新銳の意氣益壯也。學者肌の人にして研學の念欝勃として禁ぜず、切磋卓勵甚だ勉むる所あり、賦性高潔にして志操堅實、淸淡にして名聞利祿を求めず、只管醫育の爲め專念し學生の提撕に力む、居常又た人に對するに應答の禮を重んじ時務に缺ぐことなし、其の態度の眞面目にして寬容なるは、現代的學者の執るべき常道として、其の人格を尊ぶ。長崎市上西山町一五八番地に住す。

◇

寺本嘉範　△四日市市濱田一八二八に新設せる寺本耳鼻咽喉科病院あり、院長は寺本嘉範博士にして、開業日尚淺少なるにも拘はらず、完備せる內部の設備と相俟つて博士の診療、手術は的確にして評判良く、鄕人より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め多幸とす。博士は千葉醫專の出身にして、陸軍一等軍醫の印綬を帶び、陸軍々醫學校及び母校の恩師久保護躬博士指導の下にて多年研究の結果、主論文「魚類大腸菌屬ノ研究」及び參考論文、(1)稻麴中ノ一新桿菌ニ就テ、(2)所謂脚氣菌ト蔗糖分解性大腸菌トノ鑑別ニ就テを完成して、千葉醫大より學位を得たる篤學の名醫博也。

△博士は大正八年千葉醫專卒業後、陸軍々醫生活に入り、同十五年一等軍醫に進級、陸軍々醫學校にて耳鼻科を專攻し陸軍耳鼻の爲め盡力せしが、昭和四年退役し、千葉醫大衞生學次で耳鼻科教室に入りて研究し、同六年九月千葉醫大より學位を受領せり、翌七年千葉縣銚子市岩井耳鼻科病院の留守院長となり、次で前記の現住所に於て耳鼻咽喉科病院を建設して開業今日に至る。

△博士は三重縣桑名の人、明治三十年生る、當年三十九歲にして手腕漸く壯熟の域に入り、今は最も得意時代にして其の診療に臨むや熱心甚だ努め、誠意誠實を以てし親切を盡す、現代的臨床家として篤き人望を博する所以なるべし學究的溫厚の紳士にして、人と接するに愛想よく快恬なり、居常又た應答の禮を厚ふして時務を缺ぐことなし。晩近博士の人格に對する世論の紛々たるの秋、學德兼備せる博士の如きは歡迎すべき也。

◇

岩田惣七　△福島縣郡山市燧田八五に新築落成、堂々たる新興の岩田耳鼻咽喉科院あり、院長岩田惣七博士の經營にして、外構宏壯、內容充實、私立病院中斷然此の地方に一頭地を拔く。博士は金澤醫大派の名醫博中の新進にして、研鑽多年の經驗に富み、深奧なる學問と共に臨床的獨特の手腕を有す。今や其の玲瓏たる診療手術の評判は、既にして當地方を風靡し遠近よりの外來患者日々輻輳すと云ふ、著者は更めて博士の成功を祝福する者也。

△博士は大正十四年金澤醫大を卒へ、直ちに附屬醫院耳鼻咽喉科に入り、久保教授の指導を受け、後ち東京帝大醫學部耳鼻咽喉科に入り增田教授に師事す、辭職後は再び金澤醫大に歸學し解剖學教室にて岡本教授指導の下に研究、次で再び耳鼻咽喉科に復歸し山川教授に就き臨床的方面の研究に從事す、昭和六年十二月高知市武田病院耳鼻咽喉科長として赴任、同七年一月母校にて學位を得、八年春武田病院を辭し頭書の私立病院を新築經營今日に至る。斯間の指導教授は久保護躬博士、增田胤次博士、岡本規矩男博士、山川强四郎博士等なるが、學位論文は「邦人顳顬骨ノ研究」が主論文にして、外に參考論文八篇あり。本論文は博士會心の著にして、人類學人種解剖學並に局所解剖學的方面より邦人顳顬骨の解剖學樹立に貢獻せる處大なり。

△博士は埼玉縣入間郡堀兼村青柳の人、岩田銀藏の長男にして、明治三十四年生る、年齒三十有五歲の少壯也。新鋭の意氣壯んにして、その臨床にのぞむや專念その事に從ひ、孜々として熱心倦むことを知らず、患者を待つに親切にして誠意、同情を以てす、その篤き人望を博する所以、亦以て博士の德とする處あるを窺はる。學究的溫厚の紳士にして臨床家としての特徵を具備し、學德兩全の醫博人物たるを多幸とす。多趣味の人にして特別に記すべきことなしと雖も、人の成すことは何んでもやると云ふ風な主義と聞く。

◇

神林悌一　△帝都診療界に躍進して、其の專門とする內科、耳鼻咽喉科を標榜して、豐島區西巢鴨四丁目四〇四番地（市內電車新庚申塚下車、又は王子電車庚申塚際）に自營の昭和醫院長として日々診療に精進努力しつゝある神林悌一博士は、日本醫專の出身にて、入澤達吉博士の門下生として恩師及び藤井暢三博士指導の下に內科學を專

攻し、又た耳鼻咽喉科學は西端驥一博士に就て研究し、主論文「耳迷路ト內分泌臟器竝ニ植物神經トノ關係ニ就テノ實驗的研究」及び外參考論文八篇を完成、京都帝大醫學部に提出して昭和七年一月學位を獲得せり。篤學の士にして博士獨特の手腕は名醫博たるの名に恥ぢず、玲瓏たる診療手術の好評は多年の聲望と相俟つて、益々人氣を集中し、日增隆盛に向ひつゝある前途は矚目に値す。

△博士は新潟縣刈羽郡北條村大字舊廣田の出身にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。年壯銳氣、學究的溫厚の紳士にして、其の閲歷は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ。殊に學園を出でゝより頂天立地、幾星霜かの間、臨床の傍ら時には毀譽褒貶の中に拮据奮迅して專念研究に沒頭し、凡有ゆる辛酸難苦を嘗めて遂に克く初志を貫行して、學位を獲得せる篤學は特筆に値し博士の面目を語るに充分なり。今や手腕圓熟の域に入りて一段の貫祿を加へ、働盛にて最も得意の時代に在り。精力主義の勤勉家にして「醫は仁術也」を以て本分となし、平生臨床に在るや熱心克く誠實と親切とを盡す、其の眞摯にして和氣溫味に富む態度は、現代的好箇の臨床家としての人物を推奬す。

◇

大藤敏三　△關東廳醫院醫官にして、關東廳旅順醫院耳鼻咽喉科醫長たる大藤敏三博士は、九州帝大系の名醫博たる新人にして、耳鼻咽喉科界の耆宿久保猪之吉教授、生理學界の泰斗石原誠教授等、母校の恩師に親炙して造詣する所あり。既にして研鑽多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし。

△博士は東京府立一中、一高を經て、大正十五年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院醫員囑託、副手として同學耳鼻咽喉科教室に勤務、助手、醫局長、聲音障碍言語障碍部主任補助となり、昭和六年三月同大學講師拜命、次でX光線療法主任囑託、同年十二月同大學を辭し、關東廳旅順醫院醫官に任ぜられ今日に至る、同七年一月母校より學位を受領す。

△學位主論文は『「パラトグラフイキ」ノ實驗聲音學的、並ニ臨床學的意義』にして、外に參考論文として、(1)馬鼻疽類似症、(2)敗血症ニ到レルウンサン氏口峽炎、(3)實驗的「アンギーナ」ト蟲樣突起炎ノ實驗研究、參考論文は、(1) Ueber das Kindesstammeln und den familiären Koppzismus (2) Ueber die Bedeutung der neuen Ergebnisse der palatographischen Kurven bei offenem palatalem Näseln. (3) Zur Kasuistik der Sprachstörungen durch Rhinolalia clausa palatina zunctionalis. 其他十二篇あり。

△博士曰く「臨床醫學を離れない研究を切望する者である。研究のための研究も勿論惡くはありませんが臨床的研究を餘り喜ばない風潮に對して自分は餘り賛成出來ない者であります。醫學の對照は人間であり、人間の疾病治療にあるからであります。重要なる臨床的諸問題は家常茶飯事の物でも未だ未解決の者がある以上夫に向つて研究する事は敢て怪しむに足りないと思ふ。徒な動物實驗以上に臨床問題に留意する事は人類の幸福增進に益多く醫學の根本問題にふれる者と思ふ」云々とは、現代學界に對する博士の感想の一片なり、三思傾聽すべきに値す。

△博士は東京市麻布區笄町二七大藤敏太郎の長男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳の少壯也。文學趣味豐富にして、和歌に堪能、また繪を能くす、スポーツとしてはゴルフを好む、時に又た旅行を樂しむ風あり。精力家にして少壯の意氣益々壯んなるは多幸とす、その臨床にのぞむや熱心にして亦他事を顧みず、患者を待つに同情と親切とを以てし大に人望を集む、好個なる臨床家として學德兼備の人物たるを尊ぶ。順旅市大津町二四に住す。

◇

豐田邦二　新時代に相應しき耳鼻咽喉科界の新人豐田邦二博士は、名古屋醫大の出身にて、曩年母校の耳鼻咽喉科教室の恩師八木澤文吾博士の膝下を巣立ち、一躍して山梨縣病院耳鼻咽喉科部長の椅子に納まり、爾來孜々として地方診療界の爲め精進して倦むことなく、玲瓏たる診療手術の好評は益々嘖々たる人氣を集め、今や新進大家と

して多大の聲望を博しつゝあるは、地方診療界の爲め多幸とす。

△博士は豊橋中學を經て、大正十一年愛知醫專を卒へ、更に同十五年愛知醫大を卒業す。此間母校の耳鼻咽喉科教室にありて、八木澤博士の指導を受けて研究に從事す、一度び學窓を出づるや、直ちに山梨縣立病院耳鼻咽喉科部長を命ぜられ、昭和七年二月名古屋醫大にて學位を授與せられ今日に至る。

△主論文は「日本住血吸蟲病知見補遺」にして、(1)日本住血吸蟲「セルカリア」ノ聽器感染ニ就テ、(2)日本住血吸蟲「セルカリア」ノ鼻腔感染ニ就テ、の二篇より成る、參考論文は、(1)意識消失ヲ伴フ外傷性半身不隨症ノ一例、(2)右側耳性顳顬葉膿瘍ノ一例、(3)方氣管枝異物ノ一例、(4)鼻性視神經炎ノ稀有ナル一例等なり。

△博士の感想の斷片を披瀝せば、「墮胎公認せよ」のスローガンを揭げて、産兒制限位では駄目との氣焰を仄めかす一方「百萬圓以上の私有財産を認めず、餘金の一部を醫療機關に廻して貰つて貧乏人を助けて頂き度いものだ」など〻述べ「醫者も段々食へぬ様になること」を吐露せり。愛知縣八名郡三上村の人、明治三十一年生れの少壯にして、年齒未だ三十有八歳。多趣味の人、性格は剛毅にしてユーモアに富み、磊落にして樂天主義なれば居常甚だ快活なり、患者に對しては親切者の評判なり、「勿論長所なんてないが、此頃御多分にもれず、精力が減つて來て殘念に思つて居る。從つて勉强も多く出來ないのが殘念だ」云々とは、著者に寄せられたる書簡の一節なるが、氏の性格の一端を窺はる。春秋猶頗る豊富なれば、益々奮鬪斯界の爲に折角の努力貢獻あらんことを囑望して止まず。甲府市穴切町二〇七に住む。

◇

北野　伊八郎　△日赤兵庫支部姫路病院耳鼻咽喉科醫長北野伊八郎博士は、京大派の新進にして、多年恩師星野貞次博士に師事して大に造詣する所あり、今猶現職の傍ら本院病理科に於て研究に餘念なき博士の前途は、實地と學理と併せて大に囑目すべきものある可し。

△大阪府立八尾中學卒業、大阪高工中途退學、第三高等學校を經て、昭和二年京都帝大醫學部を卒業、直ちに同大學附屬醫院副手囑託として耳鼻咽喉科教室に勤め、同四年三月高知市楠病院耳鼻咽喉科々長として赴任、翌五年八月現職に就任、同七年三月京都帝大より學位を受領して今日に至れり。

△學位主論文は「日本人胎兒ノ中耳及其ノ隣接器官ニ於ケル彈力纖維ノ發生ニ就テ」にして、外に參考論文七篇あり、(1)流行性耳下腺炎性腦膜炎ノ一例、(2)口腔底皮膚樣囊腫、(3)急性副鼻腔炎ヨリ惹起セシ眼窩蜂窠織炎ニ就テ、(4)水癌病竈組織ニ於ケル細菌學的所見、(5)喉頭下腔ニ發生セシ內被細胞腫ニ就テ、(6)鼻咽腔惡性腫瘍ノ神經症狀ニ就テ、(7)家兎中耳腔ニ石炭「テール」ヲ注入シ惹起セシメタル慢性炎症ノ組織學的觀察、要するに博士の研究は中耳殊にその音傳導裝置を研究するには間質組織就中彈力組織の研究必要なるに和辻前京大教授以外これに關するものなく、然かも胎兒に就てのこの發生に關しては全く未知なるを以て先づこれを明かにし次で彈力纖維發生に關する所見を述べて從來の學說を批判せるものなり。

△理想としては學閥による爭鬪、健康保險制度の改善を高唱する共鳴者の一人にして、多分の思慮を有し識見に富む趣味としてはスポーツ（漕艇）を好む風あり。大阪市東淀川區天神橋筋八の一八、北野伊三郎の長男、明治三十五年生れにして、年齒未だ三十有四歳の少壯紳士也。氣は長いが、研究に對する熱心と執着力に强きこと敢て人後に落ちず、强ひて短所を云へば、餘り社交的の事を好まず、或は世才に缺ぐる所ありて會々世の誤解を招くことなきか、而かも眞面目にして親切なるは又た患者に對する忠實なる所以にして、篤き信望を博するも亦偶然ならざるを思はしむ姫路市柿山伏町八一に住む。

◇

岸　祐雄　△桐生市本町六ノ三五に耳鼻咽喉科を以て著聞する岸病院あり、院長は岸祐雄博士也。千葉醫專の出身にて、千葉醫大教授松村及び久保兩博士指導の下に研究の結果、學位論文「普通大腸菌ノ研究」、(參考論文なし)を完成して、千葉醫大より學位を得たる近來の名醫博也。學識豐富、臨床に堪能にして、獨特の手腕を有し、嘖々たる好評と共に日增繁榮の域に在るは、地方診療界の爲め多幸とす。

△博士は大正九年千葉醫專卒業、卒業後一年志願兵として入營、除隊後大正十一年四月より大正十三年十月まで東京日本赤十字社病院耳鼻科勤務、大正十三年十一月桐生市に開業、昭和四年九月開業を止め千葉醫大衞生學教室に入り、松村教授の元にて研究、次で千葉醫大久保教授及び東京同愛記念病院細谷博士の元にて耳鼻科を研究、昭和七年三月千葉醫大にて學位受領、同年八月現地に開業今日に至る。

△博士の出身地は群馬縣群馬郡金古町にして、明治二十八年生る、當年四十有一歳也。學究的溫厚の紳士、年壯氣銳にして手腕圓熟し、今は最も奮鬪活躍の時代に入る。臨床に勵精、熱心克く誠實と懇切とを盡し「醫は仁術也」をモットとす。好箇の臨床家として相應しき性格の持主にして、患者より多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは高邁なる爲人を窺はる。讀書家にして精研修養相俟つて克く勉む、又劍道を趣味して心神の鍛錬に力め健康の增進を計る。

◇

片山正一　△群醫割據の大阪診療界に進出して、自己の專門とする耳鼻咽喉科を標榜して獨立の地位を占めんとして、現に大阪市西成區粉濱東之町四丁目に醫院新築開業せる片山正一博士は、京都府立醫大系の名醫博にして初め增田胤次教授に手解を受け後、母校の恩師中村登博士に師事して斯學の研鑽を重ね、臨床に堪能にして、手腕愈よ圓熟の域に入り、今や斯科の大家と仰がれ、大衆より多大の信望を博しつゝあり。聞說、學位論文としての研究の中には、蓄膿症方面に多分の自信を得たるが、現在の臨床に於ては耳疾にヨリ以上の興味を有すと。

△博士は京都府立二中を經て、大正四年京都府立醫專を卒へ、爾後十年まで陸軍々醫として在職す、次で私立大阪住友病院耳鼻咽喉科長として就任、昭和二年十月より七年三月迄、京都府立醫大にて研究、同七年二月同大學より學位を授與せらる。

△主論文は「藥物ノ作用ニ關スル實驗的聽器病理知見補遺」にして、參考論文は、(1)比較的高度ノ氣溫ガ聽器ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究、(2)比較的高度ノ氣溫ガ上氣道ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究、(3)徑口的喉頭內手術創ノ治癒機轉ニ關スル實驗的研究、蓄膿症ニ關スル研究三篇外二篇あり。

△博士曰く「巷間醫博粗製濫造の聲あり。往時の學位論文と近時のものとを比較するに毫も遜色あるを想はしめず、寧ろ研究機關及び設備の完備に伴ひ益々進步の徵あり、又研究者の數も昔日の比にあらず、醫博輩出するは當然にして素質の下落なしと云ふべし。然れども稀に內部より窺ふて疑を感ずるものなしと云ひ難く、尙ほ殊に學位受領後に於ける學究的態度には遺憾の點多し。彼我共に大に戒心して世評を排擊すべきなり」云々と。又曰く「現代の醫師會は既成政黨の如し。幹部の情實、積惡枚擧の遑なし。多額の醫師會費を强要するが如きは醫師會設立の本旨に反す」云々と、現代學界及び醫師界に對する感想一片を吐露せり、三思傾聽に値す。

△京都市左京區下鴨宮崎町片山正夫の長男にして、明治二十四年生る、當年四十有五歳也。性格より打診すれば、恪勤にして眞面目なるが故に、病院勤などには歡迎せらるゝ方ならん、而かも餘りに正直過ぎて敢て阿諛るを好まざれば、或は開業醫としては萬人向せざるやも知れざれど、その親切にして卒直なる點は却つて患者をして信賴せしむる德を有す。博士は動物愛好家にして、業餘の趣味としては之を樂しむ風あり。

◇

阿久根　睦　△海軍々醫中佐阿久根睦博士は、名古屋醫大教授兼海軍々醫學校教官として耳鼻咽喉科學を擔任

し、學生指導の任に當り熱心甚だ務むる所あり。博士は東京帝大系の耳鼻咽喉科學者として錚々たるものにして、東大耳科教授增田胤次博士及びベルリン大學講師フリツツシツフ氏に就て研究の結果、母校より學位を得たる名醫博也。該博なる學識を備え、能く臨床にも通曉して卓越せる手腕を有す。耳鼻咽喉科界現代の一權威たるべき新進教授として推奬し、猶輝しき前途の大成を期待せんとす。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閲歷を公開すれば、博士は七高造士館を經て、大正八年東京帝大醫學部卒業後、直に海軍に入り、大正十五年四月より二ケ年東京帝大大學院に入り耳鼻科專攻、昭和四年三月より二ケ年間獨逸國駐在、同六年五月歸朝、直に伊勢軍醫長、同年十二月海軍軍醫學校教官兼名古屋醫大教授となり、昭和七年三月母校より學位を受領す、翌八年六月名古屋醫大教授專任、海軍軍醫學校教官を兼ぬ。

△學位主論文は「人血A型亞型ノ研究」にして、參考論文は(1)血淸型MNノ知見補遺、(2)血淸學的人類學ヨリ見タル日本人、外一篇あり。

△博士の出身地は鹿兒島縣薩摩郡高城村麓にして、明治廿七年阿久根助市の次男に生る、當年四十有二歲也。漸く不惑に入りて年壯の意氣に燃え、志操堅實にして思慮あり識見に富む、淸淡にして名聞を求めず、利祿に介意せずして只管育英と研究とに專念し又た他を顧みず、診療に臨むや熱情と誠實とを以てす。賦性高潔、高邁なる人格を備へ、最高學府に逸すべからざる名教授として敬意を表す。趣味、閑を得ば旅して自然の美をたのしむ。名古屋市東區千種町北畑七八ノ二に住む。

◇

山本肇

△在岡崎市愛知縣立岡崎病院に耳鼻咽喉科部長として活躍し、內外の信望を博しつゝあるは山本肇博士也。名古屋醫大系愛知醫專の出身にして、耳鼻咽喉科學を專門とし、母校の恩師愛知醫大教授八木澤文吾博士の指導を受け研究の結果、名古屋醫大より學位を得たる名醫博也。

△博士は大正七年愛知醫專を卒へ、同十五年一月より昭和六年四月迄愛知醫大耳鼻咽喉科教室に於て研究（指導教授八木澤文吾博士）、先是昭和二年五月愛知縣立岡崎病院耳鼻咽喉科部長拜命現在に至る、同七年四月名古屋醫大にて學位受領。

△學位主論文は「人類胎生期ニ於ケル鼻腔竝ニ副鼻腔ノ組織學的研究」にして、參考論文は、(1)人類扁桃腺ノ「グリコゲーン」ニ就テ、(2)健康者及ビ急性咽頭炎患者ノ唾液水素「イオン」濃度竝ニ各種含嗽劑ノ之ニ對スル影響ニ就テ(3)上頸骨ニ發生セル多形細胞肉腫ノ生體色素攝取ノ一例ニ就テ、(4)實驗的急性炎症性舌及ビ口腔粘膜ノ「グリコゲーン」分佈所見、(5)流行性耳下腺炎ノ血液像、(6)上顎癌腫ヲ疑ハシムル擴張性上顎竇炎ニ就テ、(7)慢性鼻炎ニ對スル次硝酸蒼鉛乳劑「ヘミシン」注射療法ノ臨床的竝ニ組織學的研究なり。

△感想の一片を述べて曰く「誰しも等しく抱く感ならんも、現今簇出する新藥も玉石混同にして、往々誇大廣告あるは見苦しき限りなるも、是れを實驗せし文獻も是等新藥會社に迎合する傾向あるを遺憾に思ふ、正直なる實驗報告こそ望ましきものなり。次に醫藥分業論に對して吾人の實生活に立脚し、經濟方面を除外するも現今の制度こそ適當ならんと思はる」云々と、三思傾聽すべき也。

△博士は愛知縣岡崎市岡町字北石原の人、山本宇三郎の長男にして、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歲也。年壯氣鋭、手腕圓熟の期に在り、診療に臨むや自信を以て熱心甚だ力む、性來物に熱し易く、熱中すれば他を顧みず徹底的に成遂ぐる長所を有す、併し意に滿たざれば怒り易き癖なしとせず。スポーツマンのフアンとして知られ、運動競技の見物を唯一の趣味とす。又た時に旅行をも好む風あり。岡崎市岡町字北石原三三に住す。

◇

岡田清之輔　△名古屋市中區吾妻町十八に岡田耳鼻咽喉科醫院あり、耳鼻咽喉科界にては斷然頭角を現はし、近時岐阜縣多治見町に更に分院を開設せり。院長岡田清之輔博士は益々繁忙、其の圓熟せる診斷と治術の好評とは、博士の高潔にして、溫厚なる人格と相俟つて益々遠近に著聞す。名古屋醫大系の英才、多年克く自重して研鑽を重ね、漸く治療界に乘り出して早くも臨床家としての最高目的たる良醫の評を獲得し、年壯醫博の全盛時代を釀出せり。昭和八年仲秋の頃、たま〳〵著者に寄せられたる博士の書簡の一節に曰く「天佑か昨年夏以來分院開設し毎日午後出張診察いたして居るも身體に何んの違和も生ぜず益々奮鬪努力し經濟非常時を切りぬけんものと勉め居り候」云々。博士の努力主義を如實に物語るものにして、その今日の成功あらしめたるも亦偶然ならざるを思はしむ。

△博士は明倫中學を經て、大正八年愛知醫專を卒業す、同年五月名古屋市中區南園町中村耳鼻咽喉科病院に就職、同九年四月同病院より一ケ年間東京帝大醫學部へ留學を命ぜられ岡田和一郎教授の指導の下に耳鼻咽喉科を研究す、同年七月東京帝大耳鼻咽喉科教室介補を囑託せられ、翌十年五月介補を辭す、同年六月中村耳鼻咽喉科病院に復職し、同十二年九月同院副院長を辭職後、翌十月愛知醫大解剖學教室に入り淺井猛郎教授指導の下に研究、其餘暇自宅にて耳鼻咽喉科の診療に從事す、昭和六年五月再び名古屋醫大解剖學教室にて長松英一教授指導の下に研究を續け、翌七年六月名古屋醫大にて學位を得て今日に至る。

△學位主論文は『「マウス」葉狀乳頭ニ就テ（組織學的並ニ發生學的研究セリ）』にして、參考論文は、(1)「ラツテ」葉狀乳頭ニ就テ（組織學的並發生學的研究）、(2)舌繫帶部ニ發生セル巨大ナル乳嚢腫ノ一例の二篇なり。

△博士は前記現住地の人、明治二十八年生れにして當年四十有一歲也。手腕漸く熟し年壯氣鋭の時代を控へ潑剌たる氣魄に富む、學究的溫厚の紳士にして、好箇の臨床家としての特徴を具備す。業餘高山植物の栽培を無上の樂しみとせり、曾て昭和七年の夏華氏百三度の酷暑に見舞はれ、博士が六ケ年屋上に栽培せし苦心の結晶たる高山植物は殆ど全部枯死し博士を非常に落膽せしめたり、現在猶山地帶に繁生するものゝみ僅かにあり、後日餘裕を得て庭園廣き所に移轉の曉は再び栽培に着手ししたき希望を有すと云ふ。

◇

只木良信　△京都市上京區大宮通今出川角只木耳鼻咽喉科醫院は、院長只木良信博士の經營也。開業日猶淺少なれど既に診療手術の好評は人氣を獲得して、斯科治療界に於ける地盤を躍食しつゝあり。博士は東京市澁谷區金王三一の人、明治二十九年生にして、東京府立一中を經て、大正九年京都府立醫專卒業、直に同學附屬病院耳鼻咽喉科醫員として勤務、次いで京都府立醫大助手となり、引續き研究科に入りて研學多年、其間教授中村登博士の指導を受く、其後京都府立醫大講師となり、昭和七年六月京都府立醫大にて學位を得、同年九月大學講師を辭して頭書の如く開業今日に至る。

△學位主論文は『「レントゲン」放射線ノ鼻部組織ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文としては、(1)喉頭癌發生ニ關スル實驗的研究、(2)家兎顎下腺ノ人工的「テール」癌發生ニ關スル實驗的研究、(3)家兎中耳胞內「テール」注入ノ影響ニ關スル實驗的研究、その他五篇あり。年齒未だ三十有八歲、少壯にして手腕漸く壯熟の域に入り、臨床家として最も活躍重望せらるゝ時代にあれば、幸に健康と共に益々發奮大成あらん事を望むや切也。

◇

田久保茂樹　△東京市品川區大井寺下町一四二〇に、田久保耳鼻咽喉科醫院を經營して一家を成すは慶大派の田久保茂樹博士也。內部諸般の設備を整へ、一般耳鼻咽喉科及び耳鼻顏面整形科を標榜し競爭激甚なる帝都醫療界へ躍進して、努力奮勵、日も尙足らざるの概を示し、既に牢固たる地盤を開拓して漸次堅實なる發展振りを示しつゝあるは囑目に値す。

△博士は大正十五年慶大醫學部卒業後、直ちに北里研究所員となり病理、細菌學及一般內科傳染病學を醫博草間滋部長に就いて學び、後慶大醫學部教員となり耳鼻咽喉科教室に轉じ、耳鼻咽喉科學を小此木修三教授に師事して研修し、昭和七年七月慶大にて學位を得、爾來頭書の如く開業して一般診療界に活躍しつゝあり。主論文は「流行性耳下腺炎ノ實驗的研究」にして、外參考論文多數あり。

△感想を吐露して曰く「現代醫學界は歐米の模倣の大多數なり。されども本邦醫學者の頭腦及び手先は確かに歐米の先進國學者を凌駕するもの尠からず。然共本邦に於ける研究組織乃至は學者待遇は極めて貧弱にして大學の教授は內職するに非ずんばその體面を保てず眞に學究的の徒をして素貧に甘んぜしめ、折角の良能を挫折せしむること數限りなくあり。醫業の民衆化と現代經濟組織（資本主義）の行詰りのため、開業醫の生活を脅かすもの頻々たり。之れ一は醫師の現代社會組織に對する認識不足と一般民衆の醫療に對する誤れる觀念其の基調をなすものと信ず。且醫業の最終目的は治療に非ずして其の豫防にあり。宜しく當局者は非文明病たる結核、癩等をして其の豫防的見地よりして之を驅逐するの覺悟と絕大の努力を要すべきものなり」云々と。要するに博士の言は學者擁護の論熾烈なると同時に當局に何物かを訴へて止まず、傾聽すべき也。

△博士は東京市麻布區霞町一の人、田久保節造の次男にして、明治三十二年生る。當年三十有七歳の少壯也。讀書家にして業餘研究に終始し、臨床多忙の裡に之れに親しみ樂しむの風あり。而して其の診療に臨むや熱心にして誠意、親切を以てす、その手術的手腕は漸く壯熟して最も得意の時代に入る、篤き今日の聲望ある所以知るべき也。耳鼻咽喉科界の前途益々多望なるの秋、爲斯界益々努力奮盡あらんことを翹望して止まず。醫博松本本松、醫博故眞家眞は親戚の間柄と聞く。

◇

矢野原　乃武　△宇治山田市に在る日赤三重支部山田病院に耳鼻咽喉科醫長として矢野原乃武博士あり。學系より觀たる博士は京都帝大醫學部、大正十二年の出身にして、卒業後直ちに島薗內科に入り斯學專攻、同十三年星野教室に轉じ耳鼻咽喉科研究、助手を拜命す、同十四年愛媛縣今治今治病院耳鼻科部長として赴任す、同十五年日赤三重支部山田病院に轉任して今日に至る。此間昭和五年四月より同七年三月まで二ケ年間內地留學を命ぜられ京都帝大星野教室に研究し、同七年八月京都帝大にて學位を授與せらる。主論文は「腦脊髓液壓ト前庭迷路機能トノ關係ニ就テノ實驗的研究」にして、外に參考論文五篇あり。

△出身地は岐阜縣稻葉郡島村にして、明治二十九年生る、當年四十歳也。學究的好箇の臨床家として、其の專門的學識は勿論、多年の經驗と共に臨床的手腕今や壯熟の域に入り、只管診療界の爲め精進しつゝあるは多とす。淸淡にして名聞を願はず、利祿を求めず、一意專心、唯だ至誠以て其の職務に勵み、勵精恪勤の人として內外の信望を博す。宇治山田市八日市場町に住す。

◇

桑原　良一　△岡山縣兒島郡味野町に耳鼻咽喉科專門を以て名盛を博せる桑原良一博士あり。學系は岡山醫大に屬し、現代耳鼻咽喉科界の泰斗、岡山醫大教授田中文男博士の愛弟子にして、恩師の指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる新進の名醫博として其の手腕を認めらる。久しく母校にて學術の研鑽と共に實地の經驗を積み、教室を退いて診療界に躍進するや、獨特の手腕を振ひ、拮据黽勉、孜々營々として獨自の地盤を開拓して、年次堅實なる發展振りを示しつゝあり。

△博士は岡山縣立第一岡山中學校、六高を經て、昭和四年岡山醫大を卒へ、引續同大學副手として附屬醫院耳鼻咽喉科教室に勤め、同七年任同大學助手、同年九月母校より學位を受領す、次で現住地にて開業せり。

△主論文は「口蓋扁桃腺内ニ於ケル放線狀菌ニ就テ」にして二篇より成る、參考論文は、(1)小兒口蓋扁桃腺並ニ咽頭扁桃腺ニ於ケル放線狀菌塊ニ就テ、(2)口蓋扁桃腺ト「アクチノミコーゼ」、(3)口蓋扁桃腺窩穴ニ見ル重層甃毛上皮ニ就テ、(4)扁桃腺囊腫ニ就テ、(5)聲脣ノ先天性上皮囊腫ニ就テ、(6)總頸動脈破裂ヲ來セル食道周圍瓦斯蜂窠織寇ノ一例なり。

△岡山市五番町の出身、明治三十七年生にして、當年未だ三十有二歳の少壯也。學究的臨床家として當年の意氣を以て起ち、努力奮鬪日も尙足らざるの概を示す。而かも年齒未だ年少なれば、輝しき學位の前途は多事益々多望にして博士の將來を語るに餘裕綽々たり。有爲の新人物として向後の活躍を待つや切也。殊に特筆すべきは博士の發表せる論文中「放線狀菌ノ研究」は著名にして學界に重要せらる、本論文は博士會心の著作にして、博士の最も得意せるもの也。研究以外業餘の趣味としては運動殊に庭球を好む風あり。

◇

窪田主一　△九州醫學專門學校教授にして同附屬病院耳鼻咽喉科醫長たる窪田主一博士は、九州帝大系耳鼻咽喉科界の耆宿、現名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師の親しき指導を受くること多年、又た九大教授武谷廣博士に師事して內科學を研究せる結果、母校より學位を得たる、所謂九大派の一新勢力たる名醫博也。該博なる學識と共に臨床的實驗に富み、而も圓熟せる手術的快腕に至りては自他共に許す所、今や斯科の大家として其の手腕を認められ、診療界の爲め努力精進しつゝあり。孺て一たび學生指導の任に當るや、平素の寡默吶辯に似もやらず、熱辯滔々學生をして理解せしめざれば已まざる所、他の追隨を許さずとは、門下生の評なり。

△博士は中學迄は鄕里村上にて修め、四高を經て、大正三年九州帝大醫科大學卒業後、直ちに同學耳鼻咽喉科教室に入り久保教授の指導を受け、次て後一年武谷內科に入り武谷教授の指導を受く、其後八幡製鐵所病院耳鼻咽喉科醫長となり、居ること五年、九州醫專の設立せらるゝや聘せられて同校教授となる、昭和七年九月母校にて學位受領、以て今日に至る。學位論文は「外鼻ノ計測的研究、特ニ鼻中隔異形ト顏面骨骼トノ關係ニ就テ」にして副論文なし。

△博士が追憶としての感想に曰く「現代の學界に於ては實力よりも肩書とか資格とかに重きを置き過ぐる傾向がありはしませんか知ら、私が鄕里の村上中學に居つた時分のことですが、村上の人で藤山鎭太郎先生と云ふ學者がありました、先生は漢文歷史には造詣深く、鄕里村上の沿革史などには隨分精進して居られたものです、從來村上には私學校（中學程度）と云ふのがあり舊藩士の子弟を養て居つたので、先生は其校長をして居られたのですが村上に縣立の中學が出來るに及んで聘せられて村上中學の先生となられました所が、惜哉先生には中學教諭たる資格がなかつたので囑託であつた譯です、夫で先生より實力はなくとも資格のある所謂教諭、先生の下風に立たるゝのを不本意否な寧ろ憤慨してをられたのが、私達少年の眼にも立つた樣に思はれます、夫で私達の卒業後先生は遂に憤慨の餘り中學教員の檢定試驗を受けられたそうですが身體に無理がいつた爲ですか健康を害はれ遂に早世せられました、實に惜しいことです、私達は寧ろ藤山先生の學力と當時の試驗官の實力と何れか勝れたるかを疑ふものであります、斯くの如き學者を遇するの道を知らざるの甚だしきものではありませんか、惜しき村上の至寶は無慘にも碎かれて了つたのです、之は昔の話ですが現今の學界にも此弊風が依然として存在する樣です」云々。

△博士は新潟縣岩船郡村上本町窪田玄辰長男、明治十九年生る。年壯銳氣、學究的溫厚の學者にして、又た好箇の臨床家たり、其の輝しき閱歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。賦性高潔にして事に當るや熱意と熱情とを以てす、併し學生の指導に當り、博士の長所たる餘り熱心と親切とが過ぎて、却つて不良學生の爲め嫌はれることなしとせず、以て博士の眞劍味あり熱心振りを察せられ、同時に其の崇高なる人格を敬慕せらる。圍碁其他室內遊戲を業餘の趣味とす。久留米市櫛原町一丁目一ノ四に住す。

◇

增田芳次　△近來私學の一勢力たる慶大派は新進の人物に富む、玆に紹介品隲せんとする、東京市向島區吾嬬町西六ノ一〇七增田耳鼻咽喉科增田芳次博士の如きも、亦た此の勢力圈内に逸すべからざる少壯の名醫博たるに耻ぢず。卽ち博士は昭和三年慶大醫學部出身の新智識にして、耳鼻咽喉科を以て立ち、母校より學位を獲得せる後ち、慶大附屬病院耳鼻咽喉科教室に勤め、孜々として研究に沒頭しつゝありしが、一度び教室を勇退して以來、診療界に躍進して獨特の手腕を振ひ、誠意誠實以て仁術の最善を盡しつゝ獨立の舞臺に活躍し、診療手術の好評と相俟つて年次堅實に發展しつゝある前途や囑目に値す。

△博士は昭和三年慶大醫學部を卒へ、直に同校耳鼻科教室に助手として入り、同四年七月大阪高等醫學專門學校耳鼻科講師に赴任、同七年七月まで同耳鼻科、病理兩教室に於て研究し、滿三ケ年母校慶應と大阪高醫の爲になす所あり、同年八月より再び母校に助手として勤務の傍ら研究に從事し、同七年十月母校より學位を受領す、其後辭職して開業今日に至る。主論文は「喉頭ノ癲性變化並ニ間質纖維ノ態度ニ就テ」にして、參考論文は「咽頭扁桃腺ノ病理組織學的研究」前篇、後篇の外五篇あり。

△感想に曰く「大阪高等醫學專門學校が完成した始めての學位だ母校の川上、小此木教授等の御教授もあつたが、高醫の江口、山崎兩教授の御指導に深謝してやまない」云々、子弟情調の溫かさを想はしむ。博士は埼玉縣北埼玉郡下忍村の人にして、明治卅一年生なれば、年齒未だ三十有八歳也。少壯の意氣潑剌として今も猶研究心に富む、開業日尙淺きも、拮据勤勉、刀圭甚だ多忙を極めつゝあり。賦性快活、寬厚能く人を容れ、恬澹として能く話し好感を與ふ、また人に對するに應答禮を以てし、時務を見るに同情と理解とを以て處理す。學究的溫厚の紳士として其の眞摯なる態度は人に親しまるゝ德を有す。

◇

山下憲治　△臺灣總督府臺北醫院耳鼻科醫長兼臺北醫專教授として、耳鼻咽喉科學を擔任しつゝある山下憲治博士は、京大系の新進にして、恩師星野貞次博士に就きて耳鼻咽喉科學を、同舟岡省五博士に就きて解剖學を研究して、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。殊に博士の年少二十八歳を以て學位を得たるは近來稀に見る所にして、頭腦の明晰と潑剌たる研究心の旺盛なるを想はしむ。而かも未だ少壯にして精研に餘念なき前途は洋々として、將來有爲の學究的人物として囑望せらる。

△博士は鹿兒島一中、七高を經て、昭和三年京都帝大醫學部卒業後、直ちに耳鼻咽喉科教室に入る、同年五月任同學部助手、昭和五年二月大學院入學（特選給費學生）、同六年九月文部省自然科學研究奬勵金を受く、同七年三月京都帝大醫學部講師となり、同年四月大阪女子高等醫學專門學校教授に任ぜらる、同年十二月京都帝大より學位を受領す、同九年六月現職に赴任す。

△主論文は「顳顬骨蜂窩ニ就テ」にして獨逸文六篇より成る、參考論文は、(1)耳石形成機轉ニ就テ（獨文）、(2)耳性脊髓合併症ニ就テ、(3)迷路周圍及岩樣骨錐體尖端蜂窩化濃ニ就テ、(4)人間ノ音響性耳殼運動ニ就テ、(5)消化性潰瘍ニ由ル瘢痕性食道狹窄ノ一例、(6)「ヤトコニン」ニヨル淋巴腺結核治療等なり。論文中「顳顬骨含氣蜂窩ノ解剖及ビ其臨床的手術學的意義」は博士の最も得意とするものなり。

△感想に曰く「醫學的論著は每月每月山の如く產生せられるが、內容の充實した眞面目な研究は比較的少い。殊に長年月を要する如き業績の發表は甚だ寥々である。之れは現今の醫學研究の大部分は單に博士獲得の手段であつて數年間に小器用にまとめ上げるからである。研究室を辭してから後にも診療の余暇を割いて自己の題目に就て研究を續行する學究が今少しく多くあつてもよいと思ふ。しかし之は望み難い事だから、博士號授與を論文のみならず、一定年

間の研究と其研究經過報告（まとまつた成績に達せぬ場合でも）を條件とすればよい。後進の研究者が之を續行する事にすれは之が重つて大きな業績が出來上り、此所に世界に誇る日本醫學が出來るだらう」云々。

△博士は鹿兒島市加治屋町山下平藏次男、明治三十八年生る。年齒未だ三十有一歳にして少壯の意氣に燃え、向學の精神欝勃として禁ぜざるものあり。其の今日ある閲歴は躍如として輝き、今は學生の指導と自己の研究に沒頭して亦他事を顧みず、其の態度の眞劍にして熱あり力あるは、博士の將來を表徴するものとして更に大に期待せらる。人と爲り穩健にして、志操堅實、清淡にして功名を求めず、恬澹として衒はず、人を容れ克く學生を愛撫する點は、博士の長所と見るべきか。若し强ひて言はしむれば、眞正直にして交際下手の傾きなしといへず。趣味としてはスポーツを好む。山下秀之助醫博は叔父（父の弟）に當る。臺北市東門町六に住む。

◇

梶浦 毅四郎　△朝鮮釜山府立病院醫長にして耳鼻咽喉科を擔任しつゝある梶浦毅四郎博士は、九州帝大の出身にて、現九州帝大名譽教授久保猪之吉博士の門弟中の新進として知られ、大學院在學中恩師久保、小川兩教授指導の下に研究の結果、母校より學位を獲得せる少壯の名醫博也。

△博士の感想に曰く「特に朝鮮に來り衞生的設備の不完全なるを認むると共に、一般人士に衞生學並びに豫防醫學に對する知識の普及を計る事急務なりと痛感せり。醫者として醫學の發達進歩に貢献すべく患者の治療に從事するは勿論なるも、更に百尺竿頭一歩を進め衞生學、豫防醫學の普及により疾病を未前に防ぎ健全なる身體精神を有する國民を作り上げる事なりと思惟す」云々。

△博士は昭和三年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに九州帝國大學耳鼻咽喉科副手として久保猪之吉教授に師事す、昭和五年四月同大學大學院に入り、久保（耳鼻）、小川（細菌）兩教授指導の下に、粘液性連鎖狀球菌の臨床的並びに細菌學的研究をなす、昭和七年五月釜山府立病院耳鼻科長として赴任す、同年十二月九州帝大にて學位を授與せらる。主論文は『「ムコーズス」中耳炎患者ヨリ分離シタル粘液性連鎖狀球菌ノ研究』にして、參考論文として、(1)ガアレル氏双眼寫眞機ニ依ル喉頭寫眞撮影法ニ就テ、(2)「ムコーズス」中耳炎の二篇あり、其他論著夥多。

△出身地は愛媛縣新居郡西條町にして、明治三十五年梶浦鎌次郎の四男に生る、當年三十有四歳也。勵精恪勤の人にして、其の診療に臨むや當年の意氣を以て熱心甚だ力め、誠意親切を以てす。賦性溫厚篤實、學究的少壯の紳士としての品格を具へ、又た臨床家として相應しき性格の持主たるを思はしむ。研究以外にはスポーツを趣味し、特に水泳乘馬を好み、又音樂を愛好す。釜山府土城町二丁目十六番地に住す。

◇

金野 巖　△新潟醫大派の一新勢力と見るべき新進の耳鼻咽喉科學者たる金野巖博士は、現に岩手醫專教授として耳鼻咽喉科學教室の首席を占め、學生指導の爲め多年の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、諄々と說き懇々と講義す、其の態度の眞摯にして熱あり力ある所に一段の貫祿を有し、常に學生間に其の英才と德とを敬慕せらる。氏の醫專學府への躍進は獨り學内の中堅たるのみならず、今や耳鼻咽喉科學界に重きを爲す新進教授としての前途を更に期待せらる。

△博士は岩手縣立盛岡中學校（第四學年修了）、新潟高等學校を經て、大正十五年三月新潟醫科大學卒業、同年四月財團法人岩手病院醫員となる、同年同月耳鼻咽喉科學研究の爲東京帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室に派遣せらる、昭和二年四月岩手病院耳鼻咽喉科部長を命ぜらる、同四年四月岩手醫學專門學校教授に任ぜられ、耳鼻咽喉科學擔當を命ぜらる、同五年六月内地留學を命ぜられ新潟醫科大學に於て鳥居教授指導の下に研究に從事す、同七年四月歸任、同八年一月新潟醫大にて學位を授與せらる。斯間、東京帝大教授增田胤次、新潟醫大教授鳥居惠二、新潟醫大教授川

村麟也博士等の指導を受け專ら耳鼻咽喉科學を研究す。

△學位主論文は「可性化膿性腦膜炎ノ診斷及治療ニ關スル研究」にして、參考論文は「正常聽力ノ時間的動搖ニ就テ」なり、其他論著夥多あり。

△博士は岩手縣東磐井郡千厩町北方の人、金野九十郎の長男にして、明治三十六年生る。學究肌の少壯紳士にして、年齒未だ三十有三歳、潑剌たる研究心を有し、研究と醫育とに趣味を集中して他に道樂を求めず、研學切磋、孜々として倦まず、希望ある將來に期する所大なるものあるは、博士の前途を語るに綽々たる餘裕を存す。賦性謹直にして溫厚、謙遜にして衒はず、物事に熱心にして意志强固なり。盛岡市內丸三六に住む。

◇

吉原大輔　△佐賀縣立病院好生館に耳鼻咽喉科部長として吉原大輔博士あり。博士の嘖々たる名聲は九州診療界に聞くや既に久矣。博士や十數年一日の如く勵精恪勤、孜々として倦むことを知らず、至誠以て民衆治療界の爲め努力貢獻せる功績は言はずもがな、今以て不斷の精進を續け大に將來に俟つ所あらんとする、稀に見る勤勉熱誠の士也。氏は九大系耳鼻咽喉科界の權威現九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師指導の下に斯學を研鑽すること多年、又副鼻腔の病理學的研究は、九大教授田原淳博士の指導を受け、母校より學位を獲得せる所謂九大派の名醫博として其の學識手腕を認められ、今や九州診療界に於ける斯科界の重鎭として最も矚目せらる一人物たり。

△博士は七高造士館（大正五年）を經て、大正九年七月九州帝大醫學部を卒へ、同年十月より同十年九月迄同學部第一外科教室に外科學研究、大正十年十月より耳鼻咽喉科教室に歸り久保教授の下に指導を受く、同十一年六月現佐賀縣立病院に赴任、昭和四年二月より學術研究の爲佐賀縣命を以て九大醫學部に派遣せられ、耳鼻咽喉科學及び病理學教室に研究、同六年三月研究を了して現病院に歸任す、同七年六月九州帝大にて學位を受領し現在に至る。

△學位主論文は「副鼻腔ニ於ケル囊腫ノ發生ニ就テ」にして、參考論文は、(1)食道異物ニ就テ、(2)「ヂフテリー」ニ關スル臨床的觀察、(3)官能性障碍ニヨル氣管套管拔去困難症ニ就テ、等なり。就中特意とする所は「副鼻腔問題」なり、其他論著中「上顎竇蓄膿症」に關するもの、及び「食道異物」に關するものは最も重要のものと見るべき也。

△感想に曰く「我國は明治維新以來諸外國と交通し、海外の文明を吸收するに孜々として怠りなく、玆幾十年の久しきに及び、今や世界の舞臺に大飛躍を演ずるに至つた。一般文物の發達と共に我邦醫學も亦未曾有の進運を遂げ、正に歐米醫學を凌駕すとも劣らざるの域に達した。さり乍ら醫學の奥底は究めて悉し難きものがある。方今概ね歐米醫學に心醉せるが如きも、彼の東洋固有の醫學、卽ち和漢醫學の眞髓は又靈妙であり、民間醫學と雖決して輕視すべきに非ず。宜しく比較的等閑視せられたる此方面を攻究して、更に歐米醫學とも對照し、長短相補ひ、有無相通じ、世界醫學の殿堂を築くべきだ。これ實に人類救濟の大使命を全ふする所以と思ふのである」云々。

△博士は三重縣名賀郡比奈知村大字瀧之原の人、吉原熊太郎の長男、明治二十五年生にして、當年不惑に入る四歳也學究的溫厚の紳士にして、勵精恪勤の士を以て稱せらる。その今日あるは既に氏の閲歷よく之れを語りて餘蘊なからしむ。性格より打診すれば、頭腦緻密にして何事にも用意周到、萬事に几帳面の方なり、人情味に富み、特別涙もろき方にて可愛想のものに對しては同情と愛とを以て接す、又人に對するに應答禮を厚うして時務を缺ぐことなし。以て其爲人を窺知すると共に、高邁なる人格を景仰す。研究以外の趣味としては圍碁（二、三級位）を愛し、其他景勝の地に旅行を好み、又芝居も好む。殊に特筆すべきは、氏は子供の時分より書に堪能にして、よく展覽會等に出品して愛賞せることありし點なり。有爲の臨床家として猶春秋に富む、折角の自重加餐を祈るや切也。佐賀市水ケ江町中橋小路一八一に住む。

◇

遠藤秀雄　△大阪市東區淡路町四ノ四六に新興せる遠藤耳鼻咽喉科院あり、遠藤秀雄博士の經營せる診療所にして、新裝せる內部の設備整ひ、博士自ら日々診療に勵しみ、誠意誠實を以てモットーとして醫は仁術也の本分を盡すべく努力精進しつゝあり。氏は愛知醫專出身の耳鼻咽喉科學者にして、大正十年卒業後、新潟赤十字社病院（元長岡市病院）耳鼻咽喉科醫長を勤め、その後大阪大同病院耳鼻咽喉科醫長を歷任して、昭和七年十二月辭職、現住所に於て耳鼻咽喉科院を獨立開業せり。斯間、昭和六年四月京都帝大にて學位受領、斯科界近來の名醫博として名聲を馳せ、今や多年蘊蓄せる學殖と相俟つて實地の經驗に富み、獨特の手術的技能を發揮するに獨自の立場に在り、開業拮据日尙淺きに拘はらず、卓越せる診療手術の好評は益々民衆の人氣を獲得して漸次地盤を開拓し、近來著るしく堅實なる發展振りを示しつゝある前途は大に矚目に値す。

△學位主論文は「第八對神經節細胞ノ病變ニ對スル網狀織內被細胞系統ノ態度ニツイテ」にして、他に論著夥多あり本論文に對する學問的價値に就ては既に學界に定評あれば玆に贅せず。氏は大阪市の人遠藤三吉の嗣子にして、明治二十八年生る。嚴父三吉氏は辯護士にして、大阪成器商業學校々主兼校長として名聲を馳せ、德望家を以て知らる。博士や嚴父の衣鉢を承けて篤實溫厚、禮儀節文を重ずる人、平生時務を缺ぐことなく、患者に接し人に對するに誠實親切を以てす。稀に見る篤學者にして、學究的溫厚の紳士として高邁なる品格を備ふ。年齒漸く不惑に入る一歲、學識、手腕共に圓熟の域に入り、臨床家としては今が最も活躍の全盛時にて、一般社會より最も重望せらるゝ年輩に在り、博士の得意や想ふべき也。而かも春秋猶豐富にして、前途洋々たるの秋、折角の努力奮鬪を望むや切也。

◇

宮本種美　△岡山醫大派の名醫博として其の學識手腕を認められ、自己專門の耳鼻咽喉科を以て起ち、今や斯科新進の大家と仰がれつゝある、宮本種美博士の經營主宰する宮本耳鼻咽喉科醫院は、德島縣三好郡池田町本町に在りて其の地方を風靡するの盛況を呈す。氏は岡山醫大出身の耳鼻咽喉科醫として錚々たるものにして、多年の經驗に富み獨特の手腕識見を有す。大正十三年大學卒業後、直ちに母校の耳鼻咽喉科教室に入り、田中文男教授指導の下に實地研究に從事し、昭和六年七月岡山醫大にて學位を受領せり。

△學位主論文は「藥劑中毒ニ因ル聽器障碍ノ病理ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)迷路內淋巴腺ノ由來ニ就テ、(2)聽神經節細胞內ノ色素顆粒ニ就テ、(3)聽神經節細胞內ノ脂肪顆粒ニ就テ、(4)海猩聽器ニ見タル前庭副終末裝置ニ就テ、(5)耳下部ヨリ發生シテ頭蓋內竝ニ內耳ニ侵入セル癌腫ノ一症例等なり。

△氏は香川縣綾歌郡飯野村の人、明治三十四年生れにして、當年未だ三十有五歲也。多年恩師田中教授に師事して實地の研究に勉め、臨床的技能に長じて今は手腕漸く壯熟の域に入る、殊に氏は精力主義の人にして、日夜診療に努力勵精して倦むことを知らず、其の熱誠振りと、患者に對する態度の眞摯にして懇篤なるは極めて評判良く、篤き信望を博する所以と見るべき也。趣味としては醫療と研究との外何等の道樂なく、一意專心、唯だ誠意誠實を以て其の事に一路邁進し、以て自己の天職なるを樂しむの仁也。賦性溫厚篤實なる紳士としての氣品を備え、學究的有爲の臨床家として、其の高邁なる爲人を敬慕す。

◇

漆原滋雄　△日赤岐阜支部斐太病院に耳鼻咽喉科醫長として漆原滋雄博士あり。氏は金澤醫大（專門部卒業）系の耳鼻咽喉科臨床家として一家を成し、斯科界の泰斗京大敎授星野貞次博士に就て研究の結果、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博として其の學議、手腕を認められ、今や斯科新進の大家と仰がれ、當地方診療界に逸すべからざる一人物として囑望せらるゝ所あり。而かも年齒未だ少壯にして、潑剌たる前途は猶頗る春秋に富む、學

究的有爲の臨床家として博士の將來を語るに綽々たる餘裕を存す。

△博士は大正十四年金澤醫大醫學專門部卒業、直ちに同大學須藤教授指導の下にありて醫化學の研究をなす、昭和二年十一月京都帝大醫學部耳鼻咽喉科教室に入室、同三年九月同科研究室に入る、同六年四月日赤岐阜支部斐太病院耳鼻咽喉科醫長として赴任し現在に至る、斯間同七年七月學位を受領す。學位主論文は「迷路ト體溫」にして、參考論文は「濕熱中樞ト前庭迷路機能トノ交渉ニ就テノ實驗的研究」外九篇あり。

△博士は香川縣木田郡三谷村漆原文五郎の三男にして、明治三十三年生る。學究的溫厚の紳士にして、高邁なる品格を備え、當年未だ三十有六歳也。臨床家としての經驗に富み、蘊蓄せる學識と相俟つて手腕漸く壯熟し、少壯の意氣益壯にして、今は最も活躍奮鬪の全盛時代に在り。恪勤精力主義の人にして、一意專心、至誠以て公に奉ずる信念の下に、不斷の勵精努力を續け、民衆より多大の信望を博しつゝあり。性來謙遜家にして、偏に恩師先輩の助力を說き淡々として己を虛うして自己の識學を衒はず、人に對し患者に接するに誠意誠實を盡し、眞摯にして能く親切を以てす。趣味としては研究と醫療そのものに集中して他に何等の道樂を求めず、拮据黽勉、精研に餘念なきが如し。折角の努力奮鬪を望むや切也。岐阜縣大野郡大名田中花里に住む。

◇

松森明　△前の吳海軍共濟組合病院耳鼻咽喉科々長として、多年海軍診療界に活躍しつゝありし松森明博士は、曩年辭職後民間診療界に躍進して自己專門の耳鼻咽喉科を標榜して起てり。氏の獨力經營せる松森耳鼻咽喉科醫院は、吳市本町通七丁目に在りて內部の設備を新裝し、開業拮据未だ數年ならざるも、氏が熱誠なる活動振りと、博士獨特の手術的技能の好評とは、兩々相俟つて遠近の人氣を吸收し、門前常に賑ひ、近來著るしく盛況を極めつゝありとの評判也。

△博士は福井中學校、山形高等學校を經て、昭和三年岡山醫科大學を卒へ、同六年十二月同大學耳鼻咽喉科教室助手勤務、爾來吳海軍共濟組合病院耳鼻咽喉科々長として勤務、昭和七年十一月岡山醫大にて學位を受領し、其後職を辭し現住地にて開業せり。斯間母校の恩師田中文男教授の指導を受け專ら耳鼻咽喉科を研究せり。

△學位主論文は「內耳結核ニ就キテノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)耳血腫ノ病理ニ關スル實驗的研究、(2)耳性化膿性軟腦膜炎患者ニ於ケル岩樣骨ノ組成並ニ病變ニ就テ、(3)耳性化膿性軟腦膜炎患者ニ於ケル迷路病變ニ就テ、(4)耳性顳顬葉膿瘍ノ二例、(5)鉛中毒ニ因ル聾兒ノ二例、等なり。論著中の「內耳結核ニ就テノ實驗的研究」は氏の會心の作にして、最も得意とせるもの也。

△氏は福井縣足羽郡酒生村梅野の人、松森佐一の三男にして、明治三十四年生る。學究的少壯の紳士にして、年齒未だ三十有五歳也。スポーツを趣味し、身體强健にして少壯の意氣に燃ゆ、樂天家にして厭味なく、天眞爛熳、恬澹として朗快なるところ人に好感を抱かしむ。技術方面にては多分の經驗を有し、手腕漸く壯熟して最も得意時代に入り、臨床家として相應しき性格と相俟つて多大の聲望を博し、前途益々向上發展の道程に在り。和歌山市開業（耳鼻科）

御前慶造博士とは近親の間柄なり。

◇

坂元直夫　△金澤市西町三番丁八に坂元耳鼻咽喉科醫院あり、院長坂元直夫博士の經營せる斯科專門醫院にして、病室十、レントゲンの設備あり、其他內容充實す、博士自ら日々診療に從事し刀圭甚だ多忙を極む。博士は九大系の學流を汲み、耳鼻咽喉科界の權威現九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、學位は金澤醫大より獲得せる名醫博として其の學識手腕を認められ、今や金澤診療界に於ける斯科新進の大家と仰がれ、博士獨特の手腕と相俟つて多大の信望を博し、好評嘖々の裡に日增繁盛を續け、堅實なる地盤を有す。

△博士は七高を經て、昭和二年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同大學耳鼻咽喉科教室副手囑託、同年十月金澤醫大助手に任命、同四年四月講師に進み、同七年五月辭職、現住所に開業、同七年十一月學位受領、以て今日に至れり。斯間九大教授久保猪之吉博士、元金澤醫大教授久保護躬博士、同山川强四郎博士、金澤醫大病理學教授杉山繁輝博士等に就きて研究、耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「內耳生體染色ノ實驗的研究」にして、三篇より成る。參考論文は(1)耳性小腦膿瘍ニ就テ、(2)急性中耳炎ニ繼發セル誘導性漿液性內耳炎ニ就テ、(3)鼓膜裂傷ノ鑑定一例、(4)鼻中隔癌腫ノ治驗例等なり。

△宮崎縣都城市姫城町、坂元重俊の三男にして、明治三十四年生る。多年學究生活に沒頭し、一度びは講師として教壇に起ち、將來を囑望せられつゝありしが、象牙の塔を勇退し實地診療界に起ちて以來、日尙淺きも、醫は仁術也を以て任じ、一意專心、唯だ醫療に渾心の身力を盡し、孜々營々として奮鬪的活動を續け、一路邁進して亦他事を顧みざるの概あり。年齒三十有五歲にして、少壯の意氣と共に手腕晰く壯熟し、不斷の熱誠努力と相俟つて篤き聲望を博しつゝあり。而かも猶春秋頗る豐富なれば、潑剌たる前途の大成は更に大に期待すべきものあるべし。將來有爲の臨床家として玆に推奬し敬意を表す。

◇

原田雄吉　△縣立鹿兒島病院に耳鼻科部長として名聲を馳せ、縣下診療界の爲め努力奮勵しつゝあるは原田雄吉博士也。博士は京都府立醫專出身の耳鼻咽喉科學者にして、特に喉頭聲帶運動に關する疾患に關する領域に就て獨特の手腕を有し最も得意とす。學位は九大より獲得せる名醫博として其の學識手腕を認められ、今や九州診療界に最も囑目せらるゝ中堅人物と爲す。

△大正六年京都府立醫專卒業、同年十二月一年志願兵として步兵第十一聯隊入營、八年三月陸軍三等軍醫に任官、同時に正八位に叙せらる、同八年一月より九大小兒科醫員となり、同年十一月辭して鄕里にて小兒科開業、同十四年三月九大耳鼻科醫局に入り臨床研究、昭和二年七月函館室本病院耳鼻部長として赴任、同四年九月より九大專攻科に入學研究に從事し、同八年三月學位受領、昭和七年六月縣立鹿兒島病院耳鼻科部長として赴任今日に至る。

△學位主論文は「喉頭廻歸神經吻合ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)アイヌ人ニ於ケル耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨床的觀察、(2)アイヌ及函館學齡兒童ニ於ケル懸應垂披裂症ニ就キテノ統計的觀察、(3)四肢運動障害ヲ來セル稀有ナル鼻性反射神經症ノ一例、(4)再發性兩側扁桃腺周圍膿瘍ニ於テ兩側摘出後複雜ナル合併症ヲ伴ヒタル一治驗例、(5)アイヌ雜談、(6)届出「ヂフテリー」患者ト知ラズシテ診療セル時吾人臨床醫家ハ如何ナル處置ニ出ヅベキカ、(7)上顎竇內遊離骨片ニ就キテ、其他十一編あり。主論文中殊に迷走神經より回歸神經終末に至る迄の喉頭聲帶開大、閉鎖神經束の分離及諸實驗に成功せること、並に乳兒脚氣及其の類似症に於ける嗄聲成立機轉に關する立證は注目に値す。

△「現在醫業の進步發達は實際驚異に價して各方面への研究至れり盡せりの感ですが、只一つ實際醫學卽ち臨床上の治療方面に至りては簡單なもの程その治療難く眼科に於ける開眼術の如く、我が領域殊に聾又は難聽者に對しても、之に比敵する晴天霹靂の施術又は補聽器の發明なきかと嘆ぜらるゝもの多きを遺憾とす」云々とは、氏の感想の一片なり。

△山口縣吉敷郡秋穗西本鄕の人、明治二十五年生る、年齒今や不惑に入る四歲也。讀書家にして精研修養克く讀む方なり、又旅行を好み暇を得れば之を樂しむ。何事にも熱中する代りに寢食時間をも忘るゝ事あり、診療に臨む態度の熱意あるほども亦窺はる。米子病院產婦人科醫長西島義一博士及び大阪築港病院相原義一博士とは兄弟にして、兄弟三博士としての美談も旣に世間に喧傳し、世人より羨望せらる。著者は更めて三兄弟の健康と成功とを祝

し敬意を表する者也。鹿兒島市淸水町一〇に住む。

◇

山本哲　△開業二十周年新築落成記念を擧行せる鹿兒島縣薩摩郡川內町に在る耳鼻咽喉科山本病院は、院長山本哲博士の經營にして新裝成り、威風堂々たる現代式洋風の建物也。開業既に古く、多年聲望を其の地方に扶植して多大の好評を博し、今や名實相伴ふ名病院として拔くべからざる勢力を有す。博士の出身校は長崎醫專にて、現九大名譽教授久保猪之吉博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻し、學位は九州帝大より獲得せる斯科界の大家として錚々たるもの也。

△博士は明治四十二年長崎醫專卒業、同年一年志願兵として久留米聯隊に入隊、兵役を終へて後、東京菊池耳鼻咽喉科病院に勤務、二ケ年の後同病院を辭し、現住地に於て專門開業今日に至る、其間昭和五年六月より同七年十月迄九州帝大醫學部耳鼻咽喉科教室に於て臨床の外、別項問題に就て研鑽し昭和八年三月學位を得。

△學位主論文は「前額竇性腦膜炎ノ實驗的研究」にして、論文中主要の點は鼻性頭蓋內感染特に前額竇よりの感染經路並に感染機轉を闡明した點にあり。參考論文は、(1)軟口蓋麻痺ノ療法ニ就テ、(2)腫脹性鼻炎ノ療法特ニ「マグネシン」ノ効果ニ就テ、(3)上顎竇ヨリ下眼瞼結膜ニ現ハレタル異物竹片摘出例ニ就テ、(4)氣管及氣管枝異物（杉葉、川ゑび）二例、(5)約十年間鼻腔ニ介在セル異物（キルク）及ビ之ニ由テ來レル後鼻孔閉鎖ノ手術式ニ就テ、(6)歐氏管逆通氣療法ニ就テ等なり。

△感想に曰く「今や世を擧げて非常時〳〵の聲を聞くが之はたゞに國際關係、經濟狀態のみの言葉ではない、文明逆轉の兆あることを云つておるのである、我が醫學界に於ても確かに其兆が濃厚であると云へる。一例を擧げて云へば保健、簡保から進んで國民保險も布かれようとしておるのも、其一つで之は醫療普及の上から云へば誠に結構なことではあるが一面確かに醫學の進歩を阻害する方法であると觀るべきである、何となれば現に保健に於て感ぜらるゝ如く治療が面倒で意の如くやれぬと云ふことは、此の種の治療に嫌氣がさし易く勢ひ研究的治療法を避けて無難な平凡療法となつてしもうので治療學上進歩と云ふことがなくなつてしもう恐れがあることである。之は保險加入者の治療のみではなく、之が習性となつて一般患者の治療も自然斯かる狀態になつて來るのは明らかなことで醫學進歩の上から觀て識者の大に考ふべき點ではあるまいか。次に又博士濫造と云ふ言葉は終には博士制限、廢止、或は其他の方法で博士の價値を低下する方法となつて來るかも知れぬが、之は靑年學徒好學の目標を取り去るようなもので之も大に考へておかねばならぬことゝ思ふ」云々。

△鹿兒島縣薩摩郡高城村の人、山本家治の長男にして、明治十八年生る、學究的溫厚の紳士也。臨床家として多年奮鬪せる跡を追想せば、其の今日ある學識、手腕の練達玉成せるもの當然と云ふべく、今や壯齡漸く熟して一段の貫祿を備へ、最も重望せらるゝ全盛時と見るべし。讀書家にして書見を唯一の趣味とし、今猶研究に對するに甚だ熱心にして、精研修養相俟つて克く勉む。又弓道の達人だけに身體强健にして元氣益々旺盛也。人と爲り穩健篤實にして、誰彼を問はず親切なるは、其の德望の歸因する所以たるを見逃すべからず。東京西巢鴨に開業の鵜木秀二博士は從弟に當る。

◇

岩田龍生　△長崎醫大派の一新勢力と見るべき新人岩田龍生博士は、近代耳鼻咽喉科界の臨床家として錚々たるもの也。博士の獨力經營する岩田耳鼻咽喉科醫院は現に延岡市北小路に在り、新裝せる結構と相俟つて內容充實し、開業早々躍進せる奮鬪振りと、經營のモットーとする誠意誠實と、博士獨特の新手腕とは、兩々相俟つて遠近の人望を吸收し、漸次隆興の氣勢を示しつゝある前途の發展は頗る囑目せらる。

△博士は大正十四年長崎醫科大學專門部卒業、昭和四年長崎醫科大學解剖學教室助手、同八年同大學耳鼻咽喉科教室勤務副手、同年九月長崎醫大にて學位授與、同九年九州帝大醫學部耳鼻咽喉科教室勤務、同十年延岡市北新小路にて開業今日に至る、斯間長崎醫大解剖學教授國友鼎博士、及び現九州帝大名譽教授久保猪之吉博士に就きて、耳鼻咽喉科を專攻せり。

△學位主論文は「聽瞻腺ノ發生學的研究」にして、參考論文は、(1)彈力纖維ノ發生學的研究、(2) Zur Frage der trophischen Zentren der Radialisfusern in den Spinalganglien mit Rücksicht auf die Art des innervierten Organ 外三篇あり。

△大分縣大野郡川登村大字清水原の人、岩田直記の二男にして、明治三十五年生る、學究的少壯の紳士にして、年齒未だ三十有四歳也。學究生活を脱して診療界に奮起するや、努力勵精日も猶足らざるの概あり、而かも當年の意氣を以て起ち刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、日進醫學の研究を怠らず、精研修養相俟つて克く勉む。流星は其の號にして、スポーツに趣味を有し、又圍碁に親しむ。將來有爲の資に富む好箇の臨床家としての前途の大成を期待す、折角の發奮活躍を望む。

◇

須小明　△臺北醫專系の一異才にして、九州帝大派の名醫博として四國診療界に躍進せる須小明博士は、曩に高知市町田病院に迎へられて耳鼻咽喉科長の椅子に着き、拮据勵精、孜々として其の職務に忠實を盡し、誠意親切を以て仁術の本分を盡すに餘念なく、明快にして犀利なるメスの好評と相俟つて内外の信望を博し、今や同地診療界に最も嘱望せらるゝ一人物と爲す。

△博士は大正十五年四月臺北醫專卒業後、一年志願兵として兵役に服務除隊後、母校研究科に入り耳鼻咽喉科專攻、昭和八年十一月九州帝國大學醫學部教授會にて學位論文通過、同九年一月學位受領、同年二月町田病院耳鼻咽喉科長として赴任今日に至る。斯間、上村新一郎教授及び久保猪之吉教授に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「急性鼻副鼻腔炎ノ腦脊髓液ニ及ボス影響ニ關スル研究、附、鼻性腦膜炎ノ感染經路ニ關スル知見補遺」にして、參考論文は、(1)呼吸困難ト血液ノ變移、(2)舌軟性下痢症例追加、(3)稀有ナル鼻腫ノ一例、(4)人肥大扁桃腺「エキス」ニ關スル實驗的研究、等なり。

△感想に曰く「醫師會員は結束して宜敷僞醫政者を排すべきを痛感す、現醫師會は僞醫政者の爲め壓迫を受けつゝあり」云々。山口縣厚狹郡吉野村の人、須小俊藏の長男にして、明治三十五年生る。學究的少壯の紳士にして、其の今日ある篤學は氏の閲歴に一段の異彩を放ち光彩陸離たらしめたり。而かも年齒未だ三十有四歳にして、光る前途は猶洋々たり。物事に熱中する人にして、意志强固、忍耐力强く、何事にもよらず貫徹的に成遂ぐる長所を有す。一面又同情心に富み餘り人を信じ過ぎる方なり、强ひて言へば或はそれが短所とも見られる、研究以外には自然を樂しむ風あり。前途有爲の資に富む少壯醫博、切に自重加餐を祈る。高知市帶屋町二丁目に住む。

◇

田中一弘　△大分縣立病院耳鼻咽喉科部長田中一弘博士の盛名は、當地診療界に於ける大なる存在として嘖々たり。博士は九大系、耳鼻咽喉科界の權威たる現九大名譽教授久保猪之吉博士の門弟中の新人にして、多年恩師の膝下に親しき指導と薫陶とを受け、學究生活を巣立ちて現職に赴任するや、至誠以て公に奉ずるの信念の下に努力奮勉日も猶足らず、好評の裡に博士獨特の手腕は愈々展び、今は奮鬪活躍の全盛時にて、氏の得意や想ふべき也。

△博士は中學修猷館、五高を經て、九州帝大醫學部に入學、昭和二年同學卒業、直ちに耳鼻科教室に勤務、副手助手を經て、同六年三月講師を嘱託せらる、此の間九州齒科醫學專門學校講師を兼ね耳鼻咽喉科學を講義し、又福岡縣立

聾學校校醫を兼ぬ、同八年十二月現職に轉じ今日に至る、同九年一月學位を授與せらる。

△學位主論文は「日本人聾啞ニ關スル遺傳生物學的研究」にして、參考論文は十一篇あり、聲音言語障害方面や遺傳に關する論文多し。目下久保猪之吉博士監輯「日本耳鼻咽喉科學全書」に「耳鼻咽喉科ト遺傳及體質」執筆中なり。

△福岡市の人、明治三十七年生にして、年齒未だ三十有二歳の年少也。少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として今猶精研に餘念なし。一光は號にして、俳句を能くす。他に道樂を求めず、研究と醫療に趣味を集中して一路邁進する學究的臨床家たる熱誠の士也。賦性溫厚の紳士にして、學生氣分未だ去らず、居常甚だ快活にして人に厚く、功名榮達には恬澹なり、又能く應答禮を重ずる人也。大分市中島浦四條通に住む。

◇

曾木時夫　△當世醫博界中の最年少にして、熊本醫大派の學風に薫陶されたる曾木時夫博士は、現に熊本遞信診療所醫員として活躍し、民衆治療界の爲め努力貢獻する所あり。研究室を勇退後診療界に躍進して以來、日尚淺く、素より未だ特筆すべき功績の著るしきものなしと雖も、勵精恪勤の人として其の職務に忠實を盡し、診療に對する熱心振りと、臨床的手術の好評とは內外の信望を博し、將來有爲の臨床家として最も囑望せらる。

△博士は鹿兒島縣立川內中學校を經て、大正十一年熊本醫科大學豫科入學、昭和四年熊本醫科大學々士試驗合格、直に同大學耳鼻咽喉科教室に入り、副手、助手を經て、同八年七月同大學を辭し、現職に轉ず、其間昭和五年二月より十一月に至る幹部候補生として步兵第十三聯隊入營、後に陸軍三等軍醫に任ぜらる、同九年七月母校より學位を受領す。斯間熊本醫大教授鰐淵源博士に就て耳鼻咽喉科を專攻せり。

△學位主論文は「口蓋扁桃腺剔出ノ家兎骨發育並ニ之ガ內分泌臟器ニ及ボス影響ニ就テノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)「カルミン」ノ咽頭粘膜下注射或ハ一二操作ニ依ル咽頭潰瘍形成ノ「モノチトーゼ」ニ及ボス影響、(2)熊本縣立盲啞學校聾啞部生徒ニ就テノ聾啞ノ統計的並ニ臨床的觀察其一統計的觀察、(3)同右其二臨床的觀察、(4)小腦腫瘍患者ニ見タル側方凝視性特發性頭震盪ニ就テ、(5)鼻前頭管ノ形態學的研究、(6)先天性側頸囊腫、之ニ續發セル胸瘻、喉頭狹窄症並ニ喉頭軟骨軟化ノ一症例、(7)「キニーネ」ニ因ル聽器障碍ニ就テ、(8) Pfaiffer 氏腺熱ニ就テ。

△鹿兒島縣薩摩郡川內町西手の人、曾木吉之進の三男、明治三十七年生にして、年齒未だ三十有二歳の年少也。學生氣分未だ去らず、恬澹として自己の識學を衒はず、舉措甚だ快活にして天眞爛熳たる所、人に親しまるゝ德を有す。研究以外には圍碁を好み、撞球を趣味す。洋々たる前途は猶頗る春秋に富み、益々努力を要するの切なるを思ふの秋希くば小事に拘泥せず、折角の發奮活躍あらん事を、著者は更めて望む者也。熊本市手取本町三九に住む。

◇

一丸輝宏　△大阪市西區靱南通四ノ二五に耳鼻咽喉科を以て開業し、久しく診療に從事しつゝありし一丸輝宏博士は、昭和十年一月都合に依り醫業は令弟加藤哲宏氏に繼承せしめ、故山に歸鄉して悠々たる環境に在り。

△博士は現住地たる大分縣東國東郡國東町の人、明治十七年を以て同地に生る、同四十三年大阪高醫の出身にして、耳鼻咽喉科を以て立ち、爾來大阪市にて開業一般の診療に從事しつゝありしが、斯間大阪帝大醫學部にて研究の結果學位論文「硅酸曹達溶液注射ガ血淸沃度酸値ニ及ボス影響ニツイテノ研究」を完成して、昭和九年十二月大阪帝大より學位を受領せり。

△耳鼻咽喉科臨床家として一家を成し、旣にして成功の裡に幾星霜かの間、開業の傍ら春風秋雨の努力研鑽を續け、獨力貫行して終に克く學位を獲得せる厚志篤學は特筆に値し、立志傳的醫博人物として頂門の一針たる範を示すに足る。博士の年齒今や知命に入る二歳、健康にして元氣旺盛、今は故鄉に錦を飾りて樂天地に在り、氏の得意や想ふべき也。篤實溫厚の紳士にして、謙抑克く自ら持し、學者として衒はず、寬厚能く人を愛し後進を親しむ。大分縣東國

東郡國東町に住む。

◇

池田初一　△九大派の少壯醫博として新進の氣勢を揚げ、今や臺灣診療界に於ける耳鼻咽喉科の新手腕家として重きを爲し、最も嘱目せられつゝあるは池田初一博士也。現に博士は臺灣總督府醫院醫長にして、嘉義醫院に勤務、耳鼻咽喉科を擔任して內外の信望を博す。

△博士は三重縣宇治山田中學校、第八高等學校を經て、昭和五年九州帝國大學醫學部卒業、直ちに同學部耳鼻咽喉科教室に入り、昭和十年迄勤務す、斯間同七年より九年迄大學院學生として研學、同十年一月九州帝大にて學位を授與せられ、臺灣總督府醫院醫長に任ぜられ嘉義醫院勤務を命ぜらる。斯間現九大名譽教授久保猪之吉博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「神經吻合ニ因ル廻歸神經麻痺療法ノ實驗的研究」にして、參考論文四篇あり、其他の論著夥多。

△博士は三重縣志摩郡畔名村の人、池田傳藏長男、明治三十五年生にして、年齒未だ三十有四歲の少壯也。學究生活より實際診療界に奮起して以來、日尙淺きも、拮据奮勵日も猶足らず、一意專心、其の職務に忠實を盡し、至誠以て仁術の爲め努力貢獻する處あり。研究に對する態度は今も猶變らず、精研に餘念なく切磋卓勵甚だ勉むる所あり。賦性溫厚篤實なる學究的紳士にして高邁なる品格を備え、臨床家として相應しき性格の持主也。研究以外には魚釣と園藝とを趣味す。臺灣嘉義市南町に住む。

◇

三宅等　△濟々多士たる朝鮮治療界に躍進して、現在平安北道立新義州醫院に耳鼻科部長とし活動し、民衆より多大の信望を以て、斯科の新進大家として名聲を博しつゝあるは三宅等博士也。博士は長崎醫大派の一勢力と見るべき新智識にして、今や新手腕を發揮して獨特の領域に一路邁進しつゝあり、而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる前途は猶洋々たり。

△博士は松江高等學校を經て、昭和四年長崎醫大卒業、直ちに同醫大耳鼻咽喉科教室に入り、副手より助手、講師となり、同九年十二月依願免官、同十年一月平安北道立新義州醫院耳鼻咽喉科部長として赴任、同年二月母校より學位を受領し今日に至る。斯間故長崎醫大教授小室要博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「鼻疾患臓器ノ化學的研究」にして、(1)下甲介及ビ鼻茸ノ化學的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)口蓋扁桃腺及咽頭扁桃腺ノ化學的研究、(2)耳鼻咽喉科領域ノ疾患ニ於ケル血中「ヒョレステリン」ノ消長、(3)黃疸ヲ誘發セル眞珠腫性中耳炎ノ一剖檢例、(4)慢性上顎竇炎ニ於ケル分泌膿汁ノ硫黃ノ消長(5)聽器結核知見補遺等なり。

△博士は德島縣の人、三宅彌之次郎二男、明治三十四年生にして、學究的少壯の紳士也。研究室を離れて實地臨床家として起ちて以來、日尙淺きも、拮据黽勉、一意專心、至誠公に奉ずるの信念を以て天職と爲し、民衆治療界の爲に不斷の勵精努力を續けつゝあり、恪勤の人と云ふべき也。性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、偏に恩師先輩の助力を說き報恩の念に燃ゆ、又人に對しては溫情に富み、己を虛うして淡々たる態度を持す。趣味としては研究と醫療とに集中して他に何等の道樂を求めず、精研に餘念なき前途は大に嘱望せらる。朝鮮新義州府常盤町五丁目五ノ一に住む。

◇

佐藤イクヨ　△十五番目の女醫學博士として內外學界に氣勢を揚げ、現代醫博人物界に異彩を放ちたるは佐藤イクヨ博士也。現在東京女子醫專助教授として母校の教壇に起ち、得意の耳鼻咽喉科學を講じ、女子醫育界の爲め多

年の蘊蓄と不斷の努力精進を續け、專心學生指導の任に當り、至誠以て大に將來に期するところあらんとする熱誠振りは敬服すべき也。而かも晩學にして學位を獲得せる女史の厚志篤學は、近來醫博界の美談として推奬に値し、女醫界の爲め頂門の一針として後學の範とすべき也。

△女史は大分縣西國東郡中眞玉村の人にして、十人兄弟の一番末ツ子に生れ、十八歳にて鄕里の大分高等女學校を卒業するや、爾來滿九年間慈母の許にて家事を手傳ながら女子大學の講義錄に依りて獨學自修し、たま〳〵慈惠醫大を卒業して歸鄕せる長兄が鄕里にて醫術開業するに際して以來、長兄の仕事をも手傳ながら臨床の事をも傍より念入りに看取れて居る內に、醫學に對する向學心興り東上遊學の意を決し、長兄の贊助を得、次で母堂の許しをも得て、二十七歳の時雀躍として笈を負ひて東上し、東京女子醫專に入學して一生懸命に勉强の結果、三十二歳を以て同校を卒業するや、學校附屬病院の耳鼻科助手を振出しに、講師に進み、更に助教授となり、五年後には內地留學生として九州帝大醫學部の專攻科に研究生として入學し、耳鼻咽喉科教室にて努力研鑽の結果、學位論文『「ムタチン」（聲破又ハ聲變リ）ニ就テノ醫學的考察』を完成、同學部に提出して、昭和十年六月學位を受領せり。

皮膚科　泌尿器科

花柳病科　性病科　生殖器病科

大和田　政實　△帝都診療界の山手方面に於て、醫院の最も集中せる環境たる四谷區新宿三光町卅七に皮膚科、花柳病專門を以て嶄然異彩を放ちつゝある大和田病院あり、正五位勳五等大和田政實博士の經營する所、開業拮据既に十餘年を越え、小ざつぱりした陣容まことに結構にして、充實せる內容の設備整ひ、書齋兼診療室に於ける博士の横顏を覗く時、その玲瓏たる打診振と、メスを持つ周到なる態度とは、流石は老大家としての練熟さを首肯せしめ、又一面には自ら親切本位を以て治療の方針とする博士の性格の反映の尊さを想起せしむ。宜なる哉、日々遠近より外來患者の輻輳するもの多く、門前常に賑ひ院內活氣を呈す。

△長野縣小諸町の人、明治十四年生る。明治三十五年千葉醫專の出身にして、卒業後直ちに縣立千葉病院外科、皮膚科の助手として勤め、同三十六年より四十年迄內務省血淸藥院及び傳研（當時院長及所長北里博士）助手勤務、同三十八年日露戰役に於ける陸軍衞生部助員として東京豫備病院に勤務し、同四十年より大正十一年迄長崎、福岡、兵庫の各縣港務醫官を歷任す、其間大正七年孟買へ出張、同九年より十一年迄大阪醫大皮黴科見學、同十一年任東京市技師、衞生試驗所部長として性病に關する調査研究を行ひ、同年より十三年迄慶大醫學部病理細菌學教室にて研究、同十三年十月學位受領、其後同大學皮膚科泌尿器科を見學、同十四年東京市衞生試驗所辭職、翌十五年より頭書の住所に於て開業今日に至る。專門中性病にては淋疾、皮膚科にては濕疹を最も得意とす。

△學位主論文は「下水ノ細菌學的研究」にして、五篇より成り、參考論文は、(1)凝集反應ノ研究殊ニ「アグルチノイ

ド」ニ就テ、(2)凝集反應及沈澱反應ニ就テ外六篇あり。

△學界に對する感想を述べて曰く「近來學位授與數は非常に多く夫々研究の賜物である事は國家の爲め喜ばしき現象なるも受領者の人格と云ふ事が全々無視せられて居る故、論文審査に當り此點も調査して貰ひ度いと考へると同時に今少しく何かの方法で審査を嚴重にしては如何かと思ふ」云々。著者も頗る同感にて、此點に關しては既に多年私見を吐露して機會ある毎に識者の反省を促し居れり、殊に輓近博士の人格に對する世論の益々紛々たるの秋、世論を正しく導く上に正當なる要求として博士の此說に著者も又共鳴する一人也。

△一度び其の謦咳に接せんか、虛心坦壞、諄々とし說く所熱あり、又た人情味に富む、會々博士が將來の抱負として其の意見を叩けば、曰く「現在の法科萬能を廢し衞生省を大々的に新設し其の首腦者は醫科出身の衞生細菌學者を以てし吾國を以て世界第一の衞生國たらしめたし」云々と、萬丈の氣焰甚だ壯とすべく、又以て其潑剌たる意氣を愛す讀書家にして業餘の書見を樂しみ、古香を號とす、また觀劇と旅行を好み、魚釣を趣味し時に太公望を極め込む事ありと聞く。

◇

久保山　高敏　△大阪市立市民病院の中堅、皮華科長久保山高敏博士は、大阪府立高醫の出身、斯道の元老櫻根（孝之進）教授の高弟也。學位は大阪醫大より獲得せるが、其の博士論文は母校の恩師佐多（愛彥）及び村田（宮吉）兩博士の指導を受くる所多し。皮膚科、泌尿器科、特に泌尿器疾患の治療は博士の最も得意とする所にして、將來の醫師は疾病治療も必要であるが、疾病豫防に進出する事が最も必要なりとの主張の下に機會ある毎に、實際醫學の臨床的經驗及び成績に對する講演及び論著の發表に努めつゝあるは世人周知の如し。

△博士は佐賀縣三養基郡基里村久保山厚長男、明治十六年生にして、同四十二年大阪府立高醫を卒へ、直ちに助手兼醫員として附屬病院皮華科に勤め櫻根教授に師事す、同四十五年辭職大阪市にて開業す、大正九年大阪醫大病理學教室に研究生として入學し佐多、村田兩教授の下に泌尿器及生殖器病を研究す、同十三年十一月學位受領、同十四年新設の大阪市立市民病院皮華科長に就任し今日に至る。

△學位主論文は「軟性下疳性横痃ノ毒性及其「ワクチン」療法の二篇なるが、他に論著夥多あり。

△學位主論文は「軟性下疳菌ノ生物的及免疫學的研究」にして、參考論文は、(1)大阪府下郡部ニ於ケル痘瘡ノ統計的觀察、(2)軟性下疳性横痃ノ毒性及其「ワクチン」療法の二篇なるが、他に論著夥多あり。

△「人生は絕えざる緊張と職業に對する趣味とを必要とす此が自ら保健にも適し、又安心立命幸福至上なるものと思ふ、要するに診療の如き職業は科學的智識以外に常に溫き同情と謙遜の德を有せざるべからずと思ふ」云々とは、博士の感想の一片なり。經驗と學術的手技と、溫き同情、要するに國家のため「よき醫師」でありたいといふのが博士の抱負であり、又常に自ら努めて之を實行しつゝある處に博士の特徵を見出さる。生來蒲柳の體質なるも保健に注意し時に太公望を極め込みて悠々淸遊す。又た讀書に趣味を有し常に學術上の新智識の吸收に力め、又克く人格の陶冶に怠らざる概あり。大阪市此花區上福島一ノ四八に住す。

◇

生駒　寅彥　△名古屋市東區鶴重町四ノ三に生駒醫院あり、院長生駒寅彥博士の診療所にして皮膚科、泌尿器科を專門とす。博士は愛知醫專出身の篤學者にして、嘗て墺太利に遊學し、ウイン大學教授マーレツシュ博士の許にて泌尿器病理、同藥物學教授ハンス、マイヤー博士の許にて泌尿器の藥物學的研究をなし、クロイス並にルブリチウス教授の教室にて泌尿器科の臨床的見學をなし、歸朝後慶大より學位を獲得せり。開業拮据數年を越えたるに過ぎざれども、臨床家として多年の經驗を有し、圓熟せる技術的手腕の好評は、氏が熱心なる診療と併せて多大の聲望を博し近來著るしく院務の發展を遂げ日增繁榮の盛況を呈しつゝあり。

△博士は三重縣南牟婁郡尾呂志村生駒定右衞門四男、明治二十三年生にして、和歌山縣立新宮中學校を經て、大正二年愛知醫專を卒へ、引續き同校皮膚科教室にて研究、同四年廣島縣立吳診療院に勤務、同八年之を辭し、名古屋市楠病院副院長として就任、同十年院費を以て渡歐留學の途に上り、主として墺國納維大學にて研究し、同十三年歸朝す翌十四年二月學位受領、昭和三年十月辭職、現地に開業せり。

△學位主論文は「尿路ノ所謂蛋白結石ニ就テ並ニ一般結石成立問題ノ補遺」にして、參考論文は、(1)「モルヒネ」ニヨリテ起ル膀胱括約筋痙攣ノ實驗的研究、(2)膀胱憩室內癌腫ニ就テ、(3)腎臟胞蟲病ノ病理、(4)淋菌培養器ノ反應ニ就テ、(5)「バクテリオフアーゲン」作用ニ就テ、(6)淋毒性副睾丸炎ノ「サルヴルサン」療法なり。

△屋外運動を居常の趣味とし、又撞球を好む。貴公子然たるタイプの持主にして、凛々しき風姿の裡に溫威を藏し、人に對する穩健自ら持し、親切と同情と理解とを以てす。

◇

片山武一

△横濱診療界の中堅として、中區山下町に有名なる村山病院あり、院長は村山小七郎博士にして自ら外科に當り、片山武一博士は皮膚科、性病科長として斯科を擔當す。片山博士は愛知醫專の出身にして、東京帝大より學位を獲得せる篤學の士也。主論文は「實驗的ワイル氏病ノ血液像殊ニ血小板ニ就テ」にして、參考論文は、(1)赤血球ノ溶血素吸收（所謂感作）ニ就テ、(2)健康家兎ノ血小板數ニ就テ、(3)鹽酸「フエニールヒドラチン」貧血家兎ノ血小板並ニ白血球核推移ニ就テ、外獨逸文一篇あり。他にも論著夥多にして枚擧に遑なし。

△三重縣四日市市の人、片山嘉平の六男、明治二十五年生にして、三重縣立第二中學校を經て、大正五年愛知醫專を卒へ、直ちに助手として母校の衞生細菌學教室に勤め、同十二年三月愛知醫大助手となり同教室に勤續す、其後同大學附屬醫院皮膚科に轉じ實地研究、同十四年六月學位を得、同十五年九月以來頭書の現職に在り。專攻は皮膚科、泌尿器科、性病科にして、又た衞生細菌學に關する造詣深し。

△讀書家にして書見を唯一の趣味とし、今猶精研修養に餘念なし。學究的溫厚の紳士にして、患者に對し又た人と接するに懇篤親切なるは、圓熟せる手腕と相俟つて今日の聲望を博する所以、而かも猶年壯銳氣にして春秋に富む前途は、洋々として更に大に期待せらる。横濱市中區本牧和田九七に住す。

◇

安達　與五郎

△小樽市稻穗町西八丁目五番地に堂々陣を張り、皮膚科、泌尿器科專門を以て著聞する安達病院は安達與五郎博士の經營にして、洋館コンクリート三階建二百坪餘、敷地三百坪を有し、結構宏壯にしてX光線、人工太陽燈、水銀石英燈其他內容の設備整ひ、打診手術の好評は年と共に繁榮をいや增し、牢固たる地盤は依然として私立病院中の一流に在り。一面又た日本黴毒學會評議員、日本皮膚科學會評議員、全國猪乃鼻會評議員、北海道廳立小樽中學校同窓會副會長等の要職に在りて公事に盡す所あり。學系は千葉醫專出身にして、學位は京都帝大より獲得せる篤學の士として既に江湖に知られ、特に其の最も得意とする泌尿科（診斷及治療）に至りては獨特の定評あり。

△博士は廳立小樽中學を經て、大正五年千葉醫專を卒へ、直ちに小樽市愛生病院に醫員として奉職す、同六年小樽市に開業し安達醫院を經營す、同十一年開業を中止し、京都帝大醫學部研究科に入り皮膚科教室に於て、松本教授指導の下に皮膚、黴毒、泌尿器科學を專攻す、同十四年退學、同年八月學位受領、同年より小樽市に於て再び開業、安達病院を經營して今日に至る。

△學位主論文は『實驗的家兎黴毒ニ於ケル再接種ニ就テ』にして、(1)黴毒ノ再感染ニ關スル實驗、(2)黴毒ノ再感染ニ關スル實驗、(3)黴毒ノ再接種ニ就テ實驗追補、(4)角膜ノ免疫獲得ニ關スル實驗、の四篇より成る。參考論文は、(1)所謂「スピロヘーテ、クニクリ」ノ研究、(2)實驗的家兎鼠咬症ノ初期硬結ニ就テ、(3)家兎胎生的腎臟腫瘍ニ就テ、(4)家

兎眼瞼ニ於ケル實驗的初期硬結ニ就テ、(5)家兎陰脣ニ於ケル實驗的黴毒初期硬結ニ就テ、(6)家兎包皮ニ於ケル實驗的黴毒初期硬結ニ就テ、(7)男性生殖腺脱落ニ關スル外的性徴特ニ陰莖ノ變化ニ就テ、(8)蒼鉛劑ノ家兎實驗黴毒ニ對スル効果ニ就テの八篇なり。其他論著夥多。

△現代の學會に對しては「毎春の學會が御祭り騒ぎになるのを避けたい」云々。又た業界に對しては「醫師が自覺して自己の使命遂行のため團結して欲しい。例へば社會保險に對しては當然な業權を主張すると同時に被保險者に對する完全なる（一般人と同樣な）治療をなし得るやう主張すべきである。このためには業者が結束して政府に當るべきである、恰も軍部の結束の如く」云々との感想を吐露せり。

△博士は小樽市錦町安達龍太郎の長男、明治二十六年生にして當年四十有三歳也。壯鋭の意氣潑剌として多量の分別を有し、臨床家としては今が最も腕の冴え時なれば博士の得意や想ふべき也。學生時代よりの讀書家にして今猶研鑽克く新知識の吸收に力め、行く〳〵は病院内に研究所を併置して從來の研究事項を續行せんとするの計畫ありと聞く。時に芝居を樂しみ以て業餘の趣味とし乘馬を日課とす。人と爲り篤實溫厚にして正義感に強く、臨床家としての特徴を具備する高邁なる人格者たるを尊ぶ。

◇

伊藤實　△金澤醫科大學に於ける皮膚科泌尿器科の新進教授として重きを爲すは伊藤實博士也。博士は東大系大正九年組の一秀才にして、皮膚泌尿器科界の先覺たる恩師故土肥慶藏博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる少壯醫博なるが、學位論文は東大皮膚科教室に於て經驗せる類「ペラグラ」患者十二例に就き、臨床的、血液學的並剖檢的所檢を叙述し、尚ほ我國に於て報告せられたる「ペラグラ」或は類「ペラグラ」の症例を綜覽し、更に歐米に於ける「ペラグラ」の文獻就中病因論に關するものを渉獵して彼我の病理を對比觀察し論究せるものにして、(1)我國ニ於ケル「ペラグラ」及類「ペラグラ」ニ就テ附其糖「ヱキス」療法、(2)類「ペラグラ」症ニ對スル糖越幾斯治驗追加の二篇より成る。參考論文は、(1)類「ペラグラ」症ニ於ケル實驗的研究、(2)被角血管腫ノ病理並分類特ニ結核トノ關係ニ就テ、(3)皮膚癌ニ於ケル彈力纖維ニ對スル「ラヂウム」線ノ影響ニ就テ、(4)懷爐火傷癌、(5)膀胱全摘出ニ就テの四篇、他に論著夥多あり。

△更に其の略歴を概括すれば、東京府立一中、一高を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、引續同學部副手囑託として皮膚泌尿器科教室に於て土肥教授指導の下に斯學研究、同十二年八月任助手、同月「ひの病」研究のため長野縣上清内路村に出張を被命、同十三年十一月任金澤醫大助教授、同十五年三月學位受領、昭和二年一月文部省在外研究員を命ぜられて渡歐、主として佛蘭西巴里に於て斯學を研究す、昭和六年四月同大學教授に昇任今日に至る。

△博士は東京市京橋區越前堀一丁目に本籍を有し、伊藤寅之助の長男にして明治廿七年生る。學究的溫厚の紳士として高邁なる氣品を備え、靄々たる裡に學者らしき威嚴を藏す。當年漸く不惑に入る二歳、年壯の意氣に燃え研究心潑剌たるものあり。今は專念醫育界の爲め精進し、其の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、諄々として說くところ熱あり力あり、其の態度の眞劍にして誠意誠實なるは其の人格を敬慕せしむ。研究以外業餘の趣味としては俳句を嗜む。春秋猶豐富にして洋々たる前途を有す。金澤市廣坂通八二に住む。

◇

竹内讓　△名古屋市中區老松町三丁目に陣容堂々たる竹内皮膚泌尿器科病院あり、院長竹内讓博士の經營にして、新築の落成と共に專門科目の設備は遺憾なく整ひて居り、病室に洋室と和室とを備へ入院患者の好むところに任せ、又た恢復期患者の爲めに小運動場をも設備せり。博士の圓熟せる技術的手腕に至りては斯界既に定評あり、加ふるに篤き德望と相俟つて益々人氣を吸收し、今や中京診療界に斯科を以て斷然一頭地を抜くの概あり。一面又た

公共方面にては現に日本皮膚科學會評議員にして、社團法人愛知性病豫防協會理事を兼ね、同協會雜誌「性の友」主幹として斯道の爲め盡す所あり。

△博士は愛知醫專の出身にして、明治四十四年卒業後直ちに同校病理學教室副手たり、大正二年十一月東京帝大醫學部皮膚科教室附介補となり、同六年四月迄勤續、それより阿久津三郎博士に就て泌尿器病學研究、同七年七月一日名古屋市に開業、同十四年九月渡歐、墺國維納大學神經學教室主任マールブルグ教授指導の下に末梢神經組織を研究し、次で伊、瑞、獨、和、白、英、佛、露の各大學を見學し、同十五年二月西伯利亞線經由歸朝す、同年六月愛知醫大より學位受領と共に現住所へ移轉今日に至る。

△學位主論文は「癩ノ末梢神經組織研究」にして、參考論文は、(1)東京醫科大學皮膚科ニ於ケル「レントゲン」療法ノ統計的研究、(2)肘腺腫脹トワ氏反應補遺（獨文）、(3)二三皮膚疾患ノ尿中防衞酵素ニ就テ、(4)「ニンゼリン」ノ批判及ビ防衞酵素ノ各種狀況ニ於ケル作用ノ變化ニ就テ、(5)各種膀胱患者ノ膀胱容量ニ就テ（獨文）外十一篇あり、他に論著夥多。著書としては、(1)生殖器の結核、(2)皮膚病講話、(3)性病豫防管見、(4)毛髮の話、(5)內務大臣の花柳病豫防諮問に關する余の性的考察及び其對策、(6)僕の觀た歐羅巴、(7)異國秘話人肉異香等あり。

△現代の醫界に對して、博士の感想を叩けば曰く「昨今の如く無料乃至實費診療所相亞で新設されては開業醫は早晩行きつまるに相違なし、寧ろ醫師を官公吏として各要所に設置の診療所に就かしむべきのみ」云々と。又たその抱負の一端を吐露して曰く「余は年少文學者たらんとし中途志を變じて父の業を繼ぎ遂に凡醫に了らんとす、余の抱負は單に醫文の提携あるのみ」云々。

△博士は石川縣士族醫師竹內壽三郎の長男、明治二十一年生にして、當年不惑に入る九歲也。其の閱歷は既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、年齒漸く壯熟して最も得意の時代に入る。文學趣味の人にして忙中閑を得れば自ら筆を執り、臨床の傍ら醫文化貢獻の爲め精進努力する所あり、その號東翠、老松子、木外等は醫文士として文壇を賑はし既に同僚の間に識らる。また音樂、乘馬等も趣味の一なるが如し。性格より打診すれば、猪突的なる特質は博士の長所にして、或はまた短所とも見るべきか。一面には又た善と知らば直ちに迎へ、惡と知らば則ち仇敵の如く憎惡する謹直の士也。從つて今日まで利せしこともあり、また失ひしことも多くあらんかと察せらる。學德兼備せる好箇の臨床家にして、當世博士界中異彩に富む一人物たるを失はず。

◇

津留壽船　△久留米市日吉町四八に皮膚科泌尿器科を以て著聞する津留病院あり、院長は斯科の大家ドクトル、メヂチーネ津留壽船博士にして、博士の經營に成り、開業古く、既に牢固たる地盤を獲得して名聲遠近に及び當地方を風靡す。博士は久留米市の人、津留壽德の長男、明治十四年生にして、明治三十八年大阪府立高醫を卒へ、直ちに任京都帝大福岡醫大助手、宮入慶之助博士に就き細菌學原蟲學を研究する事二ヶ年、四十年任母校助手、櫻根孝之進博士に就き皮膚病黴毒科研究す、四十一年獨乙留學、グライフス、ソールド大學にてレフレル教授に就き細菌學研究、四十二年同校にて「ドクトル」の學位受領、引續き同校ナイセル教授、ウキンナ大學にてクラウス教授に就きて黴毒學及血清學研究、四十三年歸朝、四十四年久留米市に開業、大正十四年大阪醫大細菌學教室に研究生として入り福原義柄博士の指導を受け免疫學血清學研究、十五年十月大阪醫大にて學位を受領す。

△學位主論文は『細菌ノ安定性並ニ不安定性凝集素ノ研究殊ニ絮片ノ大小、兩凝集素ノ成因並ニ理化學的影響ニ就テ』にして、參考論文は、(1)「コクチヂユム」「オビフオルメ」ノ研究、(2)人類及爬蟲屬ニ於ケル寄生性鞭毛蟲ノ「デモンストラチオン」、(3)一二寄生性原生動物ノ「デモンストラチオン」其他獨逸文の原著あり。博士の壯齡今や知命に入る五歲、臨床家として成功の位地を占め悠々たり。

◇

林　廣吉　△靜岡市住吉町二ノ一七に在る林醫院は、林廣吉博士の診療所にして、皮膚科泌尿器科を專門とす、充實せる內部の設備と相俟つて診療手術の評判良く、當地診療界に卓然として拔群の位地を占む。博士は東北帝大（專門部出身）系の斯科專門家にして、恩師遠山及び佐藤兩教授に就きて斯學の蘊奧を究め、又井上教授に師事して醫化學を研究し、東北帝大より學位を獲得せる名醫博たるに耻ざる一人物也。

△博士は大正四年東北帝大醫學專門部卒業後、直ちに同部皮膚泌尿器科教室に入り、遠山教授、佐藤助教授の指導を受く、同七年三月福島縣湯本町私立入山病院勤務、同八年九月宮城縣氣仙沼町私立飯田病院轉勤、同十二年五月再び舊教室に復歸して遠山教授に就き研究を續け、傍ら醫化學教室にて井上教授の指導を受く、同十五年十二月同教室を辭し學位を受領す、爾來現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「皮膚感受性ニ關スル研究」にして、(1)「アルカリ」代謝、皮膚並ニ血液ニ於ケル「アルカリ」分布ノ狀態ト皮膚感受性、(2)皮膚感受性ト水素「イオン」濃度トノ關係ニ就テ、(3)日本漆ニ對スル皮膚感受性ニ關スル研究の三篇より成れり、參考論文は、(1)諸種角質內ノ「アルカリ」及「アルカリ」土類ニ就テ附角化機轉ニ對スル知見補遺、(2)鯨皮膚ノ組織學的研究の二篇なるが、他にも論著少からざるものあり。

△博士は德島縣板野郡堀江村の人、明治廿二年生る、當年不惑に入る七歲也。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學は博士の閱歷に盡きて躍如たるものあり。開業拮据、既に拾年有餘、其の篤き聲望を博し、今日の成功を贏得たるは、學識、手腕は言はずもがな、臨床に熱心にして克く誠意と親切とを盡せる努力の賜物たるべし。趣味としては研究と醫療そのものにあるが如く、勵精餘念なき前途は猶遼遠たり、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

荒瀧　實　△北海道旭川市一條通九丁目に堂々の威容を構え、泌尿科、婦人科、腎臟病科專門を以て卓然頭角を拔き、健實味橫溢せる荒瀧病院あり。院長は泌尿科の大家荒瀧實博士にして、內部の設備整ひ、博士自ら得意のメスを揮ひ、外に新進の三好仁、藤村雄吉等の學士あり、診療手術の好評と相俟つて拔くべからざるの盛況を呈す。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、嘗て米國に遊び研鑽大に得る所あり、歸朝後北海道帝大より學位を獲得せる名醫博として既に江湖に著聞す。

△博士の學歷より閱歷を概述すれば、小樽中學校を經て、大正元年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに北海道區立札幌病院外科に勤務、秦勉造博士の指導を受け、同六年五月辭職して旭川市現住所にて病院を開設す、同十二年四月私費渡米、ヒラデルヒヤ市ペンシルベニヤ醫科大學ウエスター研究所に入りドナードソン教授に就て解剖學研究、同十四年五月よりペンシルベニヤ醫科大學病院にてマツケンニー教授及トーマス教授に就て泌尿器病學研究、後ちジョンス、ホプキンス大學、コロンビヤ大學、ハーバード大學、ミネソタ大學等を見學し、同十四年十月歸朝、再び診療に從事し今日に至る、昭和二年三月學位を受領す。現在は青少年教育に全力を盡しつゝあり、現に、少年團日本聯盟評議員として活躍し、昭和八年八月歐洲ハンガリア國に開催せられたる第四回少年團世界大會に、少年團日本聯盟より日本代表として參加を命ぜられ、滯歐半歲、其間歐洲各國及北米の各醫科大學病院の視察を了へて昭和八年十二月歸朝す。

△學位主論文は「白鼠ノ生後腎臟發育ニ就テ」にして、(1)白鼠ノ腎臟ニ於ケル糸球體數及皮質、髓質ノ發育ニ就テ、(2)扁側腎臟摘出ニ於ケル殘留腎臟ノ發育ニ對スル實驗的研究、(3)扁側腎臟水腫ニ於ケル殘留腎臟ノ發育ニ對スル實驗的研究の三篇より成り、原著は英文なり、參考論文は、(1)尾閭骨部先天性雜腫瘍ノ稀有ナル一例ニ就テ、(2)開腹ニ於ケル皮膚創中ノ細菌檢査ニ就テ、(3)脊椎破裂症ニ就テ、(4)顎骨珐瑯上皮腫ニ就テ、(5)本邦製「サルヴルサン」ノ使用法並ニ副作用ニ就テの五篇、其他の論著枚擧に遑あらず。

△博士は小樽市色内町の人、明治二十一年生る。學究的溫厚の紳士にして、成功せる臨床家としての篤學と成業とは、既に氏の閲歷に歷然として輝き博士の前半生史をして光彩陸離たらしめたり。今は年齒不惑に入る八歲、精力主義の人にして學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に達し、好箇の臨床家として一段の貫祿を備ふ。殊に博士の最も特徵とする所は、診療に臨むや熱心にして、誠實と親切とを盡し、患者をして信賴と尊敬との念を深からしむる點にあり。平生几帳面にして篤行、恭讓禮節を重んじ、時務を缺ぐことなく、同情に富み能く人を愛す、篤き聲望を博し、今日の成功あるも蓋し其の性格の反映なるを想はしむ。研究以外の趣味としては寫眞を好み、繪畫を能くす。當世博士界中、學德兼備せる醫博人物として推奬に値す。

◇

黑田　通

△千葉醫科大學助教授にして皮膚科泌尿器科學者たる黑田通博士は、千葉醫專の出身、學位は千葉醫大より獲得せる篤學の士也。主論文は「角膜種痘免疫ニ關スル實驗的研究」にして、(1)家兎角膜種痘後血淸內免疫體ノ出現ニ就テ、(2)角膜種痘後皮膚免疫ノ發現ニ就テ、(3)角膜種痘後牛痘毒ノ血行內侵入ニ就テ、(4)角膜種痘ノ際ニ於ケル結膜ノ態度の四篇より成れり。之を總括するに、博士のなしたる實驗成績は、痘毒を角膜に接種せば痘毒は主として角膜を通過して血行に移行し痘毒滅殺素を發生し皮膚も亦免疫性を獲得するものなりとの決論に到達すと云ふ。參考論文は、(1)再種痘後ニ於ケル人體血淸內免疫體ノ出現ニ就テ、(2)ワイル氏病治療ニ關スル實驗的研究（第一、二回報告）、(3)再ビ再種痘後ニ於ケル人體血淸內免疫體ノ出現ニ就テ、(4)先天性手掌足蹠角化腫ノ例症追加、(5)尿中ノアプテルハルデン氏防衞酵素ニ就テ、(6)邦人常尿成分ノ定量的關係ニ就テの六篇なり。博士や研究心甚だ旺盛にして研學切磋、日頃餘念なき前途の成業は更に大に期待せらる。

△更に學歷より見たる博士は、獨逸協會學校を經て、大正五年千葉醫專を卒へ、引續千葉縣立病院醫員を命ぜられ、同十二年四月任千葉醫大助手、皮膚科泌尿器科教室勤務、昭和二年一月同大學講師囑託となり、同年七月學位を受領す、次で任同大學助教授、以て今日に至れり。

△茨城縣結城郡山川村の人、黑田昌惠醫博の弟にして、明治二十年生る。眞面目なる學者タイプの士、肥軀强健にして、福德圓滿なる風貌に威嚴を藏し溫容を包み、光頭は其の明晰を語り一層の愛嬌を示す。賦性穩健謹直、謙抑偏に先輩の助力を說き、敢て學者として自己の才學を衒はず、淡々として己れを虛うし、寬厚克く人を客れ學生を愛撫す其の態度の眞摯にして熱情あり溫味ある奧床しさは、人をして其の人格を敬慕せしむるの德を有す。研究は博士の最も趣味とする所にして亦他事を顧みるの暇なきが如し。春秋猶豐富、幸に健康と共に、益々精研活躍あらん事を望むや切也。千葉市本町二ノ一五七三に住む。

◇

西谷長三

△京都診療界は近時醫博人物に富む、玆に推奬品隲せんとする西谷長三博士は、大阪醫大の出身にて、京都帝大より學位を獲得せる錚々たる皮膚科の專門大家にして、特に細菌學の造詣深し。診療所は京都市河原町三條上ル東入に在り、嘖々たる評判を聞く。主論文は「諸種細菌毒ノ輸尿管內注入ニ因スル腎臟並ニ腎盂ノ變化ニ就テ」にして、外に、(1)腎盂粘膜ノ抗原吸收ニ關スル實驗的研究、(2)腎盂ニ注入セラレタル抗體ノ運命ニ就テ、(3)腎盂內細菌注入ニ因スル造血臟器ノ病理組織學的變化ニ就テ、外數篇の參考論文あり。指導教授は京大教授淸野謙次及び京都府立醫大教授中川淸の兩博士にして、主として微生物學及び皮膚科學を專攻せり。學識と共に多年の經驗を有し、今や獨特の領域に年次發展しつゝある前途は刮目に値す。

△京都の人、明治三十年生る。大正十年大阪醫大の出身にして、京都帝大醫學部微生物學教室を經て、京都府立醫大皮膚科教室にて研究せる結果、昭和二年七月京都帝大より學位を受領せり。學究的溫厚の紳士にして、臨床家として

の特徴を具備す。一度び其の謦咳に接せんか、歡待能く親切を盡し、舉指悠容として迫らず、快活にして能く話し能く談ず、其の態度の眞摯にして紳士的なるは頗る好感を覺えしめたり。其の穩健篤實なる性格は自ら患者をして信賴と敬慕の念を起さしむるの德を有す。趣味としては洋樂殊にセロの演奏に秀で、近來書道を始む、桂洞は其號也。博士の春秋猶頗る豐富にして、輝しき前途は洋々たり。

◇

池上豐　△東京市神田區美倉町四に著名なる池上泌尿科あり、皮膚科、性病科、泌尿器科の大家池上豐博士經營の私立醫院也。開業拮据十年餘に垂んとし、既に堅實なる獨自の地盤を獲得して、好評嘖々の裡に超然たる位地を占む。博士は金澤市の人、明治二十三年生にして、明治四十四年金澤醫專を卒へ、大正二年五月任臺灣總督府醫院醫員、六年十二月任同府技師、七年二月任厦門醫院皮黴科醫長、九年二月任八幡製鐵所病院皮黴科部長、十年十一月任海軍醫官、十一年四月任南洋廳醫院醫官、十四年一月京都帝大醫學部專修科入學、昭和二年四月京都帝大にて學位受領、爾來横濱市にて開業、神奈川縣囑託たりしが、其後東上、現住所に移轉開業今日に至る。スポーツを趣味す。壯齡今や四十有六歳、臨床家として最も活躍時代にて手腕圓熟す。

△學位主論文は『實驗的「フランベシア」ノ研究』にして、(1)實驗的「フランベシア」ノ臨床的及病理組織學的研究(2)同免疫學的研究、重感染ニ關スル研究、(3)同免疫學的研究、再感染ニ關スル研究、(4)同血清學的研究の四篇より成る。參考論文、(1)「フランベシア」ノ臨床的及病理組織學的知見補遺、特ニ本病ニ現ハルル粟粒立疹ニ就テ、(2)「フランベシア」ノ臨床的及病理組織學的研究、外拾數篇あり。

◇

重松平吾　△福岡市柳橋町と久留米市日吉町に重松病院あり、泌尿器科、皮膚科、性病科專門病院として兩地診療界に斷然頭を拔く、院長は重松平吾博士にして、斯界の重鎭也。又た副院長として本田利秋醫學士あり、開業茲に二十年に垂んとし、福岡には昭和七年六月病院と住宅とを新設せり、古き歴史と相俟つて內部の設備充實し、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有す、特に博士の最も得意とする膀胱疾患及び尿道狹窄に至りては、博士獨特の評判と共に他の追隨を許さゞるの概あり。現に日本皮膚科學會評議員たり。殊に特筆すべきは博士の篤學にして、氏は醫術開業試驗出身より奮起して志を立て、研學切磋、終に克く九大教授高木繁博士に就きて泌尿科及び同後藤元之助博士に就きて醫化學の蘊奥を究め、兩教授指導の下に論文完成の結果、九州帝大より學位を獲得して斯界近來の名醫博たる榮冠を擔へるは、立志傳的美談として表彰に値す。其の全二十章より成る浩瀚なる學位論文は、如何に精研の該博なるかを語るものにして、既に學界に其の學問的價値を認めらる。當世博士界中、異彩に富む醫博人物として、茲に推奬するに吝ならざる者也。

△顧みて博士の今日る學歴及び閲歴を公開すれば、明治四十三年醫師試驗合格、大正三年十月九州帝大醫學部醫務介補を命ぜられ、皮膚科教室勤務、同五年九月より久留米市にて開業今日に至る、其間同八年日本皮膚科學會評議員に擧げられ、同十二年一月鐵道省囑託醫を命ぜられ、其後同十三年九月九州帝大醫學部專攻科入學、高木（泌尿科）、後藤（醫化學）兩教授の指導を受く、昭和二年十月學位受領と同時に九大を退學し、爾來再び診療に從事す、同七年六月福岡市柳橋に病院と住宅とを新築し、副院長本田利秋學士と共に兩病院を經營しつゝあり。

△學位主論は「尿閉ノ實驗的研究」にして、外に參考論文として、(1)尿閉私考、(2)輸尿管移植部位ノ撰定移植前後ニ於ケル血液及尿ノ化學的定量並細菌ノ上昇傳染ニ就テ、(3)「ワクチン」療法ニ就テ、(4)後尿道疾患ト洗滌膀胱鏡ニ就テの四篇あり。

△感想として「貧困の中に人となり、克己精勵あらゆる困難と戰ひ、炎熱天を焦す夏の日も、朔風膚を刺す冬の日も

怠らず、惰まず向上研學に精進し、業績の完成に努力を續けたること年久し、後藤、高木兩教授の指導を受けたることを感謝すると共に、肝膽相照したる大木遠吉伯爵が業績の完成前に逝去せられし事は一生の恨事にして感慨無量なり」云々と、述べられたる一片は、氏が苦學奮鬪の跡を如實に物語るものにして懦夫をして起たしむるの感あり、以て頂門の一針として銘すべく、後日境遇を同うするものあらば、此の精神氣慨に學ぶべき也。

△博士は佐賀縣神埼郡三田川村の人、明治廿年生る、佐賀縣出身の維新の元勳大木喬任氏の血緣にある氏は好後繼者遠吉伯と肝膽相照すこと年久しく、遠吉伯にして今日世にありせば、氏は醫政家としての希望と實現とを見たるならむに、氏が業績ならざる前に伯の物故せられたるは惜みても猶餘りあることにして、今更思出深きことならん。氏の今日ある立志傳的篤學の跡は、既に博士の前半生史に輝きて光彩陸離たるものあるを見る。今は腕の冴え盛りにて學識、手腕、人格共に圓熟して一段の貫祿を加へ、最も重望せらるゝ得意時代に在り。而かも學成り名を成すの今日、少しも己れの才學を衒ふなく、謙遜にして偏に恩師先輩の助力を說き、淡々として只管己れを虛うして能く人を愛す、其の紳士的奧床しき態度は眞に德操の士に非ればこゝに至るを得ず。研究以外業餘の趣味としては馬を愛し、常にサラブレツト種の愛馬を飼育して子供等と共に樂しむ風あり。

◇

森　涼　△神戸市北長狹通リ五ノ七七に皮膚科、泌尿器科專門を以て著聞する森醫院あり、院長は新進にして斯科界近來の大家として名聲を博せる森涼博士也。猶外に同博士の經營せる病理細菌試驗所にては神戸市及び兵庫縣下の一般開業醫より病理細菌血淸學的檢査の依賴に應じつゝあり。兩々相俟つて近時著るしく向上發展の域に進み、日增盛況を呈しつゝあるは頗る囑目に値す。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、在勤中兵庫縣立病院病理科醫長中院孝圓博士に師事して病理學を專攻し、後又大阪醫大教授佐谷有吉博士の下に皮膚、泌尿器病學を專攻して、學位は京都帝大より獲得せる少壯の名醫博也。今や獨特の手腕を發揮して獨自の舞臺に活躍する所、博士の得意や想ふべき也。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を概述すれば、千葉縣師範附屬小學校、縣立千葉中學校を經て、大正十年千葉醫專を卒へ、同年八月兵庫縣立神戸病院病理科醫員となり、辭職後大阪醫大皮膚泌尿器科教室にて佐谷教授の指導を受け、昭和二年十一月學位受領後、現住地にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「脂肪質試食ガ動物體硬組織ニ及ボス影響ノ形態學的研究」にして、(1)脂肪質試食家兎及家鷄ノ骨組織ノ變化ニ就テ、(2)脂肪質試食家兎及家鷄ノ骨變化ノ病理組織學的發生論、(3)脂肪質試食家兎ノ齒牙及其支持組織ノ變化ニ就テ、(4)「ビタミン」A投與ガ脂肪質試食家兎ノ骨變化ニ就テ、の四篇より成り、參考論文は、(1)流行性腦炎ノ組織學的研究、(2)血栓有機化ノ生體染色ニ據ル研究、(3)血液組織球ノ生理的存在ニ就テ、外七篇あり。

△博士は千葉市の出身、明治三十三年生る。年齒未だ三十有六歲にして、少壯の意氣に燃え、研究心旺盛也。篤學者にして日頃懸命の努力精進を續け、研鑽に餘念なく、今は手腕漸く壯熟して最も得意の時代に入り、熱心克く臨床に勵しみ、同時に同業者たる醫師仲間の便宜を圖り盡瘁に餘念なきは甚だ多とすべき也。人と爲り溫厚にして篤實、謙遜にして少しも己れの才學を誇らず、寬容にして人に厚うし己を虛うする淡々たる態度は其の人格を敬慕せしむ。

◇

竹之內辰四郎　△新潟市東堀前通七に於て皮膚科及び泌尿器科を標榜して開業せる竹之內辰四郎博士は、新潟醫大派の名醫博にして、斯科の大家として名聲を博し、開業拮据數年の今日、既に牢固たる獨自の地盤を開拓して一流の位地を占む。博士は新潟縣中蒲原郡白根町の人、明治二十五年生にして、縣立新潟中學を經て、大正五年新潟醫專を卒へ、直ちに同校附屬醫院に於て皮膚科泌尿器科を見學す、それより陸軍一年志願兵として步兵第五十八聯隊に入

營、同七年六月任新潟醫專助手、同校附屬醫院皮膚科泌尿器科教室勤務、同九年任豫備陸軍三等軍醫、同年新潟縣地方病豫防委員囑託、同十一年新潟醫大副手囑託、同十三年任同學助手、同附屬醫院皮膚科泌尿器科教室に勤務す、昭和二年六月新潟醫大より學位を受領す、次で現住所にて開業今日に至る。當年不惑に入る四歳、手腕圓熟、臨床家として最も得意時代に在り。

△學位主論文は、(1)白癬ニ關スル研究補遺、特ニ新潟地方ノ白癬性疾患ニ就テ、(2)各種「トリコフイチン」ノ白癬性疾患ニ對スル治療的効果比較研究の二篇より成る。參考論文は、(1)新潟縣下ニ於ケル「フイラリア」病ノ調査、(2)陰嚢水腫手術ノ際ニ偶然發見セル「フイラリア」母蟲結節ニ就テ、(3)輸尿管黴毒ノ稀有ナル症例、(4)新潟縣下ノ地方病俗稱「ガメ」ノ研究、(5)毳毛部黄癬ノ研究等なり、其他論著夥多。

◇

加門英夫　△京都市高倉四條下ルに加門醫院あり、性病、皮膚病、泌尿器病並に外科を以て著聞す。院長加門英夫博士は、京都府立醫專の出身にて京都帝國大學より學位を得たる新進の名醫博として令名あり。主論文は「鶏胎兒臓器組織培養ノ成長ニ及ボス諸種ノ藥物及ビ色素ノ影響ニ就テ」にして、外に參考論文六篇あり。今や獨特の手腕を發揮するところ、診療手術の好評と相俟つて年次發展向上しつゝあり。多士濟々たる京都醫博界中に逸色せる一人物にして、斯科の新進大家として推奬するに吝ならざる也。

△岡山縣の出身にて解剖學の權威たる加門桂太郎博士（前京都帝大教授）の長男にして、明治二十九年生る。大正十一年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校助手を命ぜられ、藥物學教室に勤務し、翌十二年六月京都帝大醫學部無給雇となり藥物學教室に入り、尾崎教授指導の下に藥物學を研究し、昭和三年二月京都帝大より學位を受領す、同月續いて京都帝大醫學部皮膚科、泌尿器科教室に副手として勤務、松本教授の下に研究す、同六年十一月轉じて京都府立醫大副手として産科婦人科一般を研究す、同七年夏以降は專ら現住所に開業し今日に及ぶ。

△當年漸く不惑に達し、少壯の意氣と共に手腕愈々圓熟の域に入り、今は最も活躍奮鬪の全盛時に在り。尊父の衣鉢を受け高潔にして敦厚、臨床に熱心にして克く誠實と親切とを以てす。以て其の爲人を窺はれ、高邁なる人格を敬慕せしむ。

◇

長尾慶吉　△京都診療界は近時頗る醫博人物に富む、長尾慶吉博士は東大系の出身にて、京都帝大より學位を獲得せる新進の名醫博として其の手腕を認められ、現に烏丸通五條下ル東側に診療所を設け、其の專門とする皮膚科、泌尿器科（特に淋病、梅毒）を標榜して日々診療に勵しみ、診療手術の好評と相俟つて年次頭角を顯はし成功の域に在り。主論文は「皮膚病糸狀菌ニ關スル研究」にして五篇より成り、參考論文としては、(1)主論文ノ補遺（二篇）(2)皮膚塗擦ニヨル抗體産生ニ就テ、(3)「ワクチン」注射ニヨル家兎血清ノ理化學的臨床ノ變化、外六篇あり。指導教授は故土肥慶藏博士、清野謙次博士、松本信一博士等、何れも斯界の權威なり、その今日ある博士の得意や想ふべきも也。

△石川縣金澤市の人、明治二十八年生る。大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同部皮膚泌尿器科教室に入り土肥慶藏博士の指導を受け、同十三年十一月京大大學院に入學し、昭和三年四月學位を授與せらる、更らに同四月より京大皮膚科教室に入りて研究を續行し、昭和五年四月辭職の上現住所に於て開業今日に至る。

△學究的溫厚の紳士にして、當年不惑に入る一歳、少壯の意氣益壯也。臨床家として今は働盛にて最も得意時代に在り。平生「醫は仁術也」をモットーとして、臨床に熱心勵精し克く誠實と親切とを以て終始す。猶春秋頗る豐富なれば、折角の努力奮勉を望むや切也。研究以外には純日本趣味にして、演劇、音樂を好む。